太子町の寺社建築

平成17年３月

太子町教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正
2	左7	栗岡清孝『要略太子町歴史年表』	栗岡清高『要略太子町歴史年表』
2	左30	『藩磨国鵤荘　現況調査報告総集編』	『播磨国鵤荘　現況調査報告総集編』
15		図3　◉寺院　●神社	図3　◉神社　●寺院

太子町の寺社建築

平成17年３月
太子町教育委員会

序

兵庫県揖保郡太子町は、古代から斑鳩寺を中心に開かれた町であり、法隆寺領播磨国鵤荘として、全国的にも有名な荘園が所在する町であります。

このたび、斑鳩寺庫裏が建造物として兵庫県指定文化財の指定を受けるに当たり、さらに町内に所在している寺社建築を詳細に調査を実施し、後世に伝える貴重な資料を作成しました。

調査は、兵庫県文化財保護審議会委員で京都大学大学院工学研究科助教授山岸常人先生、同じく神戸大学工学部助教授黒田龍二先生に、精力的な悉皆調査を実施していただきました。厚くお礼を申し上げます。また、寺院の住職、神社の神主、役員の方々にご協力を賜りましたことにお礼申し上げます。

最後に、本書が建造物の保護を図るための貴重な資料として十分活用されることを願ってやみません。

平成17年３月

太子町教育委員会

教育長　圓　尾　哲　一

目　次

序章　調査の概要 …… 1
1、調査の概要 …… 1
(1) 調査の目的と方法 …… 1
(2) 報告書の作成 …… 1
(3) 参考文献 …… 2
2、太子町の地理と歴史 …… 2
第一章　太子町の寺社建築の概要 …… 3
1、一次調査の概要 …… 3
2、二次調査の概要 …… 11
第二章　二次調査対象の寺社建築遺構 …… 14
1、斑鳩寺 …… 16
2、稗田神社 …… 43
3、大師堂 …… 44
4、西光寺 …… 45
5、正円寺 …… 49
6、了源寺 …… 52
7、崇導神社 …… 55
8、蓮光寺 …… 59
9、八幡神社 …… 62
10、東光稲荷神社 …… 63
11、石海神社 …… 64
12、蓮生寺 …… 68
13、八幡神社 …… 69
14、善導寺 …… 73
15、正覚寺 …… 76
16、清光寺 …… 80
17、大歳神社 …… 84
18、淨因寺 …… 86
19、黒岡神社 …… 91
20、伊都岐嶋神社 …… 93
21、法心寺 …… 94
22、照雲寺 …… 98
第三章　太子町の寺社建築の特質 …… 100
1、太子町における神社本殿の特質 …… 100
2、石海神社本殿の中国神仙彫刻 …… 106
3、真宗本堂の類型 …… 109
4、棟札等史料釈文 …… 112

序章　調査の概要

1、調査の概要

(1) 調査の目的と方法

この調査事業は、太子町域内に現存する近世の寺社建築の遺存状況を確認し、その特色を明らかにし、ひいてはその保存や活用の基礎資料とすることを目的として、太子町が事業主体となって実施したものである。調査は神戸大学黒田龍二と京都大学山岸常人に依頼し、両大学の学生・大学院生を調査補助員として、一次調査・二次調査の二段階に分けて行った。

一次調査　町内の宗教法人、及び法人に登録されていない社・堂について、その建物の現況を把握する事を目的とする。対象建物の写真撮影、推定建立年代・建築的特色の記録を行った。

調査期間　平成十四年七月一日～三日、同十五日

調査棟数　87件233棟

二次調査　一次調査の対象建物の内から、各時代・各宗派・各建築類型を代表するような特色を持った建物、宗教的・歴史的に見て特色を持った建物などを選び、詳細な実測と史料調査を行う。対象建物の写真撮影、平面図実測・境内配置図略測、改造状況と復原調査、建立年代の確認、棟札・関連文書等の調査、建築的特色の記録の作成行った。

調査期間　平成十四年七月十六・十七日、同十五年三月三日～五日、同十六年三月十五日～十七日

調査棟数　53棟

以上の調査に参加した調査員は下記の通りである。

神戸大学工学部助教授　黒田龍二
京都大学大学院工学研究科助教授　山岸常人
同　助手　岸　泰子
神戸大学大学院生　石田理恵・合田喜賢・小木曽裕子
京都大学大学院生・学部生　木藤守明・上住彩華・武田憲明・尾山義高・庄司憲一郎・合内祥之・北脇翔平

調査の事務局関係者は下記の通りである。

太子町教育長　圓尾哲一
太子町教育委員会社会教育課長　森川秀敏
太子町教育委員会社会教育課主査　三村修次
斑鳩寺顕彰保存会会長　武本義澄
兵庫県教育委員会文化財室課長補佐　村上裕道

調査に際し、各寺社の所有者・管理者・住民等、関係者の皆様には、調査の趣旨をご理解をいただき、便宜をおはかりいただいた。快く調査にご協力いただいたことに深甚の謝意を表する次第である。

(2) 報告書の作成

報告書は黒田・山岸が検討・協議した上で作成した。編集は山岸が担当し、執筆は黒田・山岸・岸が分担した。分担は以下の通りである。版下図面は京都大学学生が作成し、岸・武田・尾山がとりまとめた。

序章・第一章…山岸、第二章…黒田・山岸・岸（各項末尾に記載）、第三章１・２…黒田、３・４…山岸

調査の際に作成・撮影した調査票・野帳・写真は京都大学山岸研究室にて保管し、複製を神戸大学黒田研究室で保管する。写真のネガは太子町教育委員会にて保管する。

なお、以下の記述中の●は重要文化財、○は町指定

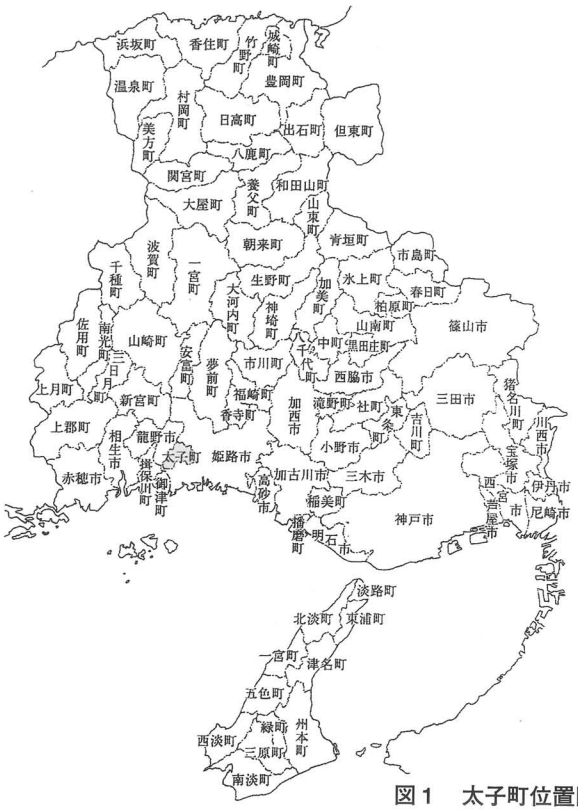


図１　太子町位置図

文化財であることを示す。

(3) 参考文献

本報告書の作成には多数の文献を参照した。すべてに註記する事ができないので、主要なものを列記する。

『太子町史』史料編　（太子町　昭和四十五年）
『太子町史』一～四巻（太子町　平成元～八年）
栗岡清孝『要略太子町歴史年表』（昭和六十一年）
日本歴史地名大系29-Ⅰ・Ⅱ『兵庫県の地名』Ⅰ・Ⅱ（平凡社　平成十一年）
『復刻版　揖保郡石海村史』（播磨地方史料刊行会　昭和五十六年）
『兵庫県の近世寺社建築』（兵庫県教育委員会　昭和五十五年）
『西脇市の寺社建築』（西脇市教育委員会　平成十二年二月）
太子町文化財資料第１集『斑鳩寺講堂瓦銘Ⅰ』（太子町教育委員会　平成元年）
太子町文化財資料第３集『斑鳩寺講堂瓦銘Ⅱ』（太子町教育委員会　平成元年）
太子町文化財資料第18集『斑鳩寺講堂保存修理工事報告書』（太子町教育委員会　平成二年）
太子町文化財資料第35集『太子町の文化財　Ⅱ』（太子町教育委員会　平成五年）
『太子町指定文化財（建造物）斑鳩寺聖徳殿前殿保存修理工事報告書』（平成九年　斑鳩寺）
『斑鳩寺―その宝物と歴史―絵画と彫刻』（太子町立歴史資料館　平成十一年）
『太子町を描く―絵図の世界―』（太子町立歴史資料館　平成十三年）
『藩磨国鵤荘　現況調査報告総集編』（太子町教育委員会　平成十六年）
『本願寺年表』（真宗文化研究会、平成八年）

2、太子町の地理と歴史

太子町は兵庫県南部の西寄りにある揖保郡の南東部に位置する。北から東、さらに南は姫路市、西から北は龍野市に接する。北と東は西播山地の端部の山地となっており、西は揖保川の支流林田川が流れ、中央部には大津茂川が流れる。町域の大部分はこれらの川による堆積によってできた平野であり、その中に火山岩でできた山が頂部を残して埋もれ、太子山・立岡山・檀特山などが島のように平野の中の独立丘となって、独特の景観をつくり出している。

町内には約二万年前の旧石器時代以来の生活の痕跡が残り、縄文時代の平方遺跡・東南遺跡、弥生時代の亀田遺跡・川島遺跡、古墳時代の鵤遺跡・黒岡山古墳など多くの遺跡が知られている。

歴史時代になると、「播磨国風土記」に町内の地名が見えるが、なんと言ってもその後のこの地域の歴史を決定づけるのは、推古天皇十四年（606）に、聖徳太子が天皇から賜った水田百町を法隆寺に施入した事であろう。後にこれが開発され十一世紀前半には法隆寺領鵤荘となる。町の西半部はこの荘域に当たる。一方、町の東半部には、藤原頼長領から後白河院領、さらに高野山領、神護寺領となった太田荘が、町南部には一条家領弘山荘があった。

この地域では、太子町矢田部で長谷寺の開基とされる徳道上人が生まれたとされ、式内社阿宗神社の故地が町内阿曽に推定される（現在旧式内社阿宗神社は林田川の西岸、龍野市誉田町に比定されている）など、古代の宗教的環境は豊富である。

中世の太子町は「播磨国鵤荘絵図」（嘉暦図・至徳図）や「峰相記」に描かれ、具体的に知ることができると共に、絵図に描かれた景観は現代まで概ね良く伝えられていることも知られる。

天正八年（1580）、羽柴秀吉が但馬・播磨を平定し、龍野城主蜂須賀家が、後に姫路城主池田氏が播磨を支配し、元和以降は太子町周辺では、鵤藩・林田藩・龍野藩が成立した。鵤の地は山陽道の宿駅として栄えた。

太子町は中世以来、揖東郡に属したが、近代に入って斑鳩村・石海村・太田村・龍田村が成立し、昭和六年斑鳩町ができ、昭和二十六年には残る三村と合併して太子町となった。

町の中央部を山陽新幹線が東西に貫き、南端を東海道線が走る。近世の山陽道をほぼ踏襲して、国道２号線が新幹線のやや北を東西に通り、国道179号線が北へ抜ける。農業が主たる産業であったが、第二次大戦後工場や住宅地が増加している。

現在、町域の面積は22.6km²、人口3.3万人である。

第一章　太子町の寺社建築の概要

1、一次調査の概要

一次調査は宗教法人名簿に掲載された寺社、及びそれ以外の社・堂などをできる限り実見し、その写真の撮影、建立年代の判定、特色の把握を行った。境内の全容や、近世建築の継承と変容をも把握するため、近代の建物も一次調査の対象とした。整理した結果、調査棟数は87寺社、233棟となった。寺院建築は81棟、神社建築は152棟である。その一覧は表１に示した。

建立年代　建立年代別に見ると、17世紀以前が８棟、18世紀が20棟、19世紀が66棟、20・21世紀は139棟である。19世紀の建立の内、幕末までの遺構は48棟であるから、中世末の斑鳩寺三重塔を含めて76棟、全体の33%が近世以前の建物と言うことになる。近代の建物も積極的に記録を採ったとはいえ、近代になって新築されたか、もしくは改築された建物の比率は高く、18世紀以前の遺構の残存比率は相対的に低い。一次調査対象とした建物の範囲が一律ではないために単純な比較はできないが、西脇市の場合、近代の建物は太子町の７割程度の比率（西脇市48%、太子町67%）、18世紀以前の遺構は太子町の二倍の比率で残存している（西脇市21%、太子町12%）（『西脇市の寺社建築』）。

寺院　宗教法人名簿によると宗派別の寺院数は、天台宗が１、真言宗が２、浄土真宗が15、禅宗が２で、浄土宗はない。この他に宗派に属さない辻堂などが５件である。この地域は、真宗寺院が圧倒的に多い。姫路の本徳寺の強い影響があるのではないかと考えられる。一次調査の対象とした寺院は15件、天台・真言宗が３件、辻堂などが４件である。

真宗寺院は表門・本堂・鐘楼が基本的構成要素で、この点は極めて定型的である。真宗の本堂はその建立が17世紀に遡るものはないが、江戸後期の建物が良く残存している。ただし近代の修理によって軒から上が大きく取り替えられている例が殆どである。

門は斑鳩寺仁王門（八脚門）・正円寺鐘楼門・蓮光寺表門（高麗門）などを除き、薬医門か四脚門で、薬医門が多い。

鐘楼は袴腰付が２棟ある以外は、方一間の一般的な形式で、屋根は入母屋造と切妻造がほぼ同数である。

斑鳩寺は顕密寺院としての中世以来の伝統を受け継ぎ、多様な形式の堂舎が現存する。それぞれの堂塔の質も極めて高い。

その他の堂宇も江戸後期以降の建立で、二次調査対象としたもの以外は、特筆すべきものは少ない。

神社　一般の神社は、規模は違っても、境域の正面に表門があり、拝殿・幣殿・本殿が接続して立つ構成が多い。

本殿（境内社を含む）は87棟調査したが、その形式は流造55棟、入母屋造17棟、流見世棚造８棟、切妻造３棟、春日造１棟、その他３棟という内訳になっている。見世棚造も含めて流造が６割を越える。２割に近い入母屋造の多さは注目される。この点については第三章１を参照されたい。

拝殿は48棟調査し、その内39棟は入母屋造、９棟が切妻造（流造形式を含む）、両形式で唐破風または千鳥破風の付くのが13棟ある。規模は桁行五間のものが石海神社と黒岡神社である以外は、すべて桁行三間で、極めて定型的である。寛延元年（1748）の「寺社境内寸法控帳」（『太子町史』第三巻第三章四五号文書、抄出である）によれば、記載された60社中、９社にしか拝殿は記されていない。しかも拝殿の規模は、間口三間、奥行二間、もしくはそれ以下が殆どである。江戸時代中期以前は拝殿の建てられない神社が多く、拝殿を持っている場合も現状と同程度か、それよりさらに小規模であったとみてよい。現存の拝殿も幕末以降に新設されたものが多いだろう。

門は８棟を調査したが、四脚門と薬医門が半数づつであった。近年建立された建速神社を除くと、四脚門は稗田神社・石海神社・黒岡神社に建てられており、神社の格と対応していると想定される。

芸能を演ずる場となる建物は町内には殆ど見られず、石海神社舞台（余興場）が貴重な例である。

龍野市

図２　一次調査寺社位置図

表１　一次調査対象建物一覧

番号	建物名	所在地	宗派	構造形式概要	推定建立年代	建立年代の根拠	備　考
1	正覚院表門	沖代字惣田201-1	真言宗醍醐派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	19世紀前期		彫刻多し
	本堂			正面三間、側面五間、宝形造、向拝一間、本瓦葺	昭和10年	本堂内の縁起	珍しい宝形造、内部外陣・内陣に区分、
	地蔵堂			桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、本瓦葺	19世紀前期		
2	蓮生寺表門	岩見構字丸町276	浄土真宗本願寺派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	18世紀前期		石海神社の門を移築と伝える、軒新材
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺、	18世紀後期		台輪以下新材
	脇門			一間薬医門、切妻造、本瓦葺	明治		
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	昭和３年	棟木墨書	
	本堂			入母屋造、向拝一間、本瓦葺	大正３年	石製縁起	彫刻豊富
3	薬師院本堂	岩見構字丸町324	臨済宗妙心寺派	方三間、宝形造、向拝一間、本瓦葺	19世紀中期		
4	荒神社拝殿	岩見構字鎌屋敷438		桁行三間、梁間一間、入母屋造、桟瓦葺	昭和17年	百度石刻銘	土間床、絵馬多数
	本殿			一間社流見世棚造、桟瓦葺	昭和17年	百度石刻銘	
5	教円寺表門	塚森字塚ノ本105	浄土真宗本願寺派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	昭和46年		
	本堂			入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	昭和戦後		
6	了源寺表門	福地字福地408	真宗大谷派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	明治		
	本堂			入母屋造、向拝一間、側背面張出付、本瓦葺	天明６年	寺伝	正面広縁あり
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	文政４年	寺伝	
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	昭和戦後		
7	蓮光寺鐘楼	常全字後畑204	真宗大谷派	桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	19世紀中期		
	本堂			入母屋造、向拝一間、側背面軒下張出付、背面下屋庇付、本瓦葺	寛政８年	墨書	三方広縁、三並び仏壇痕跡あり
	表門			一間高麗門、切妻造、本瓦葺	18世紀中期		龍野城の城門
8	教興寺表門	蓮常寺字大門147	真宗大谷派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	平成８年	石碑銘文	
	裏門			一間薬医門、切妻造、本瓦葺	平成８年	石碑銘文	
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	平成８年	石碑銘文	
	本堂			入母屋造、向拝一間、本瓦葺	明治33年	獅子口刻銘	外陣に柱無し
9	善導寺本堂	竹広字前田185	浄土真宗本願寺派	入母屋造、向拝一間、本瓦葺、背面軒下張出、側面下屋庇張出付、桟瓦葺	18世紀後期		三方広縁、欄間に文政３年墨書
	表門			四脚門、切妻造、本瓦葺	19世紀後期		
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	明治		
	裏門			一間薬医門、切妻造、本瓦葺	明治		
	庫裏			切妻造、桟瓦葺、下屋本瓦葺	19世紀中期		
10	清光寺表門	矢田部字小倉211	浄土真宗本願寺派	四脚門、切妻造、本瓦葺	19世紀中期		桁から上は新材
	本堂			入母屋造、向拝一間、背面下屋庇張出付、本瓦葺	文化５年	寺蔵記録	正面広縁、垂木より上新材
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	安永７年	寺蔵記録	桁から上は新材
11	正覚寺表門	立岡字前田346	浄土真宗本願寺派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	18世紀後期		
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	19世紀後期	鯱刻銘	明治39年ヵ
	本堂			入母屋造、向拝一間、本瓦葺、背面軒下張出、南側面下屋庇付、桟瓦葺	宝暦14年	墨書写	鬼瓦宝暦14年銘、獅子口文政２年銘、元三方広縁
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	19世紀中期		
12	斑鳩寺仁王門	鵤字斑鳩寺736	天台宗	三間一戸八脚門、入母屋造、本瓦葺	寛文13年、18世紀前期改造	記録	
	三重塔			三間三重塔婆、本瓦葺	永禄８年	瓦銘	
	講堂			桁行五間、梁間五間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	明和６年	棟札	
	聖徳殿前殿			桁行五間、梁間五間、向拝一間、入母屋造、本瓦葺	寛文５年	記録	
	聖徳殿中殿			間口三間、奥行三間、両下造、裳階付、本瓦葺	大正五年	石碑	
	聖徳殿後殿			八角円堂、銅板葺	大正五年	石碑	
	鐘楼			桁行三間、梁間二間、入母屋造、袴腰付	元禄６年	鐘銘	
	山王社			桁行一間、梁間一間、	明暦２年	小屋の板札	

				入母屋造、正面千鳥破風付、向拝一間向唐破風造、柿葺			
	天神社			桁行三間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、鉄板葺	天保６年	棟札	
	聖霊権現社本殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	文政10年	鬼瓦銘	
	旧西門			一間、向唐門、本瓦葺	幕末		
	西門			一間薬医門、切妻造、本瓦葺	19世紀前期		
	手水舎			桁行二間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	明治		
	東門			一間穴門、切妻造、本瓦葺	19世紀前期		
	庫裏（旧保性院）			入母屋造、玄関向唐破風造、本瓦葺	慶安２年 弘保12年	斑鳩寺記録	
	庫裏祈祷所			桁行一間、梁間三間、流造、本瓦葺	19世紀中期		
	庫裏表門			一間薬医門、切妻造、本瓦葺	慶安２年	斑鳩寺記録	
13	西光寺本堂	鵤字小田町1244	真宗大谷派	入母屋造、向拝一間、本瓦葺、側面・背面下屋庇付	天明年間	寺蔵記録	外陣に４本角柱、虹梁で繋ぐ、向拝彫刻繊細
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	18世紀後期		表門石柱は昭和６年
	玄関			正面一間、向唐破風造	明治		
14	正円寺鐘楼門	阿曽字屋敷876	真宗大谷派	桁行三間、梁間三間、二重門、入母屋造、本瓦葺	文化９年	石柱	腕木を絵様付板の持ち送りで受ける、軒は新材
	裏門			一間薬医門、切妻造、本瓦葺	天保頃	石柱	棟通り桁行に虹梁
	本堂			入母屋造、向拝一間、本瓦葺	享保３年	石柱	正面広縁、外陣４本の角柱、無目鴨居で繋ぐ
15	法心寺表門	佐用岡字寺垣内562	浄土真宗本願寺派	四脚門、切妻造、本瓦葺	明治		軒から上平成９年の修理
	裏門			一間薬医門、切妻造、桟瓦葺	昭和戦後		
	本堂			入母屋造、背面軒下張出付、南側面下屋庇付、向拝一間、本瓦葺	文政５年	賽銭箱墨書銘	小屋内部隅木に大正の墨書、平成９年に屋根修理（聞き取り）
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺、袴腰付	19世紀前期		垂木から上新材
16	願成寺表門	松尾字東辻ノ下185	臨済宗妙心寺派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	昭和３年	説銘板	
	本堂			入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	昭和３年	説銘板	
17	照雲寺表門	広坂字東垣内450	浄土真宗本願寺派	一間薬医門、切妻造、本瓦葺	19世紀中期		
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	19世紀中期		
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	明治		垂木より上新材
	本堂			入母屋造、背面軒下張出付、側・背面下屋庇付、向拝一間、本瓦葺	天保３年	棟札	
18	願念寺表門	上太田字南屋敷814	真宗大谷派	四脚門、切妻造、本瓦葺	明治43年	棟札（聞き取り）	
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	大正12年	基壇石垣刻銘	
	本堂			入母屋造、向拝一間、本瓦葺	嘉永６年	獅子口刻銘	天保13年上棟（聞き取り）、隅蓋獅子刻銘天保15年、外陣中柱４本
19	福泉寺鐘楼	東保字宗田130	浄土真宗本願寺派	桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	大正９年	寄付板札	
	表門			四脚門、切妻造、本瓦葺	平成		
	地蔵堂			方一間、宝形造、本瓦葺	19世紀中期 平成12年度改修		腕木で軒を受ける石製地蔵は県指定
	本堂			入母屋造、向拝一間、本瓦葺	大正３年	水盤刻銘	正面広縁、外陣に二本の円柱、虹梁で繋ぐ
20	浄因寺表門	太田字二ノ丸2051	真宗大谷派	四脚門、切妻造、本瓦葺	明治		地紋彫の辺付、龍彫刻に「松本作」の銘
	本堂			入母屋造、向拝一間、本瓦葺、南側面・背面下屋庇付、桟瓦葺	安永７年	寺蔵記録	外陣に四本の柱、繋材は特異、桁から上は新材
	鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	19世紀中期		
	庫裏			入母屋造、四方下屋庇付、桟瓦葺	19世紀中期		土間まわりよく残る
21	順海寺本堂	山田字小丸山663-24	真言宗醍醐派	正面三間、側面四間、入母屋造、妻入、向拝一間、本瓦葺	大正13年	棟上祈祷札	
	護摩堂			入母屋造、妻入、向拝一間、桟瓦葺	昭和３年	町資料	
22	八幡神社表門	吉福字ウチナウケ320		一間薬医門、切妻造、本瓦葺	18世紀前期		中央男梁上の大瓶束の意匠特徴的、吉福・沖代・米田三ヶ村の氏神
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	19世紀中期		
	境内社			一間社流造、本瓦葺	明治29年	鬼瓦刻銘	
	拝殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺	安政５年	棟札	土間床、絵馬多数、柱・軒の部材取り替え多し
	本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	19世紀中期		出組、彫刻支輪

23	皇神社拝殿	吉福字池之川517		桁行三間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	昭和６年頃	狛犬刻銘	土間床
	本殿			一間社、流造、銅板葺	大正６年頃	石製瑞垣刻銘	妻飾は古材
24	皇神社拝殿	岩見構字鎌屋敷451		桁桁行三間、梁間一間、入母屋造、桟瓦葺	昭和戦後		
	本殿			一間社、流見世棚造、鉄板葺	昭和戦後		
25	皇神社拝殿	米田字村後216		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	平成９年	石製瑞垣刻銘	
	本殿			一間社流造、銅板葺 桁行三間、梁間二間、	平成９年	石製瑞垣刻銘	
26	崇導大明神社拝殿	塚森字塚ノ本86		入母屋造、正面千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺	19世紀中期		
	本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、銅板葺	昭和４年頃	拝殿所在の大典記念改築板札	
27	荒神社拝殿	竹広字前田175		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	19世紀中期	戦争関係絵馬多し	明治28年燈籠造立板札あり、明治12年銘他
	本殿			一間社流造、鉄板葺	19世紀中期		
28	天神宮拝殿	蓮常寺字村前144		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	昭和５年	芳名板札墨書銘	土間床
	本殿			二間社流造、本瓦葺	19世紀前期	由来書板札	
	境内社			三間社流造、銅板葺	昭和35年頃		
29	崇導神社表門	福地字上土木485		一間薬医門、切妻造、本瓦葺	19世紀後期		棟通り桁行に虹梁
	拝殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	明治16年	棟札写	
	本殿			一間社隅木入春日造、銅板葺	寛政７年	棟札写	燈籠刻銘文化２年
	稲荷社			一間社流造、銅板葺	昭和戦後		
	三社			正面一間、背面三間、流造、本瓦葺	明治２年頃	燈籠刻銘	
30	稲荷神社拝殿	船代字稲荷58		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	昭和戦前		土間床
	本殿			一間社流造、本瓦葺	安政３年頃	燈籠刻銘	
31	荒神社拝殿	船代字大上権343		桁行三間、梁間一間、入母屋造、桟瓦葺	昭和戦後		土間床
	本殿			一間社流造、本瓦葺	19世紀中期		
32	石海神社表門	宮本字宮ノ前168		四脚門、切妻造、本瓦葺	明治32年	石海村史	
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	明治		
	舞台（余興場）			切妻造、本瓦葺	19世紀後期		
	屋台蔵（御興殿）			入母屋造、妻入、本瓦葺	明治		
	鎮守社			一間社流造、銅板葺	大正８年		
	拝殿（絵馬堂）			桁行五間、梁間三間、入母屋造、千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺	大正12年	石海村史	割拝殿
	本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、銅板葺	天保９年	石海村史	岩見郷11ヵ村の氏神
	幣殿			切妻造、下屋軒唐破風付、本瓦葺	明治33年	説明板	
33	荒神社拝殿	宮本字宮ノ前109		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	大正８年頃	狛犬台座刻銘	
	本殿			一間社流造、本瓦葺	大正８年頃	狛犬台座刻銘	
	稲荷社			一間社流造、本瓦葺	昭和戦後		
34	建速神社拝殿（お堂）	常全字日蓮寺178		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	19世紀後期		公会堂隣接
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和43年	背面壁板刻銘	
35	八幡神社本殿	常全字日蓮寺178		一間社流見世棚造、本瓦葺	明治27年	文書写	
36	老林神社拝殿	老原字村前175		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	大正12年頃	拝殿前石柱刻銘	土間床
	本殿			一間社流造、本瓦葺	大正12年頃	拝殿前石柱刻銘	
	境内社			一間社流見世棚造、銅板葺	明治24年	石階刻銘	
	稲荷社			一間社流見世棚造、銅板葺	大正		
37	厳島神社拝殿	糸井字糸井山28		桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺	19世紀前期		床張り、垂木より上は新材
	本殿			一間社流造、鉄板葺	19世紀前期・大正15年改築		岩山に立つ
38	徳道上人堂	矢田部字小倉224		正面三間、側面五間、入母屋造、妻入、向拝一間、本瓦葺	昭和２年頃	水盤刻銘	
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	昭和５年	棟札	
39	菅原神社拝殿（荒神社）	矢田部字檀特山482		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	昭和63年	棟札	
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和戦前		
40	菅原神社（天満宮）拝殿	立岡字山ノ下234		桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺	大正		昭和54年新幹線建設に伴い移転、土間床、片側に高い床
	本殿			一間社流造、銅板葺	安永９年頃	石燈籠刻銘	身舎側面は二間
	荒神社			一間社流造、銅板葺	明治		
	由賀社			一間社流造、本瓦葺	19世紀前期		中古材・転用材多し
	八幡神社			一間社流造、銅板葺	大正		垂木より上は新材、文化8年銘狛犬あり
41	建速神社拝殿	阿曽字荒神ノ本428		桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺	昭和56年	板書縁起	
	表門			四脚門、切妻造、銅板葺	昭和56年	板書縁起	

	本殿			一間社流造、銅板葺	明治34年	板書縁起	
	稲荷社			正面一間、側面二間、切妻造、銅板葺	明治		
42	建速神社拝殿	下阿曽字荒神本64		桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面千鳥破風付、桟瓦葺	明治		棟札有り、年号見えず
	本殿	下阿曽字荒神本64		一間社流造、銅板葺	明治12年頃	扁額名	
	稲荷社	下阿曽字荒神本64		正面一間、側面四間、正面入母屋造、背面切妻造、妻入、桟瓦葺	昭和６年	拝殿所在新築記念板札名	
43	稗田神社表門	鵤字八幡分926		四脚門、切妻造、桟瓦葺	明治元年	社伝	屋台のために基礎を高く改造する
	本殿			RC造神明造	昭和44年頃	社伝	鵤荘13ヵ村の氏神、元禄13年刻銘燈籠有り、御輿二基あり
44	春日神社拝殿	馬場字樋ノ下174		桁行三間、梁間二間、入母屋造、鉄板葺	明治41年頃	移転合祀石碑刻銘	
	本殿			一間社流造、銅板葺二棟を連結	19世紀前期		
	稲荷社			正面入母屋造、背面切妻造、妻入、桟瓦葺	昭和戦後		
45	蛭子・金刀比羅神社	鵤字太子山135-4（西本町）		二間社流造、銅板葺	明治41年頃	瑞垣刻銘	明治39年銘狛犬あり
46	荒神祠（小田堂八幡）本殿	鵤字堂ノ後1275（小田町）		一間社流造、銅板葺	昭和戦後		元西側の田にあり、公会堂隣接
47	三宝荒神社	鵤字上之町619（上之町）		一間社流造、銅板葺	昭和戦前		二社の内の向かって左
48	稲荷大明社	鵤字上之町617（上之町）		一間社流造、鉄板葺	明治		二社の内の向かって右、裏に公会堂あり
49	白玉稲荷大明神	鵤字仁王前638（仁王前）		一間社流造、銅板葺	昭和57年	鈴の綱の刻銘	隣接して屋台蔵あり
	屋台蔵	鵤字仁王前638（仁王前）		入母屋造、妻入、桟瓦葺	明治		白玉稲荷大明神に隣接、現在は斑鳩寺門前の屋台蔵を使う
50	荒神祠	鵤字出屋敷688（出屋敷）		入母屋造、妻入、桟瓦葺	明治		
51	建速神社拝殿	鵤字門田1152（北ノ町）		桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺	大正、平成に大改修		中央土間、両脇床板張り、境内に公会堂、軸部全て新材
	本殿			一間社流造、銅板葺	平成		
52	盗人荒神	佐用岡字助久垣内902		石造寄棟造			
53	稲荷社拝殿	佐用岡字瓜生836		桁行三間、梁間三間、入母屋造、桟瓦葺	大正13年	本殿墨書	
	本殿			一間社流見世棚造、銅板葺	大正13年	墨書	
54	建速神社拝殿	佐用岡字助久垣内902		間口三間、奥行三間、入母屋造、桟瓦葺、妻入	昭和戦前		
	本殿			一間社流見世棚造、銅板葺	平成14年	基壇石刻銘	
55	稲荷社本殿	佐用岡字助久垣内875		一間社流見世棚造、鉄板葺	大正15年	基壇石刻銘	
56	大歳神社拝殿	佐用岡字宮ノ本688（平方）		桁行三間、梁間二間、入母屋造、軒唐破風付、本瓦葺	昭和戦前		土間床、平成14年改造大
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和戦前		
57	荒神社拝殿	佐用岡字堂ノ後441		桁行三間、梁間三間、入母屋造、桟瓦葺	平成		土間床、三方に腰掛け、虹梁のみ昭和戦前
	本殿			一間社流造、銅板葺	19世紀後期		虹梁・桁行から上は昭和戦後の修理、石造五輪塔あり
58	荒神社拝殿	佐用岡字前山1023（柳）		間口三間、奥行四間、正面入母屋造、背面切妻造、妻入、本瓦葺	昭和後期		床板張り、前部のみ土間
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和中期		消防倉庫隣接
59	八幡社拝殿	松尾字西辻ノ下157		桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺	昭和57年	板札	
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和57年	板札	
60	荒神社	松尾字本堂767		一間社流見世棚造、本瓦葺	大正		
61	大歳神社拝殿	広坂字宮ノ前334		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	明治26年頃	石製瑞垣刻銘	
	本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	明治26年頃	石製瑞垣刻銘	公会堂隣接
	境内社			一間社流造、本瓦葺	18世紀後期		軒・身舎軸部新材
62	王子神社拝殿	王子字谷118		桁行三間、梁間三間、切妻造、正面千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺	幕末		土間床、両脇腰掛け、明治５年の絵馬あり
	本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	幕末		修理・改造少なし
63	荒神社拝殿	松ヶ下字西山291		桁行三間、梁間二間、切妻造、桟瓦葺	明治後期		
	本殿			一間社流造、本瓦葺	明治後期		
64	若王子神社拝殿	上太田字宮ノ谷47		桁行三間、梁間三間、切妻造、本瓦葺	幕末		床板張り
	本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	明治後期		
65	稲荷社拝殿	上太田字宮ノ谷47		桁行三間、梁間二間、切妻造、桟瓦葺	昭和戦前		土間床
	本殿			一間社流造、銅板葺	幕末		脇障子撤去
66	白川稲荷社拝殿	東保字高田23（間野）		桁行三間、梁間二間、	明治39年	寄附芳名板札	土間床、両脇腰掛け、軸

				入母屋造、本瓦葺			部は平成の改築、幣殿に棟札あり
	本殿	東保字高田23（間野）		一間社流造、本瓦葺	明治39年	寄附芳名板札	石製瑞垣に紀元二千五百六十六年刻銘
67	大歳神社拝殿	東保字丹生山519		桁行三間、梁間二間、本瓦葺	平成12年	改築寄進芳名板札、棟札	
	本殿			三間社流造、本瓦葺	大正11年	石製瑞垣刻銘	鵤荘絵図にあり
68	荒神社拝殿	東出字丹生山２		桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺	昭和59年		虹梁は大正の古材
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和戦前		
69	天満宮本殿	東南字佐田95		桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、銅板葺	明治43年 昭和52年改築	趣意書・寄附板札	公民館に隣接
70	三宝皇神社拝殿	東南字栗原421		桁行三間、梁間二間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間向唐破風造、本瓦葺	昭和10年	芳名表板札、石製瑞垣刻銘	
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和10年	芳名表板札、石製瑞垣刻銘	
71	黒岡神社拝殿	太田字八幡917		桁行五間、梁間三間、入母屋造、正面千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺	明治後期		
	幣殿				明治後期		
	本殿			正面桁行一間、背面桁行二間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	19世紀前期		刻銘は紀元二千五百六十二年と記す、寛文３年・天保３年の棟札あり
	表門			四脚門、切妻造、本瓦葺	明治後期		昭和の修理あり
72	竹森大明神拝殿	太田字落久保1941（川島）		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	昭和31年	稲荷神社改築寄附芳名板札	
	本殿			一間社流造、本瓦葺	昭和31年	稲荷神社改築寄附芳名板札	公民館に隣接
73	大歳神社表門	原字南町770		一間薬医門、切妻造、桟瓦葺	明治		文化11年銘狛あり
	手水舎			桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	昭和初期	石鉢刻銘	
	拝殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺	明治40年頃	板札	床板張、縁あり、棟札あり、幣殿も同時期
	本殿			正面桁行一間、背面二間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	寛政５年	棟札	
	稲荷大明神社			一間社流造、本瓦葺	昭和戦前		
	琴平社			一間社流造、桟瓦葺	明治35年	拝殿内の棟札	
	琴平社拝殿			桁行三間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	明治35年	拝殿内の棟札	明治34年銘燈籠あり
	境内社			間口一間、奥行二間、切妻造、妻入、桟瓦葺	明治後期		
74	伊都岐嶋神社拝殿	山田字檜木谷171		桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺	大正12年	説明板	床板張り、四方に縁有り
	本殿			一間社流造、本瓦葺	大正12年	説明板	
	境内社（左手）			一間社流造、銅板葺	19世紀前期	説明板	
	木野山社（右手）			一間社流造、銅板葺	享保15年	棟札	
75	荒神社本殿	太田字川原643（北村）		一間社流造、銅板葺	昭和戦後		拝殿は鉄筋コンクリート造
76	建速神社（沼田）拝殿	太田字玉ノ上41-21		桁行三間、梁間二間入母屋造、本瓦葺	昭和55年改造、虹梁のみ昭和４年		
	本殿			一間社流造、本瓦葺	昭和４年	石製瑞垣刻銘	
77	黒岡稲荷神社拝殿	太田字西山250-1		桁行三間、梁間二間、入母屋造、軒唐破風付、本瓦葺	昭和７年	改築寄附芳名板札・鳥居刻銘	
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和７年	石製瑞垣刻銘	
78	八幡神社拝殿	太田字八幡999		桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	昭和62年	八幡神社改築寄附御芳名板札	土間床、両脇に腰掛け隣接して聖徳院の石碑あり
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和62年	八幡神社改築寄附御芳名板札	
79	三輪明神社本殿	東出字丹生山519-241		一間社流造、銅板葺	昭和41年頃	石碑・手水鉢刻銘	
80	天満神社拝殿	天満山字道添88		桁行三間、梁間一間、切妻造、銅板葺	明治35年頃	狛犬刻銘・菅公千年祭祈念碑	土間床、両脇に腰掛け、柱以外は昭和46年改築
	本殿	天満山字道添88		一間社流造、銅板葺	明治35年頃	狛犬刻銘・菅公千年祭祈念碑	
81	大師堂	鵤字太子山135-2		正面一間、側面三間、宝形造、向拝一間、本瓦葺	19世紀中期		石燈籠刻銘は明治九年
82	鵜飼地蔵堂	松尾字中尾ノ下635		間口一間、奥行三間、正面入母屋造、背面切妻造、妻入、桟瓦葺	昭和戦前		
83	荒神社拝殿	松尾字谷田597		正面三間、側面三間切妻造、妻入、桟瓦葺	平成		土間床、両脇腰掛け明治二十八年銘の鬼瓦あり
	本殿			一間社流造、銅板葺	昭和戦前		石製瑞垣刻銘明治三十七年
	稲荷社			一間社流造、銅板葺	明治28年	棟札	
	境内社			一間社流造、銅板葺	平成２年	鈴の緒の銘	
84	荒神社拝殿	沖代字惣田213		桁行三間、梁間二間、切妻造、妻入、本瓦葺	平成14年	石製瑞垣刻銘	
	本殿			一間社流造、銅板葺	平成14年	石製瑞垣刻銘	
85	広坂地蔵堂	広坂字東垣内544		方一間、宝形造、本瓦葺	明治	石橋に大正10年刻銘	
86	東光稲荷神社本殿	常全字後畑211		一間社流造、銅板葺	大正	石碑刻銘	
87	薬師堂	立岡字前田325・335		方一間、宝形造、銅板葺、拝所銅板葺	昭和55年		

2、二次調査の概要

二次調査の対象とした寺社は、寺院が13ヶ寺、神社が９社であり、調査建物総数は53棟である。その内訳は、真宗本堂が10棟、真宗本堂以外の仏堂が５棟、本殿が11棟、門が11棟、鐘楼が７棟、その他の寺院建物が４棟、神社の拝殿等が５棟である。

真宗本堂　10棟の調査対象の建立年代は、正円寺が18世紀前期に遡る以外は、18世紀中期から19世紀前期である。宝暦十一年（1761）は親鸞上人の五百回忌にあたり、多くはそれ以降に建て替えられたことになる。

平面形式は、矢来筋もしくは内外陣境から後方の間口幅を広げる例が多い。外陣内部に立つ独立柱（中柱と仮称す）は四本、二本、柱無しの三類型があり、それらを繋ぐ架構も多様な形式がある。太子町内の真宗本堂の類型の詳細は第三章３に述べた。

全般的に屋根葺き替えに伴い軒から上の部材がすっかり取り替えられている例が多い中で、西光寺は規模が大きく、部材の取り替えも少なく質の高い遺構として注目される。

その他の仏堂　斑鳩寺の聖徳殿前殿と講堂は、中世仏堂形式を持つ五間堂である。近世の17世紀と18世紀に建てられており、意匠や形式は近世らしさを良く備えているが、空間構成も講堂は後戸がなく、前殿は礼堂の奥行が一間しかなく、この点でも近世の特質を示している。聖徳殿後殿・中殿は、それまで単独で存在した前殿に、近代になって附加された建物で、全体で複合形式の仏堂になっている。後殿の特異な八角二重塔（三重塔と呼んでも良い）と、前殿・後殿を中殿で接合する型式は、形式的には近世の複合社殿の系譜に位置づけられ、近世までの木造建築の技術の質的な高揚の結晶であり、建築の歴史に関する近代的な知識が集約された建物といえよう。

大師堂は鵤宿の衝にある辻堂とでも言うべき建物である。建立年代は新しいが、この種の建物の調査事例が少ないだけに今回あえて二次調査の対象とした。

本殿　建立年代は、斑鳩寺山王社が17世紀に遡る以外は、18世紀以降に降り、古い遺構は少ない。規模の面では斑鳩寺聖霊権現社と天神社が三間社である以外は、すべて間口二間以下で、規模が小さい。形式も、流造が３棟、春日造が１棟ある以外はすべて入母屋造である。入母屋造本殿の中では、とりわけ石海神社本殿の彫刻が、題材も特異で質も高く注目される。神社本殿の形式の特質については第三章１に詳しく述べた。

5	正円寺	本堂	真宗大谷派	享保三年（1718）
15	正覚寺	本堂	浄土真宗本願寺派	宝暦十四年（1764）
18	淨因寺	本堂	真宗大谷派	安永七年（1778）
6	了源寺	本堂	真宗大谷派	天明六年（1786　寺伝）
4	西光寺	本堂	真宗大谷派	天明年間（1781～1789）
8	蓮光寺	本堂	真宗大谷派	寛政八年（1796）
14	善導寺	本堂	浄土真宗本願寺派	18世紀後期
16	清光寺	本堂	浄土真宗本願寺派	文化５年（1808）
21	法心寺	本堂	浄土真宗本願寺派	文政５年（1822）
22	照雲寺	本堂	浄土真宗本願寺派	天保三年（1832）

表２　二次調査対象の真宗本堂一覧

1	斑鳩寺	聖徳殿前殿	五間堂	寛文五年（1665）
1	斑鳩寺	講堂	五間堂	明和六年（1769）
3	大師堂	大師堂	一間堂	十九世紀後期
1	斑鳩寺	聖徳殿後殿	八角円堂	大正五年（1916）
1	斑鳩寺	聖徳殿中殿	間口三間、奥行三間、両下造	大正五年（1916）

表３　二次調査対象の真宗本堂以外の仏堂一覧

1	斑鳩寺	山王社	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間向唐破風造、柿葺	明暦二年（1656）
20	伊都岐嶋神社	木野山社	一間社流造、銅板葺	享保十五年（1730）
17	大歳神社	本殿	正面桁行一間、背面二間桁行二間、梁間二間入母屋造、向拝一間、本瓦葺	寛政五年（1793）
7	崇導神社	本殿	一間社隅木入春日造、銅板葺	寛政七年（1795）
1	斑鳩寺	聖霊権現社本殿	桁行三間、梁間二間、入母屋造、向拝一間本瓦葺	文政十年（1827）
19	黒岡神社	本殿	正面桁行一間、背面桁行二間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	19世紀前期
1	斑鳩寺	天神社	桁行三間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、鉄板葺	天保六年（1835）
11	石海神社	本殿	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、銅板葺	天保九年（1838）
13	八幡神社	本殿	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	19世紀中期
9	八幡神社	本殿	一間社流見世棚造、本瓦葺	明治二十七年（1894）
10	東光稲荷神社	本殿	一間社流見世棚造、銅板葺	明治二十七年頃

表４　二次調査対象の神社本殿一覧

1	斑鳩寺	庫裏表門	一間薬医門、切妻造	慶安二年頃（1649）
1	斑鳩寺	仁王門	八脚門、入母屋造	寛文13年（1673）18世紀前期改造
12	蓮生寺	表門	一間薬医門、切妻造	18世紀前期
13	八幡神社	表門	一間薬医門、切妻造	18世紀前期
8	蓮光寺	表門	一間高麗門、切妻造	18世紀中期
15	正覚寺	表門	一間薬医門、切妻造	18世紀後期
5	正円寺	鐘楼門	桁行一間、二重門、入母屋造	文化９年（1812）
2	稗田神社	表門	四脚門、切妻造	明治元年（1867）
11	石海神社	表門	四脚門　切妻造	明治三十二年（1899）
7	崇導神社	表門	一間薬医門、切妻造	19世紀後期
14	善導寺	表門	四脚門、切妻造、	19世紀後期

表５　二次調査対象の門一覧

門　門は寺院・神社併せて11棟を調査した。17世紀中期以降の各時期の遺構が残る。形式も多様で、八脚門（斑鳩寺仁王門）、高麗門（蓮光寺）、二重門（正円寺）の各１棟がある。斑鳩寺は規模の大きな仁王門で質が高い。蓮光寺は、由緒や形式から龍野城の城門の一つの遺構と見てほぼ間違いなく、その意味で貴重である。正円寺は組物を用いず、絵様の付いた板で桁を支える簡素な形式が注目される。

上記３棟以外は薬医門と四脚門である。薬医門は斑鳩寺庫裏・蓮生寺・八幡神社・正覚寺・崇導神社の５棟を調査した。斑鳩寺庫裏表門は建立年代も古くその故もあって、意匠は簡素で、男梁上に組物も使わない端正な遺構である。控柱頂部に虹梁形貫を輪薙込むのが珍しい。他の４棟はいずれも男梁上に組物を組み複雑な形式を持つが、蓮生寺・正覚寺・崇導神社は三斗を組むのに対し、八幡神社は大斗絵様肘木でやや簡素である。一方、棟通りの処理として、蓮生寺・八幡神社は男梁上に大瓶束・笈形を立てて棟木を受けるのに対し、正覚寺・崇導神社は桁行の虹梁を置いてその上に蟇股を載せて棟木を受ける。いずれも近世らしい手法といえよう。

四脚門は稗田神社・石海神社・善導寺の３棟を調査した。いずれも建立年代が新しく、形式も複雑で意匠も派手である。石海神社・善導寺は柱上に三斗を組み、稗田神社は大斗絵様肘木を組む。棟通りの処理はいずれも桁行の虹梁を架け、稗田神社・善導寺が大瓶束を立てて棟木を受けるのに対し、石海神社は虹梁上に蟇股を置く。これらの中でも石海神社は明治に入っての建立ではあるが、地紋彫や刳り抜きの拳鼻を用いて、過剰とも言える装飾に彩られている。東日本では近世にしばしば見られるこうした装飾は、近畿圏では数少なく、その一例として注目される。

鐘楼　鐘楼は７棟を調査した。二次調査対象の中では、斑鳩寺が十七世紀に遡る建物である以外は、建立年代が新しい。斑鳩寺と法心寺が袴腰付、その他は方一間のごく一般的な形式である。

後者の内、屋根が切妻造の鐘楼は清光寺・西光寺で、入母屋造は了源寺・淨因寺・正覚寺である。切妻造の鐘楼は、妻の中備組物の内部の手先の肘木の上に絵様肘木を組んで牛梁を受ける形式が共通する。妻飾や木鼻の意匠に共通点が多い。入母屋造の鐘楼はいずれも格天井を張る。

その他の寺院建物　斑鳩寺三重塔は既に国指定の重要文化財に指定されており、改めて述べるまでもないが、町内の現存古建築を一様に把握するために改めて調査を行った。町内現存最古の遺構である。桃山時代にかかろうという時期の建物だけに、組物・隅木持ち送りの彫刻の多様性は瞠目すべきものがある。

寺院の庫裏を２棟調査した。斑鳩寺は建立年代が古い。17世紀前半に建立された庫裏は、重要文化財指定の遺構でも15棟程度であり、その意味で極めて貴重である。遺存状況も良く、若干の改造はあるが、当初形は、柱が一間毎に立つ部分が現状より多く、古式な要

1	斑鳩寺	入母屋造、袴腰付	元禄六年（1693）
16	清光寺	切妻造	安永七年（1778）
4	西光寺	切妻造	18世紀後期
6	了源寺	入母屋造	文政四年（1821）
21	法心寺	入母屋造、袴腰付	19世紀前期
18	淨因寺	入母屋造	19世紀中期
15	正覚寺	入母屋造	19世紀後期

表６　二次調査対象の鐘楼一覧

素の多いことが明瞭である。斑鳩寺は当初からではないが仏間を構えるのに対し、淨因寺は仏間はなく全くの居住と接客のための建物である。建立年代が新しいこともあって三列九室の部屋を持つ規模の大きな建物である。なお斑鳩寺庫裏祈祷所は庫裏に付属する祈祷のための極めて小さな堂で、流造の形式を採用している点は興味深い。

神社の拝殿等　拝殿は4棟を調査した。いずれも江戸時代後期の建立で、それより古い遺構は一次調査でも見出しえなかった。一次調査の知見も踏まえると、拝殿の形式は、唐破風を持つか否か、割拝殿形式か否か、といった差はあるが、極めて定型的であったと見てよい。二次調査対象の拝殿は、唐破風を持つ場合、内部の梁をそのまま前にのばして菖蒲桁としている。こうした点も含め架構も定型的である。

石海神社余興場は歌舞伎などを演ずる舞台で、町内では遺構が少ないものである。

斑鳩寺　境内に多様な形式の建物を擁するのはなんと言っても斑鳩寺である。この境内の建物を建立年代順に並べると表9のようになる。16世紀以降近代に至る各時期の良質の建物が残る。17世紀の遺構が6棟もあり、町内の全般的な遺構の遺存状況とは異なる。庫裏が江戸初期の遺構で改造も大きくないのは貴重であり、中世仏堂形式の聖徳殿前殿と講堂が形式を異にするのも興味深い。多彩な門と神社本殿、近代らしさをよく示す特異な塔形式の聖徳殿後殿など、中世以来の由緒ある古刹が、近世以降も聖徳太子に対する信仰を軸に、維持されてきたことを示しており、どれ一つとして欠かすことのできない貴重な建物群である。

斑鳩寺	三重塔	永禄八年（1565）
斑鳩寺	庫裏	慶安二年（1649）、増築部付は19世紀前期
斑鳩寺	庫裏祈祷所	19世紀中期
淨因寺	庫裡	安永七年（1778）

表7　二次調査対象のその他の寺院建築一覧

13	八幡神社	拝殿	桁行三間、梁間二間、入母屋造 正面軒唐破風付、本瓦葺	安政五年（1858）
7	崇導神社	拝殿	桁行三間、梁間二間、入母屋造 本瓦葺	明治十六年（1883）
11	石海神社	舞台（余興場）	桁行7.0m、梁間3.4m、切妻造 本瓦葺	十九世紀後期
17	大歳神社	拝殿	桁行三間、梁間二間、入母屋造 正面軒唐破風付、本瓦葺	明治四十年（1907）
11	石海神社	拝殿（絵馬堂）	桁行五間、梁間三間、入母屋造、 正面千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺	大正十二年（1923）

表8　二次調査対象のその他の神社建築一覧

三重塔	永禄八年（1565　瓦銘）
庫裏	慶安二年（1649　記録）増築部は19世紀前期
庫裏表門	慶安二年（1649　記録）
山王社	明暦二年（1656　板札）
聖徳殿前殿	寛文五年（1665　記録）18世紀中期改造
仁王門	寛文十三年（1673　記録）18世紀前期改造
鐘楼	元禄六年（1693　鐘銘）
講堂	明和六年（1769　棟札）
聖霊権現社本殿	文政十年（1827　鬼瓦銘）
天神社	天保六年（1835　棟札）
庫裏祈祷所	19世紀中期
聖徳殿中殿	大正五年（1916　石碑銘）
聖徳殿後殿	大正五年（1916　石碑銘）

表9　斑鳩寺の主要遺構編年一覧

第二章　二次調査対象の寺社建築遺構

この章では、二次調査を行った個々の建物の特徴について述べる。調査対象の建物は表10に示すとおりである。

記述のうち、建立年代については、一世紀を三等分して、前期・中期・後期と示すことにした。棟札・記録などに拠って建立年代の判明するもの以外は、様式・技法から判断したこの年代表示を用いた。

図の縮尺は、原則として平面図が1/100、規模の大きい建物の平面図は1/200、配置図は1/400、断面図は1/150とすることとしたが、便宜上必ずしもこれに従っていないものもある。図中の寸法はミリメートル単位で記している。

表10　二次調査対象建物一覧

番号	寺社名	建物名	宗派	所在地	構造形式	建立年代
1	斑鳩寺	仁王門	天台宗	鵤字斑鳩寺736	桁行三間、梁間二間、八脚門、入母屋造、本瓦葺	寛文13年（1673　記録）18世紀前期改造
		講堂			桁行五間、梁間五間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	明和六年（1769　棟札）
		聖徳殿前殿○			桁行五間、梁間五間、向拝一間、入母屋造、本瓦葺、南側に桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺張出付	寛文五年（1665　記録）
		聖徳殿中殿			間口三間、奥行三間、両下造、裳階付、本瓦葺	大正五年（1916　石碑銘）
		聖徳殿後殿			八角円堂、二重、上重裳階付、銅板葺、正面側両脇に桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺張出付	大正五年（1916　石碑銘）
		三重塔●			三間三重塔婆、本瓦葺	永禄八年（1565　瓦銘）
		鐘楼○			桁行三間、梁間二間、入母屋造、袴腰付	元禄六年（1693　鐘銘）
		山王社			桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間向唐破風造、柿葺	明暦二年（1656　板札）
		天神社			桁行三間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、鉄板葺	天保六年（1835　棟札）
		聖霊権現社本殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	文政十年（1827　鬼瓦銘）
		庫裏○			桁行22.9m、梁間13.0m、入母屋造、玄関間口一間、奥行二間、向唐破風造、本瓦葺、東増築部桁行7.9m、梁間12.1m、入母屋造、本瓦葺	慶安二年（1649　記録）、増築部付は19世紀前期
		庫裏祈祷所			桁行一間、梁間三間、流造、本瓦葺	19世紀中期
		庫裏表門			一間薬医門、切妻造、本瓦葺	慶安二年（1649、記録）
2	稗田神社	表門		鵤字八幡分92	桁行一間、梁間二間、四脚門、切妻造、桟瓦葺	明治元年（1867　社伝）
3	大師堂	大師堂		鵤字太子山135-2	正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、向拝一間、本瓦葺	十九世紀後期
4	西光寺	本堂	真宗大谷派	鵤字小田町1244	桁行14.0m、梁間14.3m、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、側面・背面下屋庇付、側面桟瓦・背面本瓦葺	天明年間（1781～1789　寺蔵記録）
		鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	18世紀後期
5	正円寺	鐘楼門	真宗大谷派	阿曽字屋敷876	桁行三間、梁間三間、二重門、入母屋造、本瓦葺	文化9年（1812　石柱銘）
		本堂			桁行13.9メートル、梁間12.4メートル、入母屋造、背面軒下張り出し付、側面葺き下ろし下屋付き、向拝一間、本瓦葺	享保三年（1718　石柱銘）
6	了源寺	本堂	真宗大谷派	福地408	桁行13.7メートル、梁間12.1メートル、入母屋造、向拝一間、側背面張出付、本瓦葺	天明六年（1786　寺伝）
		鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	文政四年（1821　寺伝）
7	崇導神社	表門		福地字上土木485	桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺	19世紀後期
		本殿			一間社隅木入春日造、銅板葺	寛政七年（1795　棟札写）
		拝殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺	明治十六年（1883　棟札写）
8	蓮光寺	表門	真宗大谷派	常全字後畑204	一間高麗門、切妻造、本瓦葺	18世紀中期
		本堂			桁行13.6メートル、梁間13.6メートル、入母屋造、向拝一間、側背面軒下張出付、背面下屋庇付、本瓦葺	寛政八年（1796　墨書）
9	八幡神社	本殿		常全字日蓮寺178	一間社流見世棚造、本瓦葺	明治二十七年（文書）
10	東光稲荷神社	本殿		常全字後畑211	一間社流見世棚造、銅板葺	明治二十七年頃
11	石海神社	表門		宮本字宮ノ前168	桁行一間、梁間二間、四脚門　切妻造　本瓦葺	明治三十二年（1899　『石海村史』）
		本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、銅板葺	天保九年（1838　『石海村史』）
		拝殿（絵馬堂）			桁行五間、梁間三間、入母屋造、正面千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺	大正十二年（1923　『石海村史』）
		舞台（余興場）			桁行7.0m、梁間3.4m、切妻造、本瓦葺、十九世紀後期	19世紀後期
12	蓮生寺	表門		岩見構276	桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺	18世紀前期
13	八幡神社	表門		吉福字ウチナウケ320	桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺	18世紀前期
		本殿			桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	19世紀中期
		拝殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺	安政五年（1858　棟札）
14	善導寺	表門	浄土真宗本願寺派	竹広字前田185	桁行一間、梁間二間、四脚門、切妻造、本瓦葺	19世紀後期
		本堂			桁行14.0メートル、梁間13.4メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、背面軒下張出、側面下屋庇張出付、桟瓦葺	18世紀後期
15	正覚寺	表門	浄土真宗本願寺派	立岡字前田346	桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺	18世紀後期
		本堂			桁行13.8メートル、梁間14.3メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、背面軒下張出、南側面下屋庇付、桟瓦葺	宝暦十四年（1764　墨書写）
		鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	19世紀後期

16	清光寺	本堂	浄土真宗本願寺派	矢田部字小倉211	桁行13.6メートル、梁間15.2メートル、入母屋造、向拝一間、背面下屋庇張出付、本瓦葺	文化５年（1808　寺蔵記録）
		鐘楼			桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺	安永七年（寺蔵記録）
17	大歳神社	本殿		原字南町770	正面桁行一間、背面二間桁行二間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	寛政五年（1793　棟札）
		拝殿			桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺	明治四十年（1907　板札）
18	淨因寺	本堂	真宗大谷派	太田字二ノ丸2051	桁行14.0メートル、梁間14.3メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、南側面・背面下屋庇付、桟瓦葺	安永七年（1778　寺蔵記録）
		庫裡			桁行　メートル、梁間　メートル、入母屋造、四方下屋庇付、桟瓦葺	19世紀中期
		鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	19世紀中期
19	黒岡神社	本殿		太田字八幡917	正面桁行一間、背面桁行二間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	19世紀前期
20	伊都岐嶋神社	木野山社		山田字檜木谷171	一間社流造、銅板葺	享保十五年（1730　棟札）
21	法心寺	本堂	浄土真宗本願寺派	佐用岡字寺垣内562	桁行12.1メートル、梁間12.8メートル、入母屋造、背面軒下張出付、南側面下屋庇付、向拝一間、本瓦葺	文政５年（1822　賽銭箱墨書銘）
		鐘楼			桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺、袴腰付	19世紀前期
22	照雲寺	本堂	浄土真宗本願寺派	広坂字東垣内450	桁行13.5メートル、梁間13.4メートル、入母屋造、背面軒下張出付、側・背面下屋庇付、向拝一間、本瓦葺	天保三年（1832　棟札）

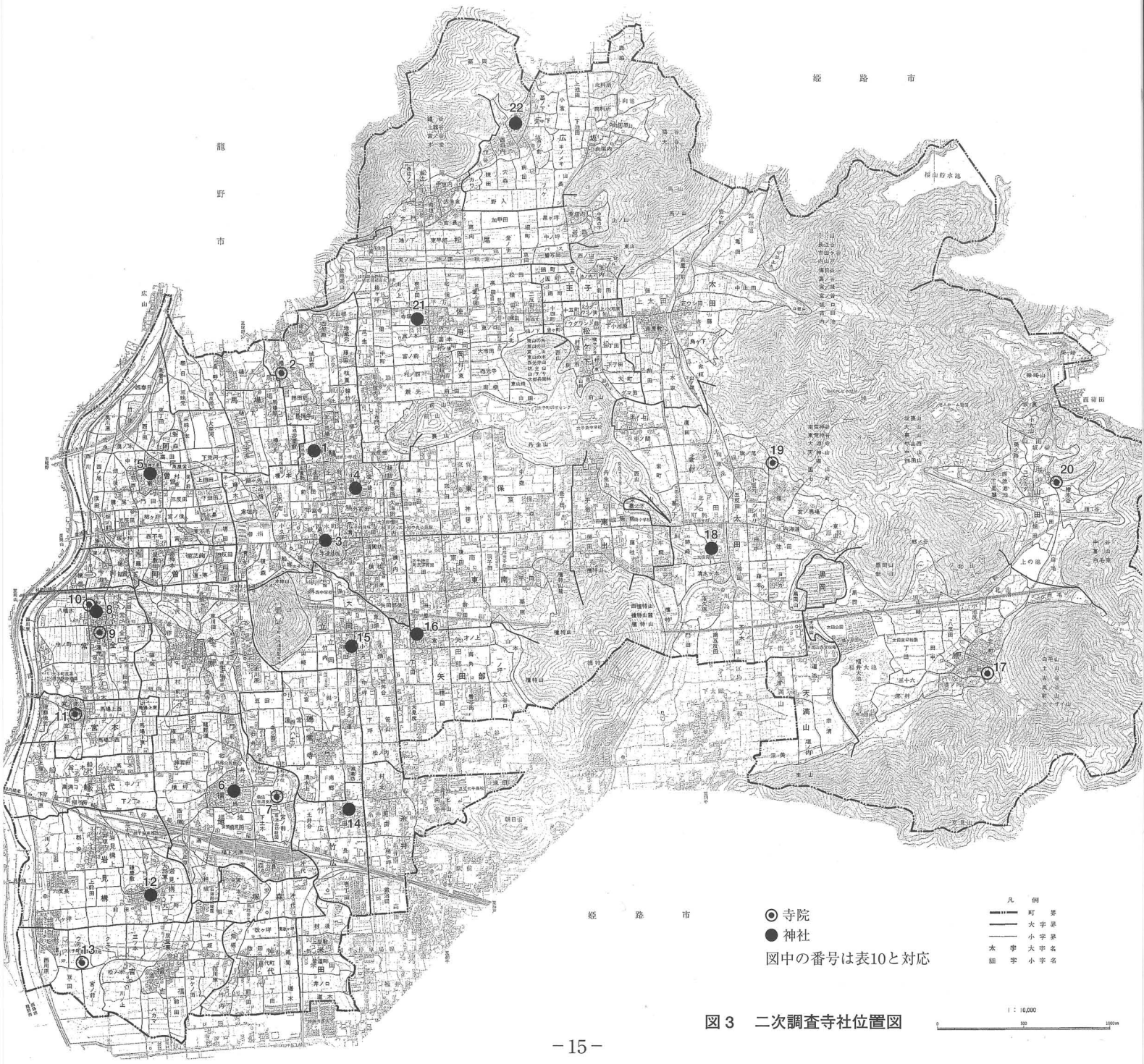


図３　二次調査寺社位置図

1、斑鳩寺　天台宗　鵤字斑鳩寺736

仁王門　桁行三間、梁間二間、八脚門、入母屋造、本瓦葺　寛文十三年（1673　記録）18世紀前期改造

円柱　足固貫　腰貫　内法貫　頭貫　木鼻　正背面中央間のみ虹梁形頭貫　平三斗　拳鼻　中備中央間のみ簑束　二軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束

講堂　桁行五間、梁間五間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺　明和六年（1769　棟札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　出三斗　中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾二重虹梁大瓶束蟇股　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　中備蟇股　二軒繁垂木

聖徳殿前殿○　桁行五間、梁間五間、向拝一間、入母屋造、本瓦葺、南側に桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺張出付　寛文五年（1665　記録）

円柱　切目長押　腰貫　内法長押　頭貫　木鼻　出組　拳鼻　蛇腹支輪　中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　中備蟇股　二軒繁垂木

聖徳殿中殿　間口三間、奥行三間、両下造、裳階付、本瓦葺　大正五年（1916　石碑銘）

円柱　虹梁形飛貫　頭貫　台輪　出三斗　中備蟇股　双斗　二軒繁垂木　裳階角柱　足固貫　腰貫　内法長押　舟肘木　中備なし　一軒疎垂木

聖徳殿後殿　八角円堂、二重、上重裳階付、銅板葺、正面側両脇に桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺張出付　大正五年（1916　石碑銘）

下層円柱　足固貫　腰貫　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　留め　出組蛇腹支輪　中備蟇股　二軒繁垂木　上層円柱　貫　挿肘木尾垂木付三手先　中備平三斗二段　二軒扇垂木　裳階円柱　挿肘木平三斗　中備間斗束　一軒疎垂木　張出部は角柱　切目長押　内法長押　舟肘木　二軒疎垂木小舞裏　妻飾木連格子　腰組は絵様持送

三重塔●　三間三重塔婆、本瓦葺　永禄八年（1565　瓦銘）

円柱　切目長押　腰長押　内法長押　台輪　尾垂木付三手先　中備簑束　二軒繁垂木

鐘楼○　桁行三間、梁間二間、入母屋造、袴腰付　元禄六年（1693　鐘銘）

下層角柱　貫三段　台輪　大斗肘木　上層　円柱　腰長押　内法長押　台輪　出三斗実肘木　中備間斗束　二軒繁垂木　妻飾大瓶束

山王社　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間向唐破風造、柿葺　明暦二年（1656　板札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫木鼻　台輪　尾垂木付三手先　蛇腹支輪　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　組高欄　木階五級　浜床　浜縁　向拝角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　海老虹梁　連三斗二段　手挟　中備蟇股　二軒繁垂木　唐破風妻飾虹梁蟇股

天神社　桁行三間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、鉄板葺　天保六年（1835　棟札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　出組　拳鼻　蛇腹支輪　中備側面のみ蟇股　二軒繁垂木　妻飾木連格子　四方切目縁　木階二級　浜床　向拝角柱腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備蟇股　二軒繁垂木

聖霊権現社本殿　桁行三間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺　文政十年（1827　鬼瓦銘）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　出組　中備蟇股　妻飾虹梁大瓶束　二軒繁垂木　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　中備蟇股　二軒繁垂木

庫裏○　桁行22.9m、梁間13.0m、入母屋造、玄関間口一間、奥行二間、向唐破風造、本瓦葺、東増築部桁行7.9m、梁間12.1m、入母屋造、本瓦葺　慶安二年（1649　記録）　増築部付は19世紀前期

御祈祷所　桁行一間、梁間三間、流造、本瓦葺　19世紀中期

身舎角柱　内法長押　大斗肘木　一軒半繁垂木　中備なし　庇角柱　敷居　鴨居　虹梁形頭貫　木鼻　大斗肘木　中備なし　一軒半繁垂木　妻飾虹梁束

庫裏表門　桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺　慶安二年（1649　記録）

ごひら角柱　蹴放　楣　冠木　控柱角柱　虹梁形飛貫　梁行腰貫　飛貫　女梁　男梁　組物なし　冠木上に絵様肘木　中央男梁上に簑束　妻飾蟇股花肘木　二軒半繁垂木

斑鳩寺は峯相記によれば、推古天皇から田を法隆寺に施入されて聖徳太子が開かれた寺とされる。境内か

らは十一世紀の瓦が出土し、その頃から斑鳩寺が法隆寺領鵤荘の経営拠点となっていた。嘉暦四年（1329）の法隆寺領播磨国鵤荘絵図に伽藍の状況が描かれている。天文十年（1541）に火災により境内のほとんどの建物が焼失し、その後再興された。三重塔はその際再建されたものである。羽柴秀吉の播磨平定により鵤荘は法隆寺への年貢納入が途絶え、斑鳩寺は龍野藩や周辺住民の信仰に支えられて法燈を継いできた。

東西250m、南北120m前後の旧寺地の中央に講堂・聖霊殿・三重塔等のある区画があり、その東・北・西は本来は院家の区画が取り囲むが、多くは廃絶し空地となったり、民家が建ち並んでしまっている。伽藍の北側に、唯一の院家旧保性院の建物が斑鳩寺の庫裏として使われている。

仁王門はこの大寺に相応しい規模の大きな八脚門である。間口は９m近くあり、中央間をその半分近くの広さにとって、中央を大きくあけている。正面側は両脇は金剛柵で囲って仁王を安置する。中央間の側通りと棟通りに虹梁形頭貫を入れ、中備に側通りでは簑束、棟通りでは三斗を置いて飾る。その他では頭貫木鼻と各組物に付く拳鼻が僅かな装飾となっており、全体的に装飾は少ない。軒の出が大きく安定感のある建物である。

この門の建立年代の判定は容易ではない。「斑鳩寺記録」（『太子町史』史料編所収）寛文十二年条には「仁王門者、当寺保性院永智之所再造也、〈略〉今寛文壬子年冬、顕海師之命不忘 為自分二王門造営之也、〈略〉十一月廿三日事始、明年癸丑年五月八日落成、大工煎烈姫路住四良三郎、同権右衛門也、」とあり、従来この史料を現仁王門の建立年代の根拠としてきた。しかし虹梁絵様の渦が木瓜型で、若葉は発達していて、例えば寛文四年の建立である円教寺仁王門（『姫路市史』第十五巻下　根拠は墨書）の虹梁絵様は斑鳩寺よりはるかに簡素で時期差を示している。一方、円教寺開山堂は寛文十一年の建立とされる（同市史　根拠明示せず、擬宝珠銘あり）が、絵様はかなり発達しているものの絵様の彫刻の幅は細い。円教寺仁王門を基準とすれば、斑鳩寺仁王門は寛文より降った時期の建立となる。円教寺開山堂との比較は慎重を要する。

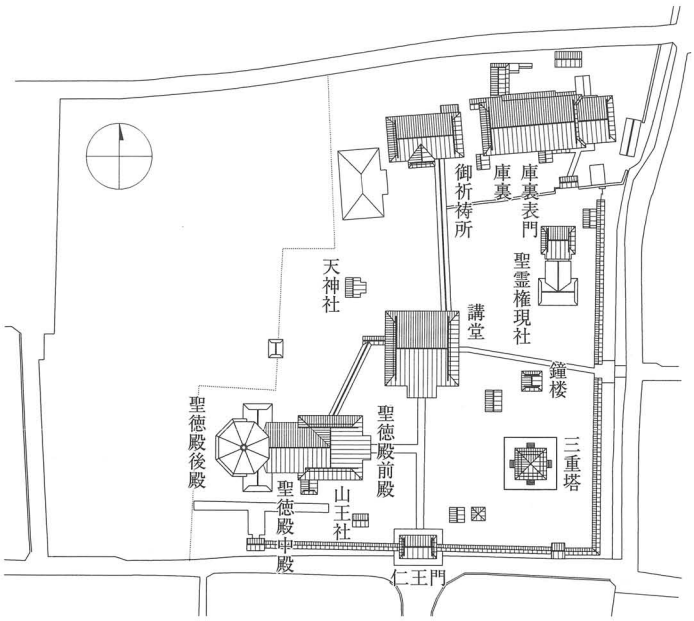


図４　斑鳩寺配置図

さて斑鳩寺旧記宝永八年条には二王門修復の記録があり、屋根瓦が落ちたので、野地板から葺き替え、柱足下に高さ八寸の礎石を据えた。工事は二ヶ月あまりで完了したと記している。この記事は極めて具体的で信用するに足るように思われる。しかし東北隅の柱には現在使われていない板決りの埋木があり、柱と貫に時期差があるようにも見受けられる。とすれば宝永の修理は軸部にまで及んでおり、現在の虹梁絵様は宝永のものと見てもよい。

なお、同記録には、享保十九年に仁王門周辺の土壁の工事も行われており、仁王門周辺での工事が続いているように見受けられる。従って、寛文の部材を残しつつ、宝永から享保にかけての十八世紀前期の大改修を経たのが現在の仁王門ということができよう。

講堂は一般の寺院では本堂に当たると見てよい堂である。規模の大きな五間堂で、柱間寸法は七尺から十一尺程度もある。前の二間通りが礼堂、後方の方三間が内陣、内陣の背面側通りは造り付けの厨子が設けられている。内陣の両側面が脇陣で、西の後端間は仏壇を造り付ける。

礼堂は側通りを化粧屋根裏、内陣前の一間通りは鏡天井を張り、中央に二本の大虹梁を架け、その大虹梁に大瓶束を立てて、その上の組物と側柱の組物を海老虹梁で繋ぐ。なお大瓶束の結綿にはかなり大きな木の葉形の彫刻が付く。入隅に柱が立つのでこの部分では前後に一間の虹梁を架け、入隅柱から正面と側面の柱へ海老虹梁を架ける。入隅柱の足下には前後に畳を敷

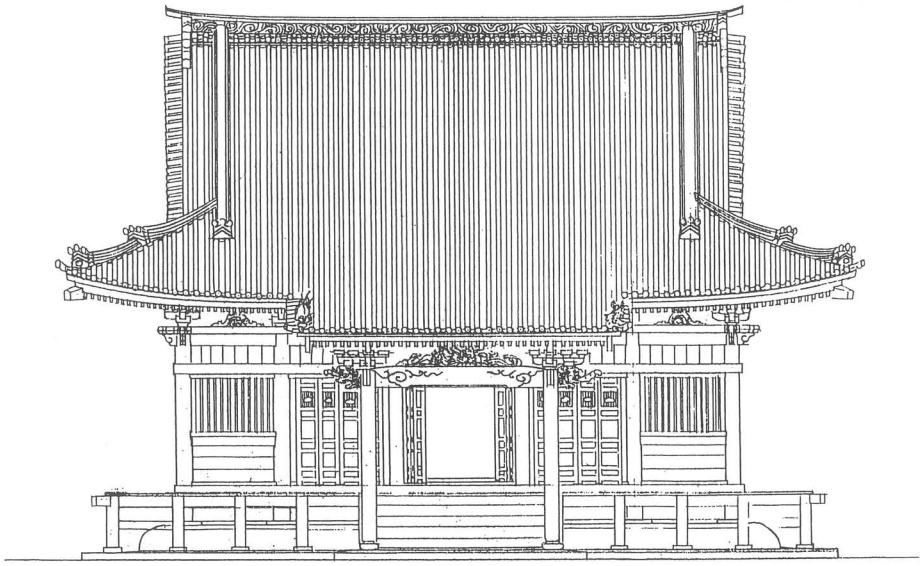


図５　講堂正立面図（中道建築設計事務所作成）

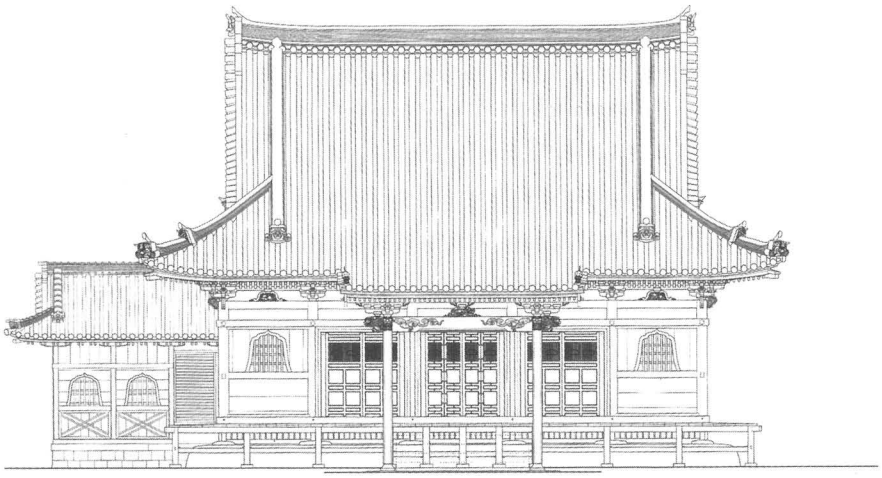


図７　聖徳殿前殿正立面図（文化財建造物保存技術協会作成）

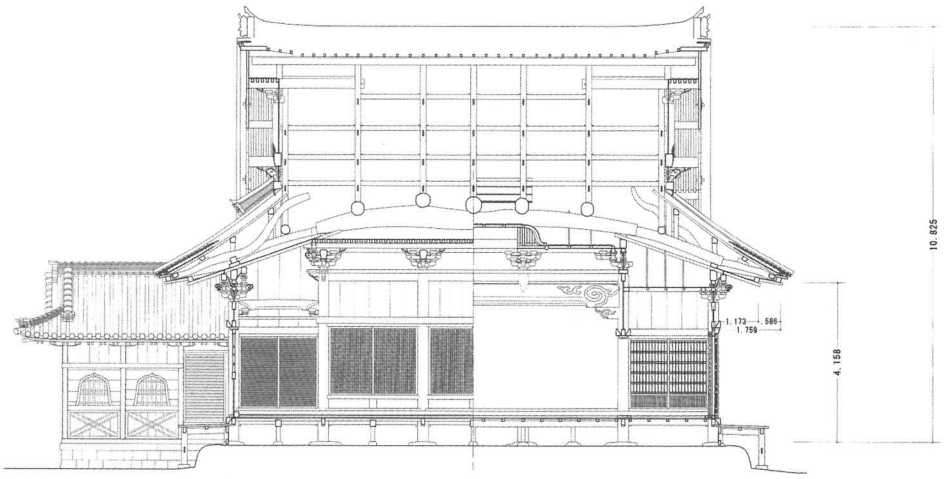


図８　聖徳殿前殿桁行断面図（文化財建造物保存技術協会作成）

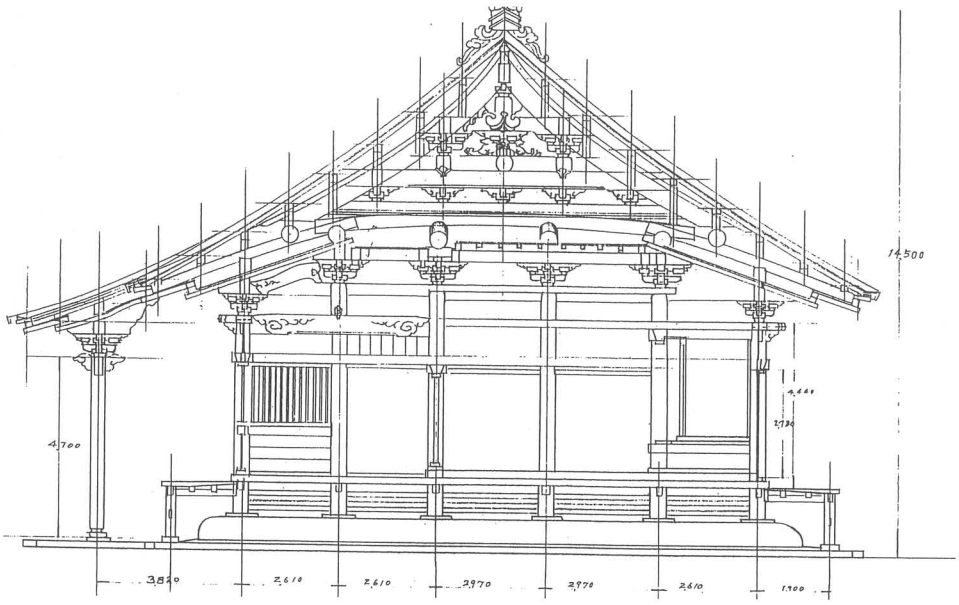


図６　講堂梁行断面図（中道建築設計事務所作成）

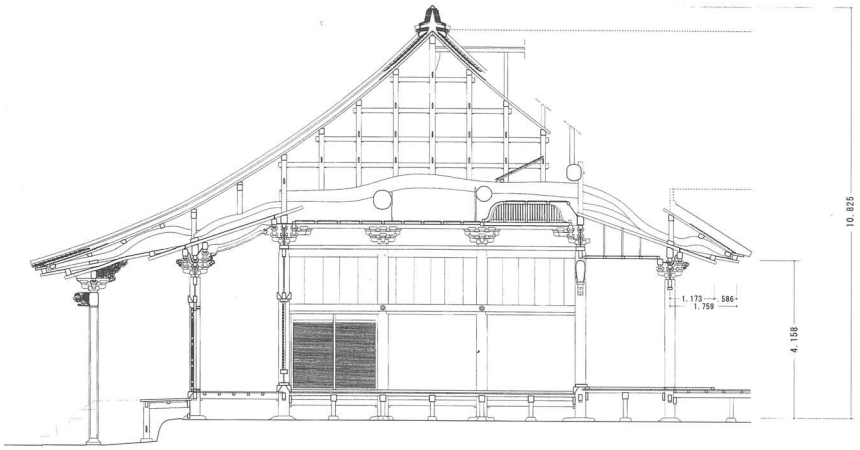


図９　聖徳殿前殿梁行断面図（文化財建造物保存技術協会作成）

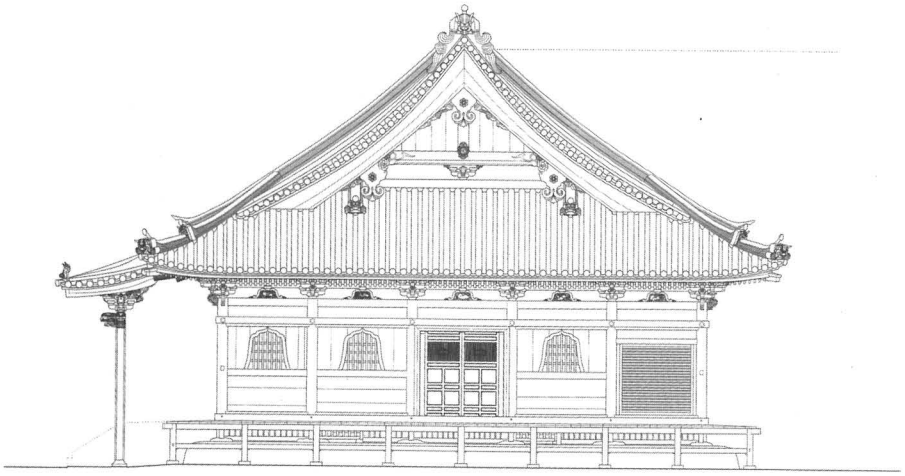


図10　聖徳殿前殿側立面図（文化財建造物保存技術協会作成）

くための無目敷居が入れられており、現在でも法会の際には礼堂床に畳を敷いて使っている。内陣・礼堂境は引違の格子戸が入れられる。この境の柱筋には腰高結界の痕跡があるが、使用されていない。

礼堂が架構を見せているのに対し、内陣は架構を用いず、棹縁天井を一面に張るだけの簡素な作りとなっている。内陣廻りの柱には台輪を載せ、虹梁形飛貫を入れ、さらに中備は簑束を据えて、それなりの見せ場を作る。内陣後方の厨子正面は、側面からの台輪を廻すが、虹梁形飛貫は入れていない。この柱筋から約一尺後方に扉を構えて厨子を作る。播磨の寺院では一乗寺本堂に代表されるように、厨子が大規模になる例が散見されるが、斑鳩寺講堂もその一例といえよう。

脇陣は化粧屋根裏とせず棹縁天井を張り、繋虹梁を入れる。西脇陣後方の厨子は中古の改造によるものである。東脇陣後端間は側面・背面共に、当初は板壁で閉じられていたが、中古に板戸に改めている。

総じて中世仏堂の形式や架構をよく踏襲した建物であるが、内陣は架構を組まず、厨子が内陣背面に広がり後戸がない点など、近世的な特質が濃厚である。勿論、彫刻や絵様は江戸時代中期らしい華やかな意匠で、向拝柱の三方に付けた木鼻、妻飾、大瓶束結綿の意匠など、時代の特徴をよく示している。向拝打越垂木がむくっている点も注目したい。礼堂には参詣者の落書が多数残されている。

明和二年から八年の刻銘のある瓦23点が使用されており、三木庄兵衛の作のものと大阪や奈良西の京の作のものが混在する。棟札が保管されており明和六年の上棟であることが確実である。近世中期の質の高い五間堂である。

聖徳殿は聖徳太子を祀る建物で、近世には太子殿と呼ばれていた。現状はかなり特異な形状を呈しており、入母屋造の前殿、両下造の中殿、三重に見える八角円堂の後殿が接続した複雑な建物である。前殿は記録により寛文五年の建立で、その南側に付属する供水所は大正十四年の増築（石碑銘）、中殿・後殿は大正五年に落慶供養が行われている。

前殿は講堂より小規模の五間堂で、梁間五間の内、前一間通りを礼堂とし、その後方の間口三間、奥行三間が内陣、両側面一間通りは脇陣、背面一間通りは中殿との取り合いで、通路状の空間となっている。内陣には何も祀られず、前殿全体が後殿に対する礼堂の役割を果たしている。

中殿・後殿を建設するに際し、背面入側の中央二本の柱を切断し、大瓶束状に残して下に新たに入れた大梁でこれを受け、中殿への見通しをよくする一方、背面側柱は漆塗りを施して、法要の場である中殿側の空間に属する体裁に変更されている。

前一間通りの礼堂は海老虹梁を架けて繋ぎ、入側通りは粽の付いた柱を頭貫・台輪で繋ぎ、出組の組物を組む。壁付きの二段目の肘木は横に広がる禅宗様の正式の形状である。

礼堂と内陣の境の中央三間の柱間には腰高結界を入れ格子戸で仕切り、両端間は舞良戸の出入口となっている。内陣と脇陣の境は、現状では内法長押を打ち敷居・鴨居を入れるが、現状より高い位置に敷居の当たりがあり、また切目長押の痕跡もある。当初の敷居は今より約六寸高く、内陣の床は脇陣より約三寸強高かったと見られる。この部分の内法高は六尺となり、南側に残された舞良戸がこの寸法と合致する。脇陣背面の内法長押は材料が新しいが、現状と同様に廻っていた痕跡があり、背面入隅の柱には特に痕跡がないが部屋であったのであろうか。

礼堂の天井は化粧屋根裏であるが、脇陣は棹縁天井、内陣は格天井で、格間には草木の絵を描く。内陣天井は後方の方一間だけ折上となっているが、支輪の材は新しいものがあり、中古に折上に改造し、さらにその後の入側柱を抜いた時にも組物・通肘木を切断し、支輪も一部切り取ったものであろう。柱を切り取られた背面入側通りの頭貫・台輪・組物には彩色が施されており、おそらくこの柱筋から後方に須弥壇が設けられていたのであろう。

向拝は講堂同様打越垂木をむくらせている。向拝の虹梁形頭貫絵様は明らかに建物本体の意匠より新しく、向拝柱と共に明治になって取り替えられていると考えられる。

南面の張出は井戸屋形とでも言うべき建物で、内部に献水御供所と記した札がある。角柱に舟肘木を載せた簡素な形式である。吹寄垂木を用い、部材の随所に面取りを施した丁寧な作りである。

「斑鳩寺記録」の寛文五年条に詳細な造営関係記録がある。天文二十年・寛文四年・宝永八年・明和二年・安永九年・文化七年の刻銘のある鬼瓦・瓦が用いられ、安永十年の修理棟札も現存する。寛文五年の建立で、前身堂の屋根瓦を用い、安永九年に屋根の修理があり、その間にも屋根葺き替えがあったと見られる。上質な建物で、組物の拳鼻は十七世紀に遡る端正な意匠を持っているので、「斑鳩寺記録」に従って寛文の建立を認めて良かろう。ただし、雲紋を彫る頭貫木鼻や隅木持ち送りなどの彫刻は十八世紀中期に見られる華麗な意匠であり、妻飾虹梁絵様もまた寛文に遡ると判断するには躊躇される。あるいは十八世紀中期の明和・安永頃に大規模な改修があった可能性もある。

中殿は前殿と後殿を繋ぐ両下造の建物である。正面側は、前殿の側柱を中殿の側柱に兼用し、背面は後殿内部に入り込んで、後殿正面の扉構えの柱筋まで、間口三間、奥行四間の空間を作って、法要の場としている。なお側面の前二間は虹梁形頭貫を入れ、中央に円束を立てて、これは外部からは柱として見えるから、実質は奥行六間ということになる。ただし小屋組に入れないために、実際の構造がこの空間の構成や、上記構造形式と対応しているか否かは確認できていない。

側面後方二間は内法長押で繋ぎ、柱間は火頭窓と土壁である。内部の天井は二重折上格天井で、中央部は小組格天井である。裳階部分は化粧屋根裏で、前殿から後殿への通路となっている。本体部と裳階の間には高欄を組んで結界としている。

この空間の背面の柱は内法長押・頭貫・台輪で繋ぎ、柱上に出三斗を組んで軒唐破風付の屋根を見せ、中央間は双折桟唐戸、両脇間は蔀を入れる。この柱筋の前に組高欄を組んで、縁・木階を設けている。霊廟の神社本殿の正面と近い構えとなっている。

後殿は珍しい三層の屋根を持つ八角円堂である。二層目の屋根は小さく裳階と見てよい。三層の意匠は下から、軒が平行繁垂木、一軒疎垂木、扇垂木、組物は出組、挿肘木平三斗、挿肘木尾垂木付三手先、中備は蟇股、双斗を載せた間斗束、平三斗と変化を付ける。外観は八角であるが、内部は前方は八角形に柱が立たず、平面から見れば、横長の建物の背後に八角円堂が接続していると見ることもできる。

内部は入側柱が八角形に立ち、内部に厨子を安置する。この部屋の正面の柱は白に彩色し、組物は金・群青・朱等の置彩色で華麗である。内部も極彩色を施し、天井は折上小組格天井をはり、格の高さを示す。入側通りには海老虹梁を架け柱上には出組組物を組む。

張出部は腰組で縁を受けた軽快な建物である。内部はそれぞれ畳敷きの部屋で、間口三間、奥行一間の入母屋造正面軒唐破風付檜皮葺の厨子を据え、北は善光寺如来、南は南無仏太子を祀る。二手先組物を組み、隅尾垂木に龍彫刻を用いた、上質の厨子である。

中・後殿の石組の基壇も丁寧な作りである。

総じて特異な形状を持つものの、日本建築の様々な形式や様式を複合させ、聖徳太子を祀る壮大な空間を作ろうとした近代の伝統意識と質の高い大工技術の粋が集められた興味深い近代建築といえよう。

太子殿南側に建つ石碑によって、明治四十一年に定礎を行い、大正三年に完成し、同五年二月に落慶供養を行ったこと、伊藤平左衛門が設計したことなどが判明する。

三重塔は既に重要文化財に指定されている規模の大きな塔である。屋根の逓減率や軒反りが大きい、姿の良い塔であるが、意匠的には極めて興味深い。すなわち組物の拳鼻を層ごとに変えて、初層はハート形の猪目の付いた複雑な意匠、二層は上と下から渦を巻き込み、三層も同様であるが巻き込みの向きを二層と逆にし、さらに拳鼻の鼻先を上に持ち上げ、変化を付ける。また隅木持送も初層は動植物等の浮彫を施し、二層は渦と若葉の絵様を彫り、三層は象鼻と変化に富む。高欄縁葛木鼻にも彫刻を付けて、豊かな装飾にあふれている。中備は初層では各間に置くが、二層は中央間のみ、三層はなしとこれも一様ではない。

初層内部は四天柱を立て、その内部を須弥壇として阿弥陀仏を祀る。天井は身舎・庇共に鏡天井で、簡素である。

瓦銘によって知られる建立年代は16世紀も半ばを過ぎ、桃山期の装飾豊かな建物の出現する先蹤となる時期の建物といえよう。

鐘楼は、標準的な規模の袴腰付の建物である。袴腰の反りが少なく、上層の立ちが高い、やや安定感に欠ける近世らしい外観を持つ。下層の柱は上層には伸ば

さず、上下別々に軸部を組んでいる。上層の化粧隅木は梁行の野梁にほぞ差しとして鼻栓で留めている。

意匠の面では隅木の持送が蟇股を逆さとしたような端正な形状である。

鐘の銘に元禄六年に鋳造した旨が記され、「斑鳩寺記録」とも合致する。その際、建物も建て替えられたと考えられる。

平成六年に町指定文化財としての修理工事が行われ、下層柱内部に添柱を付け、下層腰組、上層床と縁等の材が殆ど新しくして、当初の形態を確かめる術がない。

山王社は仁王門のすぐ北西の覆屋の中に立つ小規模な神社である。この社殿は、「斑鳩寺記録」によれば、もともとは斑鳩寺の門前の中宮寺にあった建物で、延宝七年（1679）にその諸堂を斑鳩寺に移転し、鎮守山王社としたものだと記している。寛文十二年以前の状況を描くとされる「斑鳩寺境内図」にも仁王門西南にそれらしき社殿が描かれている。小屋の中にある板札に明暦二年（1656）の墨書があり、その時の建立と認められる。

この建物は以下のように小規模ではあるが極めて凝った作りで、近世らしい特質をよく備えている。まず入母屋造で正面に千鳥破風を付け、向拝は向唐破風造という複雑な屋根形式を持つ。本体部では尾垂木付の三手先組物を組み拳鼻を付け、尾垂木先端に絵様繰形を付ける。隅では絵様繰形付きの尾垂木が二段に重なり、隅木持ち送りにも繰形を付けている。中備蟇股には双斗を二段重ねる。向拝組物は連三斗を二段に重ねるので、上段は斗が五個並ぶことになり、この組物にも前方と唐破風側に拳鼻を付ける。打越垂木にむくりと反りがある。

この他正側面三方に扉が開くのも珍しい。正面は桟唐戸、側面は板扉と形式を変えている。

材質も良く、手の込んだ意匠をもつ貴重な建物である。屋根の傷みが著しいのが惜しまれる。内部に文禄から享保の間の年号を持つ札や絵馬が多数置かれているが、この建物の建立年代を直接示すものはない。

天神社は聖徳殿の北に立つ小規模の三間社である。「斑鳩寺記録」所収の「当寺堂塔寺院之図」ではこの位置には弁天との記載がある。この建物の内部に置かれていた棟札には「自在天神　天照大神　大弁才天」と記されているので、合祀などで祭神が変化したのかも知れない。棟札によって天保六年の建立が判明する。

この社殿は山王社や聖霊権現社と同様、入母屋造である。内部は柱筋に梁行に壁を設け、三分しているが、それぞれは奥の床高を高くして神体を祀っていた。構造形式や意匠はとりたてて特徴があるわけではないが、頭貫木鼻や虹梁形頭貫木鼻、手挟等に十九世紀中期らしい意匠がよく表れている。打越垂木がむくっている点も境内の諸堂と共通している。

縁は崩落し全体に傷みは著しい。早急な修理が望まれる。向拝の飛檐垂木はおそらく近代になってからの修理で取り替えられている。

聖霊権現社は聖徳太子を祀る点で特殊な社である。また、斑鳩寺のなかにあって、中世以来、鵤荘住人との関係が深かった点において歴史上重要な社である。それらの点については第三章１で触れることにして、ここでは建物の概要を述べる。聖霊権現社は講堂の北東にあり、南面している。前方の拝殿は近年の鉄筋コンクリート造である。本殿は石製の垣に囲まれ、切石基壇の上に建つ。

本殿は平入の入母屋造で、桁行三間、梁間二間の規模があり、正面に一間の向拝をつける。身舎の正面と側面の三方に切目縁を回し、正面の階は五級で、背面の柱筋に脇障子を立てる。内部は間仕切りのない一室空間で、正面中央間に桟唐戸を開く以外の柱間は横板壁である。奥の壁の中央柱間に高さ二尺六寸の壇を設ける。壇の正面両側の柱はごひら柱（断面が長方形の柱）で、正面側に腰長押、内法長押を打つが、柱間装置はなく、正面側に御簾を吊る。壇の側面は開放である。壇上には箱型の厨子が二基安置されており、一基は新しい。柱の内部に面した部分は断面八角形の一部を残しており、外部のように円柱に仕上げていない。組物も完全には仕上げていない。天井は新しい棹縁天井である。

本殿の特色の第一点は、内部を間仕切りのない一室空間とし、奥の中央に壇を設けて、正面側に広い空間を作る点である。このような構成がとられた要因として、ひとつは殿内で何らかの行事、おそらくは仏事を行ったことが考えられる。またもうひとつの可能性として、大量の供物や飾り物を本殿内に置いたことが考

えられる。しかし、いずれにしても殿内の柱と組物が完全に仕上げられていないことから、限られた僧侶、神官以外は入ることはなかったであろう。もう一点、細部の特徴として、動物木鼻の多用があげられる。正面と側面では全ての柱頂部に動物木鼻をつける。背面では通常の絵様を施した木鼻である。向拝柱においても、三方向に木鼻をだすという珍しい手法を用いており、正面及び側面側は動物木鼻、本殿側は絵様を施した木鼻としている。向拝を含めた正面側の意匠は特ににぎやかである。

建立年代に関する確証は得られなかったが、文政十年（1827、大棟獅子口の鰭）と天保十□年（降棟鬼板）の瓦銘があり、様式的に文政十年の建立と推定する。

この本殿は技術、意匠の面において、江戸時代後期の手堅い手法になる建物である。

庫裏は旧保性院の本堂で、現在は斑鳩寺の庫裏と称されている。規模の大きな入母屋造、本瓦葺の建物で、東側に落棟を接続している。本体部分は仏間・座敷と〈庫裏〉（僧侶の日常生活の場、建物全体の呼称と区別するために〈〉を付す）を一体とした建物で、東端の表側のみ土間の玄関として、現状では十五室もの部屋を持つ。背面側には便所と離れ座敷を接続している。

建立年代を示す棟札などの直接的な史料は見出せなかったが、「斑鳩寺記録」の慶安二歳の条に「保性院造営自春至秋成、六間ニ十一間半、瓦葺并門同ク瓦葺、大工本州飾磨郡亀山住人市右衛門、」とあり、後述の技法・様式はこの史料と齟齬はない。

正面中央部は一間半四方の張出を作り、向唐破風造の屋根を架けて、式台玄関を設けている。玄関は面取の角柱を用い、頭貫で繋ぎ、木鼻を付す。柱上には三斗を組み、妻飾は虹梁蟇股である。頭貫木鼻は側面に雲紋を彫り、妻虹梁には渦と若葉の絵様を彫る。蟇股共々これらの彫刻は端正なものである。

この玄関より東が〈庫裏〉であり、土間玄関の西に一室、これらの奥に二室、背面側に二室の部屋を設ける。背面側の二室の前（南）には中廊下が設けられている。西の中央の部屋のみ内法長押を打つが、その他は長押を打たない。内法材は西の表側の部屋の二面に差鴨居を用いる以外はすべて薄鴨居である。

玄関の奥には六畳と三畳の二室が並ぶ。六畳の両側面は共に片引戸をたて、庫裏側と仏間・座敷前の広縁側との往来を可能にしている。

玄関の西は仏間・座敷で、正面側から西面にかけては一間幅の広い縁を設け、表側に十二畳と八畳の二室、その奥に三室、背面側にも三室を設ける。奥の中央間が仏間であり、奥の西端の部屋は床・棚・平書院を備えた座敷である。表の二室と座敷は内法長押と蟻壁長押を備えた上質の部屋である。これらの部屋の南と西の面、すなわち広縁との境は一間毎に柱が立つ。仏間及びその東の部屋も内法長押を打ち、その他の四室は長押を用いない。仏間は二間四方で後方約三分の一に仏壇・厨子を造り付ける。

小屋組は大梁を縦横に組んで束を梁行に半間毎に立て、貫で縦横に繋ぐ。貫は背違いに通す。前後の側柱際では登梁も併用する。

庫裏の通例どおり、この建物にも改造が少なからず見られる。

まず土間玄関の西の部屋は、土間境と南正面の二面に長さ二間の差鴨居が用いられているが、内法長押とは材質感が異なり、中央の束の下を切断している。鴨居も中古材であるので、当初はおそらく一間毎に柱が立っていたと考えられる。

背面二室の南の中廊下も当初はなく、背面の部屋の一部であった。背面の一部には柱間一間の内の半分を土壁とした片引戸の痕跡もある。

玄関の西の十二畳・八畳の部屋の南側の、広縁との境の鴨居は三本溝である。現状では障子がたてられているが、本来は舞良戸二枚と障子一枚がたてられて、広縁正面は開放であったのであろう。西の広縁と南の広縁の境には板戸がたてられ、西広縁には雨戸が入るから、南広縁のみ吹き放しとなっていたことになる。なお南広縁と部屋の境にも雨戸敷居があるが、これは板を貼っただけのもので、中古の改造である。

仏間は、正面の内法長押の中央に柱の立っていた埋木があり、鴨居も中古材であるから、ここも一間毎に柱が立っていたことになる。この位置に立つ束は柱の残材と見られる。この束の背面には、貫の埋木などがあり、仏間が東西に仕切られていたことになる。仏壇の框を納める間柱は天井と共に中古材であり、側面の内法長押も柱Ａの位置で継がれているので、仏壇の奥

行が一間あった時期がある。当初は二室の小部屋で、その後奥行一間の仏壇が設けられ、さらにそれを後退させて現状のようになったと推定される。

式台玄関奥の六畳の部屋は、まず西側面の前一間、すなわち広縁との境が、半間は障子はめ殺しの片引戸であるが、はめ殺し部分は板壁を留めた横桟の穴が残り、本来板壁であった。また柱Ｂの桁行の通りに垂れ壁があるが、内法長押は柱Ｂで留めの仕口が残り、継ぎ足されている。本来は、垂れ壁は内法位置まで下がり、内法長押を廻して、おそらく柱Ｂの筋に建具が入っていたのであろう。

背面は部材の取替が多く、明確ではないが、座敷や仏間の背面の柱筋から一間後方までが本来の規模で、座敷・仏間背後は広縁、〈庫裏〉は広縁も取り込んで部屋が設けられており、後に背面下屋庇を附加して部屋数を増やしたと考えられる。「斑鳩寺記録」の規模の記述は下屋庇のない状態とよく合致する。

土間の上の大梁は二本が新材に取り替えられている。大棟の鬼瓦には享保十一年と天保十二年の刻銘があり、その頃に屋根葺替があったことが知られる。

以上のように改造が見られるものの、概ね建立当初の姿を留めており、遺存状況は良い。柱が一間間隔で立つ部分が多いこと、差鴨居を用いないことなど、古式な技法が目立つ。式台の唐破風周りの様式も17世紀中期のものである。江戸時代前期の保存状態の良好な庫裏の建物として極めて貴重である。

東側の増築部は、庫裏の東妻の軒を切断して、付け足した建物で、井戸・竈などの施設が設置されている。土間床で天井も張らず、小屋組を見せる。近年、新建材で三部屋が設けられている。煉瓦積みの竈、石組みの井戸、コンクリートたたきの流し、ドラム缶風の水だめなど、近代の台所廻りの設備が良く残されている。

小屋組は、梁の上に束を半間毎に立てて背違いの貫で繋ぐ。野地板・垂木はすべて新しい材料に取り替えられている。

西に接続する便所はおそらく大正の増設で、傷みも目立つが、近代の和風建築の質の高さを示している。

御祈祷所は庫裏の西南隅に接続する建物である。間口２ｍに満たない小さな堂であるが、建築形式は流造であって、身舎と庇は内法長押で繋ぎ、両者一体の空間としている。天井は身舎の部分は棹縁天井、庇は化粧屋根裏で、身舎背面よりに仏壇を設けている。

様式や意匠では取り立てた特徴はないが、そもそも祈祷に使われる仏堂が流造である点は興味深い。虹梁絵様から幕末の建立と考えられる。庫裏の付属施設として欠かせない。

庫裏表門は旧保性院の区画の南面築地に開く小規模な薬医門である。一般的な薬医門の形式を持つ中で、控柱に虹梁形飛貫を入れ、その直上に桁を柱頂部に輪薙込んでいる形式、女梁の後部は男梁と同様に控柱まで延びて大入れとする形式などはやや異例である。女梁先端の繰形と絵様、控柱の虹梁形飛貫の絵様は庫裏の玄関の意匠と同形で、同時期の建立と認められる。隅蓋の獅子には文政十三年と万延二年の刻銘があり、その時期に屋根葺替があったと知られる。なお正面側の控柱は後補材である。

屋根勾配も緩く、古雅な趣のある佳品である。

以上のように、斑鳩寺境内には室町時代後期から、近代に至る様々な形式の建物が遺存している。近世を通じて一定の寺勢を保っていたことがこのことからも窺われる。近世の建物は垂木のむくりや細部意匠に共通性が多く、大工の系統などを知る手がかりともなる。建物の質は高く、ここに報告したいずれの建物も中世以来のこの寺の歴史を知る上で欠かすことができない。

境内の主な堂舎の瓦銘は『斑鳩寺講堂瓦銘　Ⅰ』・『同　Ⅱ』・『斑鳩寺―その宝物と歴史―』に報告されている。　　（山岸、聖霊権現社は黒田）

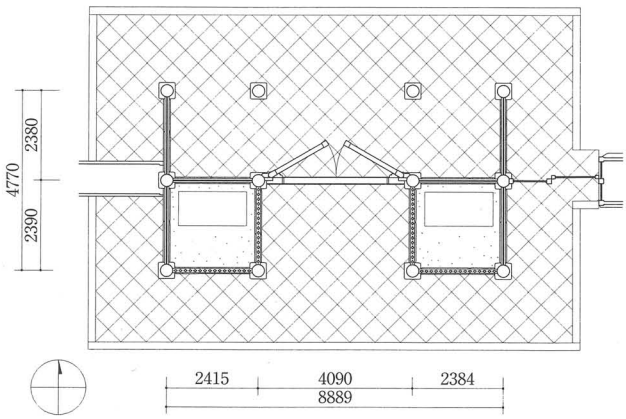


図11　仁王門平面図

写真１　仁王門全景

写真３　仁王門見上げ

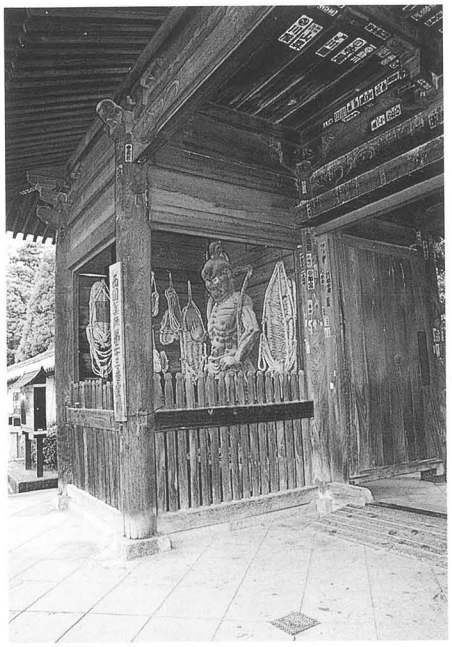


写真２　仁王門正面詳細

写真４　仁王門棟通り虹梁形頭貫

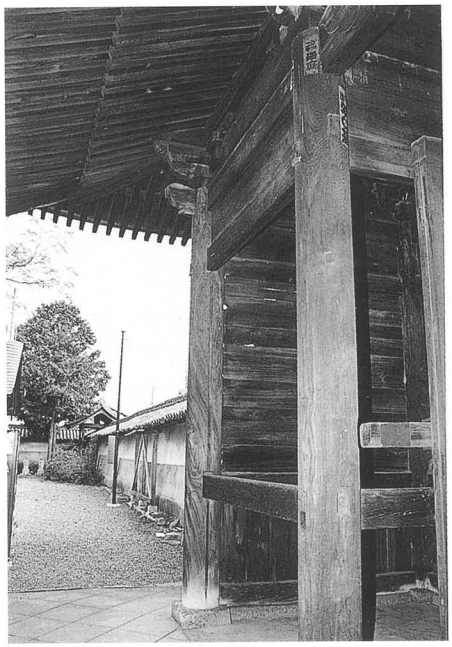


写真５　仁王門背面側詳細

写真６　講堂全景

写真７
講堂向拝見返し

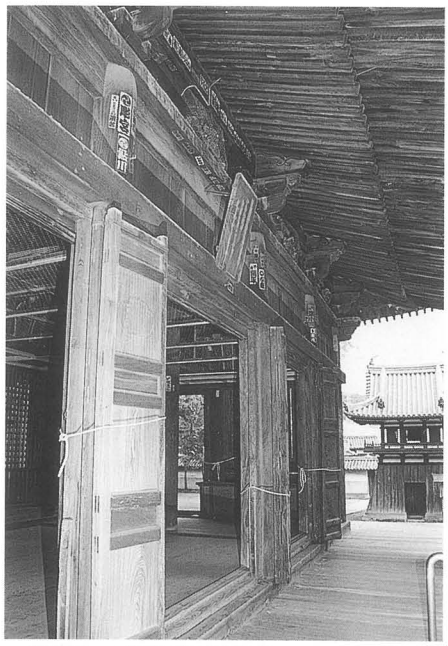


写真８　講堂正面側通り

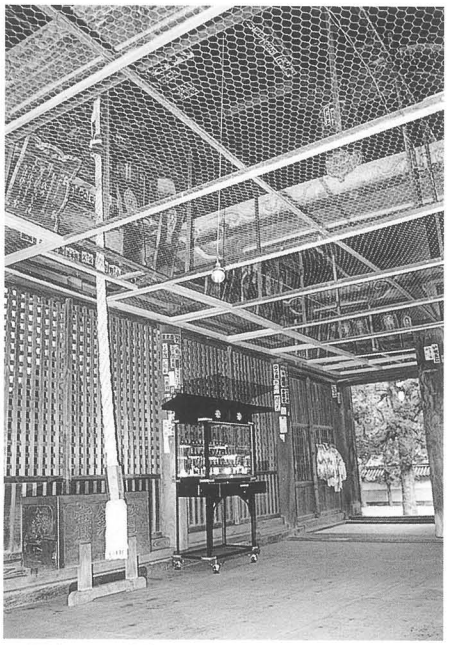


写真９　講堂外陣

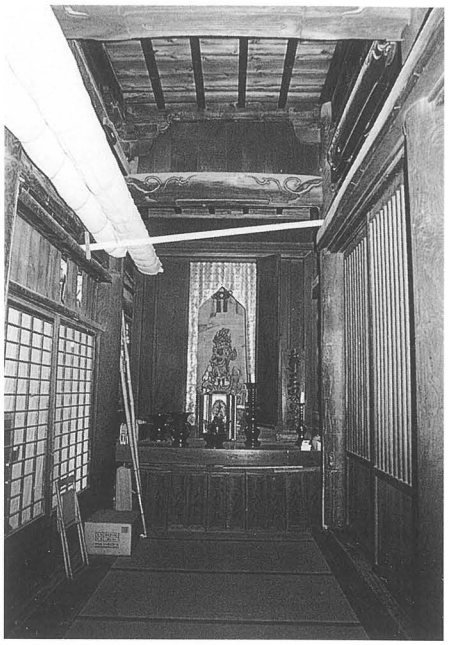


写真10　講堂脇陣

写真11
講堂棟札（左：裏、右：表）

写真12
講堂棟札（左：裏、右：表）

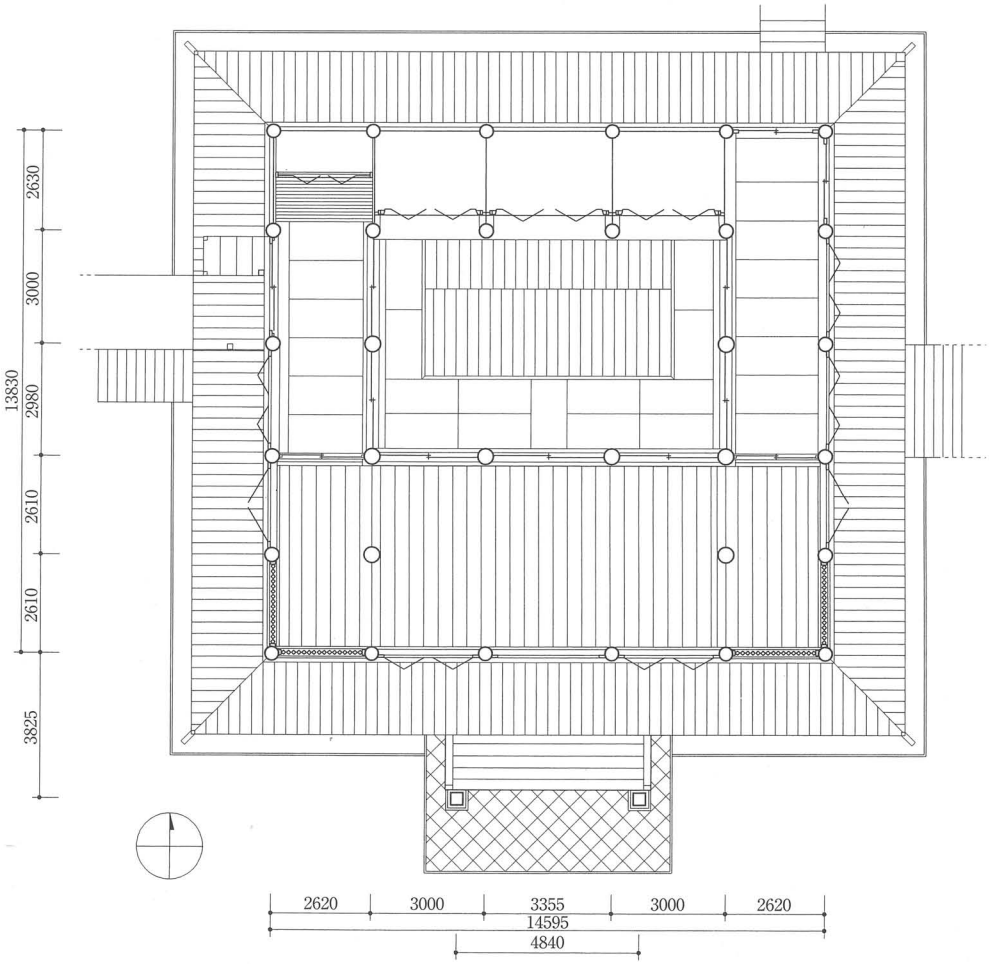


図12　講堂平面図

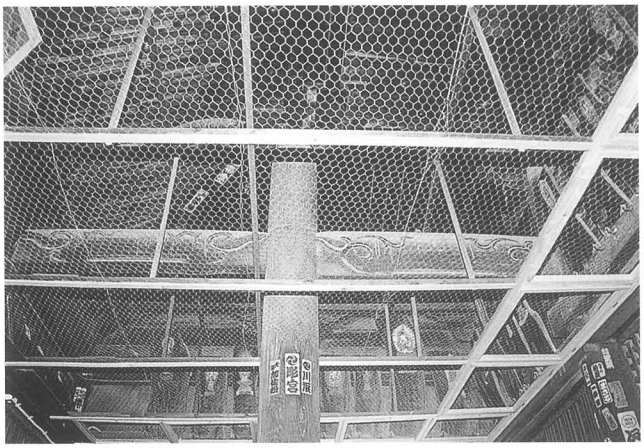


写真13　講堂外陣入隅柱部分

写真16　聖徳殿前殿全景

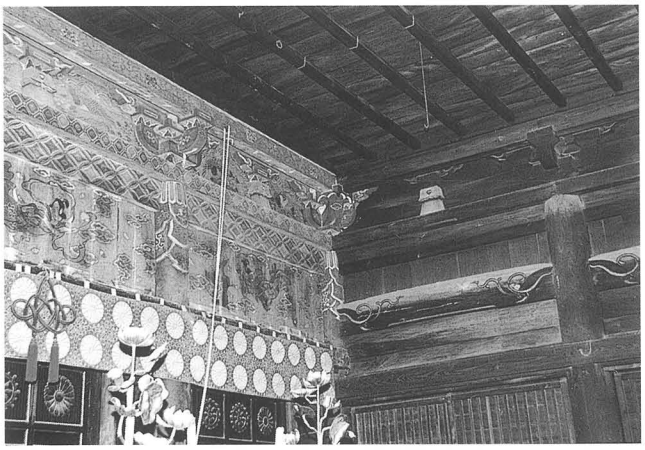


写真14　講堂内陣厨子正面

写真17　聖徳殿前殿隅組物

写真15　講堂内陣

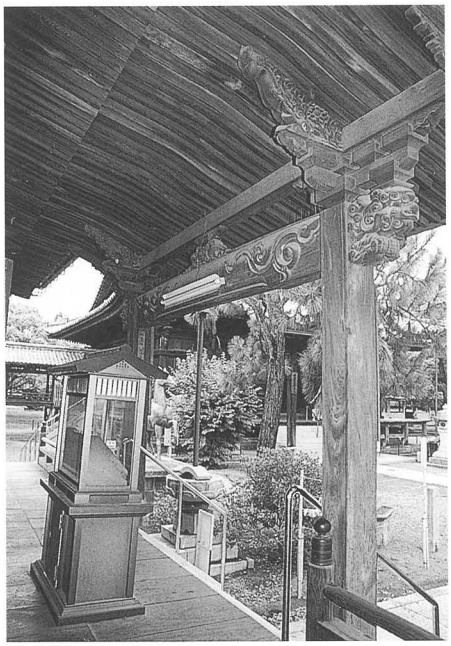


写真18　聖徳殿前殿向拝見返し

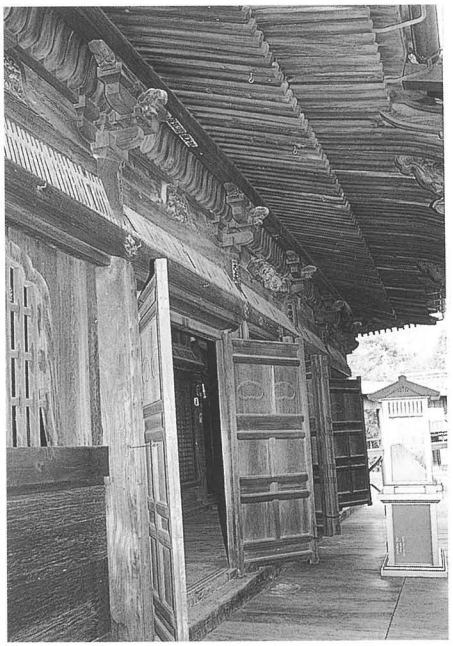


写真19　聖徳殿前殿側通り

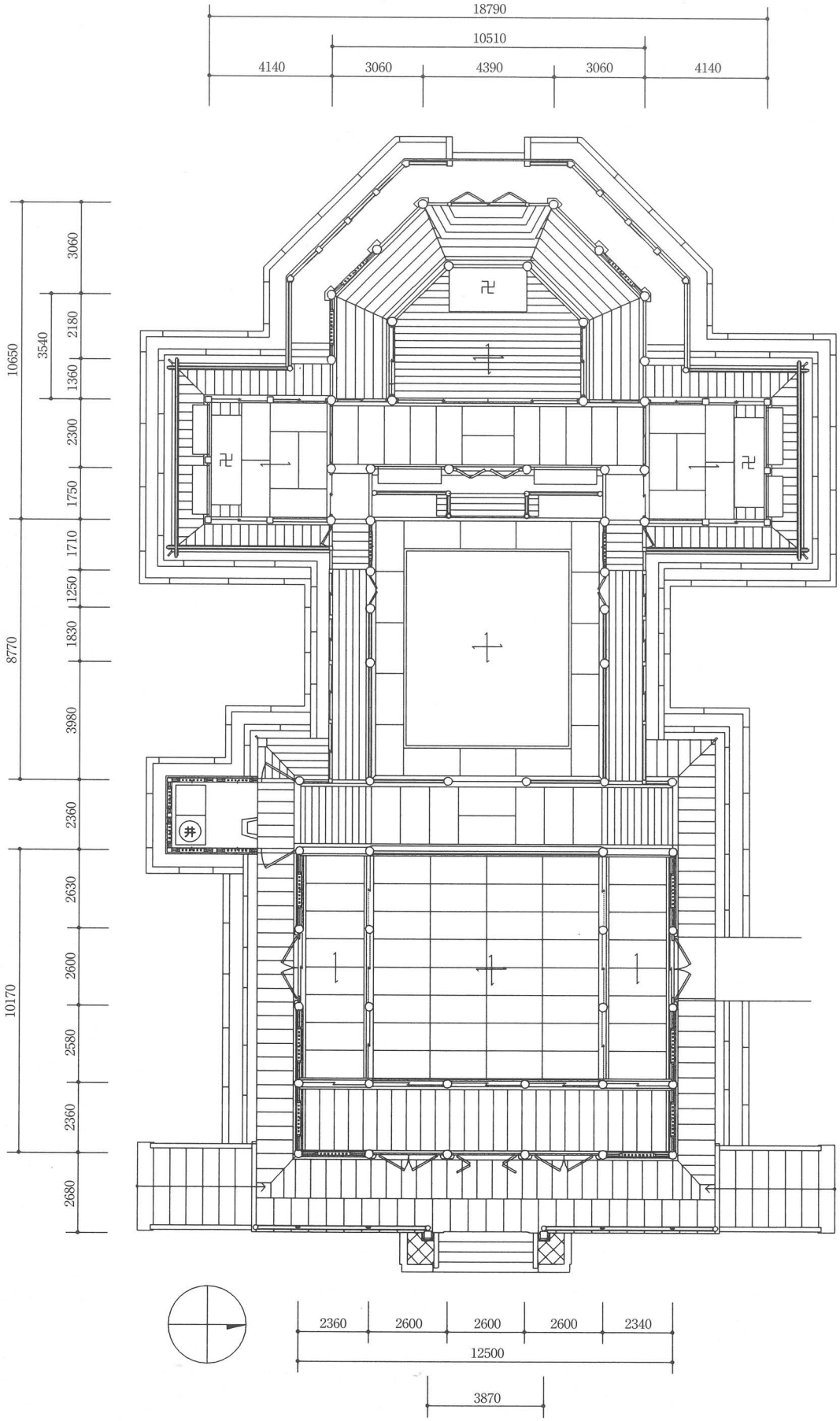


図13　聖徳殿前殿・中殿・後殿平面図

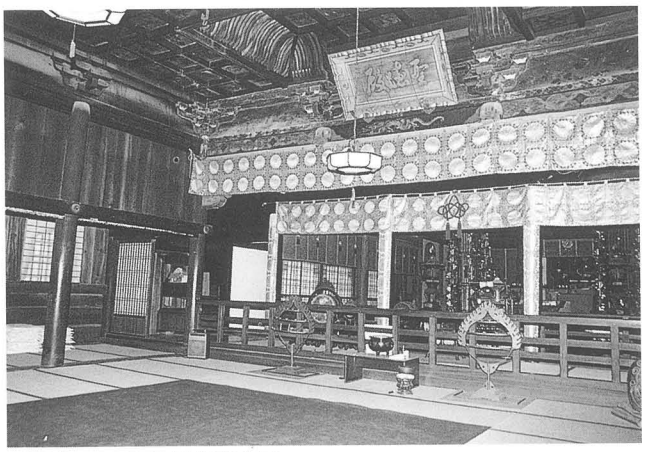


写真20　聖徳殿前殿内陣

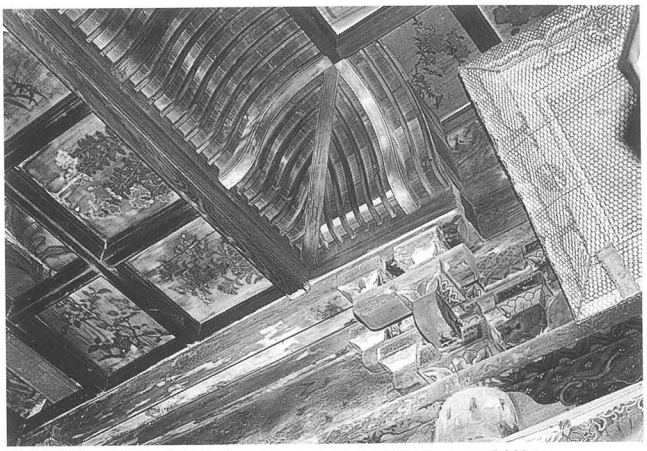


写真21　聖徳殿前殿内陣天井折上部組物の切断状況

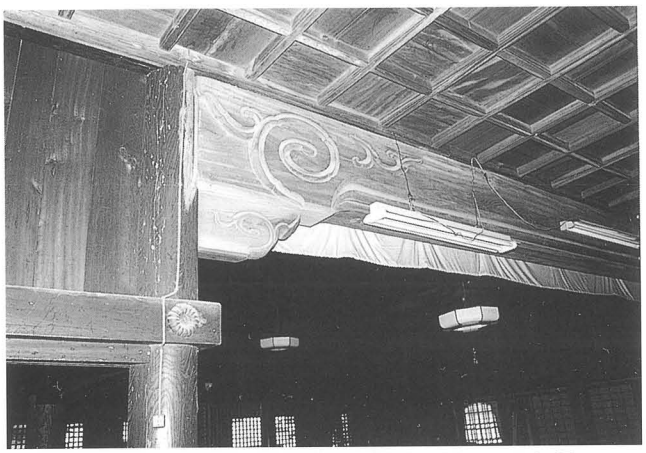


写真22　聖徳殿前殿内陣背面柱切断後に挿入した虹梁

写真25　聖徳殿前殿献水御供所外観

写真23　聖徳殿前殿外陣

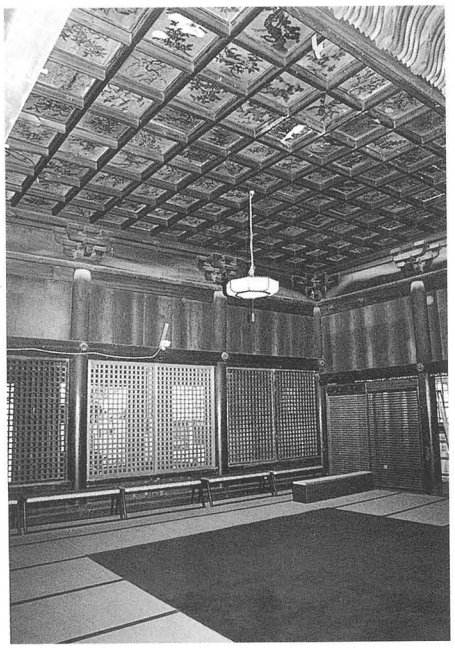


写真24　聖徳殿前殿内陣見返し

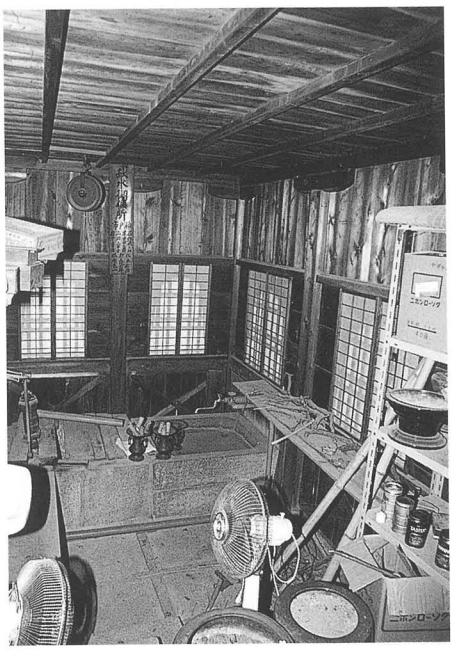


写真26　聖徳殿前殿献水御供所内部

写真27　聖徳殿中殿・後殿外観

写真28　聖徳殿中殿外観

写真29　聖徳殿中殿内部

写真30　聖徳殿中殿天井

写真31　聖徳殿前殿背面の中殿からの見返し

写真32　聖徳殿中殿裳階部分内部

写真33　聖徳殿後殿外観

写真34　聖徳殿後殿各層軸部

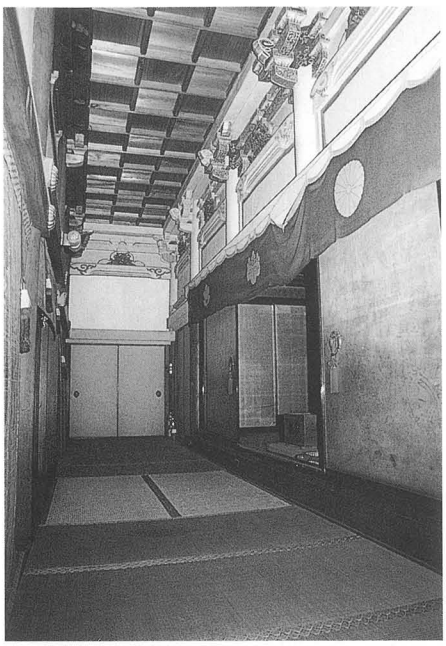


写真35　聖徳殿後殿入側柱正面

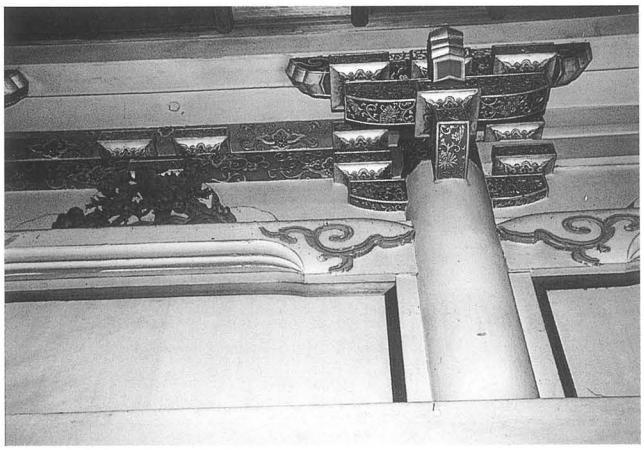


写真36　聖徳殿後殿入側柱外側組物

写真37　聖徳殿後殿厨子

写真38　聖徳殿後殿入側柱内部組物

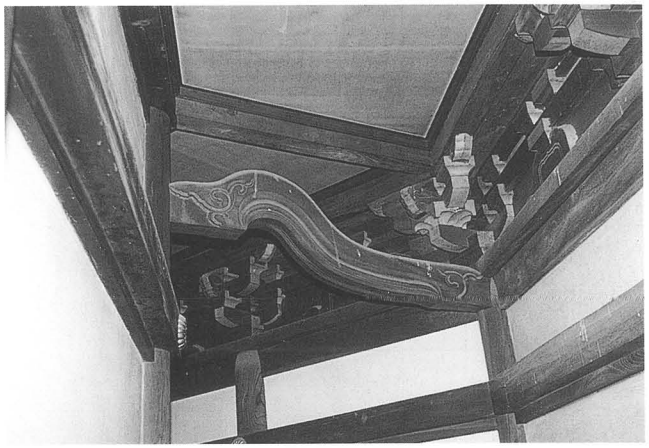


写真39　聖徳殿後殿側通り架構・組物

写真40
聖徳殿後殿張出部内部

写真41
聖徳殿後殿張出部厨子詳細

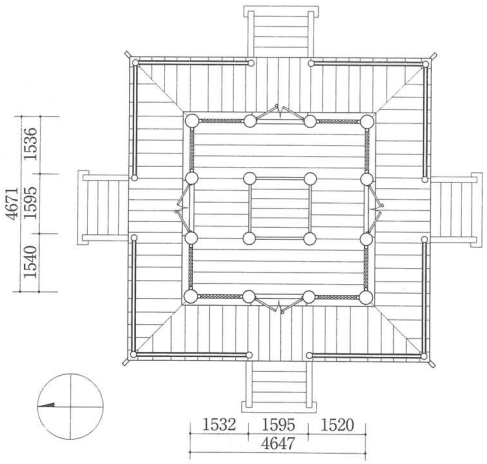


図14　三重塔平面図

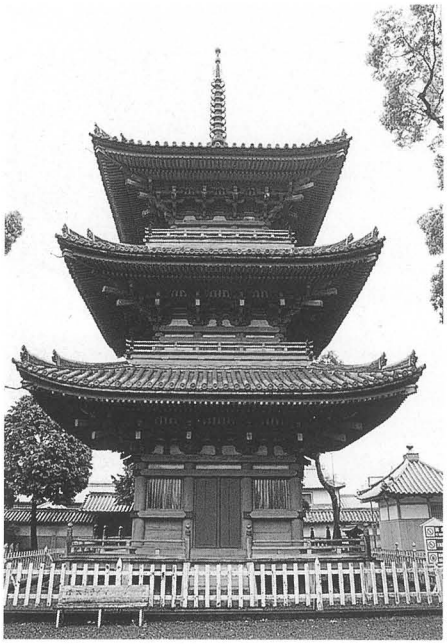


写真42　三重塔外観

写真43　三重塔初層軸部

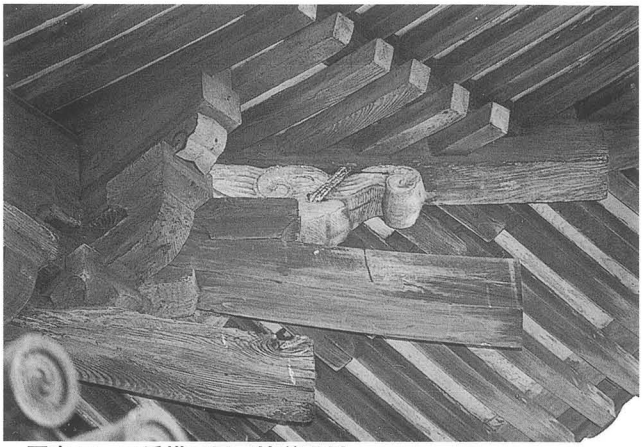


写真44　三重塔三層隅持送彫刻

写真45　三重塔二層隅持送彫刻

写真46　三重塔初層隅持送彫刻

写真47　三重塔初層内部

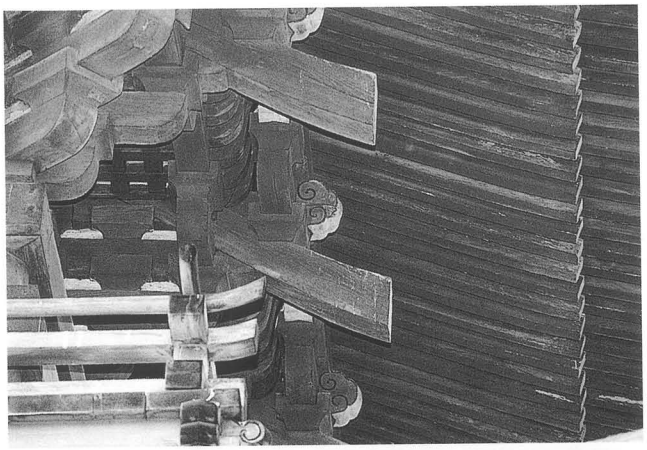


写真48
三重塔三層組物

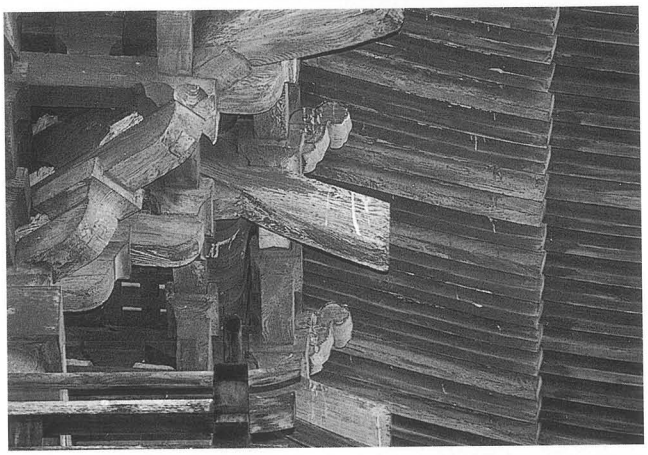


写真49
三重塔二層組物

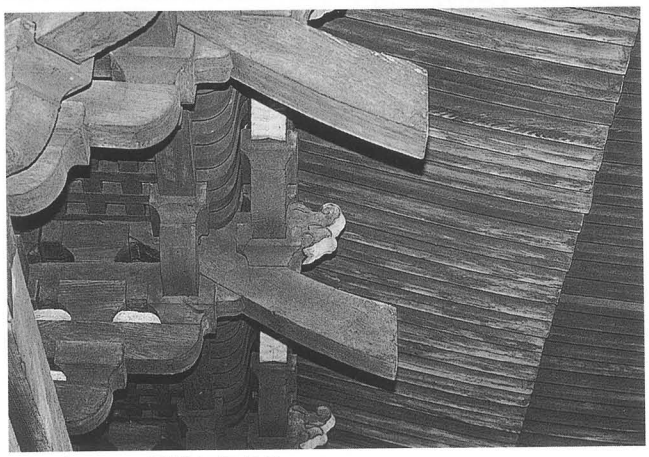


写真50　三重塔初層組物

写真51　鐘楼外観

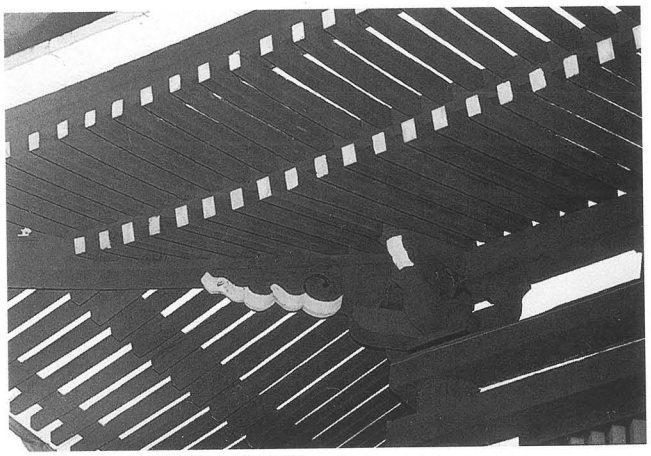
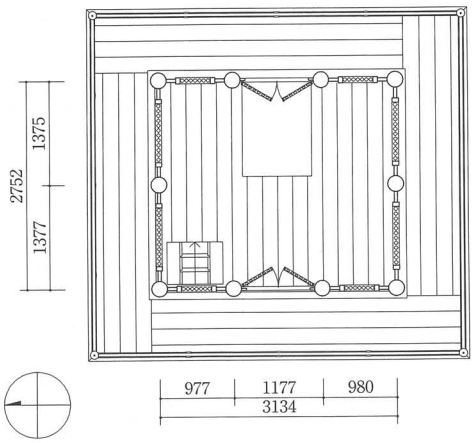


写真52　鐘楼組物・隅持送



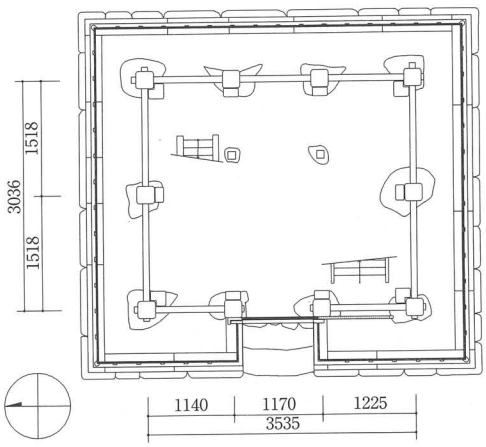


図15　鐘楼平面図（左：上層、右：下層）

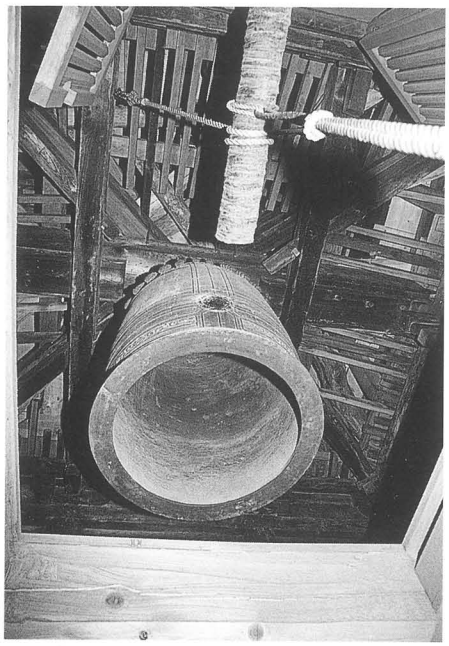


写真53　鐘楼内部見上げ

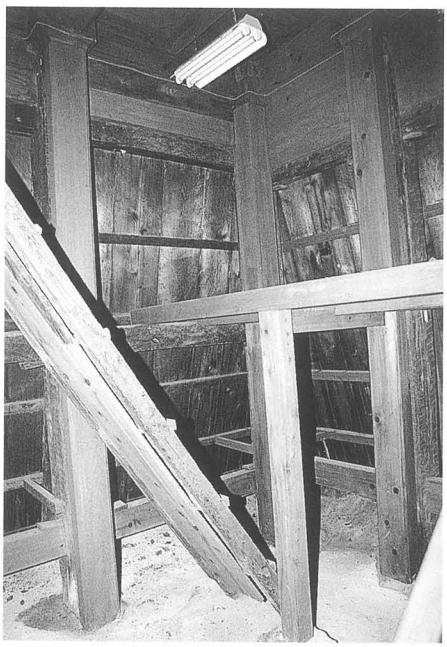


写真54　鐘楼下層内部

写真56　山王社正面

写真55　鐘楼上層内部

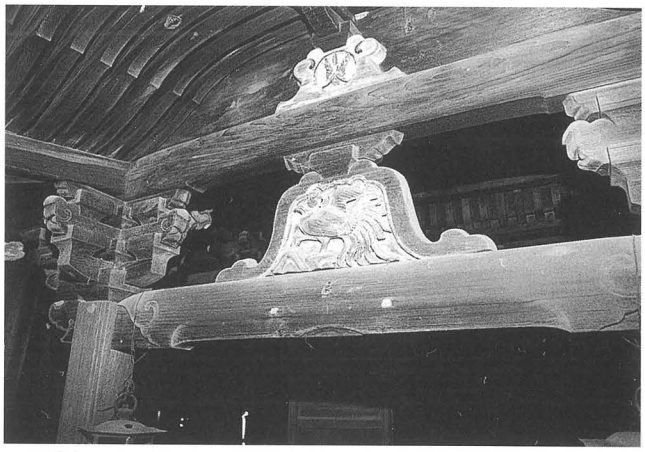


写真57　山王社向拝蟇股

写真58　山王社向拝詳細

写真59　山王社向拝見返し

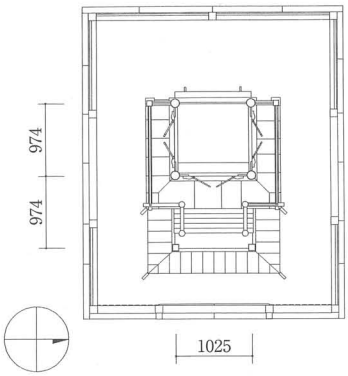


図16　山王社平面図

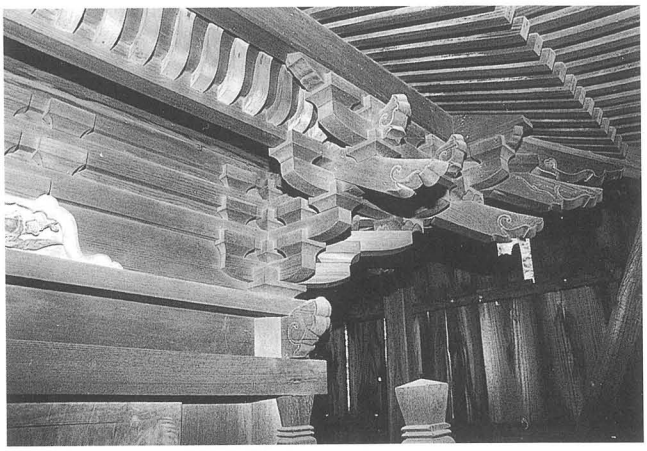


写真61　山王社本体部隅組物

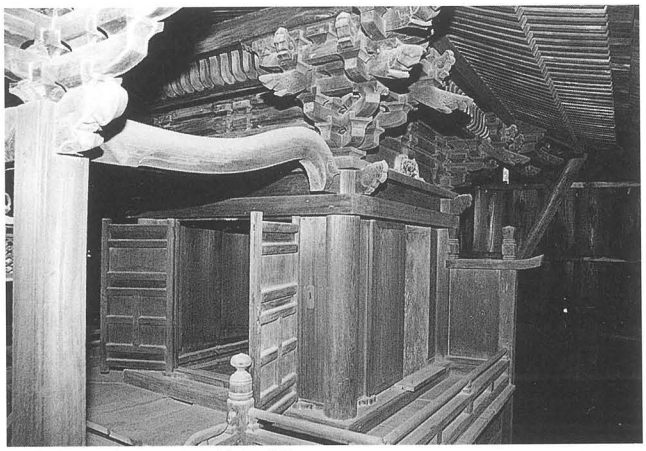


写真60　山王社本体部詳細

写真63　天神社向拝見返し

写真62　天神社全景

写真64　天神社詳細

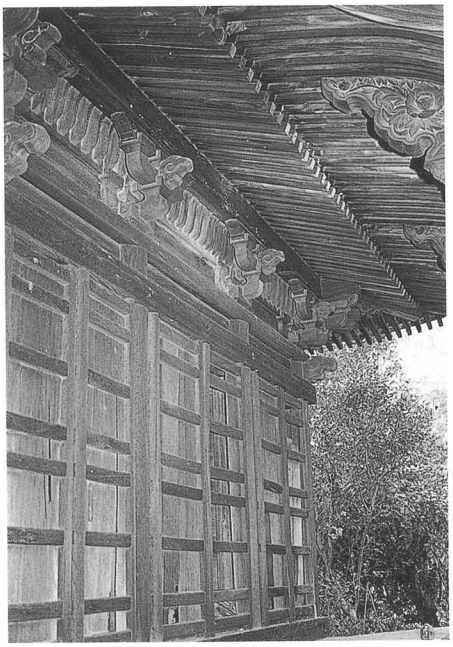


写真65　天神社本体部軸部

写真66　天神社棟札（左：裏、右：表）

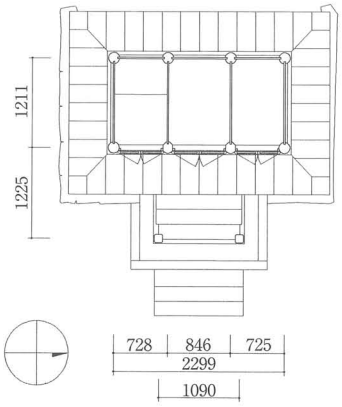


図17　天神社平面図

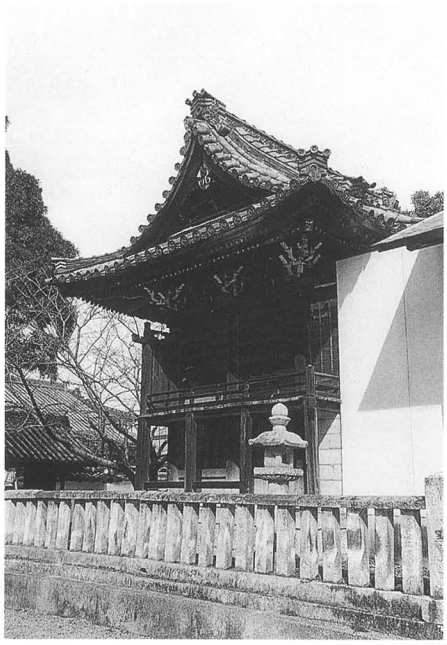


写真67　聖霊権現社外観

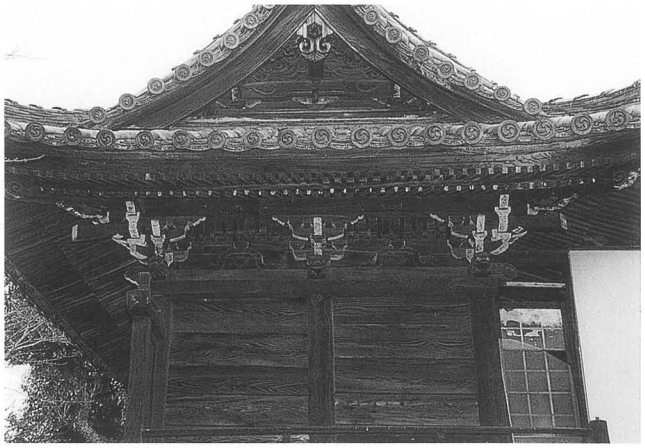


写真68　聖霊権現社側面

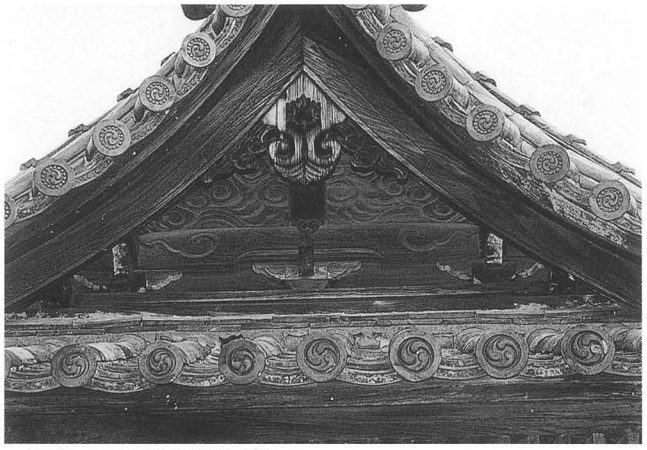


写真69　聖霊権現社妻飾

写真70　聖霊権現社向拝

写真71　聖霊権現社本体部及び向拝

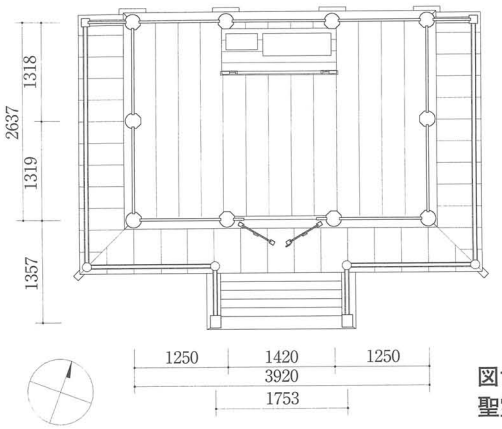


図18
聖霊権現社平面図

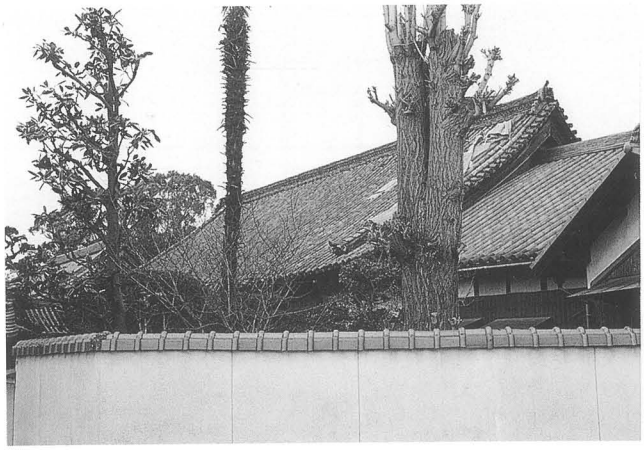


写真73　庫裏全景

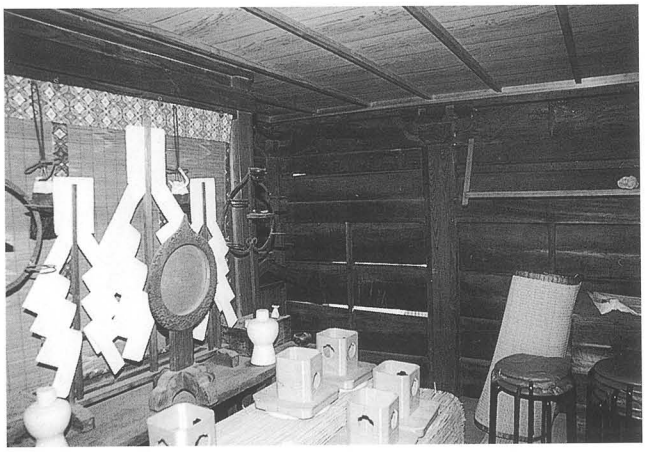


写真72　聖霊権現社内部

写真74　庫裏背面全景

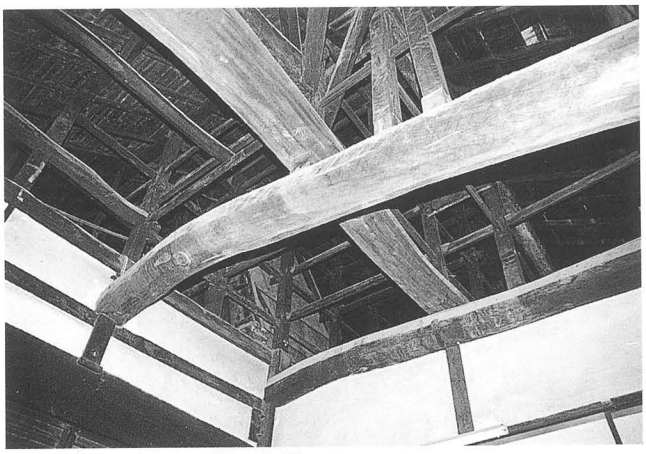


写真75　庫裏土間部分架構

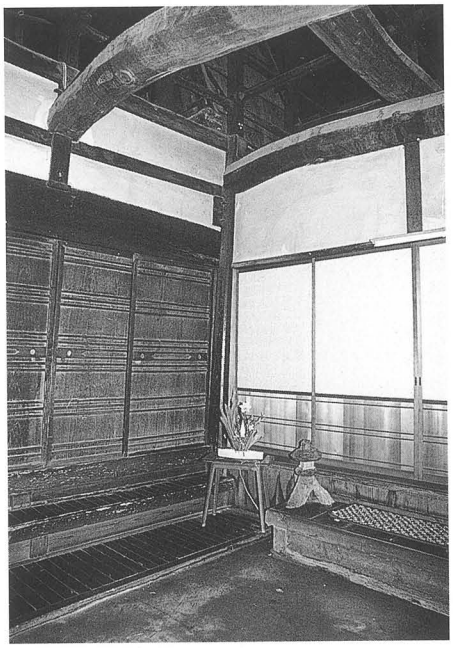


写真76　庫裏土間玄関部分

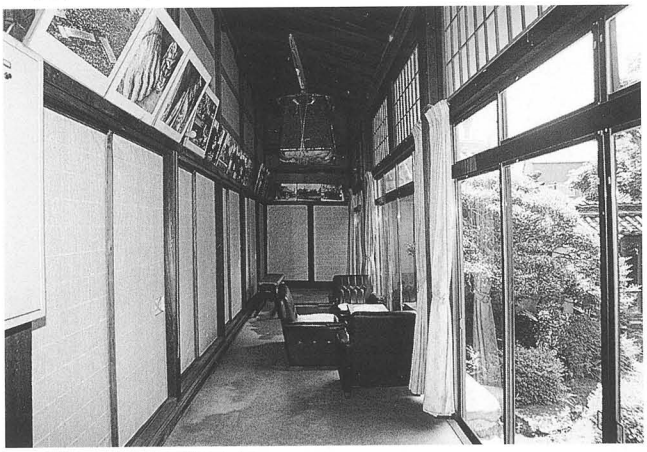


写真77　庫裏正面広縁

図19　庫裏・御祈祷所平面図

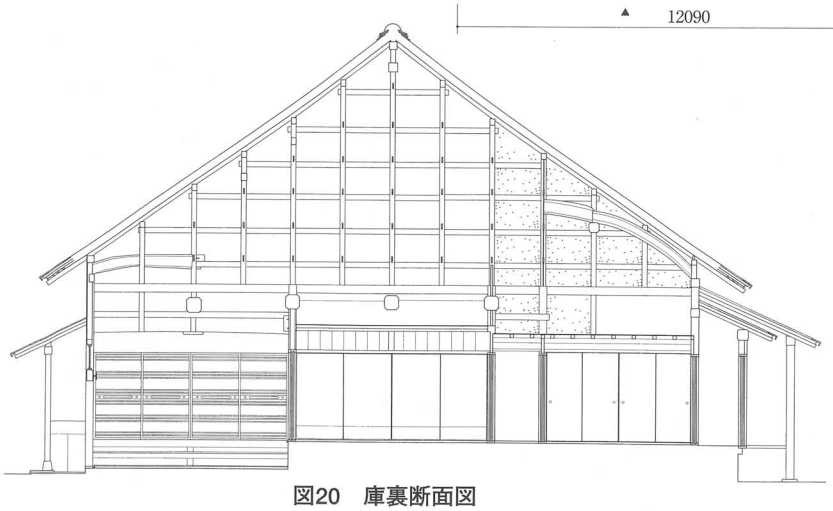


図20　庫裏断面図

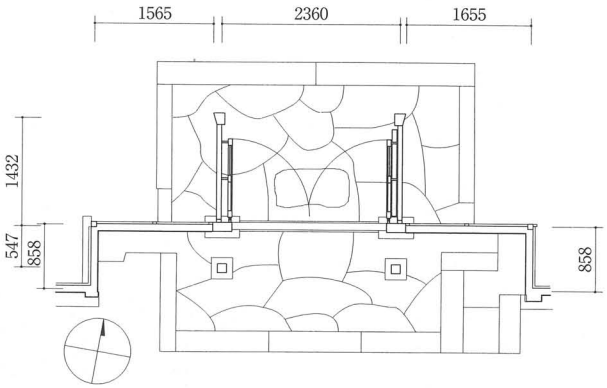


図21　庫裏表門平面図

写真78　庫裏式台玄関正面

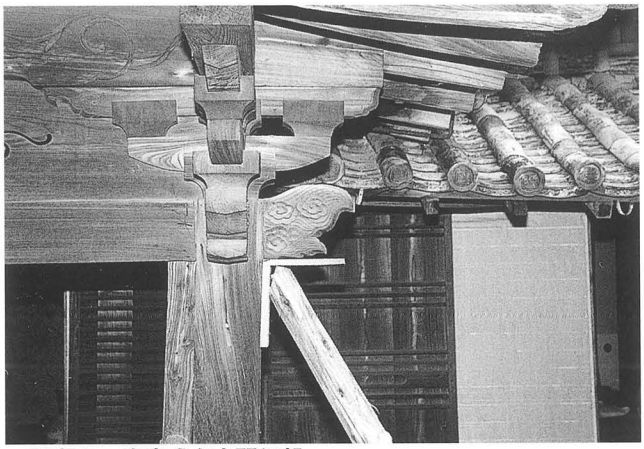


写真79　庫裏式台玄関細部

写真80　庫裏式台玄関虹梁絵様

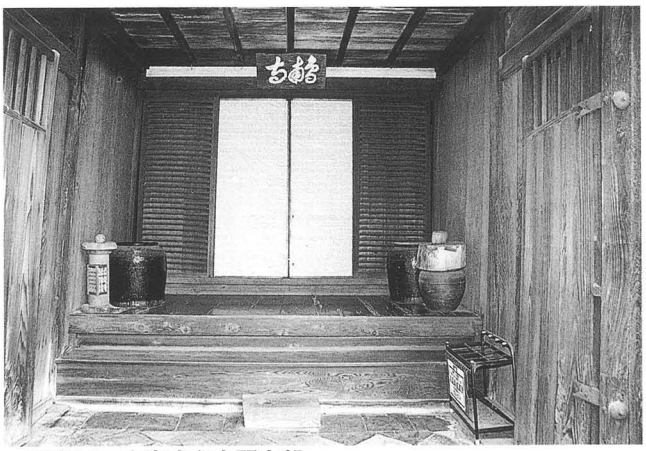


写真81　庫裏式台玄関内部

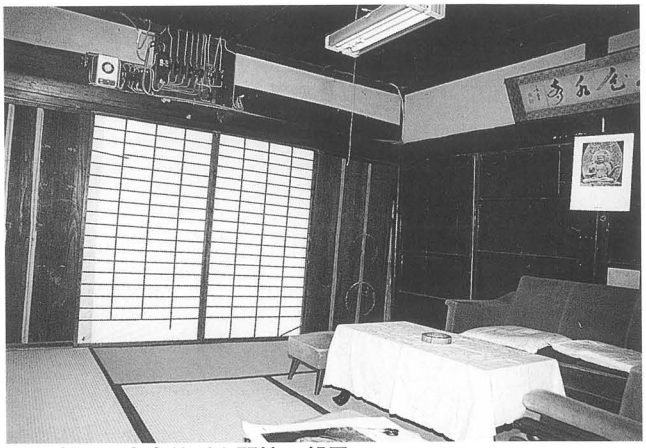


写真82　庫裏前列土間境の部屋

写真83　庫裏前列土間境の部屋の切断された柱

写真84　庫裏式台玄関後方の部屋

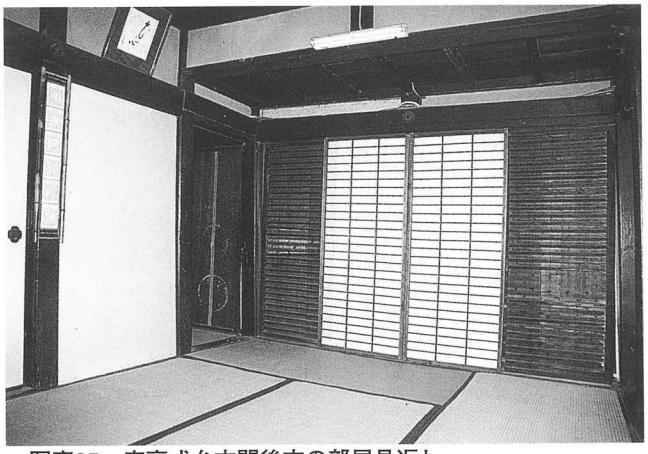


写真85　庫裏式台玄関後方の部屋見返し

写真86　庫裏仏間前の部屋（東から）

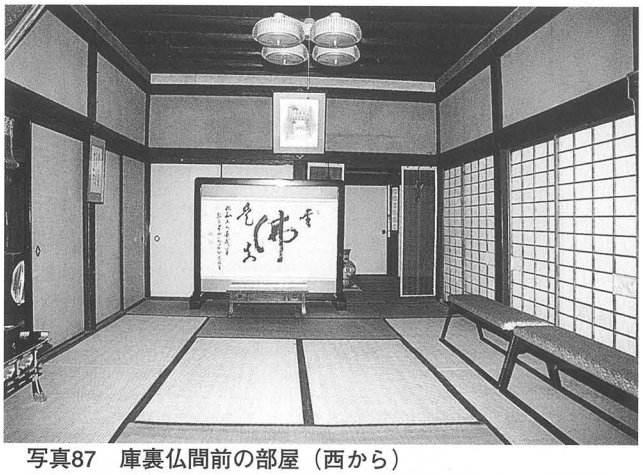


写真87　庫裏仏間前の部屋（西から）

写真88　庫裏仏間前の部屋（東南から）

写真89　庫裏仏間

写真90　庫裏座敷

写真91　庫裏座敷及びその前室

写真92　庫裏背面側の部屋

写真93　庫裏背面側の部屋

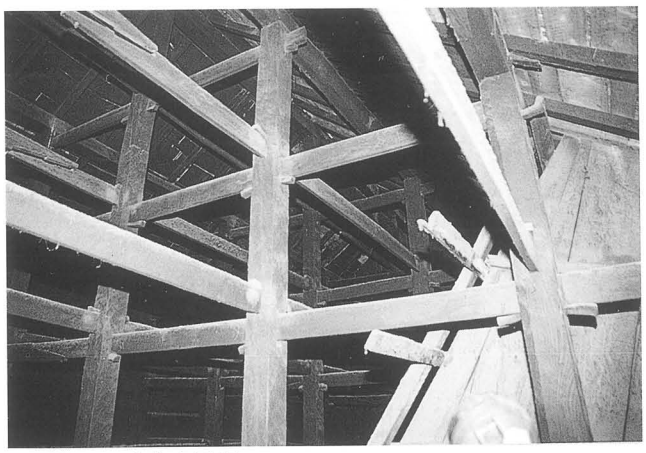


写真94　庫裏小屋組

写真95　庫裏小屋組

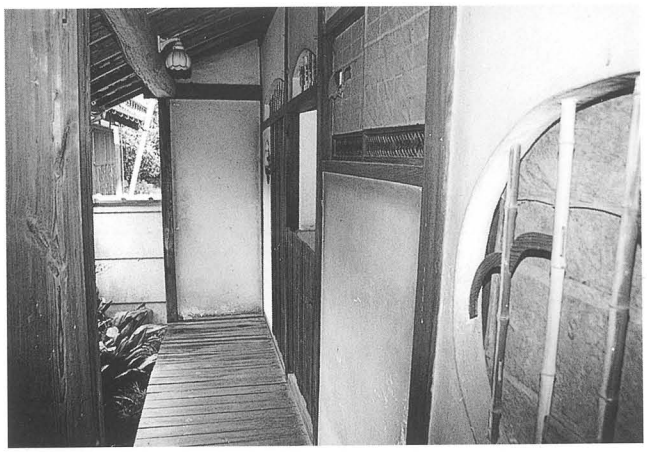


写真96　庫裏西側に付属する便所

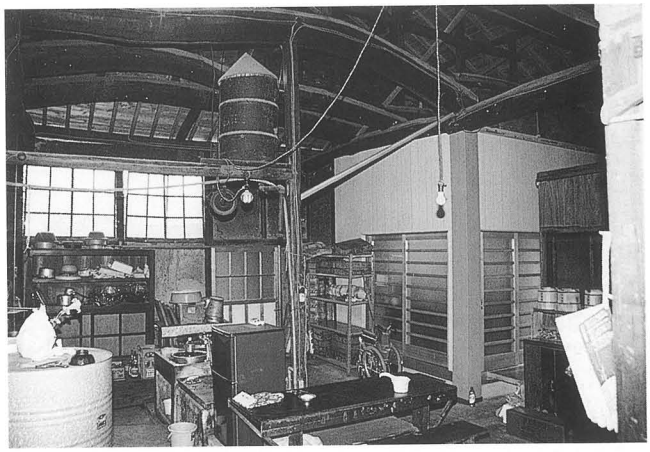


写真99　庫裏東側張出内部

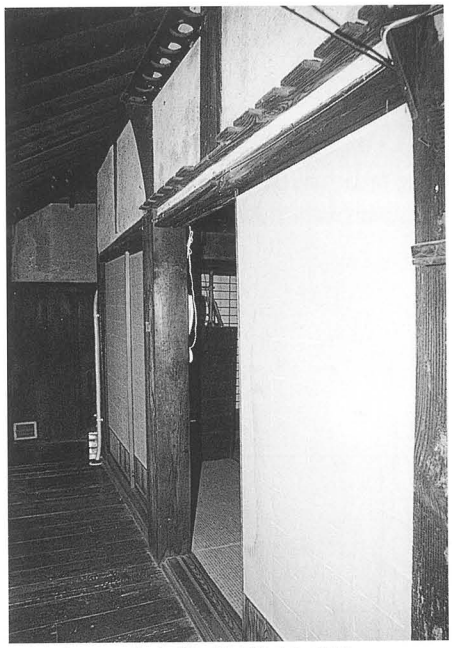


写真97　庫裏背面片引戸の痕跡

写真98　庫裏中廊下部分の柱の痕跡

写真100　庫裏東側張出部小屋組

写真101　庫裏東側張出部内部

写真102　庫裏御祈祷所外観

写真103　庫裏御祈祷所細部

写真104　庫裏表門全景

写真105　庫裏表門見上げ

写真106　庫裏表門控柱筋虹梁絵様

写真107　庫裏表門男梁・女梁

2、稗田神社　　鵤字八幡分926

表門　桁行一間、梁間二間、四脚門、切妻造、桟瓦葺

明治元年（1867　社伝）

親柱円柱　蹴放　楣　冠木　大斗絵様肘木　拳鼻　控柱　角柱　虹梁形頭貫　木鼻　大斗絵様肘木　親柱控柱間　腰貫　腰長押　女梁　男梁　中備蟇股　棟通冠木上平三斗拳鼻　棟通桁行虹梁上大瓶束笈形　妻飾虹梁大瓶束笈形　二軒繁垂木

稗田神社は鵤集落の北部に位置し、現在の龍野市まで及ぶ旧鵤荘域の十二ヶ村を氏子圏に持つ、当地域の有力な神社である。嘉暦四年（1329）の鵤荘絵図（法隆寺蔵）にも描かれている。鵤荘の鎮守社として中世には斑鳩寺が当社の神主の任命権を持ち、近世にも斑鳩寺の管理のもとにあった。斑鳩寺境内の聖霊権現社の御旅所でもあった。

表門は、材が太く大規模な四脚門である。近年、屋台が通るための高さを確保するため、コンクリート造の基壇を設け、その上に門全体が載せられた。

構造形式の面では棟通りの冠木の上に桁行の虹梁を架け、その上に大きな笈形を付けた大瓶束を載せる点は特徴的である。

虹梁の絵様、木鼻、絵様肘木には、彫りの深い派手な彫刻が施される。特に、棟通虹梁上と妻飾につく大瓶束は太く、笈形も大振りで発達した渦のある派手で独特な意匠をもち、幕末の様式をよく残す。親柱の唐居敷と冠木に軸摺穴が残り、もとは扉が構えられていたことが判明する。

社伝では明治元年（1867）に建立された。控柱や腰長押は昭和37年頃に取替えられたという。

（岸）

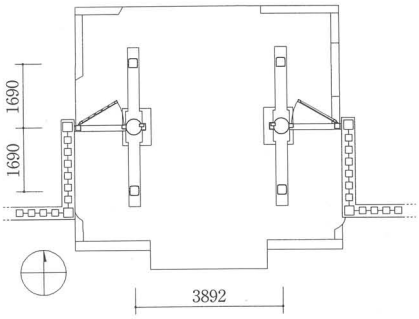


図22　表門平面図

写真108　表門全景

写真110　表門見上げ

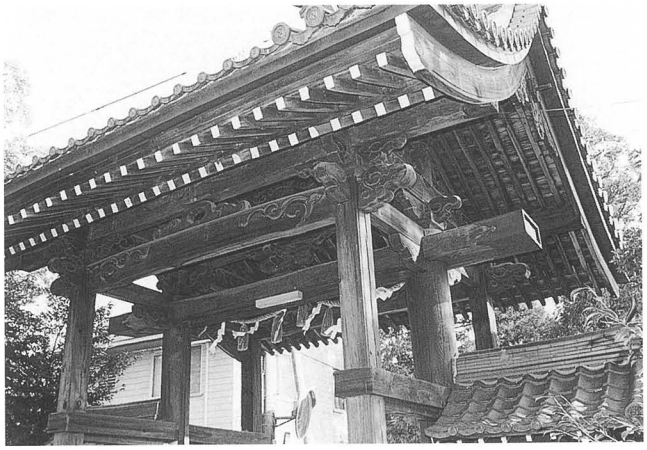


写真109　表門詳細

写真111　表門妻飾

3、大師堂　　鵤字太子山135-2

大師堂　正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、向拝一間、本瓦葺　　十九世紀後期

角柱　足固貫　差鴨居　舟肘木　中備蟇股（正面のみ）向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　大斗肘木　中備蟇股　一軒疎垂木

斑鳩寺の仁王門前の参道をまっすぐ南に下ると、小高い独立した岡である太子山に突き当たる。太子山の麓を東西に通る山陽道と、斑鳩寺の参道との交差点を山側に少し上がったところに大師堂はある。「斑鳩寺記録」寛文六年（1666）条（この年のみ年紀を欠く）によると、この年から朱印状に太子山并境内諸役免除の義を書き入れることができた。以後、太子山は江戸時代を通じて斑鳩寺の寺領であった。この堂の本尊は石造の弘法大師像で、斑鳩寺が中世には法相宗、天文の再興以降天台宗であることと合致しない。堂の床下の奥壁近く左寄りにある石碑を詳しく調査すれば堂の由来が判明するかも知れない。この堂はおそらく庶民の信仰によって建立されたもので、辻堂の性格をあわせもっている。現在は地元の西本町が管理して、堂の正面左側には公会堂がある。常住の管理人はおらず、近年まで巡礼者が寝泊りすることがあったという。

大師堂は規模が方三間で、正面は差鴨居を入れて柱を省略し、一間とする。屋根は宝形造の本瓦葺である。柱は約三寸角の栗の細い柱で、材のゆがみが見られる。組物は、柱頂部に落とし込んだ舟肘木である。壁は実矧ぎで召し合わされた欅の縦板張りで、貫に洋釘でとめている。正面は引分けの格子戸である。

内部は一室で、奥一間通に檀を設け中央に厨子を置き、弘法大師像を安置する。

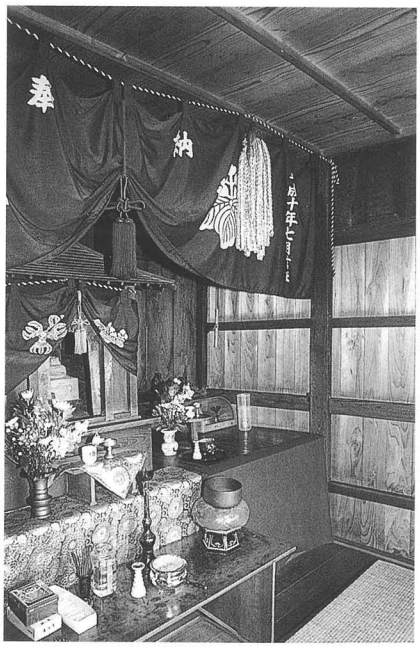


写真115　内部

天井と垂木、野地は近年に修理されている。床は中古のものであろう。

建立年代を明示する史料はない。欅の壁板の洋釘が当初と見られるので、明治時代後半の建立であろう。斑鳩寺周辺の庶民信仰を残す仏堂の好例である。（黒田）

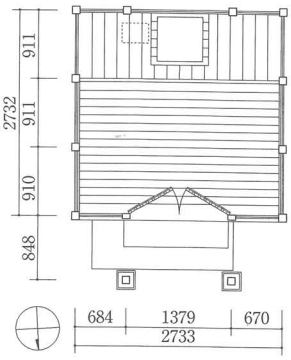


図23　大師堂平面図

写真112　全景

写真113　向拝詳細

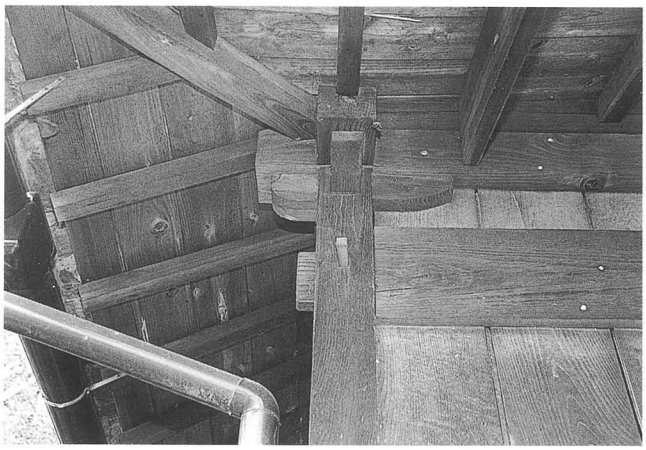


写真114　本体部細部

4、西光寺　真宗大谷派　鵤字小田町1244

本堂　桁行14.0m、梁間14.3m、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、側面・背面下屋庇付、側面桟瓦・背面本瓦葺　天明年間（1781～1789　寺蔵記録）

縁通角柱　組物なし　入側通角柱　切目半長押　内法長押　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　大斗絵様肘木　中備なし　二軒疎垂木　妻飾虹梁大瓶束蟇股　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備龍彫刻　二軒疎垂木

鐘楼　桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺　18世紀後期

角柱　腰貫　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　組物三斗枠肘木組　中備平三斗拳鼻　妻飾虹梁大瓶束笈形　二軒繁垂木

西光寺は斑鳩寺の南東、直線距離にして200mほどのところに位置し、国道179号線沿いにある。「鵤庄引付」応永二十一年（1414）の点定名注文、文亀元年（1501）条、天文三年（1534）四月二十九日条に「西光寺」の名がみえる。『兵庫県の地名』は現西光寺と文亀元年条の「西光寺」を同じと見ているが、中世の鵤庄内では一向宗道場は禁制の対象であった。「鵤庄引付」永正十一年（1514）には東保村の一向宗念仏道場が検断されたことがみえ、「当庄モ往古ヨリ堅禁制之在所、」と記されている。従って、この当時、西光寺は浄土真宗ではなかったか、あるいは現西光寺と「鵤庄引付」の西光寺は別寺だったのだろう。

真宗本堂は東を向くのが基本的であるが、町内で二次調査対象とした本堂の中で西を向くのは当寺だけである。これは斑鳩寺を意識した方位ともいえる。

本堂は定型的な真宗本堂で、内外陣境によって全体を大きく二つに分かち、前方を外陣とし、後方の中央を内陣、内陣の両脇を余間とする。後方一間通りは後戸である。外陣の正面には広縁が付く。落縁は広縁正面から堂の南側面全体に付く。柱は来迎柱とその後方の柱、及び内陣と脇陣の境が円柱である以外はすべて角柱である。

外陣の規模は、畳を基準とする実寸で正面が七間、奥行が三間半で、町内では清光寺とともに最も大規模な本堂である。中柱は四本で内陣・余間境の柱筋の延長上にたつ。面が大きく、良質の材である。中柱は、内陣に近い柱では三斗組を置いて天井桁を受け、正面側の柱は立登せ柱として挿肘木で天井桁を受ける。中柱同士は奥行方向、及び内陣に近い中柱筋を横方向に虹梁形飛貫で繋ぐ。天井は格天井である。このような外陣の構成は後に建てられた清光寺本堂と共通する形態である。外陣正面の建具は外が桟唐戸、内側が腰付き障子である。外陣正面の広縁は奥行が一間で、正面側は柱間三間に割る。天井は鏡天井である。

内外陣境は、角柱を切目長押、内法長押、頭貫、台

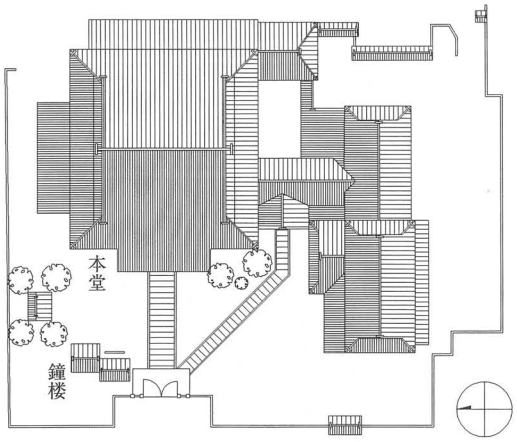


図24　西光寺配置図

写真116　本堂全景

写真117　本堂妻飾

輪でつなぐ。柱上に出三斗を置き、欄間彫刻は内陣正面が瑞鳥、余間正面が牡丹である。欄間は金箔、柱上部から組物にかけては極彩色、その他は漆塗りを施す。内陣正面建具は金障子である。

内陣の仏壇は後門形式である。来迎柱は頂部を頭貫、台輪で固める。柱上に出三斗を置いて、支輪桁を受ける。天井は折上小組格天井である。須弥壇は禅宗様で、上に厨子を安置する。内陣と余間は、漆、金箔で彩色されているが、天井は素木である。向って右の親鸞聖人を祀る脇仏壇は、前面柱筋に框を打って檀を作り、前机を置くが、奥の仏壇との間は床となっていて左側から仏壇と前机の間に入れるようになっている。右脇仏壇を後方に下げる改造は法心寺本堂、清光寺本堂でも見られる。

来迎柱およびそれと向き合う余間仏壇の柱には、腰框の痕跡がある。来迎柱の背面側には板壁を入れたであろう板決りがある。このことから、内陣脇仏壇は、もとは半間手前にあり、来迎柱筋を前面柱筋としていたことがわかる。従って、内陣の仏壇形式は、もとは出仏壇または三並仏壇であったと推定される。

余間の床は内陣より敷居分だけ低く、奥に仏壇を構え、天井は内陣と同じく小組格天井である。天井は素木であるが、その他は漆塗りで一部に金箔を使用する。向かって左余間の仏壇は、左側を出入り口とするため欠き込んだ形になっているが、本来は右余間と同じく奥の壁面一杯に作られていた。

背面一間通りの後戸の部材は新しいもので、脇仏壇背面柱筋の後戸側に風食がみられるから、その柱筋、

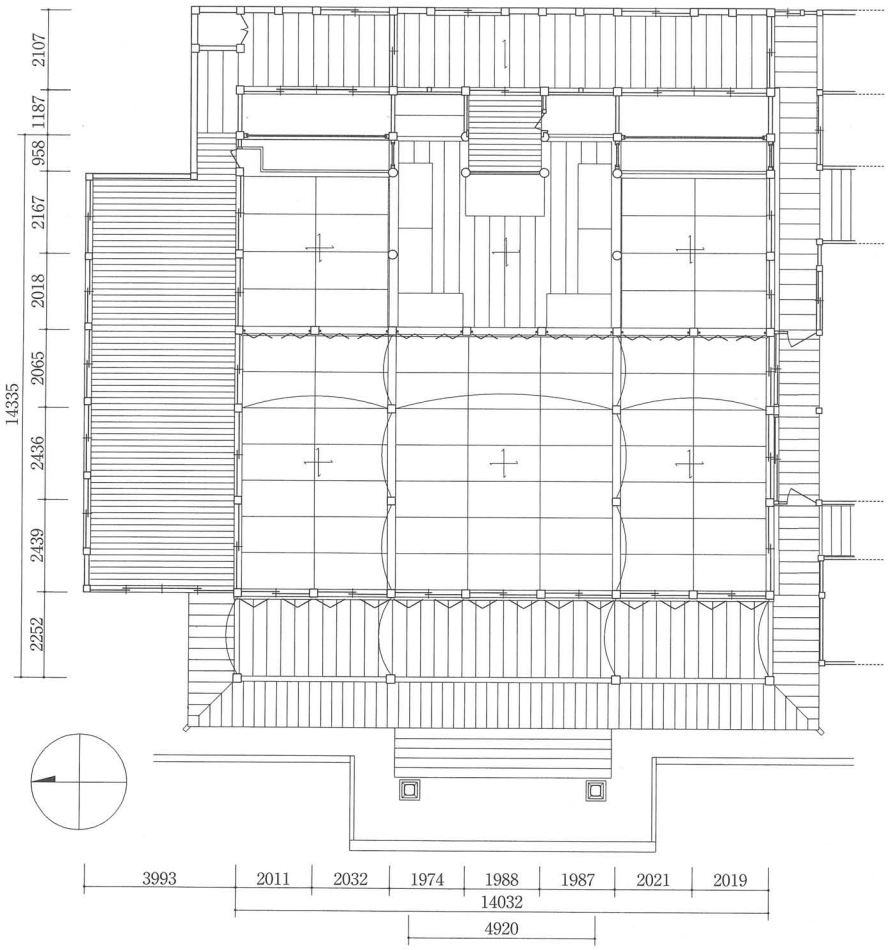


図25　本堂平面図

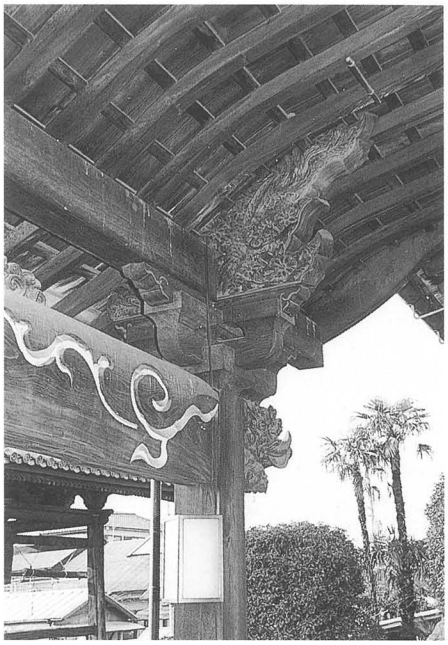


写真118　本堂向拝見返し

写真119　本堂軸部

つまり現在の後戸の本堂側柱筋が本堂のもとの背面柱筋であった。先述の通り脇仏壇は半間前にあったから、後退したその半間通りがもとの後戸であっただろう。

正面一間の向拝は打越垂木が上方に湾曲している。

小屋の構造材は梁、束、貫とも古いものが残っている。束に対する貫の取付き方は、梁行貫と桁行貫の間隔が開いていて、古風な手法である。野垂木より上は昭和五十四年から五十七年の修理で新しくなっている。

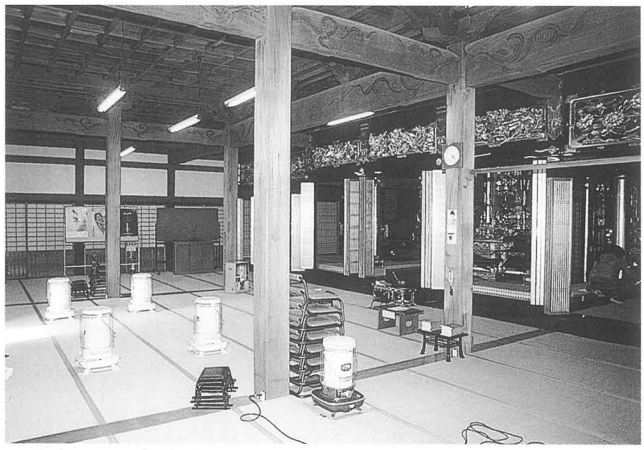


写真120　本堂外陣

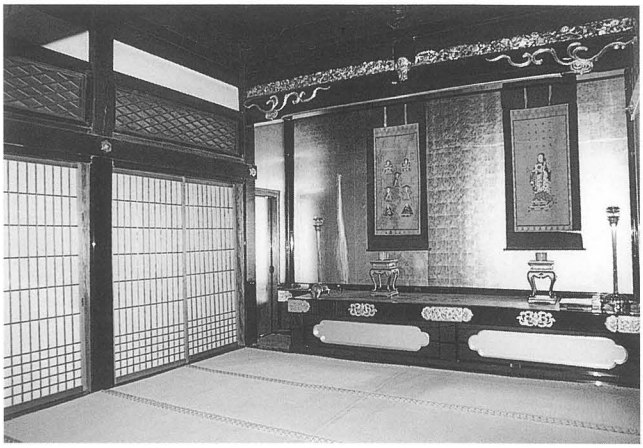


写真123　本堂余間

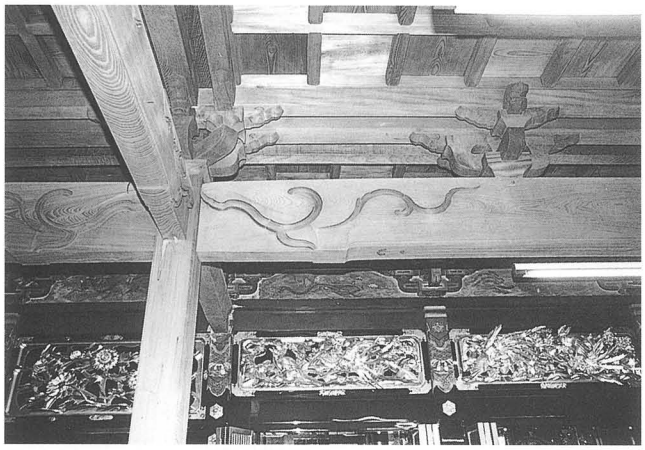


写真121　本堂外陣架構

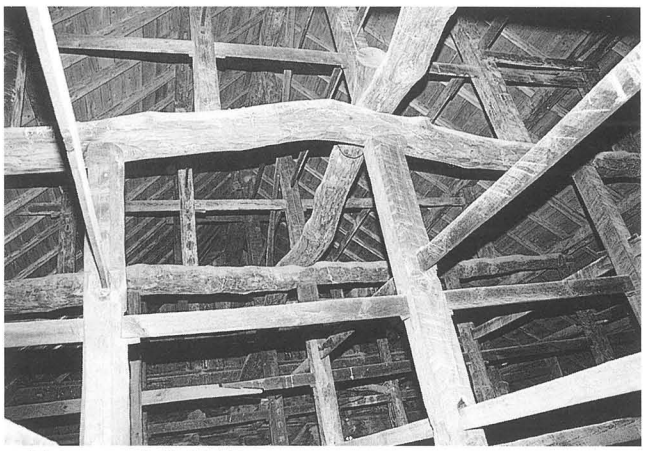


写真124　本堂小屋組

写真122　本堂内陣

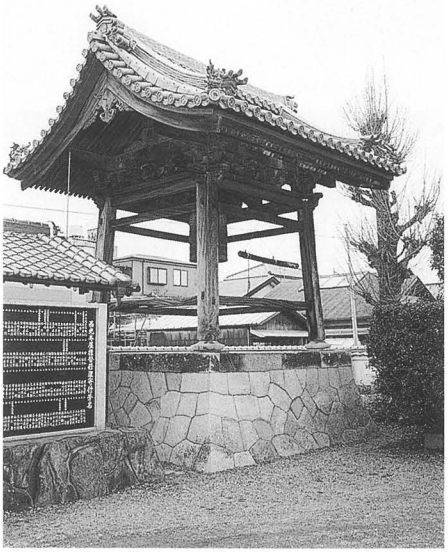


写真125　鐘楼全景

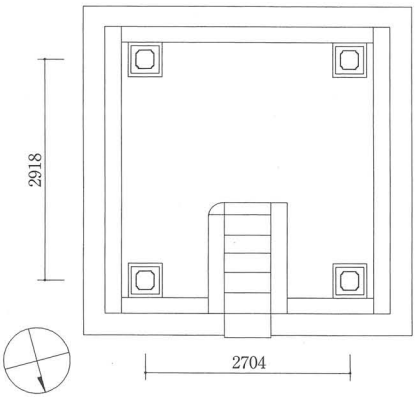


図26　鐘楼平面図

建立年代を直接示す史料は発見できなかったが、天明年間の建立を示す史料があるといい、様式手法はその年代に合致する。

この本堂は18世紀までの真宗本堂の中で規模が大きく、上質の建物であり、当初材もよく残っている。

鐘楼は、四方転び柱の方一間の建物である。角柱は几帳面が取られ、足元、頭部に粽がある。平側の柱間には、中備に平三斗絵様肘木が二箇所につく。妻側の中備の平三斗は内側は枠肘木組となり、その上に絵様肘木を組み牛梁を支えている。妻飾には太く背の低い大瓶束に派手な浮彫がなされた笈形がつく。柱や桁、梁が太く剛健であり、全体的に丁寧な造りである。

虹梁の絵様は本堂の虹梁のものと同じ意匠であり、鐘楼の建立も本堂と同じころであると考えられる。野地板や屋根は近年の修理によって取り替えられているが、軸部や組物、中備には改造もなく、保存状態は良い。十八世紀後期の鐘楼の遺構として重要である。

境内の西正面にある門の石柱は、花崗岩製の立派なもので、昭和六年に寄進された。柱は四本で、中央と両脇の入口からなる。古写真によれば、唐草風の文様を上部に配した洋風の鉄製門扉がつき、主柱の上には唐草の上に電灯がついていた。近代の真宗寺院の歴史を伝える寺院付属施設として興味深いものである。

（黒田、鐘楼のみ岸）

写真126　鐘楼側面

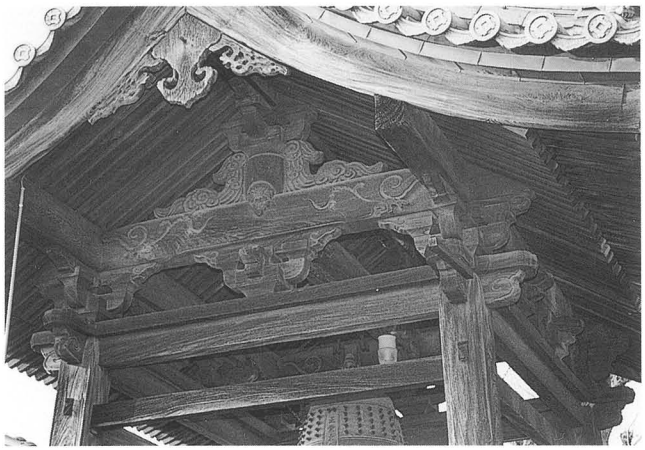


写真127　鐘楼妻飾

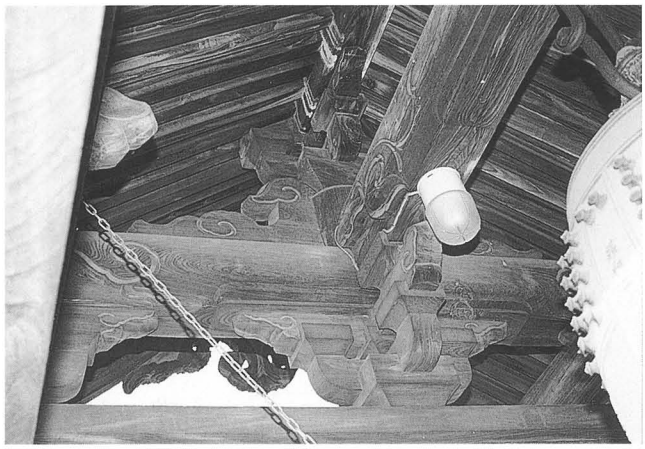


写真128　鐘楼内部見上げ

写真129　表門

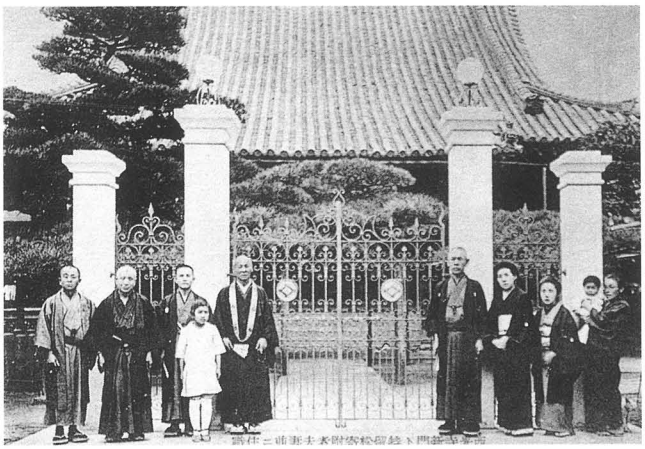


写真130　表門古写真

5、正円寺　真宗大谷派　阿曽字屋敷876

鐘楼門　桁行一間、梁間三間、二重門、入母屋造、本瓦葺　文化九年（1812　石柱銘）

下層　角柱　虹梁形頭貫　組物なし　一軒疎垂木　上層　角柱　組物なし　一軒疎垂木　妻飾木連格子

本堂　桁行13.9メートル、梁間12.4メートル、入母屋造、背面軒下張出付、側面葺き下ろし下屋付、向拝一間、本瓦葺　享保三年（1718　石柱銘）

縁通角柱　両端間虹梁形飛貫　組物なし　入側通角柱　組物なし　一軒疎垂木　妻飾漆喰壁塗　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備蟇股　一軒繁垂木

正円寺は、寺伝によればもとは天台宗で、明応元年（1492）に真宗に改宗した。阿曽の旧集落の中に寺地を構え、東の鐘楼門を入ると正面に本堂、その北に玄関をはさんで庫裏がある。

鐘楼門は二重門である。下層桁行は正面柱間一間奥行三間で、正面側から一間目の柱間に扉口を構え、扉の両脇にごひらの柱を立て、間口を三間に割っている。扉口と側柱との間、及び両側面は漆喰壁とする。前後の側柱の桁行にかかる虹梁形頭貫の上に大引を梁行に載せ、大引は頭貫の外に延びて軒桁を支える。隅には持送りを取付けている。

上層平面は桁行三間、梁間二間で、実寸は下層よりも桁行で一．三尺、梁行で一．七尺ほど小さい。内部の床は下層の天井を兼ねた板敷きで、天井は張らずに小屋組をそのまま見せる。四面の柱間に高さの異なる連子窓を設ける。上層の軒も腕木と持送りで支えられた出桁で垂木を受け、腕木は柱を貫通させて内部で尻を押さえている。

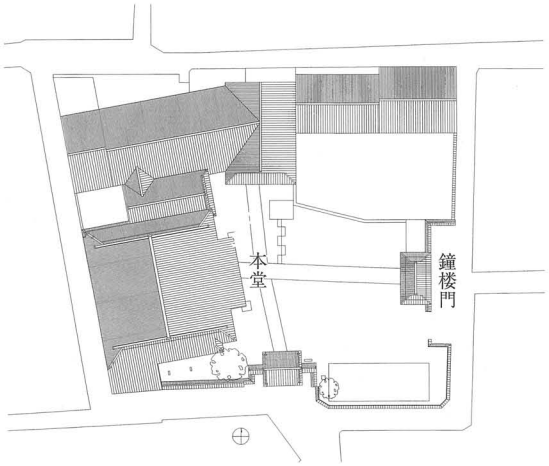


図27　正円寺配置図

建立年代は明らかでないが、寺伝によると文化九年（1812）に屋根替があり、元は現在の南門の位置にあったものを大正十四年（1925）に現地に移転した。最近は昭和五十七年に屋根替修理を行っている。様式的には19世紀前期ないし中期とみられるので、文化九年の修理を建立年代とするのが妥当であろう。

本堂は町内で最も古い真宗本堂である。平面は定型的な真宗本堂の形式で、内外陣境によって全体を大きく二つに分けて、前方を外陣とし、後方の中央を内陣、内陣の両脇を余間とする。後方一間通りは後戸である。外陣の正面側には広縁がつく。柱は来迎柱が円柱である以外はすべて角柱で、比較的たちの低い建物である。外陣と余間の両側面の部屋は後に改修されたもので、両側面の当初形式はよく分からない。

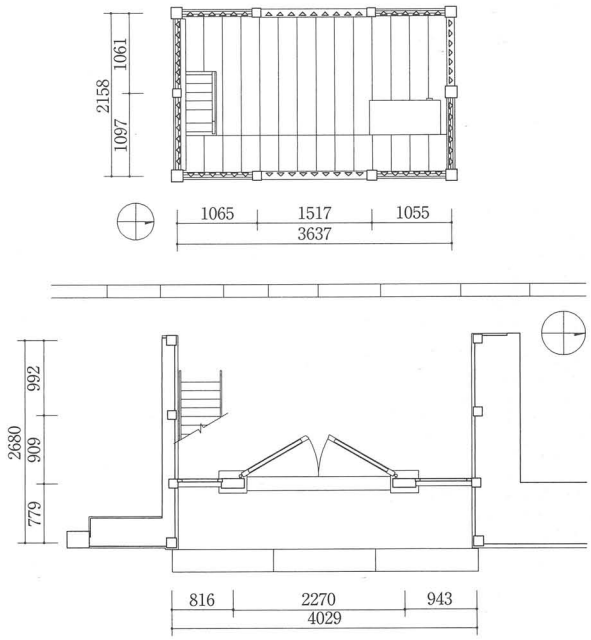


図28　鐘楼門平面図（上：上層、下：下層）

写真131　鐘楼門全景

外陣の規模は、畳を基準とする実寸で正面が六間、奥行が三間である。中柱は内陣・余間境の柱筋の延長上に左右二本ずつ計四本立つ。中柱は奥行き方向の飛貫でつながれ、上部を小壁とする。飛貫は、正面側二間は直材であるが、奥の一間だけは一段高い位置に入れて虹梁形飛貫とする。内陣手前の一間通りは矢来内で、奥の中柱およびその無目敷居に矢来が取り付けられた痕跡がある。天井は棹縁天井である。

縁は正面のみに付き、正面縁の外側にも柱がたち、棹縁天井が張られている。

内外陣境は、角柱を切目長押、内法長押、頭貫、台輪でつなぎ、全体に金箔と漆を施す。柱上に平三斗を置き、中備は蟇股、欄間彫刻は瑞鳥である。内陣正面建具は金障子である。中二本の柱は寸法が細く、敷居には柱の内陣側を通る溝がある。敷居上面には板が貼られていて溝が何本あるのか分からないが、中央間か

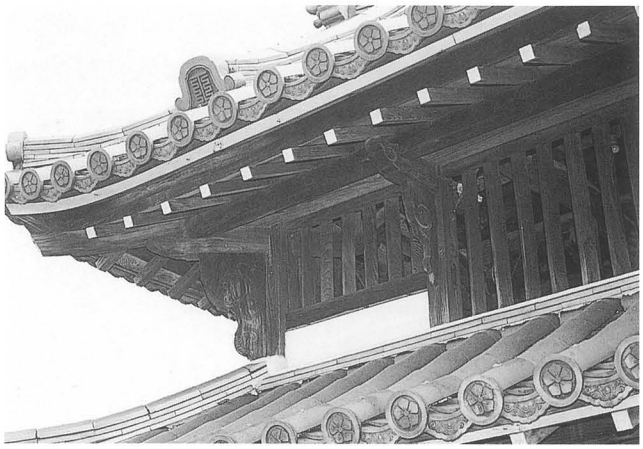


写真132　鐘楼門上層詳細

写真133　鐘楼門下層虹梁

写真134　鐘楼門下層見上げ

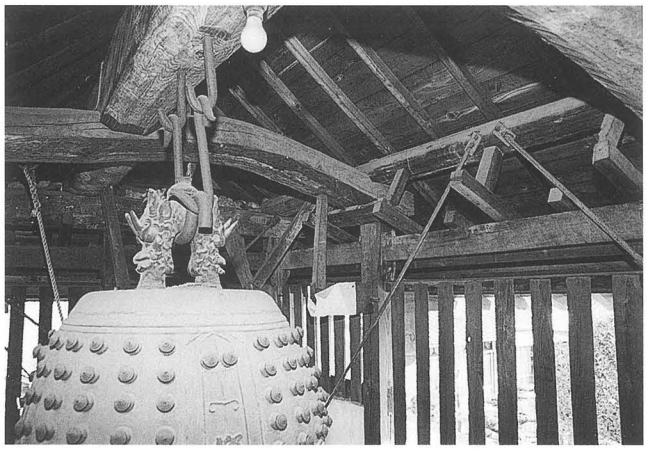


写真135　鐘楼門上層内部

写真136　本堂全景

写真137　本堂向拝虹梁絵様

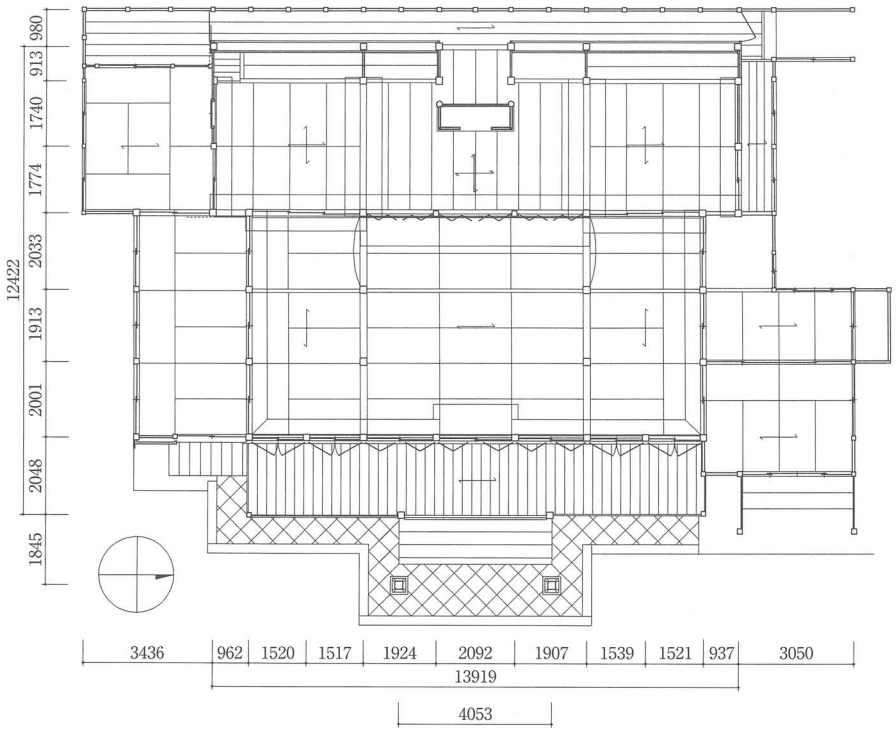


図29　本堂平面図

写真140　本堂外陣見返し

写真138　本堂正面広縁部

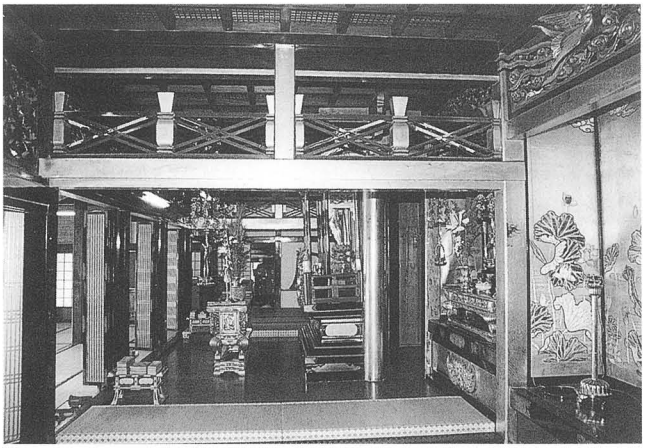


写真141　本堂余間から内陣見通し

写真139　本堂外陣

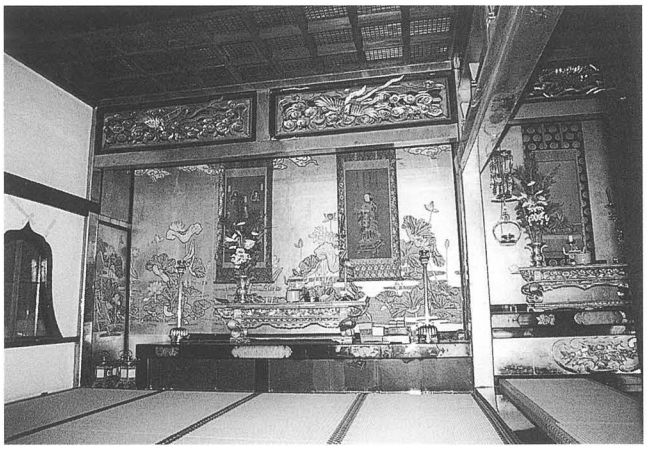


写真142　本堂余間

ら両脇間へ引分ける障子があったと思われる。

内陣仏壇は当初から後門形式であった。来迎柱は頂部を頭貫木鼻付、台輪木鼻付で固め、上に三斗枠肘木を置く。須弥壇は禅宗様で、上に厨子を安置する。天井は小組格天井である。余間は内陣と同じ床高で、奥に余間仏壇を構え、天井は内陣と同じく小組格天井である。内陣と余間は、天井以外は漆・金箔で彩色されている。内陣と余間の背面側の柱には風蝕が見られないので、後戸は当初から存在したと思われるが、現在の本堂背面の柱・壁は新しいものである。

改造が認められる主な点は、堂の両側面の諸室、背面側の柱筋全体、内外陣境の建具などである。屋根は昭和五十七年の修理で、小屋組の補強材が入れられ、また野垂木より上が新しい材になっている。それ以外の堂の本体をなす部分の根幹はよく残っている。

建立年代は、寺伝では江戸初期に建てられ、享保三年（1718）、天保十一年（1840）に修理があったとする。建物の古い部分の様式的判断からは享保三年頃の建立と考えるのが妥当である。若干の改造はあるが、当初形態はよく残っており、町内で最も古い真宗本堂として重要な建物である。（黒田）

写真143　本堂内陣

6、了源寺　真宗大谷派　福地408

本堂　桁行13.7メートル、梁間12.1メートル、入母屋造、向拝一間、側背面張出付、本瓦葺

天明六年（1786　寺伝）

正面側柱角柱　組物なし　中備なし　正面入側柱角柱　切目長押　内法長押　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　出組　中備なし　二軒半繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備蟇股　二軒半繁垂木

鐘楼　桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺

文政四年（1821　寺伝）

角柱　腰貫　飛貫　頭貫　木鼻　三斗枠肘木組　中備平三斗　飛貫上中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾木連格子

了源寺は福地の集落の中央部にある。沿革は不詳である。

本堂は小規模の真宗本堂で、正面にのみ広縁を設ける。平面は、前半分の外陣と、後方中央の内陣、その両脇の脇陣からなる真宗本堂の一般的な平面形式に則るが、内陣部分は間口を両側半間づつ広げる型式に属する。外陣は間口六間、奥行三間の規模を持ち、中柱を左右二本づつ立て、梁行に虹梁形飛貫を入れ、さらに頭貫・台輪て繋ぐ。ただし柱は立て上せ柱であるから頭貫・台輪は見せかけである。天井際の三斗組も挿肘木を用いている。

内外陣境には出組組物を組み、柱足下は地長押を打った上に蹴込板を入れた上で敷居を入れている。この

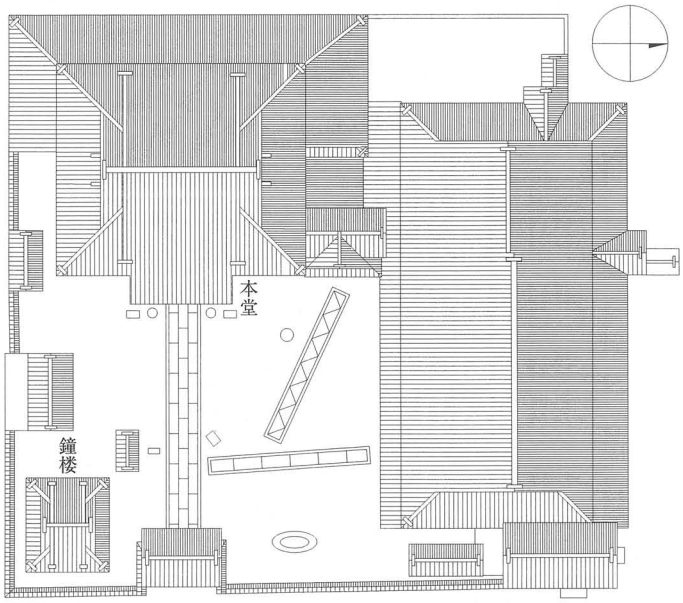


図30　了源寺配置図

写真144　本堂外観

写真145　本堂妻飾

写真146　本堂広縁部

写真148　本堂外陣架構

写真150　本堂内陣

写真147　本堂向拝

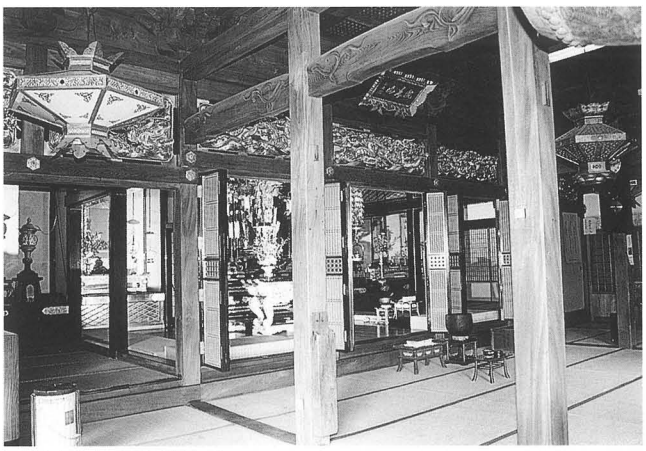


写真149　本堂外陣

構えは珍しい。

内陣廻りは出組の組物を組むが、来迎柱部分だけは二手先に蛇腹支輪・雲紋の彫刻の支輪を重ね複雑な構成となっている。内陣・余間の天井は小組格天井で、内陣は折上げている。定型通り来迎柱を立てて須弥壇を置き、脇仏壇はその半間後方に設ける。

来迎柱筋には仏壇框と内法材・板壁の痕跡が残り、本来は背面に突きだした脇仏壇はなく、余間の仏壇框と前面を揃えて、三ッ並び仏壇であった。

側・背面の張出部も後補である。

建立年代は寺伝の天明六年が様式上からも認められる。過去帳では文化六年に没した住職が本堂を建て替えたと記していて、整合している。昭和六年の銘のある棟木と擬宝珠が残り、その時に修理があったことが知られ、昭和六十一年にも修理を行った旨の記された石碑があり、垂木すべてと小屋組の一部がその際に新材に取り替えられている。須弥壇廻り以外はすべて角柱を用い、柱は一間毎に立て、当初三ッ並び仏壇を構えた古風な面を持つ江戸時代後期の真宗本堂である。

鐘楼は内転びの付いた角柱を用いたあまりたちの高くない安定した建物である。台輪上の中備に組物を各辺二組づつ置き、その下、飛貫上には蟇股を置いて、

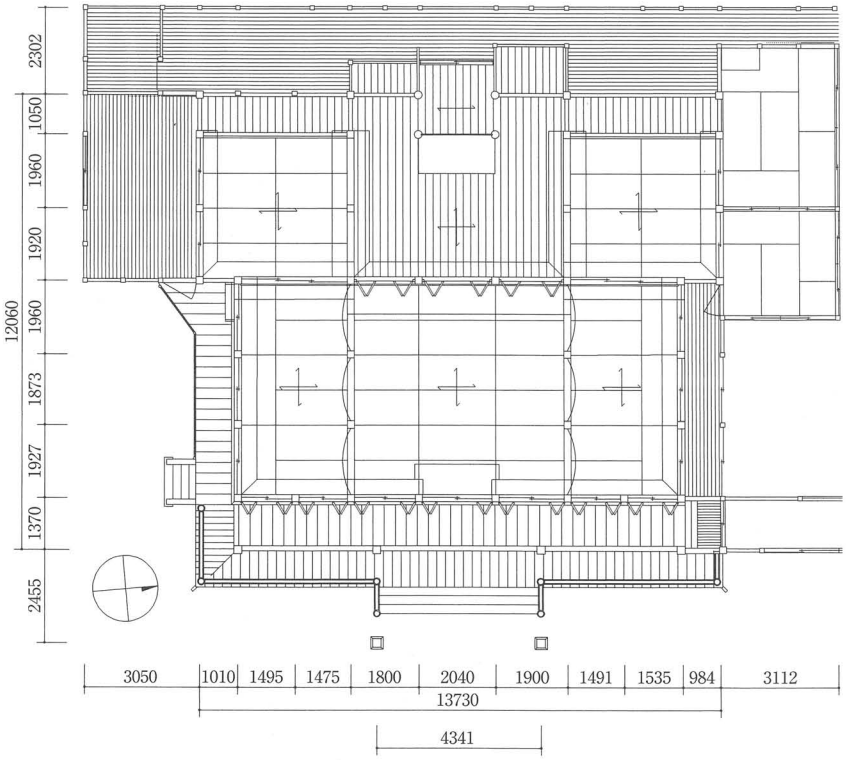


図31　本堂平面図

写真152　本堂内陣側面の三ツ並び仏壇の痕跡

写真151　本堂余間

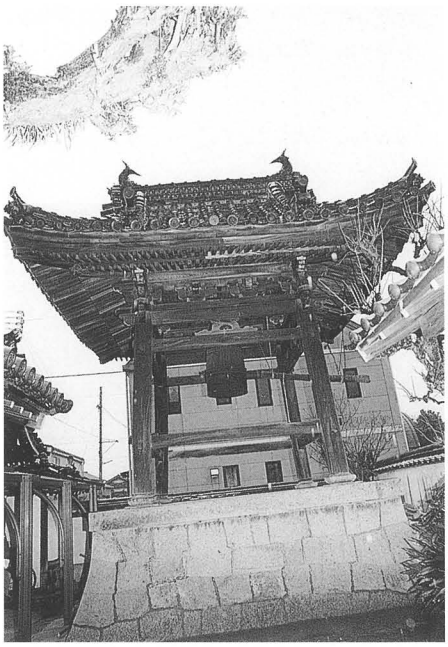


写真153　鐘楼全景

柱間上部はかなり賑やかである。内部の天井は小組格天井で、通常の形式と吹き寄せに輪をあしらったものを市松に張っているのが気がきいている。

過去帳に文政六年に没した住職が釣鐘堂の普請を行ったことを記す。文政四年建立という寺伝もありその記載通り、十九世紀前期の建立と見てよい。　（山岸）

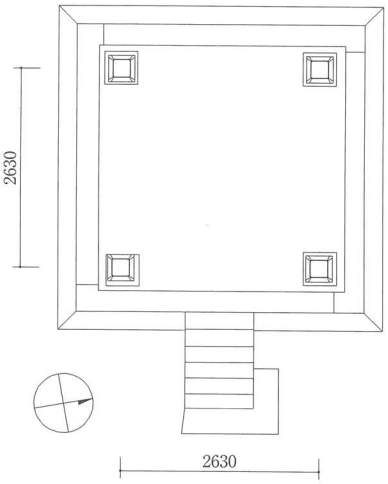


図32　鐘楼平面図

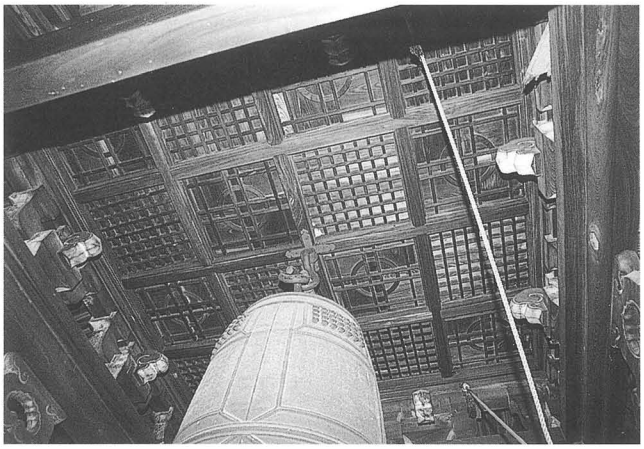


写真154　鐘楼見上げ

写真155　鐘楼詳細

7、崇導神社　　福地字上土木485

表門　桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺

19世紀後期

親柱ごひら角柱　女梁　冠木　平三斗　控柱角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　中備蟇股　親柱控柱間　男梁（控柱では頭貫）　木鼻　腰貫　飛貫　妻飾虹梁大瓶束笈形　二軒繁垂木

本殿　一間社隅木入春日造、銅板葺

寛政七年（1795　棟札写）

身舎円柱　切目長押　正面のみ内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　三斗枠肘木　中備なし　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　繋虹梁　連三斗　中備なし　背面妻飾虹梁大瓶束　一軒繁垂木

拝殿　桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺

明治十六年（1883　棟札写）

角柱　足固貫　正面背面中央間は以外腰貫　飛貫　正面背面中央間のみ虹梁形飛貫　組物なし　中備なし　妻飾木連格子　一軒疎垂木

崇導神社は福地の集落の鎮守社である。福地は石見郷を形成する集落のひとつで、宮本の石海神社の信仰圏に属している。福地を含む九集落を信仰圏とする石海神社も江戸時代には崇導（頭）神社といっていたが（石海神社の項参照）、この二社がどのような関係にあるのかは詳らかでない。神社の歴史に関しては昭和四十四年に境内や建物の大修理が行われた際に発見された棟札その他の記録によって作成された「崇導神社社歴」（板に書いて社殿内に掲示）がある。これによると御神体の台座に元禄十七年（1704）の銘があり、額には享保三年（1718）の銘があったというから、江戸時代中期には存在した神社である。福地の集落の立地

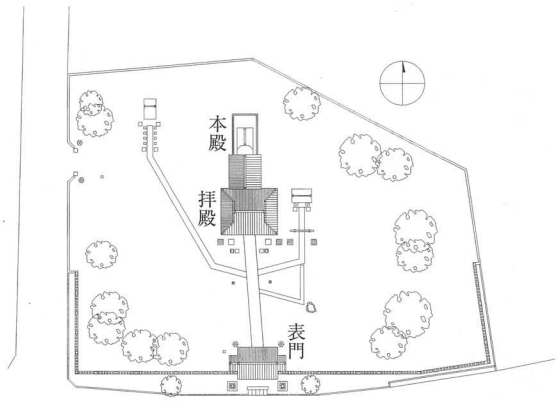


図33　崇導神社配置図

は林田川の東の平野であり、神社は旧集落の東のはずれに位置している。

表門は一間の薬医門で、切妻造、本瓦葺の屋根をもつ。親柱間には冠木を渡し、冠木上の柱位置と柱間中央に男梁を置き、その上に平三斗を置く。これらの上に桁行虹梁をかけ、中央に蟇股をおく。門両側の袖塀は、壁は下見板張、屋根は本瓦葺である。

棟通りに桁行の虹梁を架け、上に蟇股を置く形式は時折見られるが特徴的であり、男梁・女梁の木鼻、拳鼻、実肘木、虹梁の絵様などが相当に目立ち、装飾豊かな建物である。様式から、19世紀後期の建立になると推定される。幕末から明治にかけての時期の手堅い作である。

本殿は切石積の基壇の上に建ち、基壇上に石製の柵を廻らせている。現在、本殿の側面と背面に近接して塀を設けている。

本殿は一間社隅木入春日造である。縁は正面だけに設けられていて高欄もなく、階は五級を数える。柱間装置は正面に桟唐戸を開く以外は横板壁である。

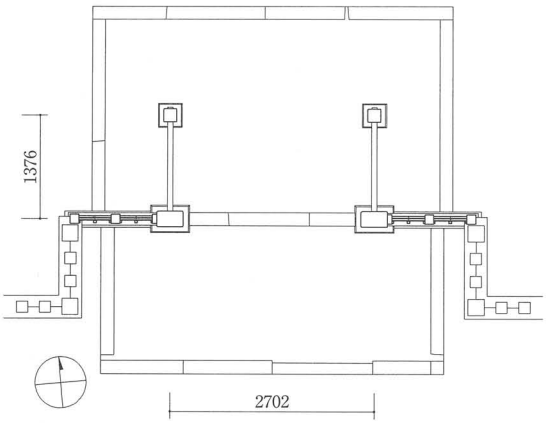


図34　表門平面図

写真158　表門妻飾

身舎の軸部は、円柱を頭貫と台輪で固める。正面だけには縁がつくので切目長押が設けられているが、側面背面にはそれもない。側面背面に縁が取り付いていた痕跡はないが、未完成であるのか、当初からこの形式を完成形と考えていたかは分からない。庇と身舎を繋ぐ虹梁は水平で、外側だけに絵様をほどこし、内側は省略する。

内部の奥壁に寄せて、欅造の厨子を置く。厨子は屋

写真156　表門全景

写真157　表門見上げ

写真159　表門詳細

根形式に特色があり、平入の屋根の左右両端に千鳥破風を作り、正面中央にはかなり大きな軒唐破風を付ける。組物の上に通肘木を置き、その上にずらりと斗を並べるなど面白い細部をもっている。扉は正面中央に一口であるが、千鳥破風が二つあることは二柱の神が祀られていることを示すであろう。

「崇導神社社歴」に建立とその後の修理改造が記されている。現在の本殿の建立は寛政七年（1795）で大工棟梁は五百籏頭重四郎信家である。その後、文政元年（1818）に天井棹桟、天保七年（1836）に階段、安政五年（1858）に垂木の修理が行われた。昭和四十四年の修理では棟木・梁・正面扉・階段・土台を取替え、瓦葺を銅板葺に変更した。

この本殿は、正面以外に縁を作らないことから、見世棚造に近いと言え、装飾も比較的簡素である。しかし、町内の神社本殿形式は入母屋造、流造が多数を占め、簡略なものに切妻造があるという情況の中で、この本殿は町内唯一の春日造本殿であり、その意味で重要である。また、建立年代が判明しており、細部様式もその年代に相応したものである。

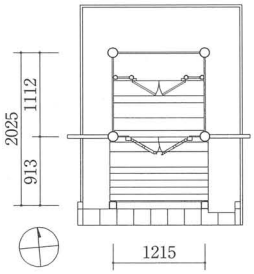


図35　本殿平面図

拝殿は幣殿を挟んで本殿の前方にある。桁行三間、梁間二間の規模で、屋根は入母屋造、本瓦葺である。腰壁を設ける以外は吹き放しで、天井もはらず、小屋組を見せ、床は板敷である。組物などもない。豪快な

写真161　本殿正面

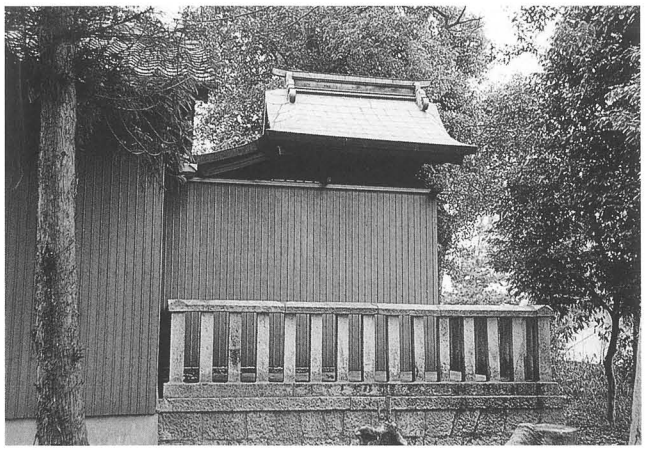


写真160　本殿外観

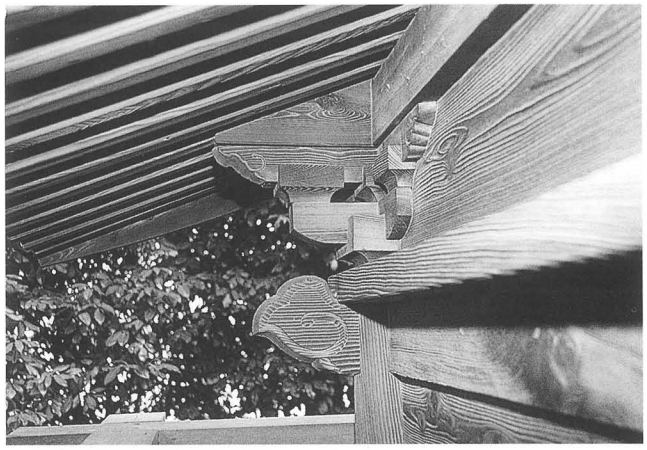


写真162　本殿母屋詳細

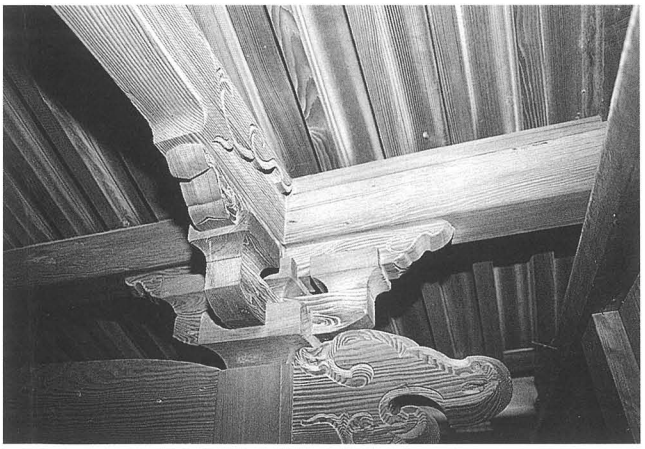


写真163　本殿庇詳細

写真164　本殿厨子

小屋組には絵馬が多数掲げられている。陸戦や海戦の様子が描かれていて興味深い。

建立年代は「崇導神社社歴」の棟札写しにより、幣殿とともに明治十六年（1883）で、大工は福地村の首藤佐兵衛であり、地元の大工の作である。　（黒田）

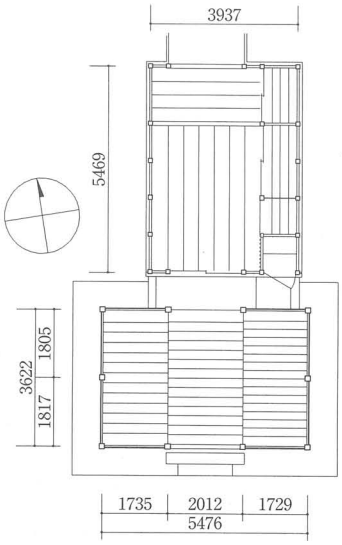


図36　拝殿・幣殿平面図

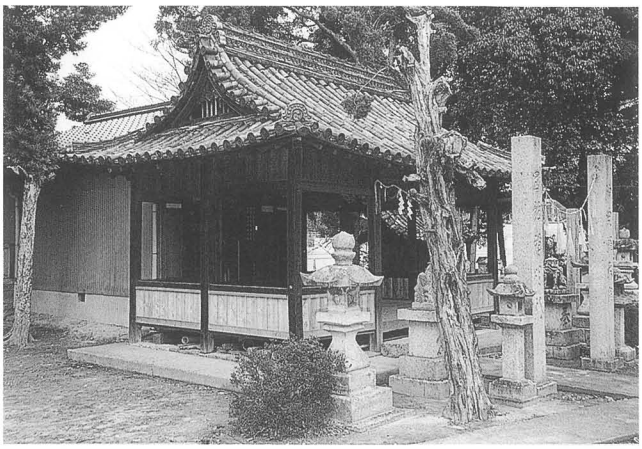


写真166　拝殿外観

写真167　拝殿正面虹梁

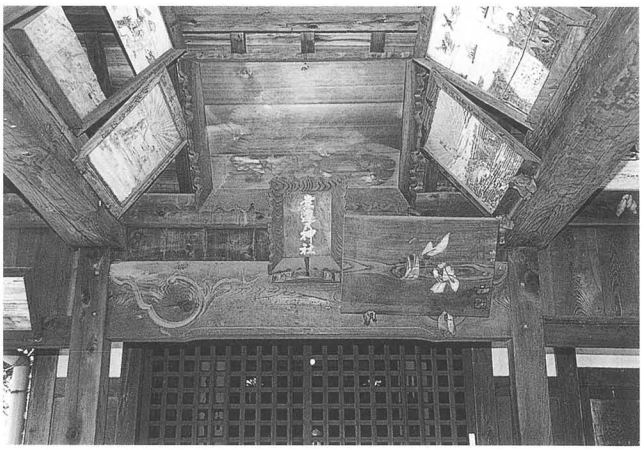


写真169　拝殿内部

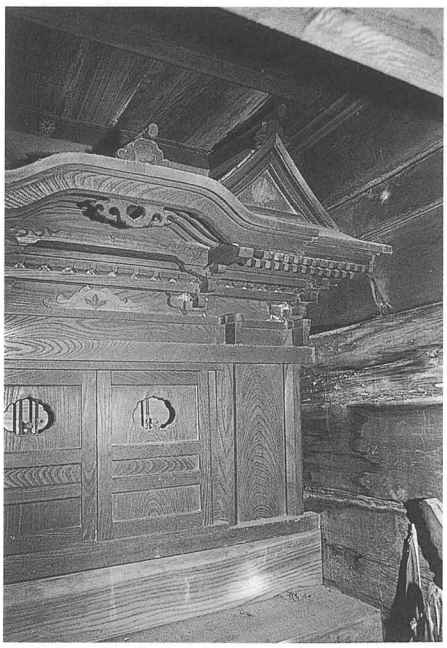


写真165　本殿内部

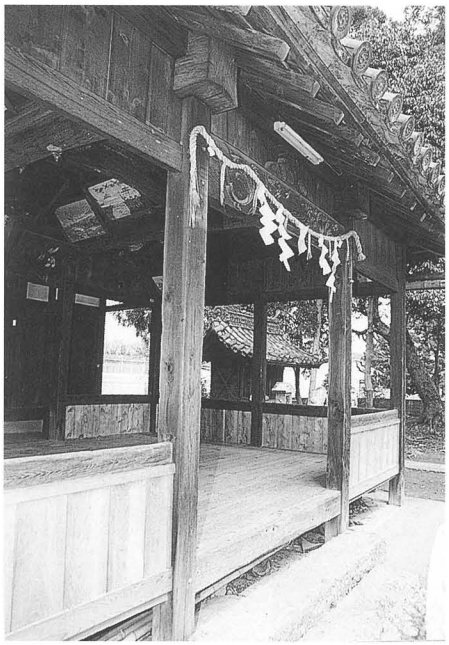


写真168　拝殿正面軸部

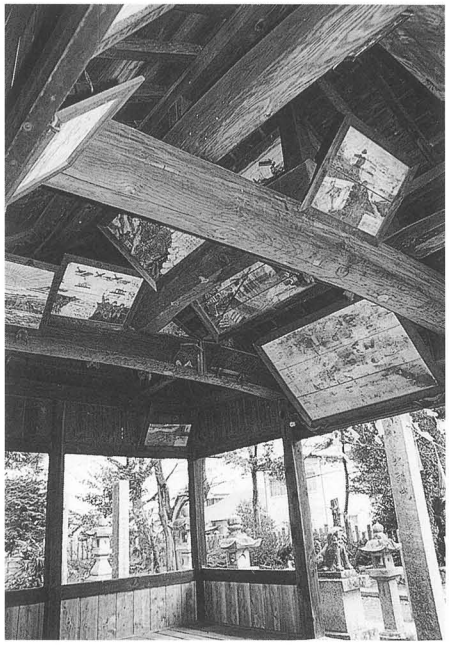


写真170　拝殿内部見上げ

8、蓮光寺　真宗大谷派　常全字後畑204

表門　一間高麗門、切妻造、本瓦葺　18世紀中期

ごひら角柱　楣　冠木　女梁　男梁　控柱角柱　腰貫　飛貫　挿肘木　一軒疎垂木　妻飾撥束

本堂　桁行13.6メートル、梁間13.6メートル、入母屋造、向拝一間、側背面軒下張出付、背面下屋庇付、本瓦葺　寛政八年（1796　墨書）

正面側柱角柱　組物なし　正面入側柱角柱　切目長押　内法長押　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　出組拳鼻　板支輪　中備なし　一軒疎垂木小舞裏　妻飾二重虹梁大瓶束

蓮光寺は林田川沿いの常全の集落の中にある。沿革は不詳である。

表門は、明治九年頃に龍野城の門を移建したものと考えられている（『寺史蓮光寺』）。以下のような諸点から見て、おそらく事実であろう。

寺の門としては珍しく高麗門の形式を採っている。規模はさほど大きくないが、柱や冠木の見付は一尺五寸あり、木太い堅固な建物である。扉は竪格子を組んでおり、上半部は太い格子の透かし格子、下半部は細い格子に裏板を貼り、鉄の饅頭金具や八双金具で強固に組まれている。軒丸瓦には輪違の紋が彫られており、これは龍野城主の脇坂家の家紋である。男梁・女梁は単純な繰形を付けるだけで、装飾的な要素は一切ない。

口碑から龍野城しころ坂門であったと考えられており、龍野城門の遺構として貴重である。

本堂は中規模の真宗本堂である。正面と側面に広縁、正面と南側面の二面に落縁を設ける。ただし北の広縁は外陣に取り込まれている。矢来筋から奥は広縁部分も堂内に取り込み、同様に落縁部分も矢来柱より奥は

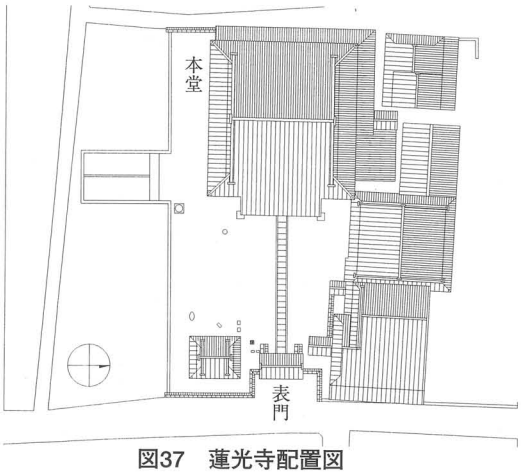


図37　蓮光寺配置図

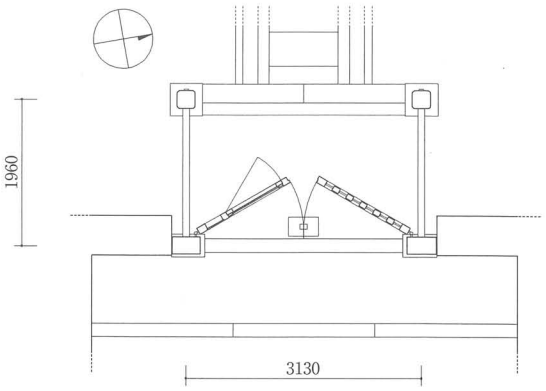


図38　表門平面図

写真171　表門全景

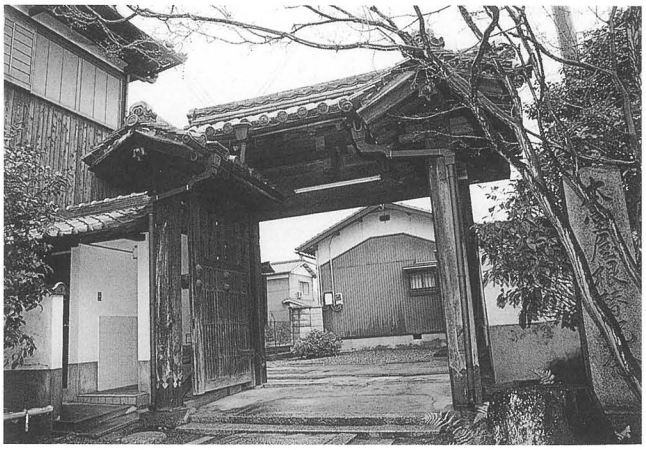


写真172　表門背面

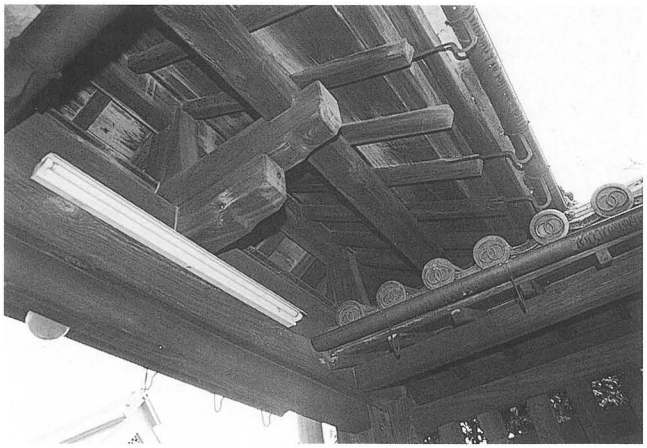


写真173　表門軒詳細

壁で囲っている。

外陣には矢来筋に二本の中柱を立て、桁行方向にのみ虹梁を架け、中柱と側面側柱、中柱と内外陣境柱は頭貫・台輪で繋ぐという珍しい架構となっている。天井は矢来筋より前は棹縁天井、矢来筋後方は格天井である。架構・意匠の差に加えて、矢来筋には結界も現存しているので、外陣は、結界より前の間口五間、奥行二間半（実寸法で）の広い空間と、矢来筋後方の細長い空間との、全く雰囲気の異なる空間に二分されている。

写真174　表門軸部

写真176　本堂向拝

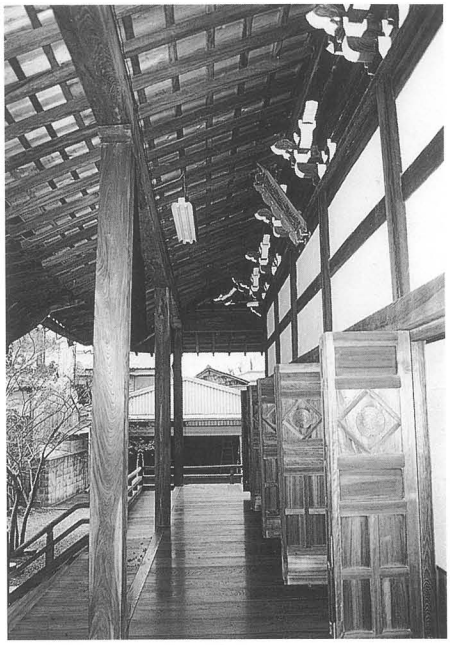


写真177　本堂広縁部

写真175　本堂外観

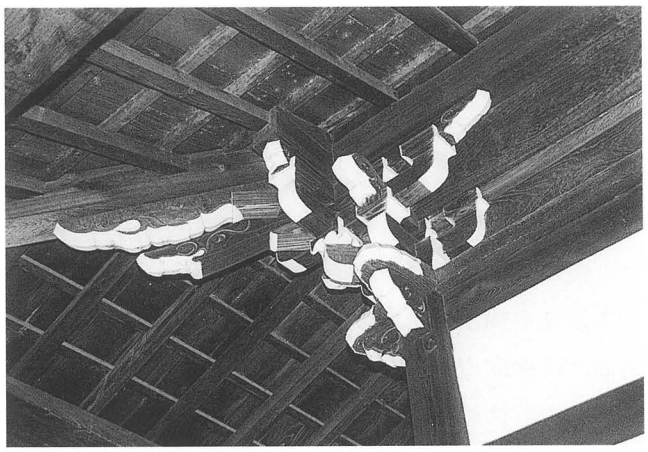


写真178　本堂隅組物

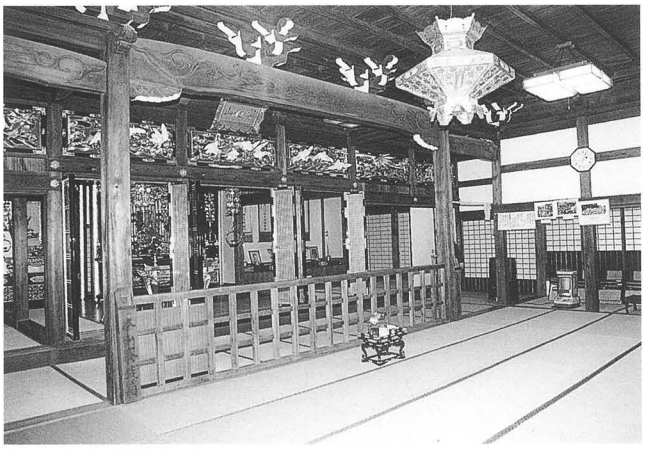


写真179　本堂外陣

写真180　本堂余間

内陣はいわゆる後門形式で、来迎柱を立て須弥壇を置き、後方に後退させて脇仏壇を設ける。内陣・余間共に天井は小組格天井、柱上の組物は出組で、来迎柱上のみ二手先を組む。内外陣境の中央二本の柱のみは立て上せ柱であるため組物は挿肘木である。

内陣の来迎柱に対向する余間との境の角柱には仏壇框の埋木が残り、当初は三ッ並び仏壇であったことと推定される。そうであれば来迎柱上の組物や支輪は現状では須弥壇・厨子の後方を飾る意匠になっているが、本来は中央仏壇の正面を飾る意匠だったことになる。

軒下を堂内に取り込んだ余間廻りの半間の通路部分は、構造的には余間の仏壇部分と一連で、当初からのものである。内陣脇仏壇を含め、背面の一間半の下屋は後補である。

外陣の独特の架構、古式な三ッ並び仏壇を持っていたことなど注目すべき点の多い真宗本堂である。

大正十年と昭和五十五年に屋根葺替工事を行っており、後者の際に破風板に寛政八年の墨書があったと記録され、同年に借金をした文書も残るので（『寺史蓮光寺』昭和五十六年　蓮光寺）、その年の建立と見てよい。

（山岸）

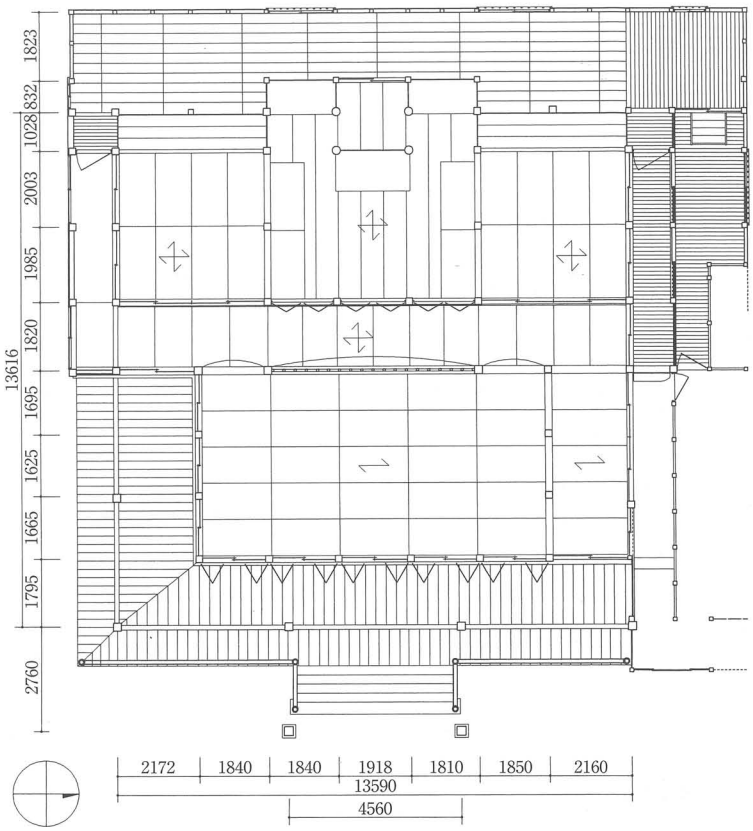


図39　本堂平面図

写真181　本堂外陣矢来通り

写真182　本堂内陣

写真183　本堂内陣見返し

9、八幡神社　　常全字日蓮寺178

本殿　一間社流見世棚造、本瓦葺

明治二十七年（文書）

身舎角柱　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　大斗　絵様肘木　中備なし　一軒繁垂木　妻飾虹梁撥束　庇角柱　腰貫　虹梁形頭貫　木鼻　平三斗　中備蟇股　二軒繁垂木

八幡神社は常全の集落の中心部にあり、公民館・火の見櫓などの集まる広場の中に、荒神社と並んで立つ。

本殿は切石積みの基壇の上に土台を組んで立つ。間口70cmに満たない小社であり、それ故構造形式も簡素ではあるが、庇には三斗を組んで、正統的に作られている。

虹梁絵様・木鼻などは18世紀後期頃の様式を示しているが、当村庄屋村瀬家の文書に、明治二十七年の新築のための拠金趣意書があり、その時に建て直されたことは明らかである。

しかも興味深いことに、常全の村の北西隅にある東光稲荷神社と形式・意匠が酷似し、同じ大工の手で、時を隔てず建てられたことが推定される。

鬼瓦には弘化四年に三木庄左衛門が作った刻銘があり、前身のものを再用していると見られる。　（山岸）

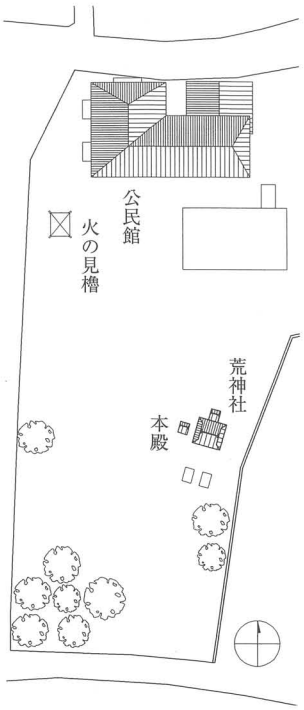


図40　八幡神社配置図

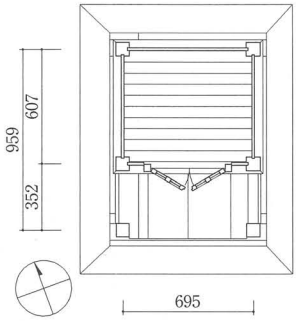


図41　本殿平面図

写真184　本殿正面

写真185　本殿全景

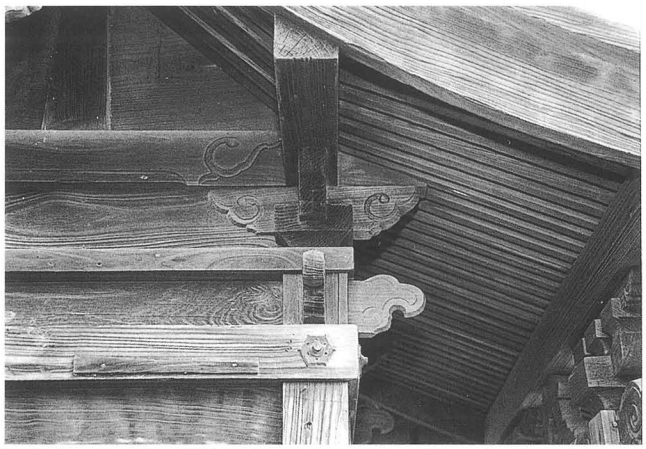


写真186　本殿身舎詳細

写真187　本殿庇詳細

10、東光稲荷神社　　常全字後畑211

本殿　一間社流見世棚造、銅板葺　　明治二十七年頃

身舎角柱　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　大斗　絵様肘木　中備なし　一軒繁垂木　妻飾虹梁撥束　庇角柱　腰貫　虹梁形頭貫　木鼻　平三斗　中備蟇股　二軒繁垂木

東光稲荷神社は常全の集落の北西隅にある。

八幡神社の項で述べたように、両者の**本殿**は形式・意匠が酷似し、同じ大工の手で、時を隔てず建てられたことが推定される。

八幡神社が明治二十七年の建立であるから、当社もほぼその頃の建立と見てよい。

二社の違いは、庇の柱間が当社の方が二寸小さいこと、屋根葺材が異なることである。

ほぼ同形同大の本殿が二棟残ることは興味深い。

（山岸）

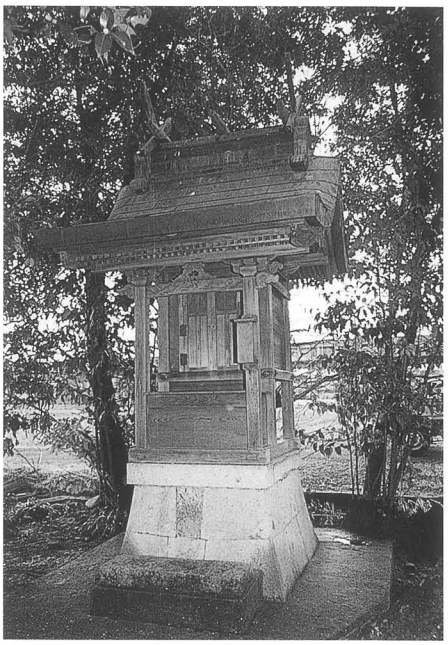


写真188　本殿全景

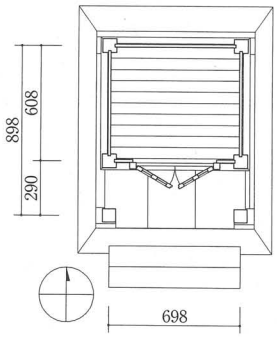


図42　本殿平面図

写真189　本殿側面

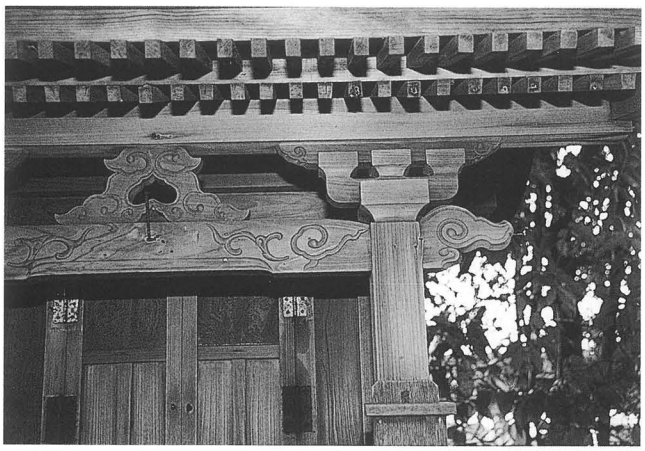


写真190　本殿庇詳細

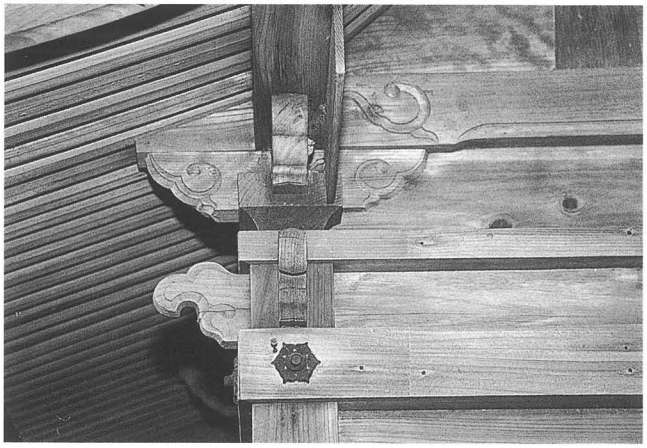


写真191　本殿身舎詳細

11、石海神社　　宮本字宮ノ前168

表門　桁行一間、梁間二間、四脚門　切妻造　本瓦葺
明治三十二年（1899　『石海村史』）
親柱円柱　楣　冠木　出三斗　中備龍彫刻　控柱角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　中備彫刻蟇股　親柱控柱間腰貫　腰長押　頭貫　木鼻　妻飾虹梁大瓶束笈形付　二軒繁垂木

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、銅板葺　　天保九年（1838　『石海村史』）
円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　彫刻板支輪　中備出組組物　二軒繁垂木　妻飾彫刻板　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備龍彫刻　二軒繁垂木

拝殿（絵馬堂）　桁行五間、梁間三間、入母屋造、正面千鳥破風、軒唐破風付、本瓦葺
大正十二年（1923　『石海村史』）
角柱　足固貫　腰貫　飛貫　正・背面中央間虹梁形飛貫　組物なし　中備正面背面中央間板彫刻　妻飾板貼り　千鳥破風妻飾木連格子　唐破風妻飾蟇股　一軒繁疎木

舞台（余興場）　桁行7.0m　梁間3.4m　切妻造　本瓦葺　　十九世紀後期
角柱　組物なし　中備なし　妻飾土壁　一軒疎垂木

石海神社という名称は、近代に石海村ができてからの名称であろう。江戸時代の文書（『復刻版　揖保郡石海村史』所収）では崇導（頭）大明神と書かれている。この付近は石見郷と呼ばれ、崇導大明神社は九集落を信仰圏とする。社地は江戸時代の宮本村の中にある。この村は林田川から東200mのところに立地している。同じように川近くに立地する吉福の八幡神社はここから1.4km南方である。

境内南面の表門をはいると、すぐ東に余興場、西に神輿殿がある。正面には拝殿があり、その奥に幣殿、本殿がある。

表門は規模の大きい四脚門で、重厚な切妻造本瓦葺の屋根をもつ。親柱下は石製の唐居敷、控柱下は石製の礎盤を置く。入口の左右と上方、つまり方立と楣には雲紋の地紋彫を施している。親柱上の組物は枠肘木が木鼻となって妻側へ出るが、その形は刳り貫かれた鳥兜状の特徴的なものである。冠木の上にも平行して桁行の虹梁をかけ、その間に大きな竜の彫刻を入れる。このほか妻飾の虹梁大瓶束、桟唐戸の羽目板に施された浮彫、控柱上の頭貫木鼻の彫刻など、精緻な装飾が数多く見られる上質の門である。

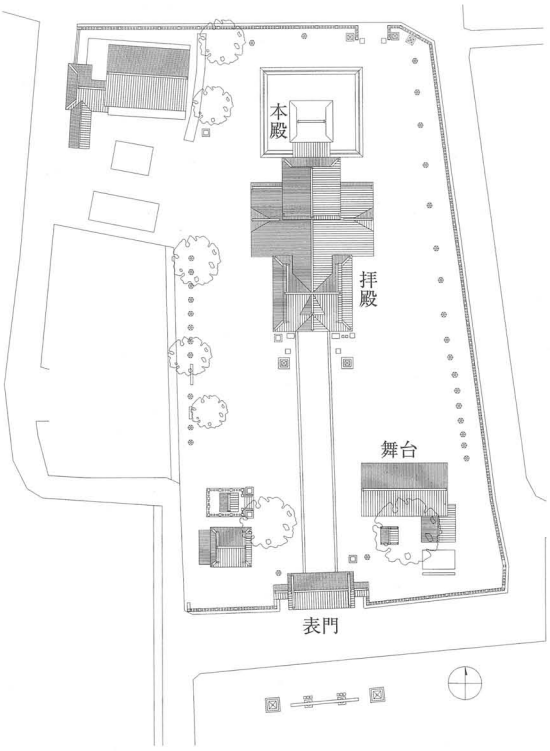


図43　石海神社配置図

写真192　表門全景

写真193　表門見上げ

建立年代は明治三十二年、大工は奥野光次郎と伝え、明治時代らしい手の込んだしっかりとした作である。なお両脇二間の袖塀も同時期のもので、屋根は本瓦葺、壁は真壁造で外側は下見板を張り、欄間は二重の襷を入れる。

本殿の一郭は切石積みの基壇を築き、壇の上に透塀を廻らしている。本殿は高さ約90cmの亀甲積み基壇の上に縁束をたて、柱はさらに高さ約50cmのモルタル塗

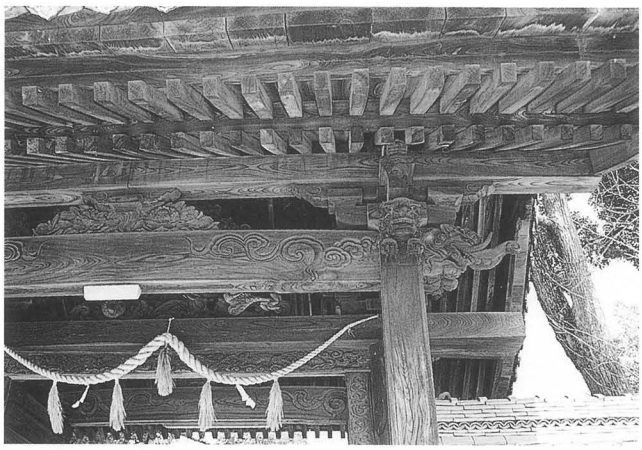


写真194　表門詳細

写真196　表門妻飾

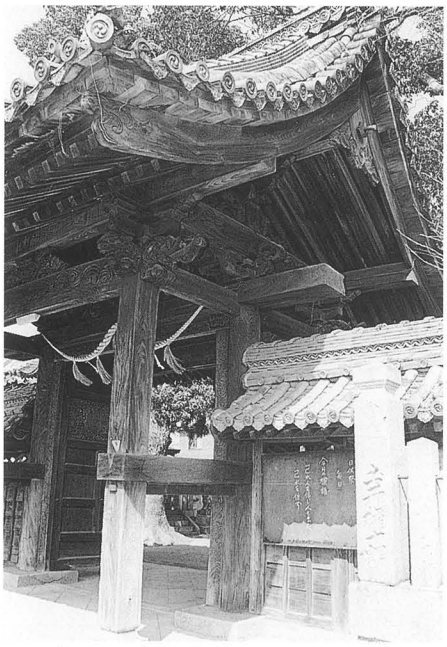


写真195　表門側面

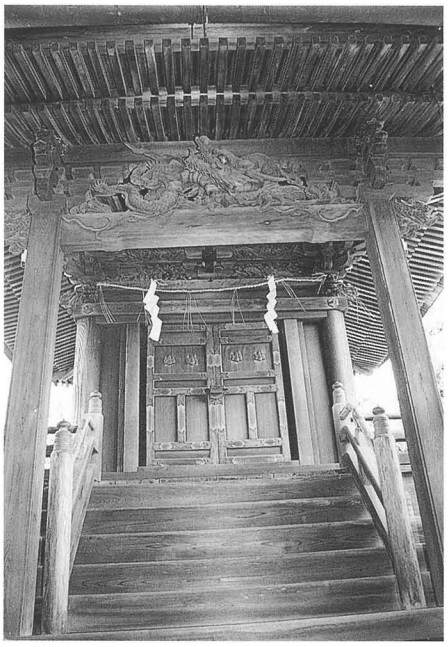


写真198　本殿正面

写真199　本殿腰組

写真197　本殿全景

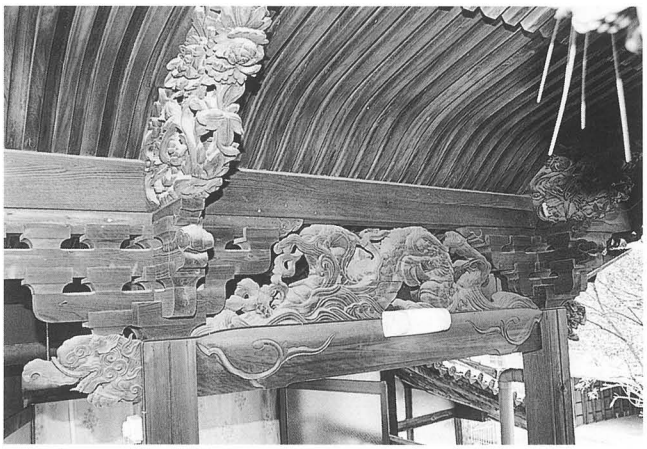


写真200　本殿向拝見返し

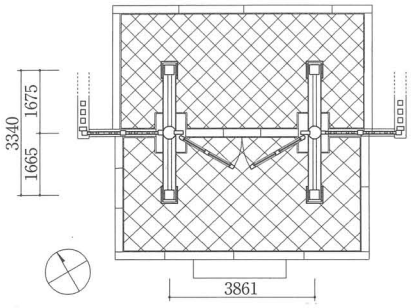


図44　表門平面図

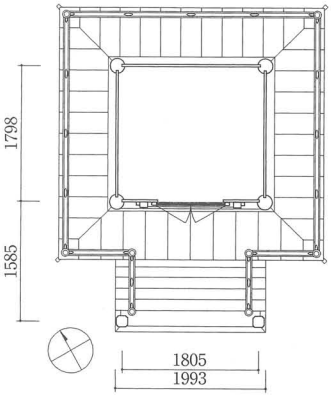


図45　本殿平面図

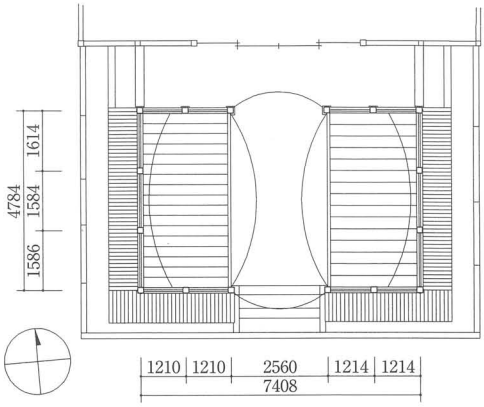


図46　拝殿平面図

写真201　本殿本体部詳細

写真203　拝殿正面詳細

写真202　拝殿全景

写真204　拝殿内部

写真205　拝殿内部

写真206　拝殿虹梁絵様

り基壇を築いて建てる。本殿の形式は平入の入母屋造で、規模は桁行一間、梁間一間、正面に一間の向拝をつける。身舎の四方に切目縁を回し、正面の階は五級である。柱間装置は、正面に扉を開く以外は横板壁である。

組物は拳鼻、実肘木をもつ出組で、柱間中間にも一組の組物を置く。組物の間には合計8面の中国神仙の彫刻を施している。このような神仙彫刻は、動植物、雲紋、水紋に比べると数少ないものである。この彫刻については、第三章2で詳しく述べる。頭貫の木鼻は全て動物木鼻で、隅の組物からも龍が彫刻された尾垂木が出る。

向拝組物は、桁行方向に二手広がる連三斗である。肘木も二段であるから頭貫と桁の間隔も広く、それらの間一杯に龍彫刻を入れ、組物の上には手挟を置く。身舎の飛檐垂木を打越した打越垂木は、向拝柱筋の身舎側で上方に湾曲し、外側では強い反りをみせる。縁は角柱の縁束を腰貫と虹梁形頭貫でつなぎ、出組で縁葛と通肘木を受けるという凝った作りになっている。

向拝はおそらく近代になってから作り変えられたものである。東側と西側の実肘木の絵様が異なっていて、東の実肘木が身舎の実肘木と同じ絵様をもつので、それは古い実肘木を再用したものとみられる。実肘木が再用されているのであれば、組物の形状は修理以前と変わらず、ひいては向拝全体の形もそれほど大きくは変わっていないと考えてよい。その他には大きな改造はない。建立年代を示す直接の史料は見ていないが、『石海村史』に天保九年（1838）の再建とあり、様式

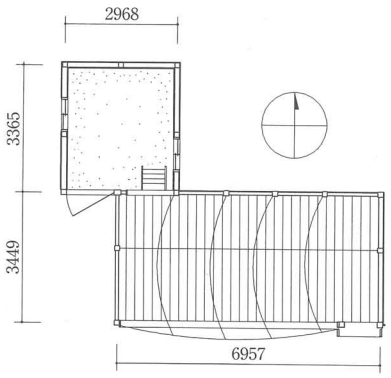


図47　舞台平面図

写真207　拝殿・幣殿外観

写真208　舞台正面

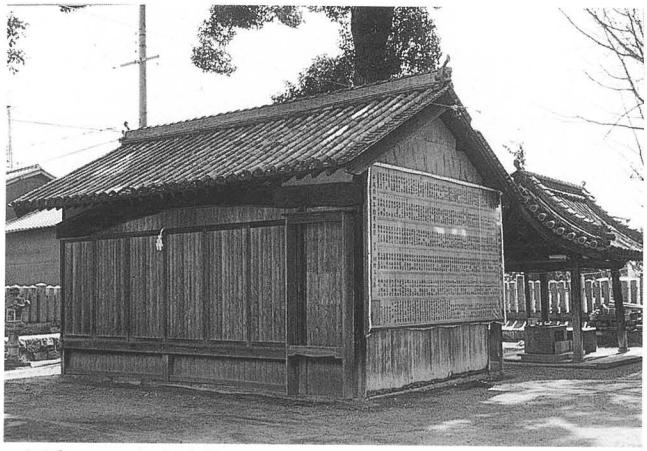


写真209　舞台全景

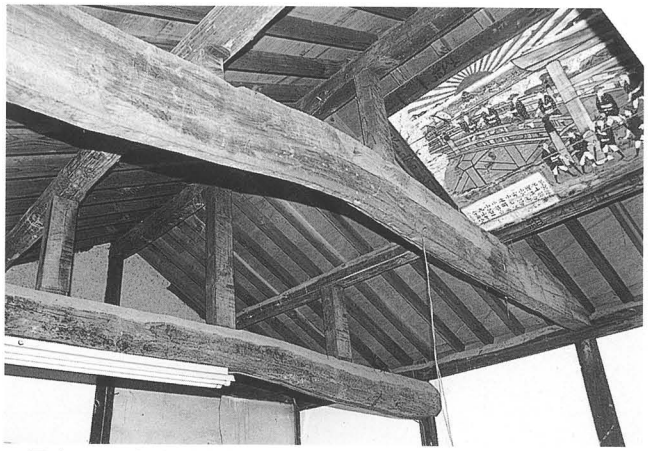


写真210　舞台内部架構

はその年代に合致する。この本殿も吉福の八幡神社とともに一連の入母屋造本殿であり、その中で最も上質の作である。

拝殿は絵馬堂とも称され、最も古いものでは嘉永二年の絵馬が懸けられている。中央は土間の通路となり、両側桁行二間づつが床張りとなっている。すなわち割拝殿形式をとる小規模な建物である。屋根には千鳥破風と軒唐破風がつき、複雑な屋根形式である。一方、軸部は木細く、組物がない簡素な造りである。

内部には桁行・梁行に数本の虹梁が架かり、それらの虹梁は極端に太い。唐破風の菖蒲桁は、内部の虹梁がそのまま先端を伸ばして、腕木状に延びている。

蟇股には兎や鶴の派手な彫刻が施され、虹梁にも彫りの深く、若葉の発達した絵様が使われている。

三方に切目縁がつくが、背面にも縁があった痕跡があり、縁の高さが二度変更されたことが確認できる。

建立年代について、神社の説明板には天保九年とあるが、部材の太さや様式からみて、近代の建立と考えられる。『石海村史』に大正十二年の建立とあり、それが妥当であろう。

なおこの背後に立つ幣殿は、切妻造で両側面の木階部分に軒唐破風を付ける変わった形式の建物で、注目される。

舞台は表門を入ってすぐ右手にあり、正面を本殿側に向けている。正面側は間口幅一杯に野物のゆがみをもつ飛貫をいれ、西半間の位置に柱を立てる以外は柱を立てない。側面と背面は土壁で、東の背面隅に方一間の物入れあるいは楽屋が付属する。一般的に歌舞伎舞台といってよいものではあるが、舞台装置などはない。梁間方向は柱位置に梁を掛け、その上に束立てで母屋を受ける。天井は張らず、架構が見えている。垂木と野地板、床組、雨戸と戸袋が近年の新しいものである。物置も舞台ほどは古くはない。

建設年代は十九世紀後期であろう。戦後はよく芝居を行ったといい、一時代前の神社での娯楽のあり方を伝える境内施設として保存していきたい建物である。

（黒田、拝殿は岸）

12、蓮生寺　浄土真宗本願寺派　岩見構276

表門　桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺　18世紀前期

親柱ごひら角柱　蹴放　楣　冠木　控柱角柱　虹梁形頭貫　木鼻　親柱控柱間　腰貫　飛貫　女梁　男梁　組物　三斗枠肘木組　中備平三斗拳鼻　中央男梁上大瓶束笈形　妻飾虹梁蟇股　二軒疎垂木

蓮生寺は石見構の集落の中にある。明応五年（1496）証玄によって創建され、慶安二年（1649）に木仏・寺号を許された。

表門は、規模の大きな薬医門である。簡素な形式ではあるが、男梁先端に三斗を載せて軒を受けたり、桁行中央の棟受けに大瓶束を立て、せいの高い本蟇股風の形状の独特の笈形を置くなど、意外に近世的な特質を備えている。

冠木下面に軸摺穴があるが、その穴は使用した形跡はない。垂木から上の部材はすべて近年の取替材である。親柱北半分は根継があり、正面左方の男梁上の大斗と巻斗、右方の実肘木は中古材であろう。

屋根勾配が緩く、古風な印象を与える。棟通や妻飾の虹梁の絵様の線は細く、18世紀前半から中期ごろの遺構と考えられる。石海神社から移築したとの伝えがある。これを確認できる史料は見出していないが、これが石海神社の表門であったのならば、石海神社は近代になって表門を壮大に造り替えたことになる。この門は近年倒壊したため、男梁の先端に支柱が立てられている。

（岸）

写真211　表門全景

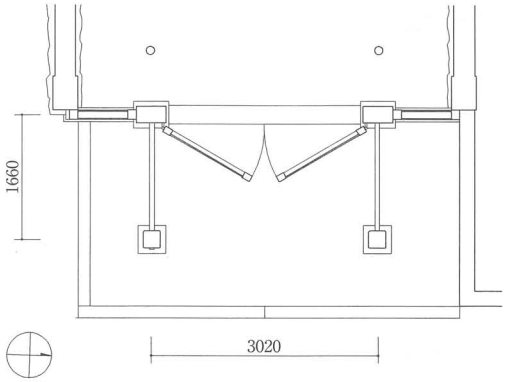


図48　表門平面図

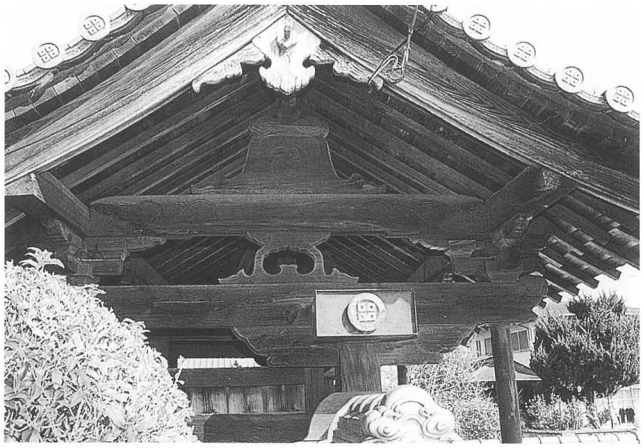


写真212　表門妻飾

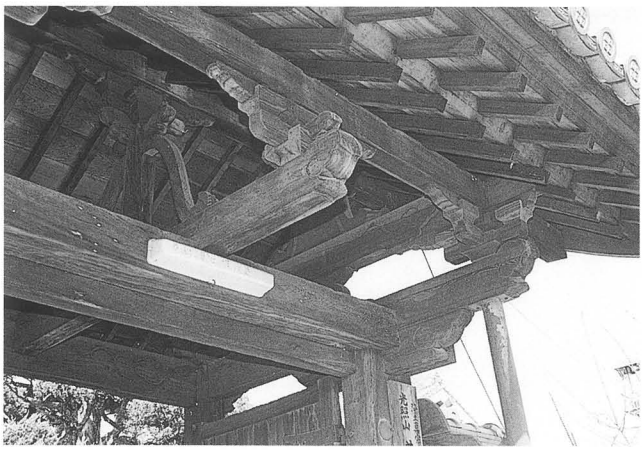


写真213　表門軒見上げ

写真214　表門内部見上げ

13、八幡神社　　吉福字ウチナウケ320

表門　桁行一間、梁間一間、薬医門、切妻造、本瓦葺　18世紀前期

親柱ごひら角柱　楣　冠木　控柱角柱　虹梁形飛貫　親柱控柱間　腰貫　飛貫　女梁　男梁　組物大斗絵様肘木　中備男梁上蟇股　控柱筋大斗絵様肘木　桁行中央男梁上大瓶束笈形　妻飾虹梁蟇股　二軒疎垂木

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺　19世紀中期

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　出組　彫刻板支輪　中備出組組物　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　中備龍彫刻　妻飾木連格子　二軒繁垂木

拝殿　桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺　安政五年（1858　棟札）

角柱　飛貫　正面中央間のみ虹梁形飛貫　組物なし　中備正面中央間のみ雲板　妻飾板壁　一軒半繁垂木

八幡神社は、吉福（本村）、沖代（新村）、米田（出屋敷）の三集落の鎮守社である。吉福は町の南西の端の集落であり、林田川と揖保川の合流点の近くにある。社地は本村の吉福からさらに西へ500mほど離れた水田のなかにあり、川の合流点までは西に300mほどである。このような川の近くの立地は、開発における水利や水害の防御と関連した神社の性格を表していると

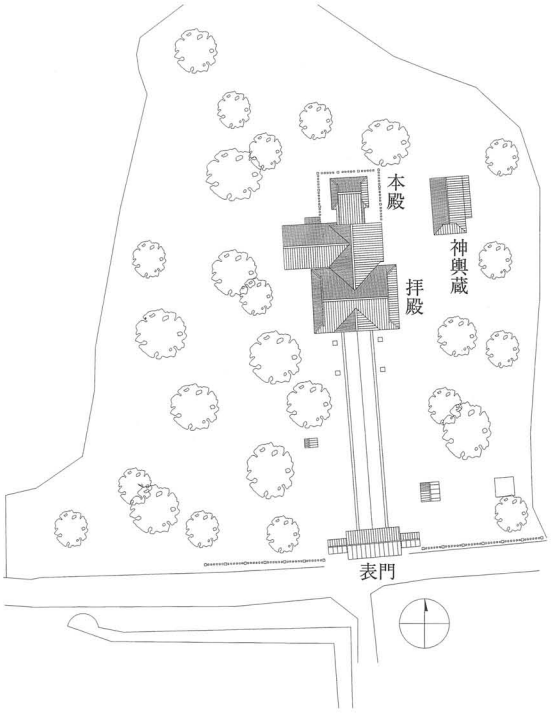


図49　八幡神社配置図

思われる。同じように川近くに立地する宮本の石海神社はここから1.4km北方である。境内の南面に門があり、門を入ると正面に拝殿があり、その奥に幣殿、本殿と続く。本殿の東には神輿蔵がある。

表門は、小規模な一間薬医門である。親柱控柱間と桁行の中央に木鼻がついた男梁がのる。これらの男梁の上に大斗絵様肘木が組まれ、桁を支える。親柱筋の中間に大振りな大瓶束笈形がのり、大斗と枠肘木で棟木を支える。この大瓶束笈形は町内の門ではしばしば用いられる特徴的な形式である。

妻飾や控柱筋の虹梁には幅の細く端正な絵様が丁寧に彫られており、18世紀前期の建立と推定される。小規模で簡素ながらも江戸時代中期の特徴をよく残している佳品である。

本殿は周囲を石製の瑞垣で囲まれ、切石積基壇の上に建っている、入母屋造、平入の建物である。規模は桁行一間、梁間一間で、正面に一間の向拝をつける。身舎の四方に切目縁を回し、正面の階は五級である。柱間装置は、正面に扉を開く以外は横板壁である。内部は正面側に畳を敷き、その奥は床を一段高めて厨子を置く。天井は棹縁天井である。

組物は拳鼻、実肘木をもつ出組で、柱間中間にも一組の組物を置く。この詰組の組物の配置とともに肘木の下端曲線が円弧状であるから、禅宗様の形といえる。組物間の琵琶板は水鳥の浮彫り、支輪は雲紋の浮彫を施している。頭貫の木鼻は全て動物木鼻である。向拝打越垂木は上方に湾曲している。

改造はほとんどなく、当初の形態をよく残している。建立年代を示す史料は発見できなかったが、様式上十九世紀中期の建立と推定される。この本殿は、町内の一連の入母屋造本殿のなかで上質の作である。形式的に近いのは石海神社本殿で、当本殿の彫刻も緻密であるが、石海神社本殿においてはさらに彫刻が華やかである。

拝殿は、幣殿を挟んで本殿の前方にある。安政五年の棟札が棟木に打ちつけられていて建立年代は明らかであるが、柱全部と垂木、野地板は昭和五十二年に取り替えられたものである。また、内部の床がコンクリートで、桁行中央間以外の柱間にはコンクリートの腰壁を立ち上げている。従って、建立当初のものは桁より上の小屋組部分ということになる。大棟の鬼瓦にも安政五年の銘があり、瓦は古いものが使われている。

内部は梁行方向の柱筋に梁をかけて、柱をたてない。梁はそのまま正面側に延びて、軒唐破風の菖蒲桁となる。天井はなく、屋根の形態と構造を決める単純明快な梁組を見せている。内部には明治三十年代以降の絵馬が多数奉納されている。

なお、本殿の東にある神輿蔵は正面入母屋造、背面切妻造、本瓦葺で、建立年代は十九世紀中期であろう。

（黒田、表門は岸）

写真215　八幡神社の杜

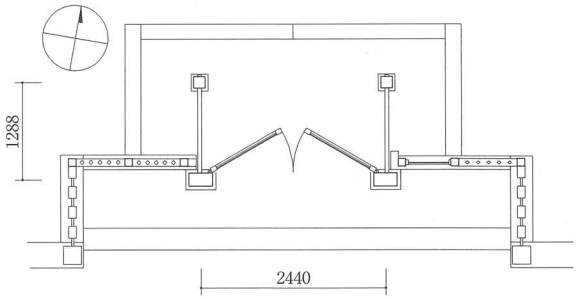


図50　表門平面図

写真216　表門全景

写真217　表門軒見上げ

写真218　表門控柱虹梁

写真219　表門妻飾内部

写真220　本殿全景

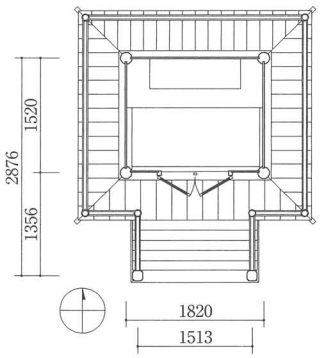


図51　本殿平面図

写真221　本殿向拝詳細

写真222　本殿向拝見返し

写真223　本殿本体部組物

写真224　本殿本体部軒

写真225　拝殿全景

写真226　拝殿内部見上げ

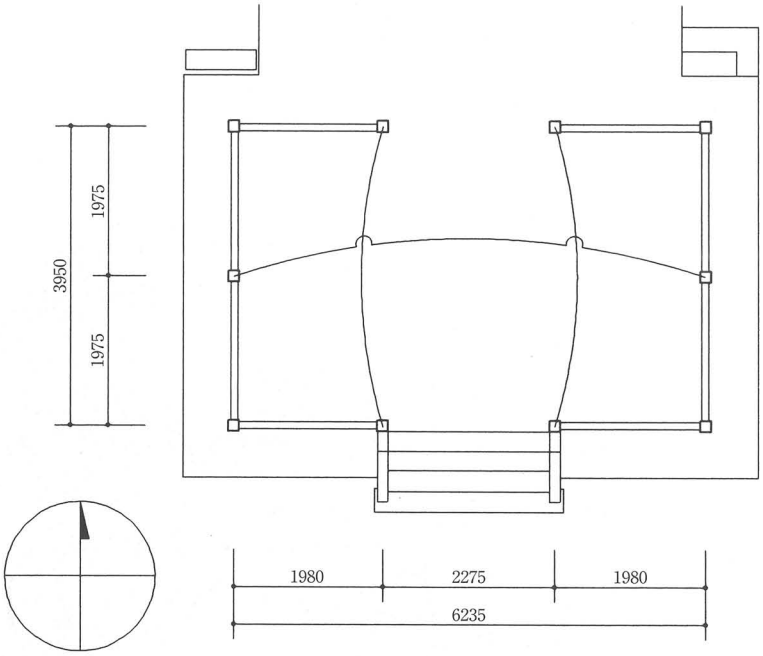


図52　拝殿平面図図

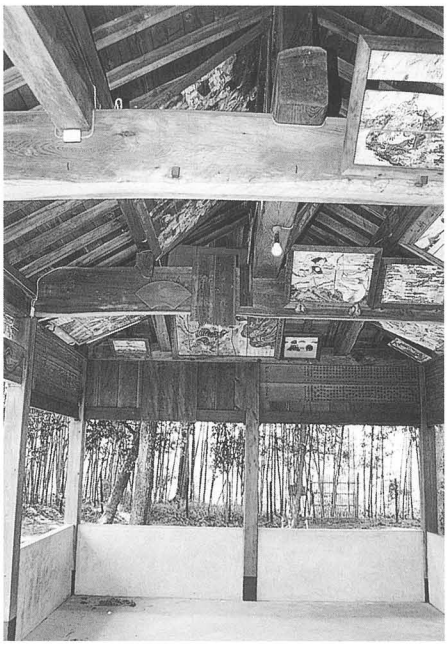


写真227　拝殿内部

14、善導寺　浄土真宗本願寺派　竹広字前田185

表門　桁行一間、梁間二間、四脚門、切妻造、本瓦葺　19世紀後期

親柱円柱　蹴放　楣　冠木　平三斗拳鼻　中備平三斗拳鼻　控柱角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　親柱控柱間　腰長押　腰貫　男梁（控柱では頭貫）　妻飾虹大瓶束　二軒繁垂木

本堂　桁行14.0メートル、梁間13.4メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、背面軒下張出、側面下屋庇張出付、桟瓦葺　18世紀後期

縁通角柱　両脇間虹梁形飛貫　中備両脇間蟇股　正面入側通角柱　切目半長押　内法長押　飛貫　台輪　大斗肘木　中備なし　一軒半繁垂木　妻飾二重虹梁大瓶束　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備蟇股　一軒半繁垂木

善導寺は竹広の集落のなかにやや窮屈な寺地を構え、東の表門を入るとすぐ南に鐘楼、正面に本堂、その北に庫裏がある。「寺中年記法事帳」（文化八年1811　寺蔵）では、本尊裏書によって覚性を開基とし、明応元年（1492）に真宗寺院になったとする。「播磨国末寺帳」によると開基は同じで、天文十三年（1544）に創建され、貞享三年（1686）に木仏・寺号を受けている。平成二年に伽藍全体の修復を行っている。

表門の形式は四脚門で、切妻造、本瓦葺である。親柱は正面側は円柱に仕上げているが、背面側は八角形で円に仕上げていない。正面に位置する門においては珍しいことである。親柱の前後にはそれぞれ一本ずつ控柱がたつ。親柱同士は冠木でつなぎ、控柱同士は虹梁形頭貫でつなぐ。親柱の位置で冠木の上に前後にかけた男梁は控柱頂部に頭貫として納まり、腰位置では腰貫、腰長押が入る。冠木の上には平三斗の組物がならび、冠木と平行な虹梁を受けている。妻飾の虹梁を合わせて、虹梁は合計五本ある。これらは装飾性の豊かさを示すが、他にも大き目の木鼻、拳鼻が随所に配されている。建立年代は明治時代に入っているであろう。

本堂は定型的な真宗本堂形式で、内外陣境によって全体を大きく二つに分けて前方を外陣とし、後方の中央を内陣、内陣の両脇を余間とする。後方一間通りは後戸である。外陣の正側面には縁がつく。柱は内陣回りが円柱である以外はすべて角柱である。

外陣の規模は、畳を基準とする実寸で正面が五間、奥行が三間である。外陣内部には中柱はない。中柱のない外陣は、今回の二次調査対象となった真宗本堂ではここだけである。外陣の面積はその中でも最小で正円寺と同じ約十五坪であるが、正円寺では外陣に四本の中柱がたつ。天井は格天井である。外陣両側面外側の余間寄りには部屋が設けられていて、これらは当初

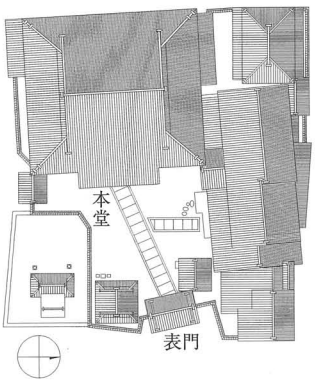


図53　善導寺配置図

写真228　表門全景

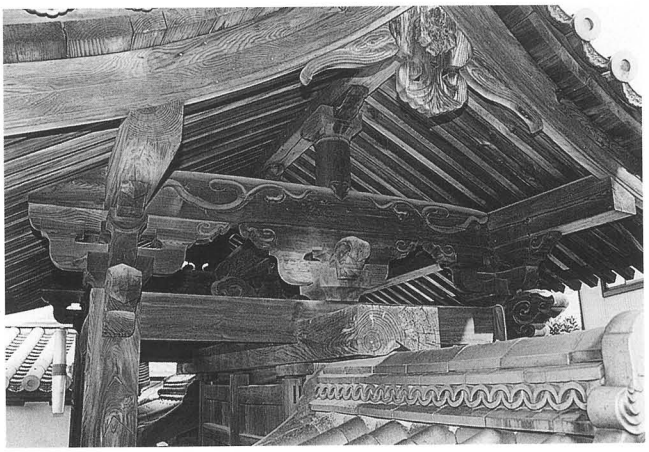


写真229　表門妻飾

から作られていた可能性が高いが、外陣北側の柱には風蝕がみられ、ある時期開放であったかもしれない。外陣正面の建具は桟唐戸で、正面中央のものは古いがその他は新しく作り直されたもので、元は蔀であった金具が残る。縁は正面から側面にまわり込み、鏡天井が張られているが、天井下の桁の側面に板決りがあり、天井は一段低かったと考えられる。

内外陣境は、円柱を切目長押・内法長押・台輪でつなぎ、全体に金箔と漆を施す。柱上に平三斗を置き、欄間彫刻は唐獅子牡丹である。内陣正面建具は現在金障子である。

内陣の仏壇は後門形式である。来迎柱は頂部を頭貫木鼻付、台輪木鼻付で固め、上に出三斗の連三斗を置いて天井を受ける。須弥壇は禅宗様で、上に厨子を安置する。天井は格天井である。内陣と余間は、天井以外は漆、金箔で彩色されている。

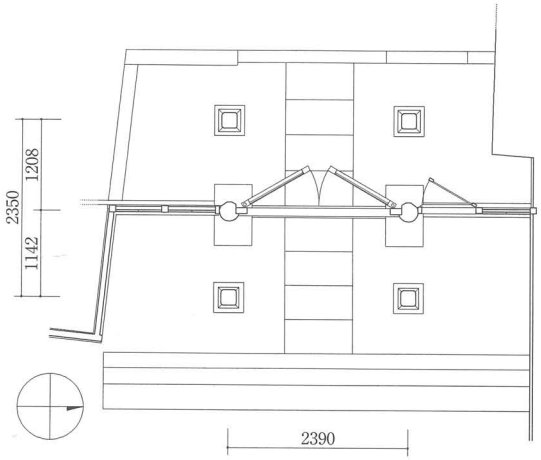


図54　表門平面図

写真232　本堂全景

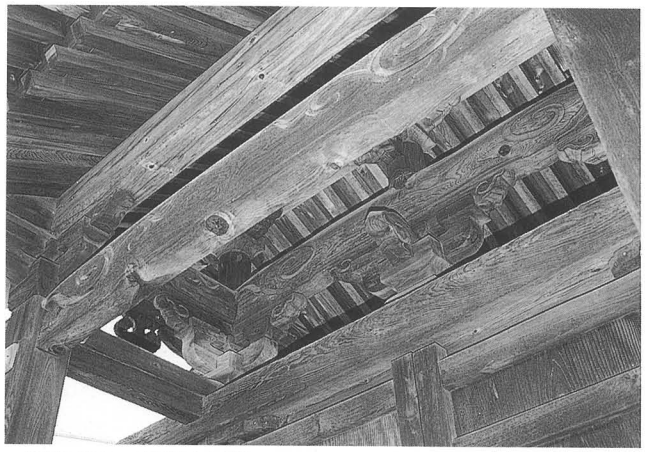


写真230　表門見上げ

写真233　本堂外陣

写真231　表門控柱虹梁絵様

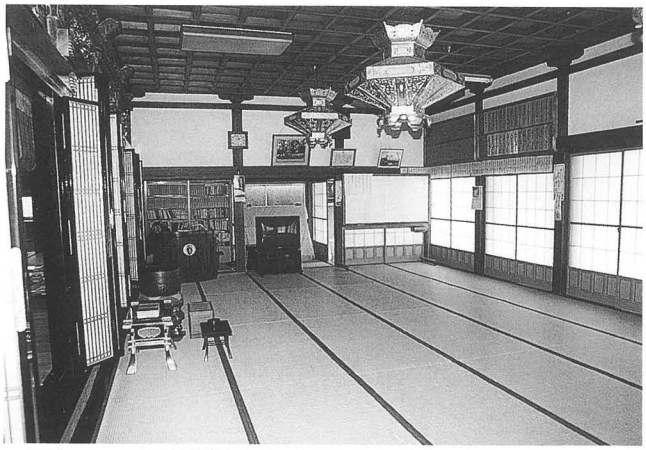


写真234　本堂外陣見返し

余間は内陣と同じ床高で、奥に仏壇を構え、天井は内陣と同じく格天井である。両余間の天井は漆塗りであるが、仏壇前の半間通りは天井が白木である。またこの筋には内陣境に柱がたつ。少なくとも向って左の余間ではこの柱の反対側の位置に柱が立っていた痕跡がある。内法長押や無目敷居に残る痕跡も余間仏壇が半間手前にあったことを示している。また、現在は両余間の正面は内陣寄りの一間が金障子になっているが、左の余間の敷居には溝が確認されるので、もとは襖であっただろう。その上の欄間彫刻裏には「文政三年／京都東六條／萬屋武助／□□□□□／七十□木□」という墨書があり、欄間彫刻は文政三年（1820）に作られたことが分かる。

両余間、外陣両側面は改造を受けている。特に両余間の仏壇が半間手前にあったらしい。また余間正面の建具も変更されているが、当初形態については不明な点が多い。小屋の構造材は古いものが残っているが、妻飾と野垂木より上は近年の修理で新しくなっている。

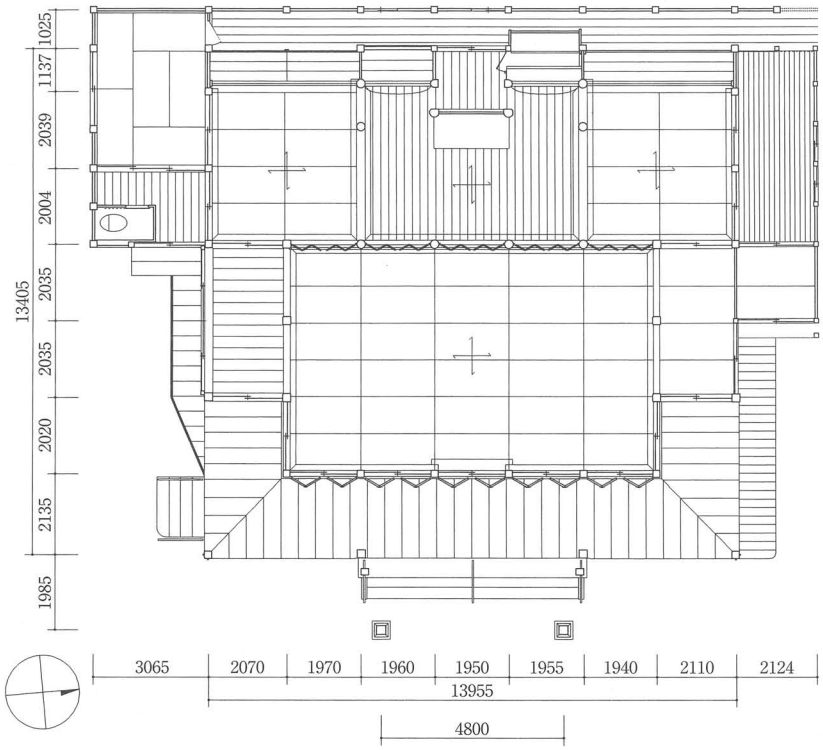


図55　本堂平面図

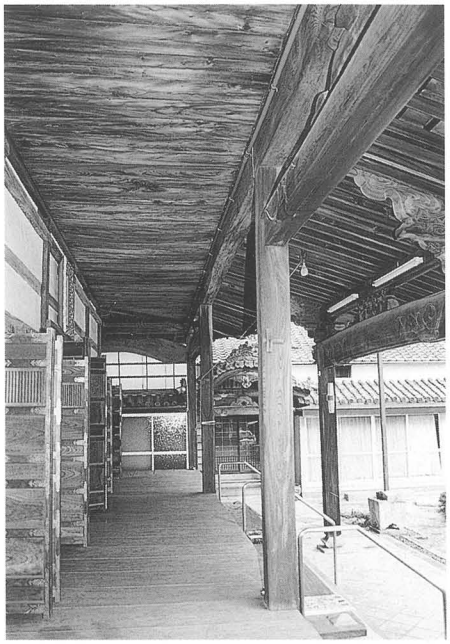


写真235　本堂広縁

写真236　本堂向拝見返し

写真237　本堂内陣

建立年代は、安永四年（1775）と伝えている。年代に関する確証は得られなかったが、様式的には18世紀後期の建立と考えられ、寺伝に一致する。

二次調査対象の中で唯一外陣内に中柱がない真宗本堂として重要な遺構である。（黒田）

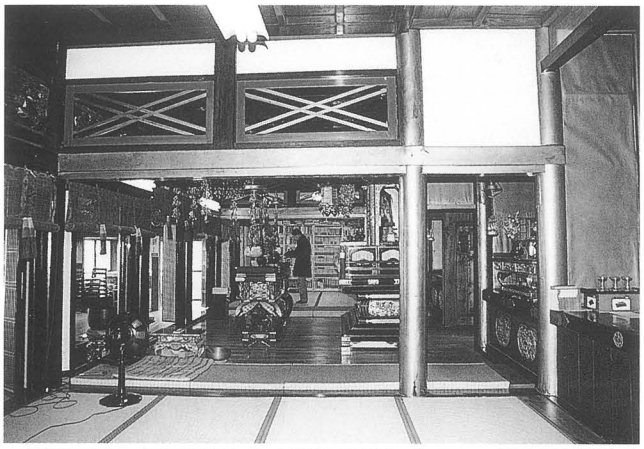


写真238　本堂余間から内陣の見通し

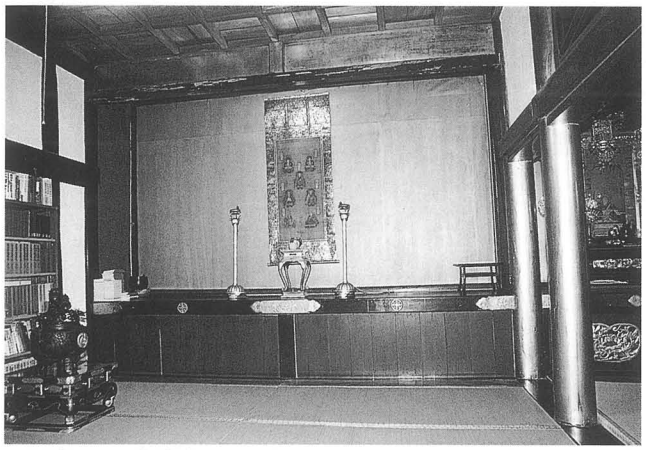


写真239　本堂余間

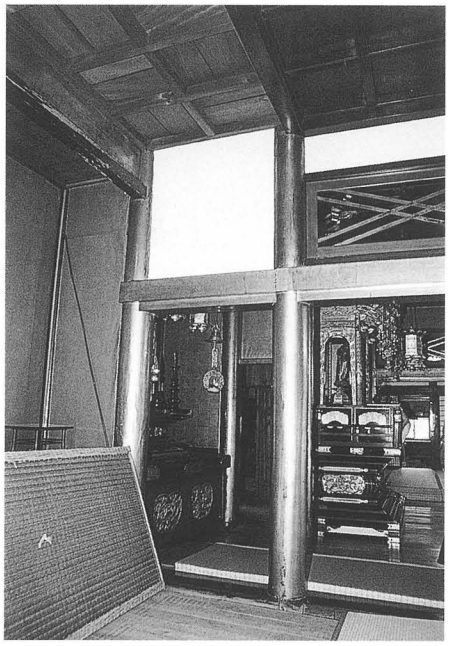


写真240　本堂余間須弥壇改造の痕跡

15、正覚寺　浄土真宗本願寺派　立岡字前田346

表門　一間薬医門、切妻造、本瓦葺　18世紀後期

親柱ごひら角柱　蹴放　楣　冠木　控柱角柱　虹梁形頭貫　木鼻　梁行腰貫　飛貫　女梁　男梁　三斗枠肘木組　控柱通り中備蟇股　棟通り中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾　虹梁大瓶束

本堂　桁行13.8メートル、梁間14.3メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、背面軒下張出、南側面下屋庇付、桟瓦葺　宝暦十四年（1764　墨書写）

正面側柱角柱　組物なし　正面入側柱角柱　切目長押　内法長押　飛貫　台輪留め　大斗肘木　一軒疎垂木小舞裏　妻飾漆喰壁　向拝角柱

鐘楼　桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺　19世紀後期

角柱　腰貫　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　三斗枠肘木組　中備平三斗拳鼻　飛貫頭貫間に蟇股　妻飾大瓶束　笈形　二軒繁垂木

正覚寺は立岡山の東の立岡の集落の中にある。了西が永正十年（1519）に開き、元禄四年（1691）に木仏・寺号を許された。

表門は標準的な規模の薬医門である。この門の特徴の第一点は男梁先端上に三斗を組み、控柱上にも同様に三斗を組む、薬医門としてはやや複雑な形式を採っていることである。この結果、冠木より軒先が高くなる。第二点は男梁木鼻と組物の拳鼻が鳥兜形の独特な形状を持ち、それが上下左右に並んで、華やかな軒先を形作っている。棟通りには桁行の虹梁を架けて、その中備に蟇股を据えるのも珍しい。

図56　正覚寺配置図

昭和六十一年に修理が行われ、基壇、女梁・腰貫と垂木から上がすべて新材に取り替えられている。

本堂はやや規模の小さい真宗本堂である。正面に広縁を設け、両側面に切目縁を設ける。

外陣の両側面から一間内側に角柱が二本（二のウ・エ、七のウ・エ）立ち、内法長押が打たれている。この内法長押の前側一間（二のイ～ウ、七のイ～ウ）には蔀金具の跡があり、この柱筋が堂内外の境であった

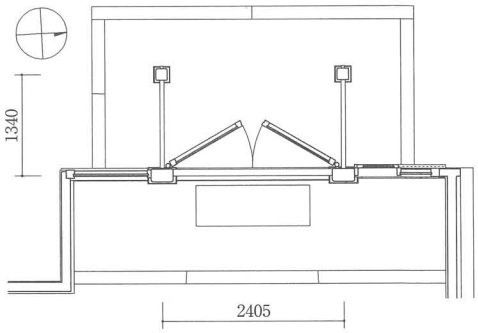


図57　表門平面図

写真241　表門全景

写真242　表門妻飾

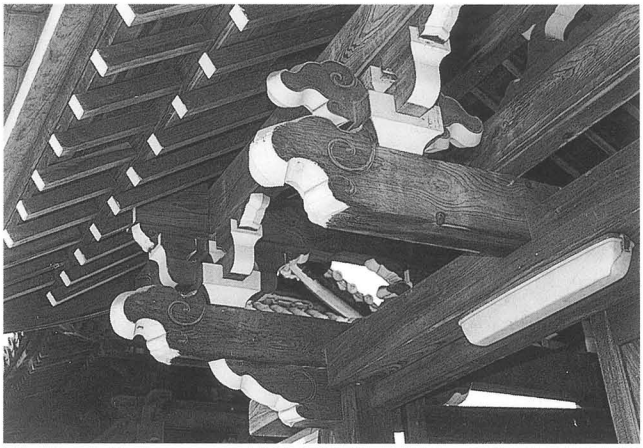


写真243　表門軒詳細

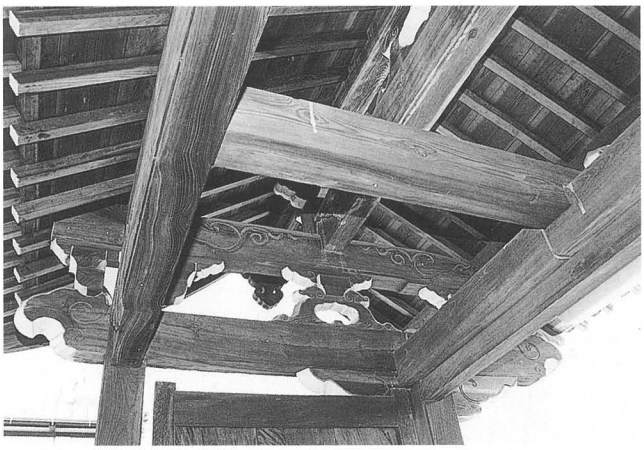


写真244　表門見上げ

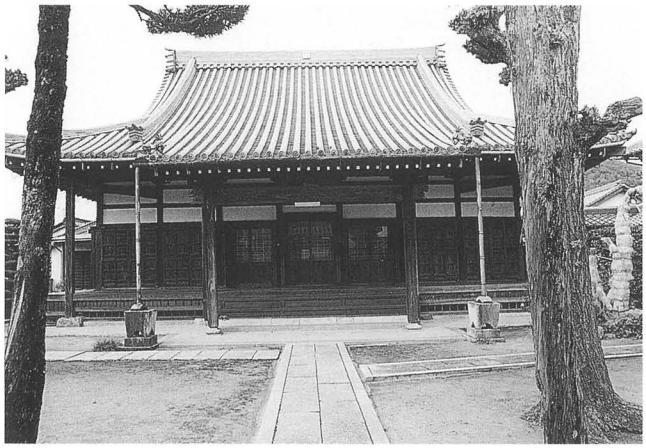


写真245　本堂外観

写真246　本堂向拝見返し

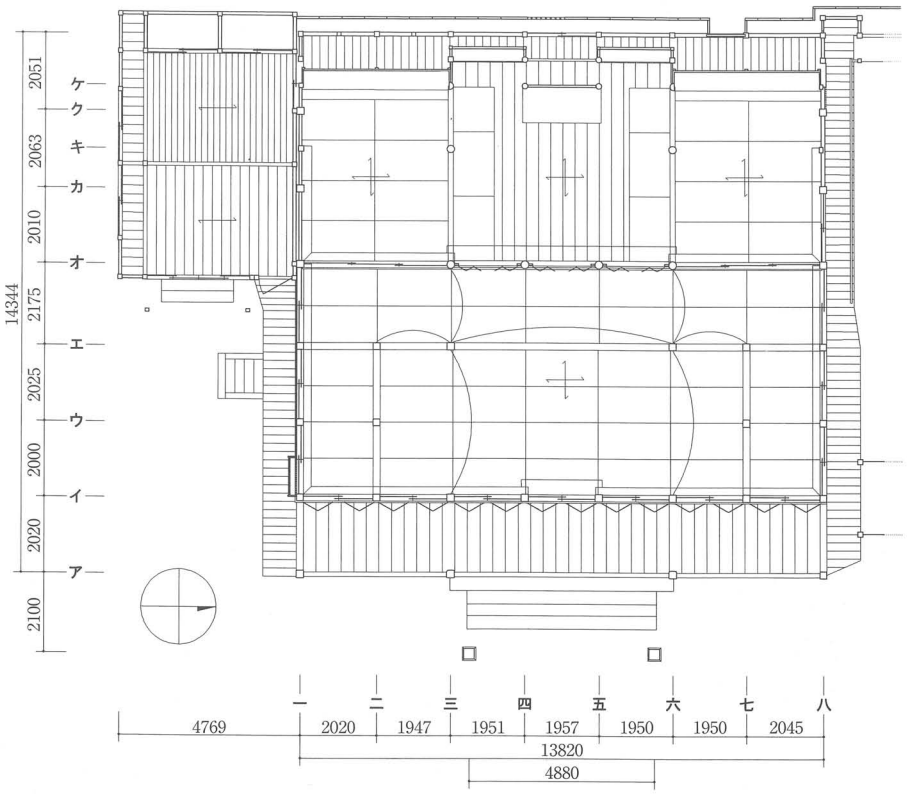


図58　本堂平面図

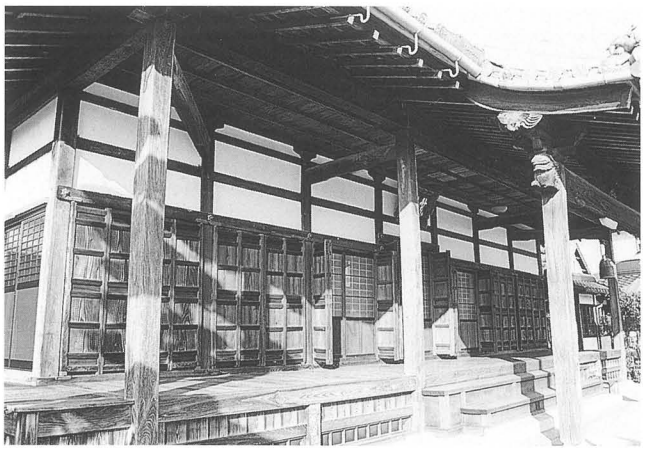


写真247　本堂軸部

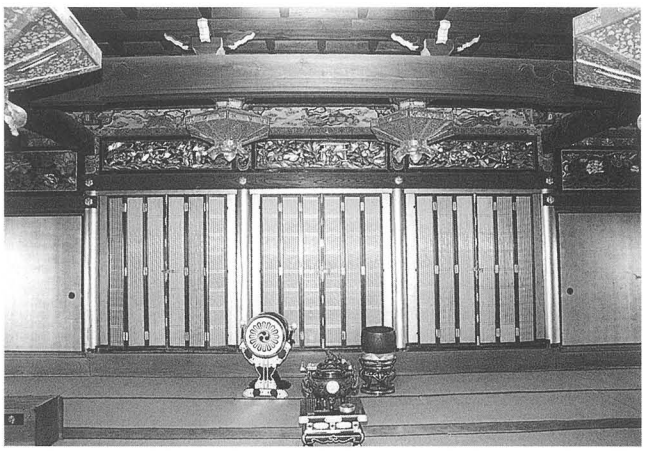


写真249　本堂内陣正面

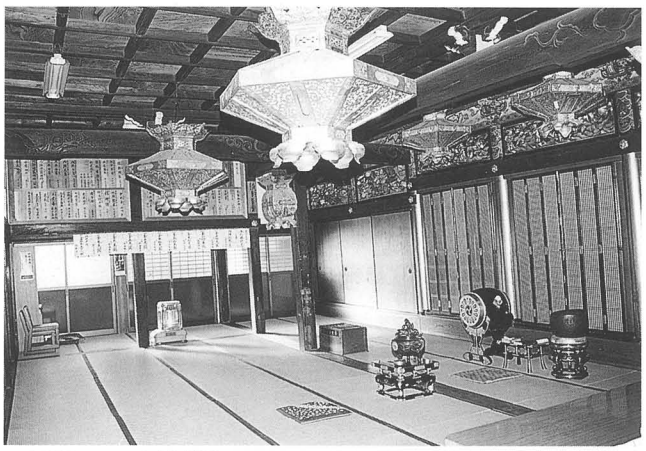


写真248　本堂外陣

写真250　本堂内陣

ことが判明する。従って外陣両側の間口一間、奥行二間の空間は、広縁を取り込んだもので、当初は広縁が三方に廻る形式であった。二のイ・七のイから隅行の繋虹梁が架かるのもこれと対応する。この部分の側面の側柱（一のイ～エ、八のイ～エ）に打たれた内法長押は材が新しく、二のウ・七のウには、一のウ・八のウとを繋ぐ内法長押や内法上の壁の痕跡が残る。一間四方の小部屋が設けられていたようである。従って矢来筋から後方の間口を広げた形式でもある。外陣の二本の中柱からは、それぞれ四方に虹梁を架けている。ただし中柱の上には組物を組まず、簡素である。

内陣・余間の奥行は約二間半あるが、余間のキの柱筋には虹梁が架かる。一のキ・八のキには仏壇框の痕跡があり、一のク・八のクには壁の痕跡もあり、当初の余間の奥行は仏壇も含めて二間であった。

内陣廻りは柱上に台輪を載せるが、背面側の台輪はケの柱筋にあるので、内陣の奥行は余間より少なくとも約四分の一間大きかったことになる。

ところで内陣正面隅の柱への中柱からの虹梁の納まりが悪く、内外陣境の台輪の継手位置が柱間にある部

写真251　本堂外陣矢来通り

写真252　本堂内陣正面虹梁の納まり

写真253　本堂外陣側面

写真254　本堂余間

写真255　鐘楼全景

写真256　鐘楼詳細

分があり、内陣廻りに大きな改造があった事が推定される。

昭和六十一年に修理工事が行われており、その際の記録写真に「宝暦十四年申四月十三日上棟」との墨書があり、その時の建立である。境内に保管されている鬼瓦にも同年の刻銘があ。文政二年の銘の獅子口があるのでその年に屋根葺き替えがあった。

改造や部材の取替が多いが、太子町域内の一般的な平面形式を持ちつつ、外陣架構が他と異なる特徴を持つ建物である。

鐘楼は高い石積み基壇の上に立つ四方転びの柱を持つ建物で、ごく一般的な形式をとる。柱には几帳面取を施し、粽を付ける。各間中備組物を二組づつ並べ、頭貫下には蟇股を置いて飾る。内部は吹き寄せの小組格天井を貼っているのが、了源寺鐘楼と通ずる意匠である。建立は明治に入ってからであろう。　（山岸）

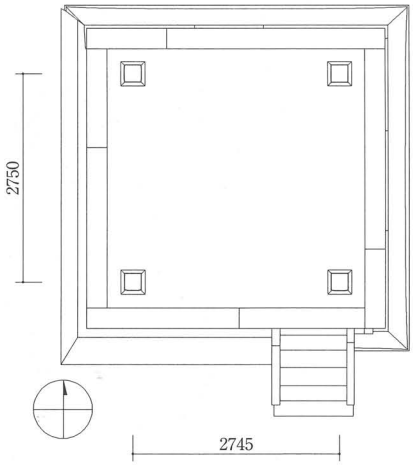


図59　鐘楼平面図

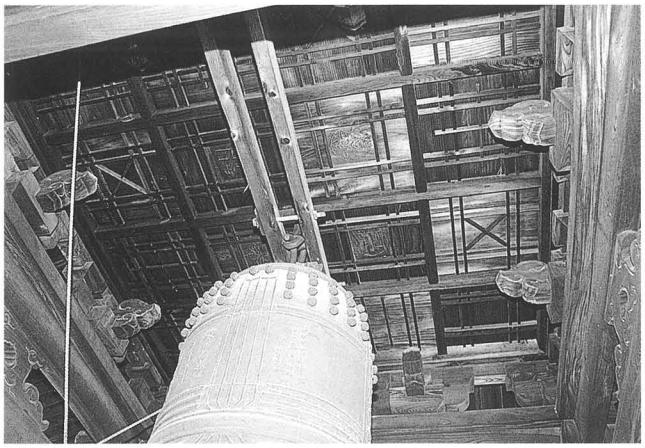


写真257　鐘楼見上げ

16、清光寺　浄土真宗本願寺派　矢田部字小倉211

本堂　桁行13.6メートル、梁間15.2メートル、入母屋造、向拝一間、背面下屋庇張出付、本瓦葺

文化五年（1808　寺蔵記録）

縁通角柱　絵様肘木　入側通角柱　切目半長押　内法長押　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　平三斗　中備なし　二軒疎垂木　妻飾虹梁大瓶束　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備龍彫刻　二軒疎垂木

鐘楼　桁行一間、梁間一間、切妻造、本瓦葺

安永七年（寺蔵記録）

角柱　腰貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　三斗枠肘木組　中備平三斗拳鼻　妻飾虹梁大瓶束笈形　二軒繁垂木

清光寺は、檀特山と立岡山の中間の平野に位置する矢田部の集落にある。

『播磨の国清光寺』（檀特山清光寺本堂平成大修復記念）によると、清光寺は明応元年（1492）に開かれた。現在右余間に祀られている光明本尊が当時の本尊で、実如から下されたものという。元禄十五年（1702）には木仏・寺号免許を受けた。本堂は寛文七年（1667）、寛延二年（1749）に建立された記録があるが、現在の建物は文化五年（1808）の再建である。平成三年から七年にかけて大修理が行われた。

本堂は定型的な真宗本堂形式で、内外陣境によって全体を大きく二つに分かち、前方を外陣とし、後方の中央を内陣、内陣の両脇を余間とする。後方一間通りは後戸である。正面には広縁がある。落縁は広縁正面から外陣両側面につく。柱は来迎柱、内陣両脇間正面の柱および内陣周りの柱が円柱で、他は角柱である。

外陣の規模は、畳を基準とする実寸で正面が七間、

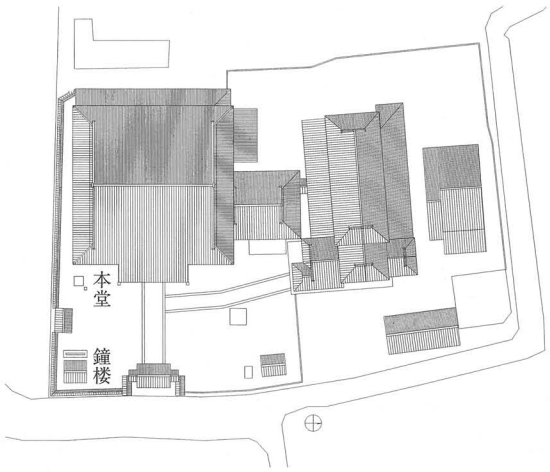


図60　清光寺配置図

奥行が三間半で、町内では西光寺とともに最も大規模な本堂である。中柱は四本で内陣・余間境の柱筋の延長上にたつ。中柱の頂部は、内陣に近い側では三斗組を置いて天井桁を受け、正面側のものは立登せ柱として挿肘木で天井桁を受ける。中柱同士は奥行方向、及び内陣に近い中柱筋を横方向に虹梁形飛貫で繋ぐ。天井は格天井である。以上のような外陣の構成は、西光寺と共通する手法である。内陣寄りの中柱及びその両脇の側柱には矢来を取り付ける金具が残っている。外陣の建具は正面、両側面とも内側に木製の腰付ガラス戸をいれ、その外側に正面側では桟唐戸をつり、両側面ではアルミサッシュをいれる。外陣正面の広縁は奥行が一間で、正面側は柱間三間に割る。天井は棹縁天井である。

内外陣境は、角柱を切目長押、内法長押、頭貫木鼻付、台輪木鼻付でつなぐ。柱上に出三斗を置き、欄間彫刻は牡丹である。欄間は金箔、柱上部から組物にかけては極彩色、その他は漆塗りを施す。内陣正面建具

写真258　本堂外観

写真259　本堂妻飾

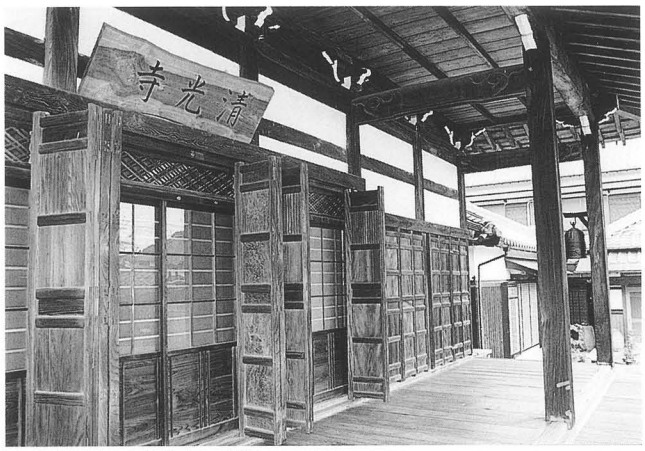


写真260　本堂正面軸部

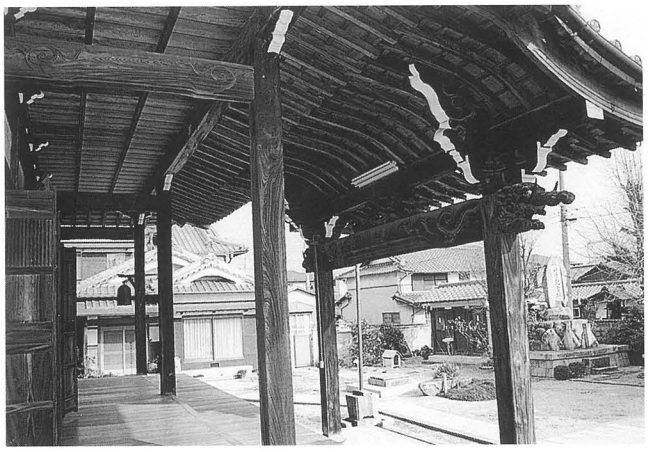


写真261　本堂正面広縁部

写真262　本堂外陣

写真263　本堂外陣見返し

は金障子である。

内陣の仏壇は後門形式である。来迎柱は頂部を頭貫、台輪で固める。柱上に二手先の連三斗を置いて、天井の格縁を受ける。この連三斗は絵様木鼻の尾垂木をもつ華麗なものである。天井は折上格天井である。須弥壇は禅宗様で、上に厨子を安

写真264　本堂内陣

写真265　本堂内陣正面

写真267　本堂余間虹梁

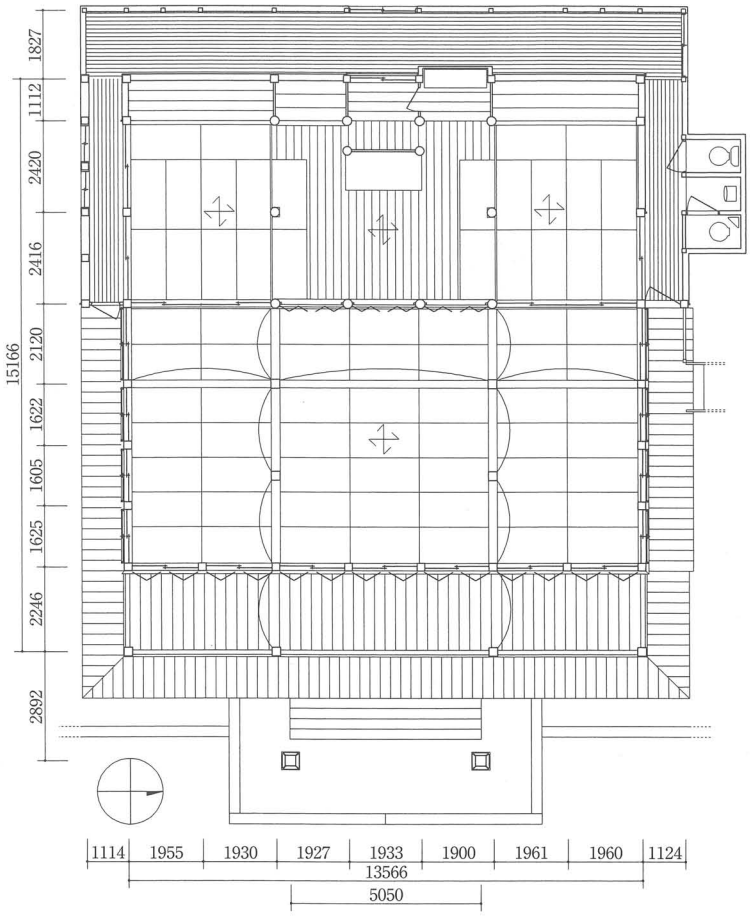


図61　本堂平面図

写真266　本堂余間

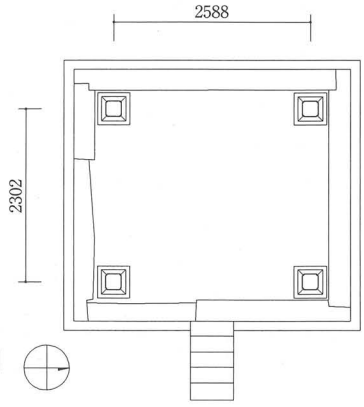


図62　鐘楼平面図

置する。内陣と余間は、柱上部から組物まで極彩色、その他は漆、金箔で彩色されているが、天井は素木である。向って右の親鸞聖人を祀る脇仏壇は、もとは左脇仏壇と同じように前面柱に框を入れて仏壇としていたのを、まず前面柱筋には檀を残し仏壇を後方に下げて側面から仏壇前に入れるように改造し、次いで前面柱筋の檀を取り去ったと思われる。右脇仏壇を後方に下げる改造は法心寺本堂、西光寺本堂でも見られる。

余間の床は内陣より敷居分だけ低く、奥に仏壇を構え、天井は素木の小組格天井である。両余間の側面側の柱には外側には風蝕が見られるので、もと両余間の側面側は外部に面していたか、開放であった。

背面一間通りの後戸の現在の部材は新しいもので、脇仏壇背面柱筋の後戸側に風蝕がみられる。後方には近年の改修以前にも「ローカ」と呼ばれるものがあったというが、建立当初は後戸はなかったと推定される。向拝は通常の形で、打越垂木が上方に湾曲している。

小屋の内部は未見であるが、近年の修理で地垂木より上は新しく、妻飾も新しい。

この本堂は、西光寺本堂とともに町内で最も大きい外陣をもち、かつ両者は非常によく似ている。平面形式の大きな特徴は、この二棟は外陣正面の幅と内陣・両余間の幅が等しいのに対して、他の本堂は外陣正面の幅が狭いことが挙げられる。当寺本堂の建立年代は19世紀に入っているが、この年代に特有の華やかな細部意匠ではなく、抑制の効いた意匠が採用されている。垂木より上が新しくなっているが、その他はよく古い材が残されており、太子町の真宗本堂形式を考える上で重要な建物である。

鐘楼は、標準的な方一間の建物である。柱に粽を付け、肘木は木口が円弧状で禅宗様に概ね忠実な様式を用いている。中備の様式や配置や牛梁受けの中備組物など西光寺の鐘楼とよく似ている。妻中備の平三斗は内側が出三斗となって絵様肘木を組むが、こちらはその上にさらに巻斗と実肘木がのり、牛梁をささえるというさらに複雑な構造をもつ。

虹梁の絵様の彫りは深く力強い。建立年代は寺蔵記録の安永七年を認めてよい。野地板や垂木は新材だが、軸部の改造はなく、18世紀後半の特徴をよく残す秀作である。（黒田、鐘楼は岸）

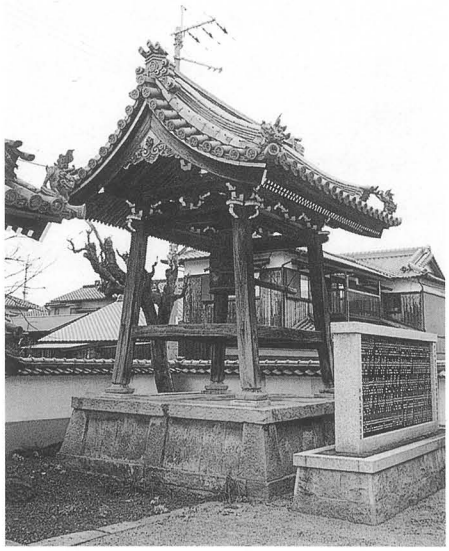


写真269
鐘楼全景

写真270
鐘楼妻側

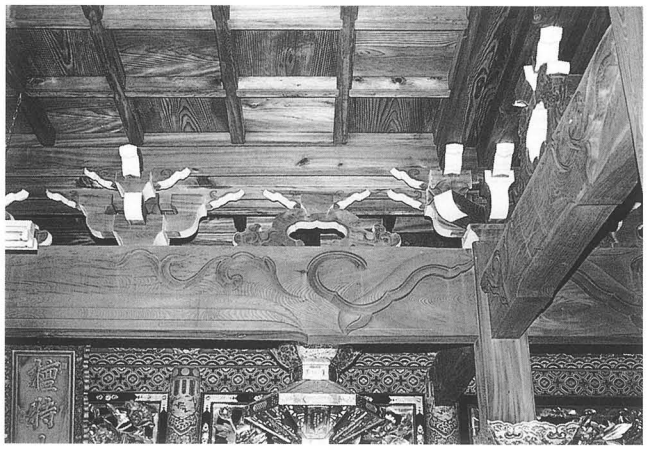


写真268　本堂外陣虹梁絵様

写真271　鐘楼内部見上げ

17、大歳神社　　原字南町770

本殿　正面桁行一間、背面二間、梁間二間　入母屋造、向拝一間、本瓦葺　　寛政五年（1793　棟札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　尾垂木付二手先　蛇腹支輪　中備蟇股　二軒繁垂木　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　手挟　中備龍彫刻　妻飾木連格子　二軒繁垂木

拝殿　桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面軒唐破風付、本瓦葺　　明治四十年（1907　板札）

角柱　足固貫　腰貫　飛貫　正面背面中央間虹梁形飛貫　組物なし　中備正面中央間のみ蟇股　妻飾木連格子　一軒疎垂木

大歳神社は、江戸時代の原村（棟札記載）、つまりおよそ現在の原の108戸の鎮守社である（聞取り）。原は太子町のほぼ東端の集落で京見山の北麓にあるが、京見山稜線の東側と南側は姫路市である。

北から順に本殿・幣殿・拝殿がならび、本殿の周囲には土塀が廻る。土塀の外の東西には境内社がある。拝殿の左手前には手水舎がある。

本殿は高さ約85cmの切石積み基壇の上に建つ入母屋造の建物である。規模は桁行二間、梁間二間で、正面に一間の向拝をつける。身舎の正面、側面の三方に切目縁を回し、正面の階は五級で、背面の柱筋に脇障子を立てる。柱間装置は正面に扉を開く以外は、横板壁である。内部は背面の壁に寄せて檀を作り、その前面の両脇に小脇壁を設け、中央には几帳を垂れる。天井は棹縁天井である。

組物は尾垂木・拳鼻・実肘木をもつ二手先で、尾垂木は強い反りをもつ。全ての柱の頭貫位置には外側に動物木鼻を出す。正面は中央に柱はないが、内法長押の上の中央に柱形を付けて、側・背面と同様に扱う。内部の組物は平三斗で、通肘木の上に斗がならんで天井桁を受ける。外部の手先方向の肘木の尻が内部に出るが、肘木形にはせず、短く切断している。

向拝組物の上には手挟を置き、手挟の上端付近で打越垂木が上方に折れ曲がるように湾曲している。

向拝正面の柱間の飛檐垂木が近年の取替材であるが、その他は大きな改造は認められず、当初の形態をよく残している。

本殿内には棟札があり、建物に関するもので年代などが読めるものには、元文三年のもの、元禄八年原村大歳大明神再興の棟札、寛政五年大歳大明神修復の棟札がある。建

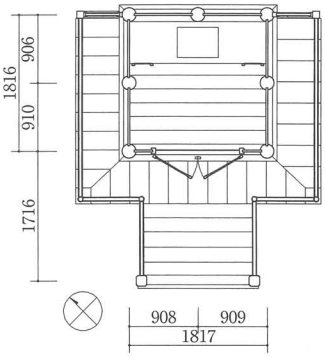


図64　本殿平面図

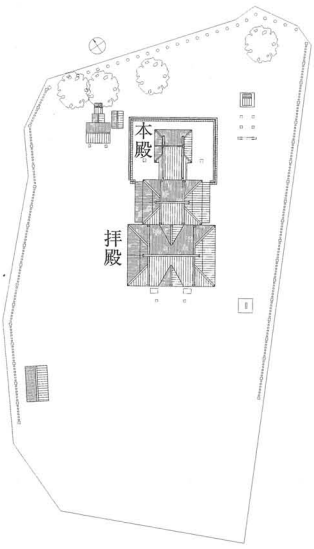


図63　大歳神社配置図

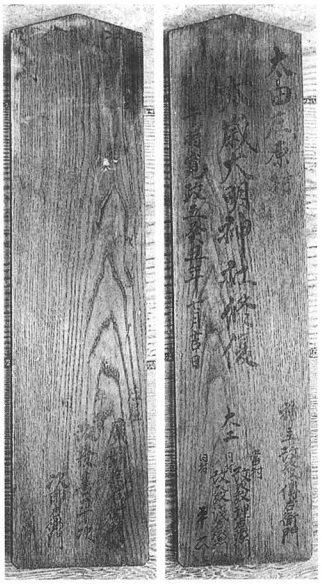


写真273　本殿棟札（左：裏、右：表）

写真272　本殿全景（背面から）

写真274　本殿本体部詳細

立年代は建物の様式その他の判断と合致する年代である寛政五年（1793）と考えられる。

この本殿は、町内に多い入母屋造本殿の一例である。保存状態もよく、同形式の本殿の代表的な遺構である。

拝殿は、割合小規模の簡素な建物である。四方に切目縁がつき、内部に床板を張る。組物はなく、簡素であるが、正面中央間のみは虹梁形飛貫・蟇股を入れて飾る。蟇股には兎が、唐破風懸魚には鶴が入る手の込んだ彫刻が施されている。

内部から延びる虹梁の先端がそのまま唐破風の菖蒲桁と一体になる構造は、石海神社拝殿にもみられる。小屋組の材はせいが極めて高い。

写真275　本殿本体部組物

写真279　拝殿全景

写真276　本殿向拝見返し

写真280　拝殿正面

写真277　本殿正面

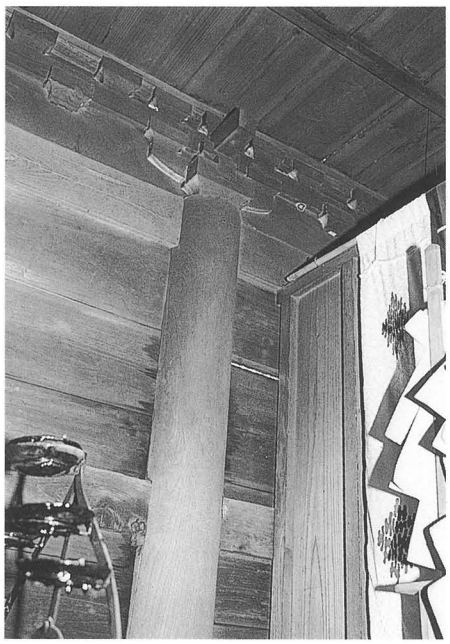


写真278　本殿内部

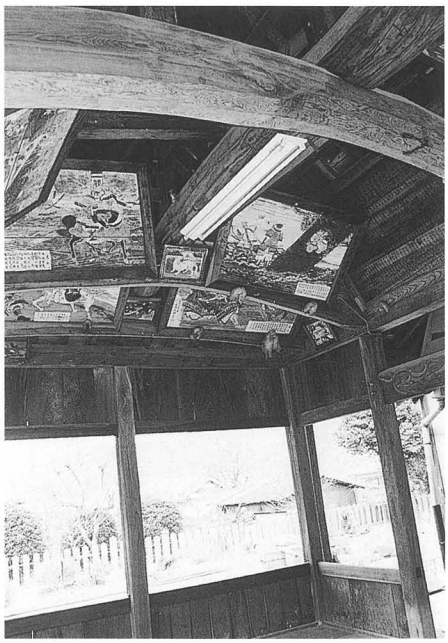


写真281　拝殿内部

拝殿内部にかかる「幣殿拝殿改築寄附芳名表　明治四十年六月上旬　従七位勲六等開発展也書」の板札から、幣殿と拝殿が同時期に改築されたことがわかる。

（黒田、拝殿は岸）

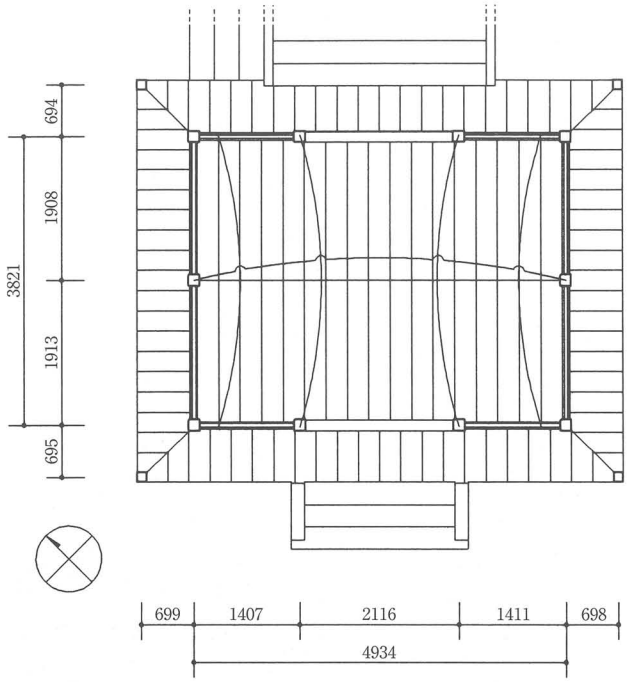


図65　拝殿平面図

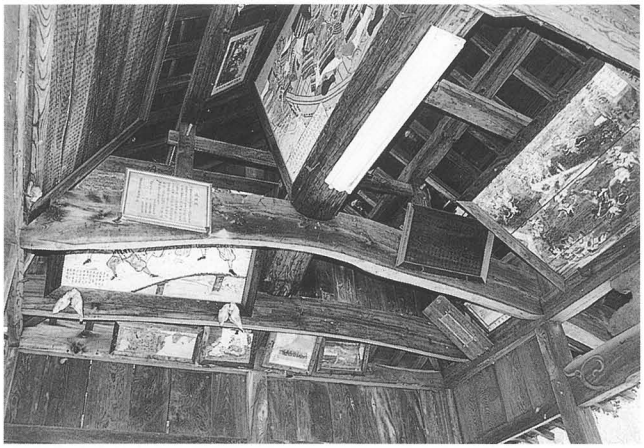


写真282　拝殿内部架構

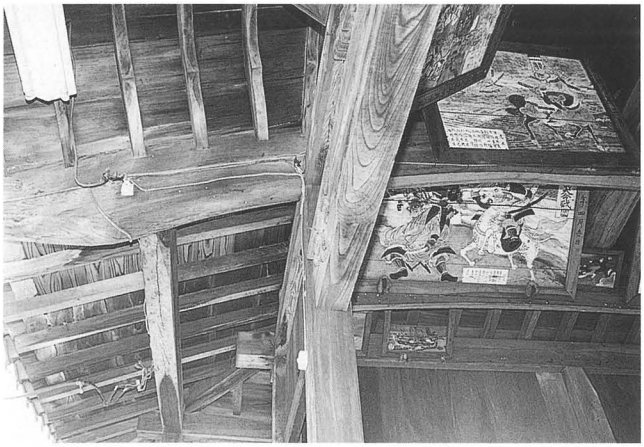


写真283　拝殿内部虹梁の先端（菖蒲桁となる）

18、浄因寺　真宗大谷派　太田字二ノ丸2051

本堂　桁行14.0メートル、梁間14.3メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、南側面・背面下屋庇付、桟瓦葺　安永七年（1778　寺蔵記録）

縁通角柱　虹梁形飛貫（両端間のみ）　側通角柱　切目半長押　内法長押　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　平三斗拳鼻　中備蟇股（中央間のみ）　二軒半繁垂木　妻飾二重虹梁大瓶束蟇股　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　獅子彫刻　二軒半繁垂木

庫裏　桁行18.1メートル、梁間10.9メートル、入母屋造、四方下屋庇付、桟瓦葺　19世紀中期

鐘楼　桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺　19世紀中期

角柱　腰貫　飛貫　頭貫　木鼻　台輪留め　三斗枠肘木　中備蟇股　妻飾木連格子　二軒繁垂木

浄因寺のある太田は、太子町東部、町中央部の前山から檀特山、朝日山と南北に連なる低い山並みの東側にある。浄因寺は、それらの山並みと東側の城山との間の谷筋を南へ流れる大津茂川が国道２号線と交差する付近にある。「浄因寺来由記」（『日輪山浄因寺』浄因寺　平成四年）によると、天元四年（981）に建立された真言宗の日輪寺が、十五世紀後期に浄土真宗に転じて浄円寺となり、元禄年間（1688～1704）に現在の地に寺地を定めて浄因寺となった。江戸時代には林田藩主建部氏の菩提寺であった。安永年間（1772～1781）に本堂、庫裏が炎上し、安永七年（1778）に本堂を建立したといい、様式的な年代観と一致するので、本堂の建立年代は安永七年と考えられる。

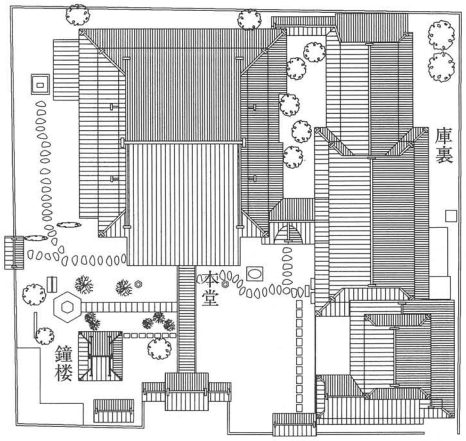


図66　浄因寺配置図

本堂は定型的な真宗本堂形式で、内外陣境によって全体を大きく二つに分かち、前方を外陣とし、後方の中央を内陣、内陣の両脇を余間とする。後方一間通りは後戸である。外陣の正面には広縁・落縁が付くが、側面には廻らない。柱は来迎柱が円柱である以外はすべて角柱である。

基本となる外陣の幅は広縁と同じで、畳を基準とする実寸で正面が六間、奥行三間半であり、町内ではやや大きめである。中柱は四本で、内陣・余間境の柱筋の延長上に立つ。天井は格天井である。中柱頂部は直接に天井桁を受け、奥行方向には下に虹梁形飛貫、上に直材の飛貫と二段の飛貫でつなぎ、飛貫間に蟇股、飛貫と天井桁の間に大瓶束実肘木を入れる。一方、内外陣境に近い方の中柱は、柱間三間とも虹梁形飛貫で繋がれ、こちらでは直な飛貫は入れず、天井桁との間に雲紋の蟇股、獅子頭をもつ平三斗を飾る。虹梁形飛貫の柱際の下端には植物を丸彫りした持送を入れる。また、この筋の柱の足元には結界の枘穴の埋木があり、ここより内陣側が矢来内であったことが分かる。

ところで、奥行方向の虹梁形飛貫の絵様と矢来筋の

写真284　本堂全景

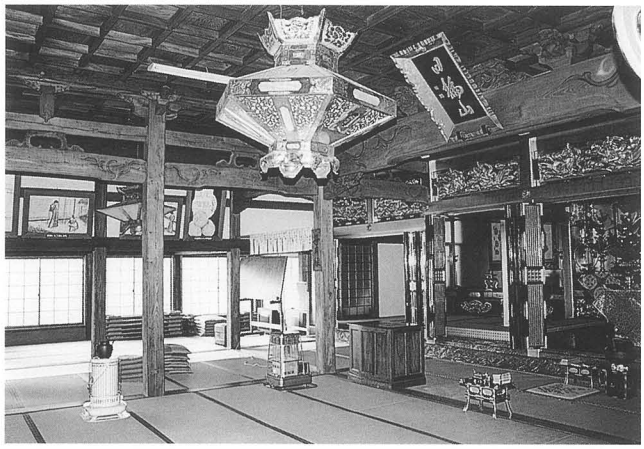


写真285　本堂外陣

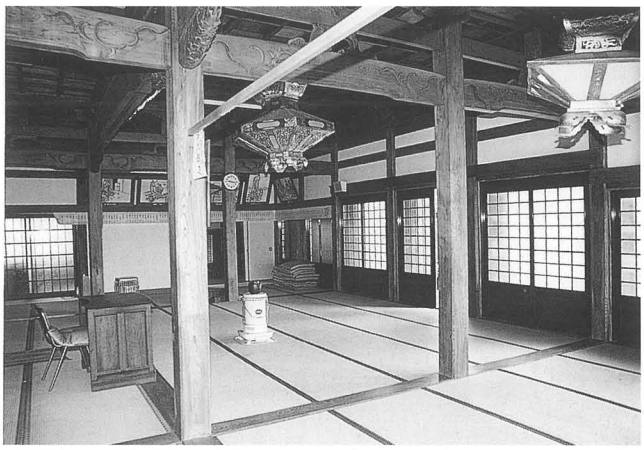


写真286　本堂外陣見返し

写真287　本堂向拝見返し

写真288　本堂正面軸部

写真289　本堂内陣

虹梁形飛貫の絵様は異なり、矢来筋のものの方が彫りが深く、意匠的に時代が降ると見られるものである。矢来筋の虹梁の中柱への納まりを観察すると、

(1) 中央間の虹梁絵様が柱際では別材で作られていること

(2) 中柱の左右両側の虹梁の上面に仕口が彫られ、そこから中柱内部に延びる別材と虹梁が車知で止められていること

の二点が見て取れる。(1)は中央間の虹梁を、立ったままの柱にやり返しで入れたときのやり返し分を別材で作ったもの、(2)の別材は中柱の左右の虹梁をつなぐもので、中央間の虹梁が抜け落ちないように固定しているものと考えられる。

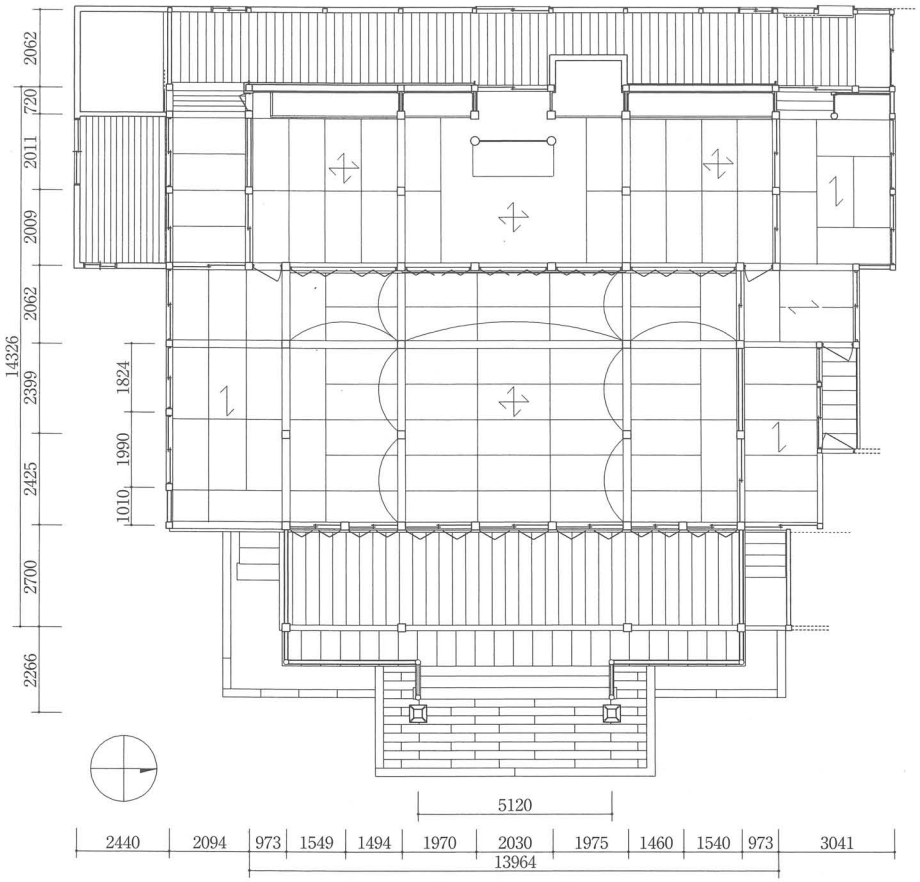


図67　本堂平面図

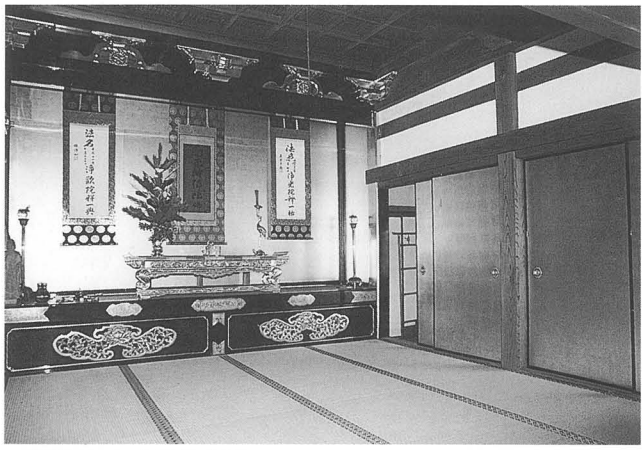


写真290　本堂北余間

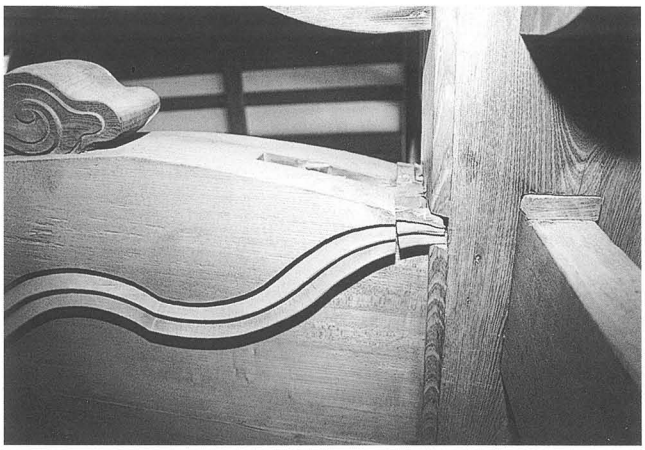


写真292　本堂外陣後補の虹梁の柱との取り合い

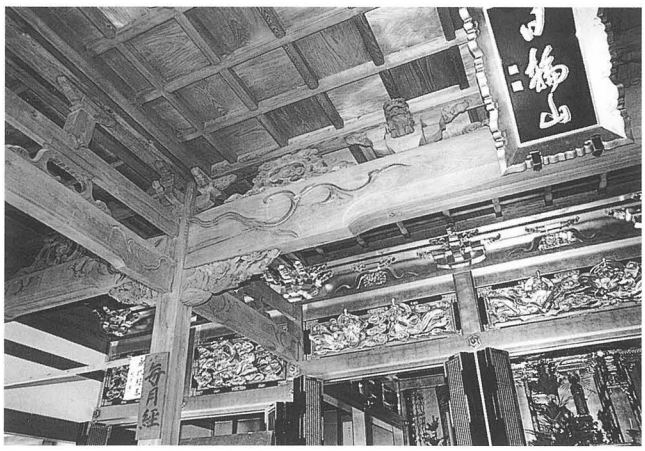


写真291　本堂外陣後補の虹梁

写真293　本堂南余間

写真294　庫裏全景

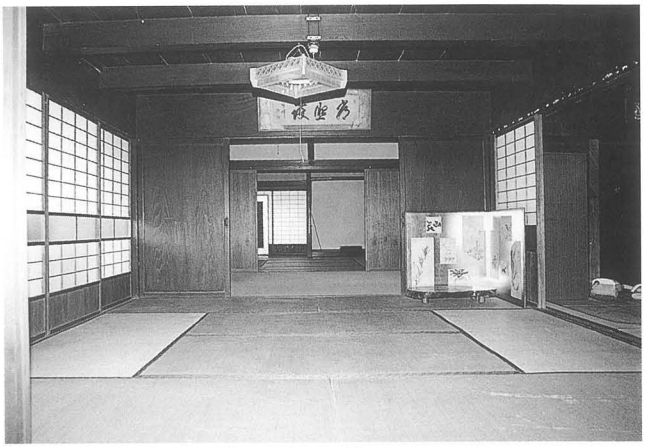


写真295　庫裏南側部屋列の見通し

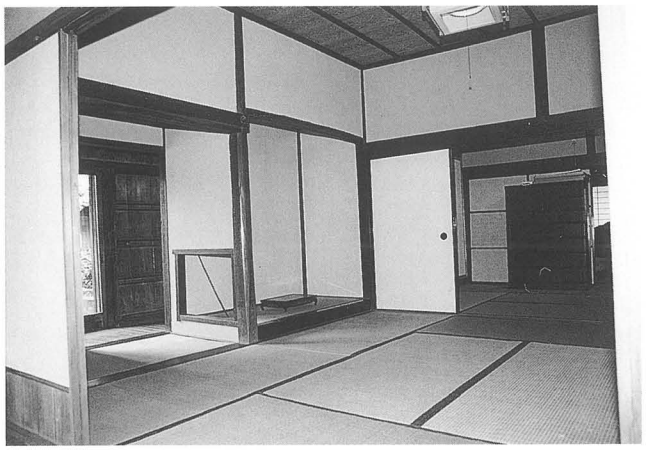


写真296　庫裏座敷

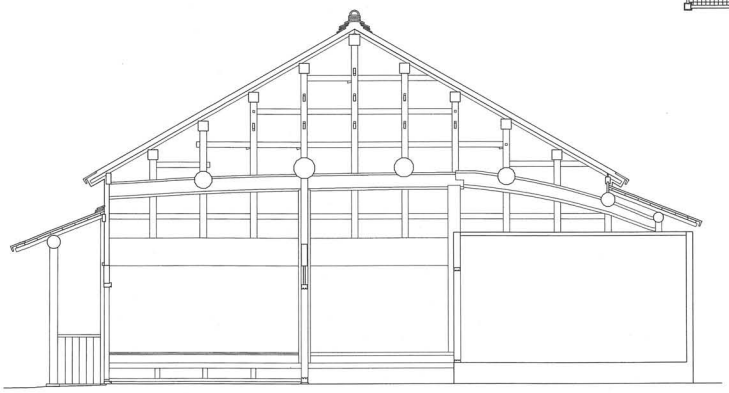


図68　庫裏断面図

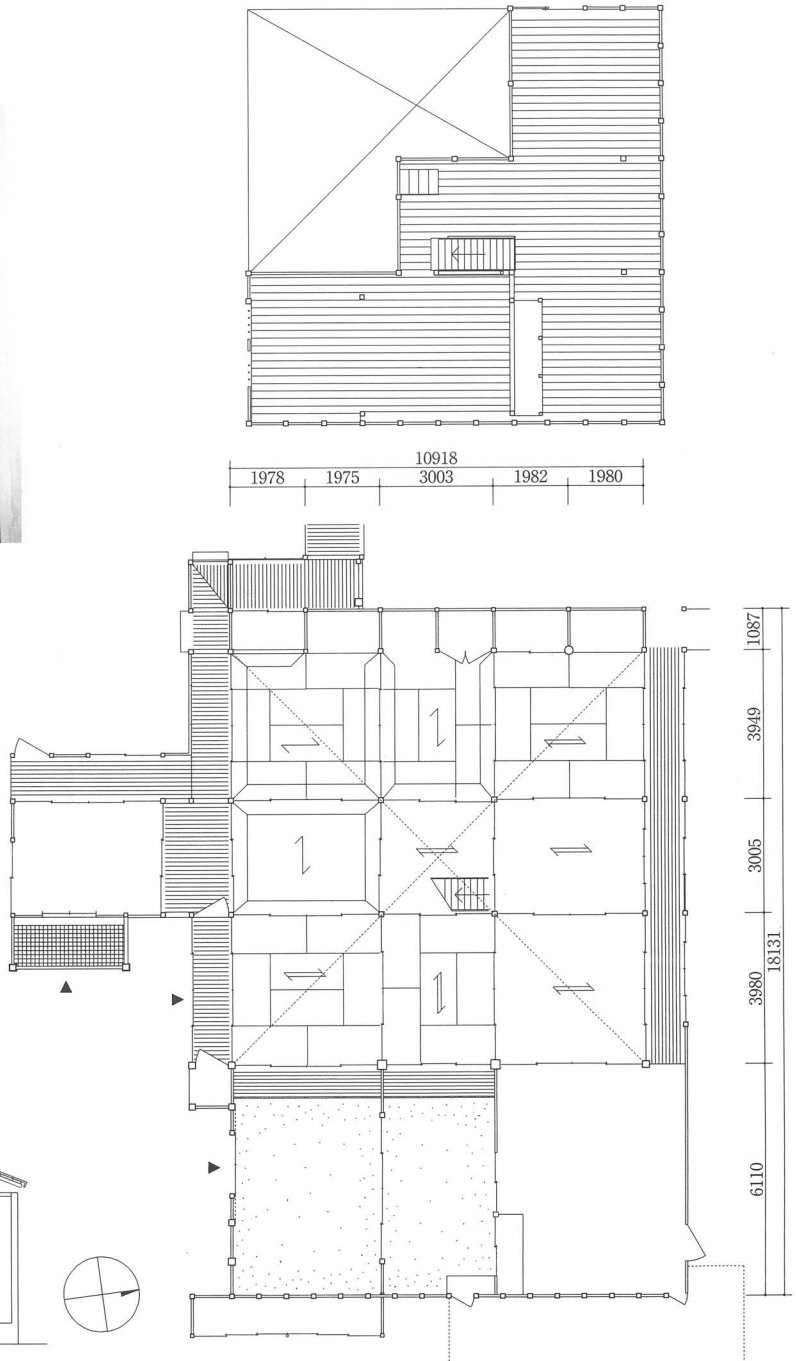


図69　庫裏平面図（上：二階、下：一階、一点鎖線×印部に二階が載る）

これは非常に巧妙な改造の技術である。さらに虹梁下には持ち送りの彫刻が置かれているが、これも後から挿入した虹梁を止めるためのものである。これらのことから、矢来筋の虹梁形飛貫・蟇股・平三斗・挿肘木は様式から見て十九世紀後期の改造によるものである。

内外陣境は、角柱を切目長押、内法長押、頭貫、台輪でつなぐ。柱上に出三斗を置き、中備は蟇股である。欄間彫刻は飛天である。内外陣境は全体が金箔、黒漆塗りで、建具は金障子である。

内陣の仏壇は後門形式である。来迎柱は頂部を頭貫木鼻付、台輪木鼻付で固める。柱上に出組組物を置く。須弥壇は禅宗様で、上に厨子を安置する。天井は素木の小組格天井である。その他の部分は、漆、金箔で仕上げられている。

余間は外陣側面より半間外側に広がる。余間の床は内陣より敷居分だけ低く、奥に仏壇を構える。余間においては仏壇のみ金箔、漆塗りである。

平成十年の修理で桁より上は妻飾も含めて全て新材となっている。後戸も新しい部材で構成されている。

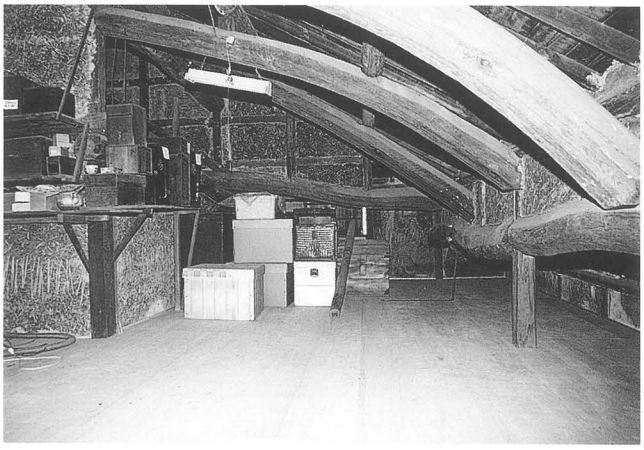


写真299　庫裏二階

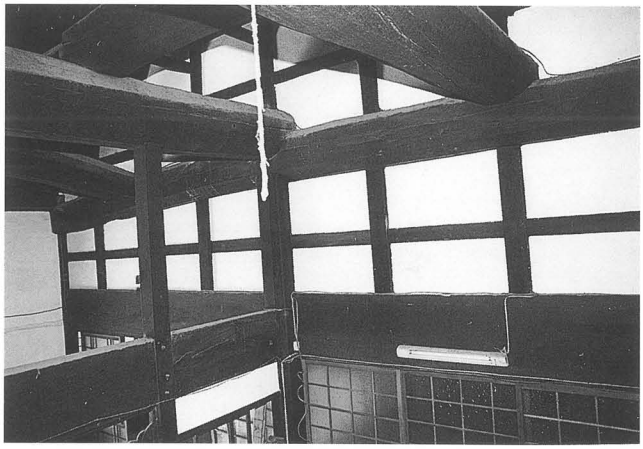


写真297　庫裏土間部分小屋組

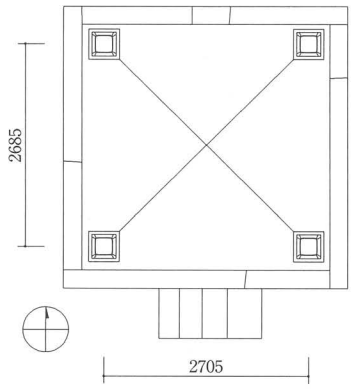


図70　鐘楼平面図

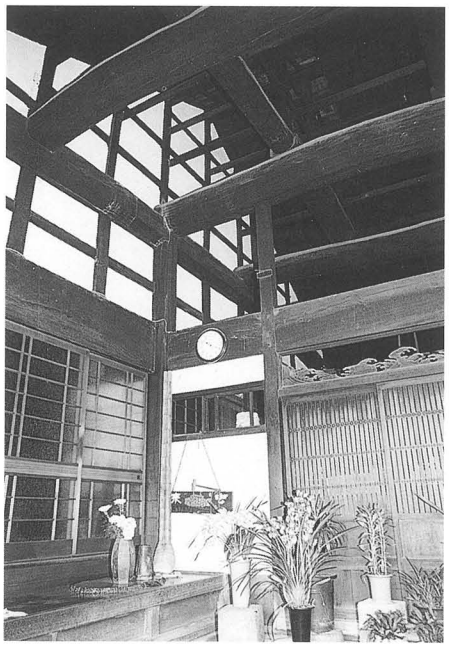


写真298　庫裏土間部分

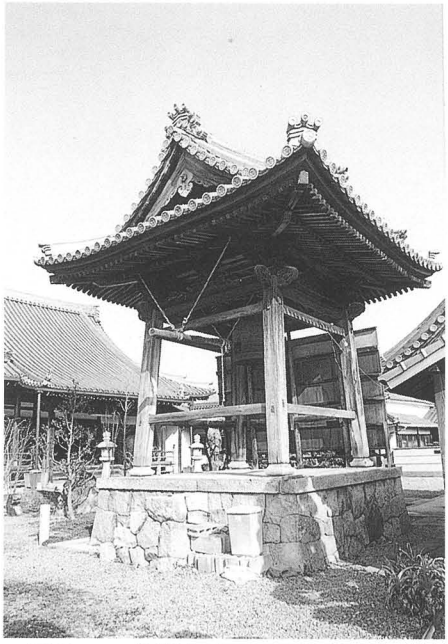


写真300　鐘楼全景

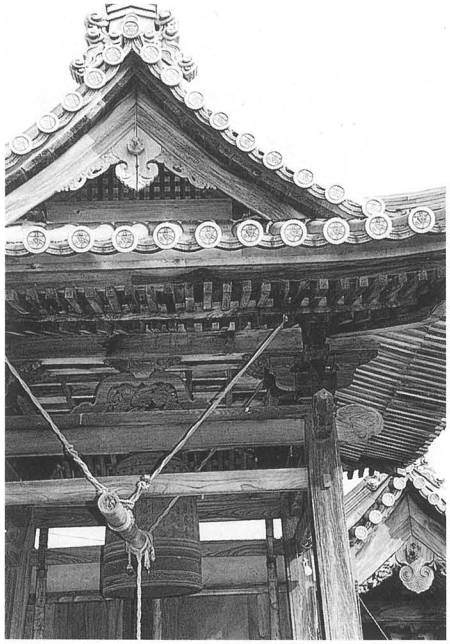


写真301　鐘楼詳細

外陣の両側面にある部屋は近年のものではないが、当初形態は分からない。庭におろされた旧獅子口には、弘化三年（1846）の年号が刻まれており、この頃屋根替えが行われている。

以上のようにかなりの改造が行われているが、内陣外陣の基本部分は創建時の形をとどめており、特に矢来筋の虹梁を後に入れる技術が判明した点は、幕末から明治時代の高い技術水準を示しており、興味深い建物である。

庫裏は本堂の北に立つ。屋根瓦・外壁が近年の修理を受けていて、外観は全く新しく見えるが、内部は近世の建物が良く残されている。桁行の南端三間分は土間、その北は梁間を二間、一間半、二間に割って九室が設けられている。西端の北と南の部屋に床が設けられている。ただし北の部屋の床柱は差鴨居を残したまま入れており明らかに後補である。南の部屋が当初からの座敷であり、この部屋とその前室に当たる東隣の部屋、座敷の北の部屋にのみ内法長押を打ち、薄鴨居を入れる。その他の部屋境はすべてせいの高い差鴨居を入れ、大引天井を張る。ツシ二階が設けられている。

土間部分は太い梁を架け渡し、束と貫で母屋を受ける。ツシ二階部分では登梁で母屋を受ける。

整った平面、梁や差鴨居の材の断面の大きいことなどから幕末の建立と考えられる。本堂側、すなわち南面の縁の柱筋には改造の痕跡が多数あり、土間の一部に新建材を用いて台所を新たに作っているが、概ね建立当初の形態を良く留めている。

近世の庫裏が丁寧に使い続けられていて貴重である。

鐘楼は、桁行一間、梁間一間の通常規模の鐘楼である。柱の足元と上部には粽がつく。頭貫木鼻はやや大振りで繰りの多い独特な意匠をもつ。

柱は几帳面取がなされ、全体的に丁寧に造られた十九世紀中期の様式をよく残す遺構である。天井（格天井）や野地板、桁は新材に取り替えられている。

（本堂は黒田、庫裏は山岸、鐘楼は岸）

19、黒岡神社　　太田字八幡917

本殿　正面桁行一間、背面桁行二間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、本瓦葺　　19世紀前期

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　出組拳鼻　蛇腹支輪　中備蟇股　妻飾木連格子　二軒繁垂木　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木組　手挟　中備蟇股　二軒繁垂木

黒岡神社は、城山の麓にあり、太田地区を氏子にもつ。祭神は、応神天皇（八幡大神）・神藤原貞国（黒岡大明神）・菅原道真（天満宮）である。特に、藤原貞国は、播磨西五郡の大領であり、天平宝字八年に新羅が播磨国に攻めてきた際の将軍であることから当地とゆかりが深いとされる。峰相記に黒岡明神と見え、境内には貞国の墓とされる六世紀の古墳があり、信仰の重層性を窺わせる。

本殿は、小規模な入母屋造の社殿である。二間四方の規模を持つが、正面は柱を省略し板扉を構える。ただし内法長押から上には他の部分と同様に柱形の束を立て組物を組んで二間の構えにはなっている。各柱の頂部に木鼻を付け、出組の組物にもそれとほぼ似た意匠の拳鼻が付く。 四隅の出組には尾垂木が入り、その上には斗がのり隅木受けの持ち送りを支え、地隅木先端に絵様繰形を付けるから、持ち送りと一体となった独特の形態となっている。

正面の蟇股には、天満宮の紋が、側面の蟇股には天満宮と八幡大神の紋がそれぞれ彫られている。

向拝は幣殿の内部に取り込まれる。打越垂木は町内でよく見られるようにむくりがある。庇につく中備の蟇股は天満宮の紋が彫られている。

全体に柱や長押は木柄が太く、軒の出は大きい。

垂木、身舎の板壁、浜床や浜縁は、幣殿の建立時に部材が新しく取り替えられている。

建立年代については、寛文と天保三年（1832）の棟札があると伝えられるが、確認はできていない。幣殿に上棟札が打ち付けてあるが、年号は背面にあるのか確認できない。絵様などは幕末期の様式をよく示しており、天保三年建立と見てよい。　（岸）

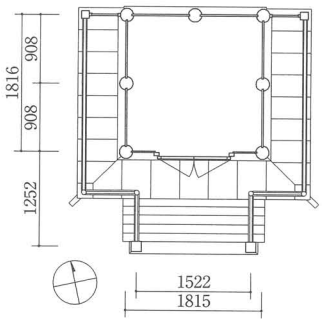


図71　本殿平面図

写真302　本殿全景（背面から）

写真303　本殿軒詳細

写真305　本殿向拝

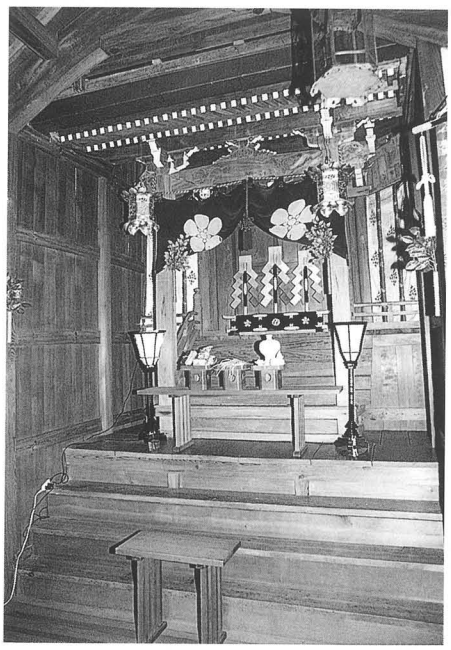


写真304　本殿正面

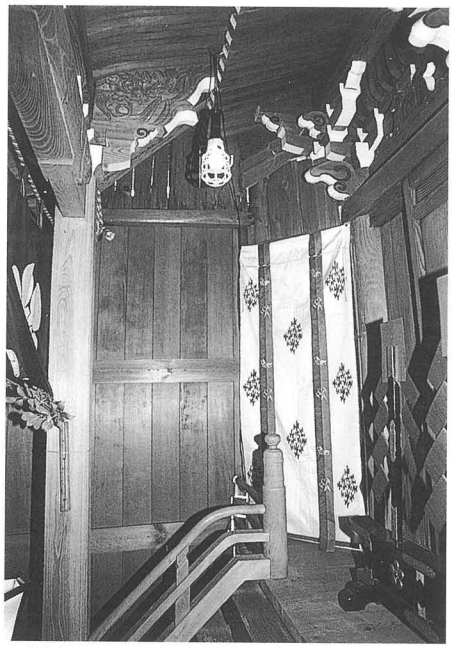


写真306　本殿向拝・本体部

写真307　本殿本体部詳細

20、伊都岐嶋神社　　山田字檜木谷171

木野山社本殿　一間社流造、銅板葺

享保十五年（1730　棟札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　大斗肘木　中備なし　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　中備蟇股　妻飾虹梁大瓶束　二軒繁垂木

山田は太子町の東端に位置する集落で、東の山を越えると姫路市である。伊都岐島神社は山田の集落54戸（聞取りによる）の鎮守社で、集落の東の山の麓に社地を構える。本殿・幣殿・拝殿は大正十二年に改築されており、ここでとりあげる木野山社は本殿に向かって右手の境内社である。木野山社本殿は、棟札によると享保五年（1730）の建立で、大工は菅生澗（すごうだに）村の山本孫四郎である。菅生澗は現在の夢前町内にあり、ほど近い距離である。

木野山社本殿は一間社流造で、正面一間、奥行一間の身舎の正面側に庇をつける。身舎の正面、側面に榑縁を回し、正面の階は五級で、背面の柱筋に脇障子を立てる。身舎内部は間仕切りのない一室で、正面に扉を設ける以外は横板壁である。正面の扉は板扉で、両側に小脇板をたてる

組物は大斗肘木で、肘木の下端曲線の曲率が小さく、ほとんど長方形に近い硬い形が特徴的である。また細部意匠の省略も特徴である。庇は正面側においては通常の作りであるが、本殿側では手間を省略している。中備の蟇股は、正面側では蟇股の輪郭と内部彫刻を浮彫りにしているが、本殿側では何も彫られていない。虹梁形頭貫では、正面側には虹梁絵様、頭貫絵様とも施されているが、本殿側では双方とも省略されている。この方式は身舎でも同じで、頭貫木鼻では、桁行頭貫木鼻の背面側の絵様が省略されている。妻飾の大瓶束も足元の結綿が省略されている。

小屋裏は調査できなかったが、垂木より上は近代のものである。

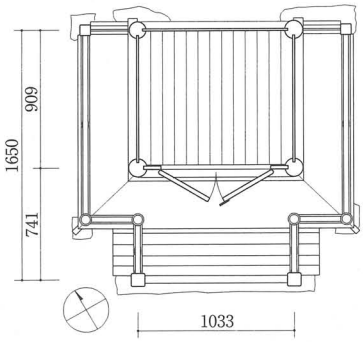


図72　木野山社平面図

写真308　木野山社全景

写真309　木野山社側面

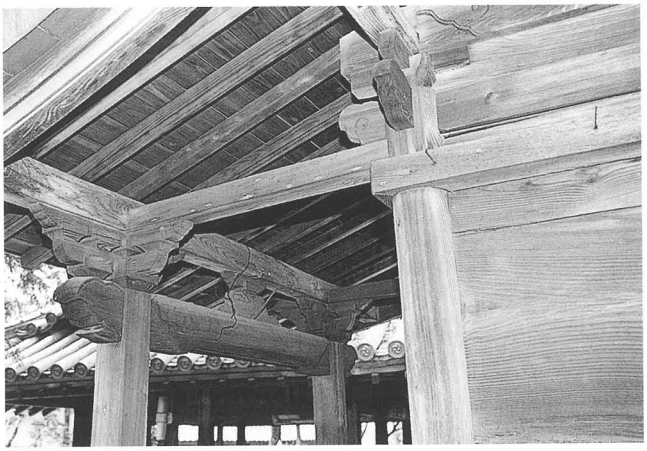


写真310　木野山社庇見返し

この本殿は以上のような装飾手間の簡略化が見られる建物であるが、全体の形は落ち着きのある比例をもち、絵様も年代相応の上品なものである。また、町内の神社建築では斑鳩寺の境内にある山王社に次いで古い神社本殿であり、村落鎮守社の中では最も古い遺構として重要である。（黒田）

写真311　木野山社庇詳細

写真312　木野山社妻飾

写真313　木野山社棟札（左：裏、右：表）

21、法心寺　浄土真宗本願寺派 佐用岡字寺垣内562

本堂　桁行12.1メートル、梁間12.8メートル、入母屋造、背面軒下張出付、南側面下屋庇付、向拝一間、本瓦葺　　文政五年（1822　賽銭箱墨書銘）

縁通角柱　組物なし　入側通角柱　切目半長押　内法長押　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　大斗絵様肘木　中備なし　二軒疎垂木　妻飾虹梁大瓶束　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　手挟　中備蟇股　二軒疎垂木

鐘楼　桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺、袴腰付　　19世紀前期

角柱　腰組より上は円柱　足固貫　腰貫　虹梁形頭貫　木鼻　台輪　大斗絵様肘木　中備蟇股　妻飾木連格子　一軒疎垂木

法心寺のある地区は平方といい、「鵤庄引付」によると永正十一年（1514）に東保村で一向宗念仏道場が検断されたとき、「平方奥村次郎衛門道場」も検断の対象とされた。従ってこの地区は戦国期から熱心な一

写真314　本堂全景

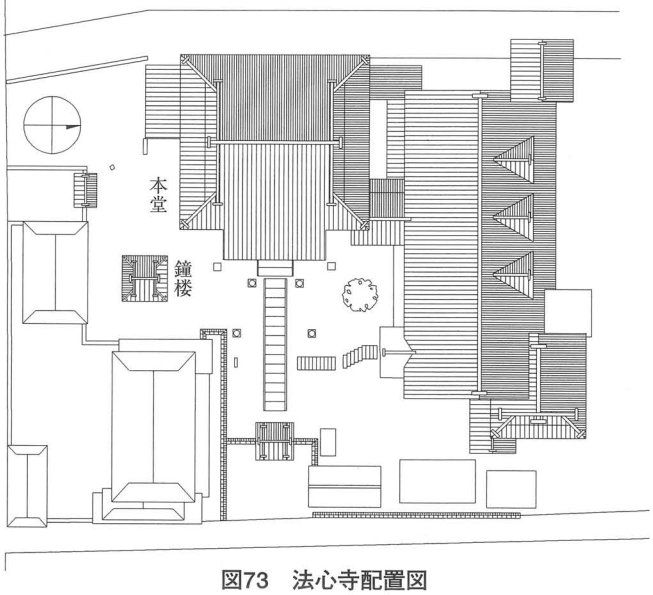


図73　法心寺配置図

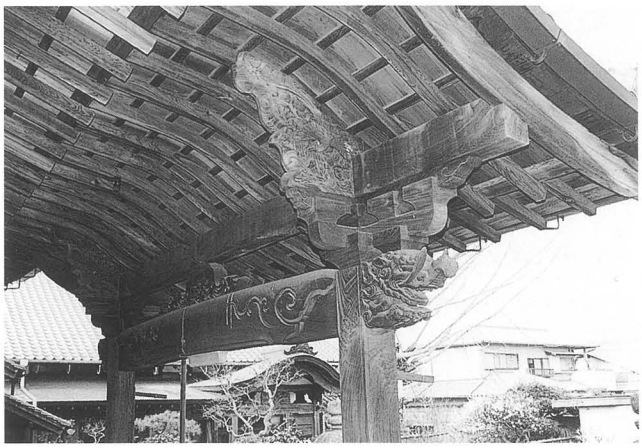


写真315　本堂向拝見返し

写真316　本堂向拝虹梁

写真317　本堂正面広縁

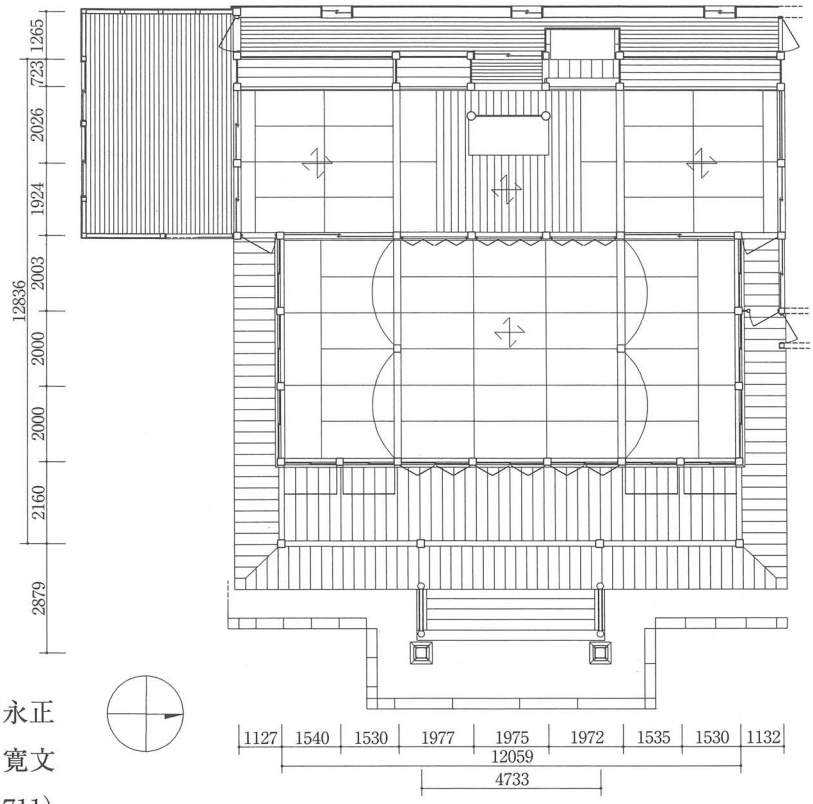


図74　本堂平面図

向宗門徒の拠点であった。法心寺はその五年後の永正十六年（1519）に願心が開基となって創立され、寛文三年（1663）玄覚のときに寺号免許、正徳元年（1711）玄周のとき木仏免許を下されている。

本堂は定型的な真宗本堂形式で、内外陣境によって全体を大きく二つに分かち、前方を外陣とし、後方の中央を内陣、内陣の両脇を余間とする。後方一間通りは後戸である。外陣の正面には広縁があり、広縁の正面から外陣側面に落縁がつく。柱は来迎柱が円柱である以外はすべて角柱である。

外陣の規模は、畳を基準とする実寸で正面が六間、奥行が三間で、町内では中規模の大きさである。中柱は二本で内陣・余間境の柱筋の延長上にたつ。中柱の頂部は、外見上は絵様肘木を落とし込んで天井桁を受けている。中柱は奥行き方向の虹梁形飛貫でつながれ

写真318　本堂外陣見返し

ており、虹梁形飛貫上の柱間中央に大瓶束を置いて天井桁を受ける。天井は格天井である。外陣周りの建具は正面側に古いものが残されており、中央三間が桟唐戸、その両脇二間ずつは内法高さの蔀戸である。外陣正面の落縁は奥行きが一間で、正面側は柱間三間に割る。天井は鏡天井である。

内外陣境は、角柱を切目長押、内法長押、頭貫、台輪で繋ぐ。柱上に平三斗を置き、欄間彫刻は飛天、唐獅子などである。欄間は金箔、柱上部から組物にかけては極彩色を施す。内陣正面建具は金障子である。

内陣の仏壇は後門形式である。来迎柱は頂部を頭貫木鼻付、台輪木鼻付で固め、柱上に出組組物を置いて、支輪桁を受け、天井との間に幅の狭い板支輪を作る。須弥壇は禅宗様で厨子を安置する。天井は小組格天井である。内陣と余間は、漆・金箔で彩色されている。

余間は外陣側面より半間外側に広がり、その広がった部分に外陣側面の落縁があたる。余間の床は内陣より敷居分だけ低く、奥に仏壇を構え、天井は内陣と同じく格天井で、極彩色を施す。向って左余間の側面側の柱には風蝕がみられるので、南側の室は増築である。しかし、右余間の同じ位置の柱には風蝕がみられず、こちらは当初から室内であったらしい。

正面一間の向拝は通常の形で、打越垂木が大きく上方に湾曲しているのが特徴である。

小屋の構造材は古いものが残っているが、野垂木より上は近年の修理で新しい。

建立年代を直接示す史料は発見できなかった。外陣中柱に取り付けられた「御堂修復賽銭箱」に文政五年（1822）の銘があり、様式からはこの賽銭箱の作成と本堂の建立がほぼ同時期と判断される。

修理の年代としては、近年の屋根修理で取り外された拝み懸魚に大正二年の墨書がある。また、親鸞を祀る内陣右の脇仏壇には少なくとも二回の改造が認められる。当初は蓮如を祀る左脇仏壇と同じ位置に作られていたのが、まず25センチ後退し、次いでさらに40センチ後退し、当初の仏壇前面柱に前机を作り付け、前机と仏壇の間に脇から出入できるようにしている。これらの改造は、親鸞の大きな年忌法要に際して行われ

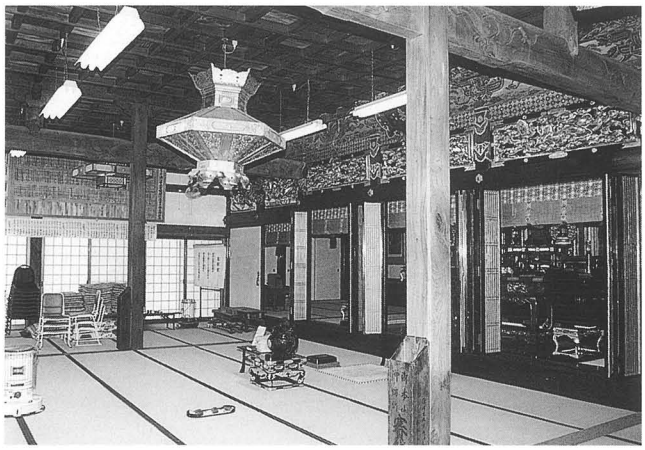


写真319　本堂外陣

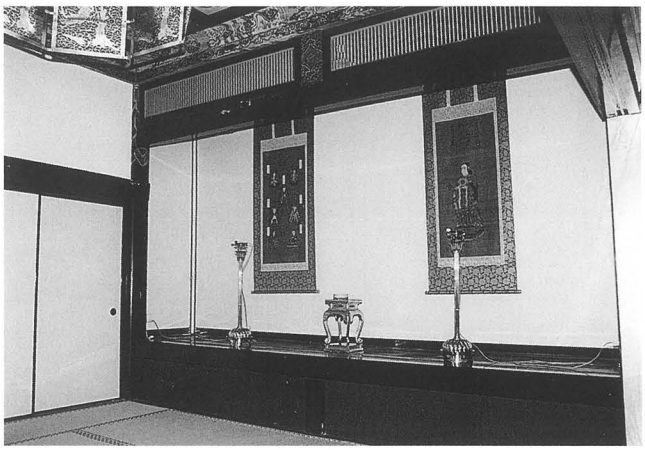


写真321　本堂余間

写真320　本堂外陣見架構

写真322　本堂内陣改造痕跡

たと思われる。右脇仏壇を後方に下げる改造は西光寺本堂、清光寺本堂でも見られる。右余間の外側には庫裏に続く建物が当初からあったが、左余間外側の室は増築である。また、内陣脇仏壇の裏側には風蝕がみられ、二回目の改造より前には後戸はなかったと考えられる。後戸が作られたのも比較的近年のことである。

親鸞を祀る壇の改造は他の寺でも見られるが、当本堂ではその過程がよく分かる点が興味深い。正面側の建具や外陣の架構などあまり目立たない部分にも江戸後期らしい意匠を備えた上質の真宗本堂である。

鐘楼は、標準的な規模の袴腰付鐘楼である。柱は角柱で、上層部分は削り出して円柱となっている。四方に擬宝珠高欄付きの切目縁を廻す。柱には床板があたっていた痕跡はなく、当初から床はなかった。天井は格天井である。枠肘木と木鼻はやや大振りで、その絵様は本堂のものと同じであることから、建立年代は本堂建立と同じ時期であろう。天井板・垂木・袴腰の板壁などに近年の修理による材の取替が目立つ。（黒田、鐘楼は岸）

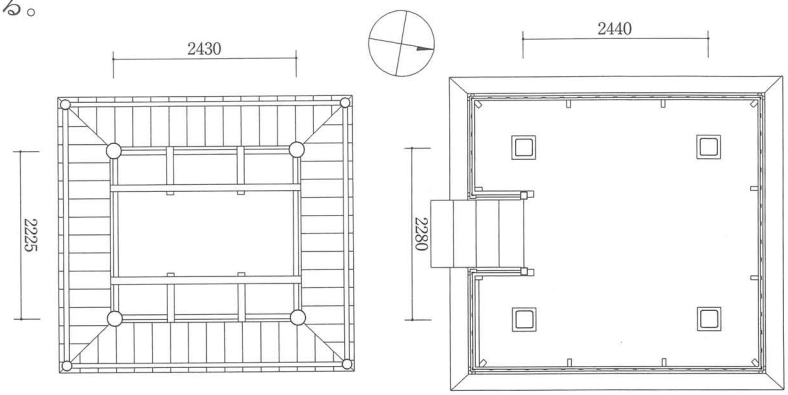


図75　鐘楼平面図（左：上層、右：下層）

写真323　本堂内陣

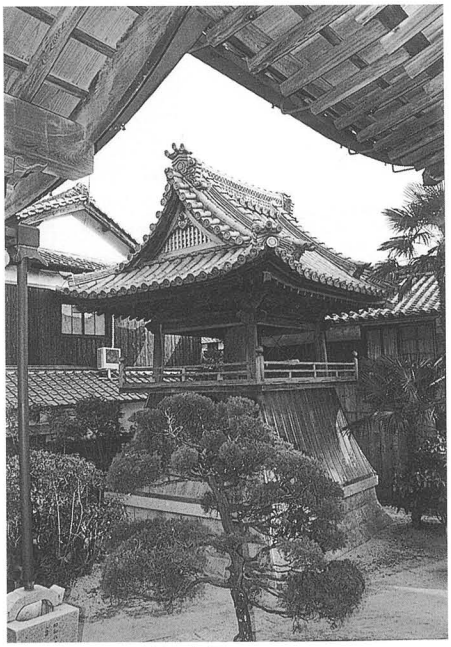


写真324　鐘楼全景

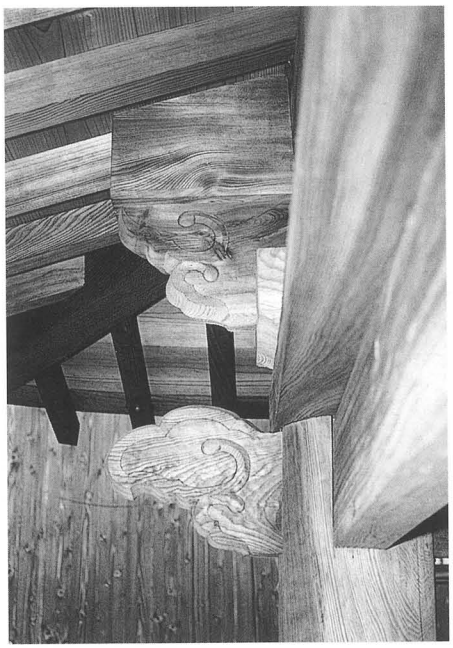


写真326　鐘楼組物

写真325　鐘楼上層

写真327　鐘楼上層縁と床板のない内部

22、照雲寺　浄土真宗本願寺派　広坂字東垣内450

本堂　桁行11.7メートル、梁間13.4メートル、入母屋造、背面軒下張出付、側・背面下屋庇付、向拝一間、本瓦葺　　天保三年（1832　棟札）

広縁通角柱　舟肘木　入側柱円柱　切目長押　内法長押　飛貫二段　頭貫木鼻　台輪留め　出組拳鼻絵　中備なし　二軒繁垂木　妻飾漆喰壁　向拝角柱　虹梁形頭貫木鼻　連三斗　手挟　中備蟇股　二軒繁垂木

照雲寺は、広坂の集落の北部に位置する。広坂村は太子町の北端にあり、氏神は姫路市の破磐神社で姫路市域との繋がりが深い。

本堂は、中規模な真宗本堂である。正面に広縁を持ち、三方に落縁を設ける。外陣は間口六間、奥行三間半で、矢来から後方は左右各半間づつ間口を広げる。外陣には中柱が二本しか立たず、この通りで虹梁を三本架け、柱頂部には挿肘木形式の出組組物を組む。外陣の正面・側面は半間ごとに間柱があるようにみせ、実際は一間おきに束として飛貫で受けている。広縁通では、側面の桁の下側を虹梁形に繰る独特な意匠が用いられる。

内陣には絵様のある尾垂木付の三手先が用いられ、天井は折上小組格天井である。

余間の下屋側の丸柱には一段低い仏壇框の埋木があり、高さは変更されている。

装飾豊富な建物であり、絵様の発達から19世紀前期の様式をよく残す本堂である。建立年代は、天保三年の棟札があり、大工棟梁は当所木村源兵衛藤原隆信と判明する。なお、石階耳石には大正十年改造の刻銘が

写真328　本堂全景

写真329　本堂外陣

写真330　本堂余間見返し

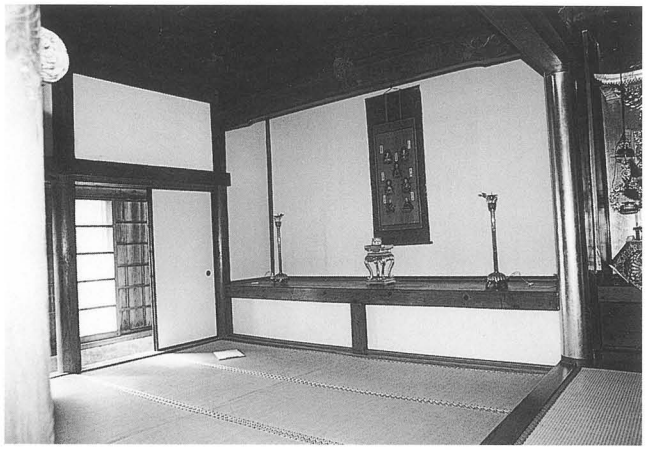


写真331　本堂余間

写真332　本堂外陣架構

ある。飛檐垂木より上は平成に入ってからの修理で新材に取り替えられている。（岸）

写真333　本堂棟札（左：裏、右：表）

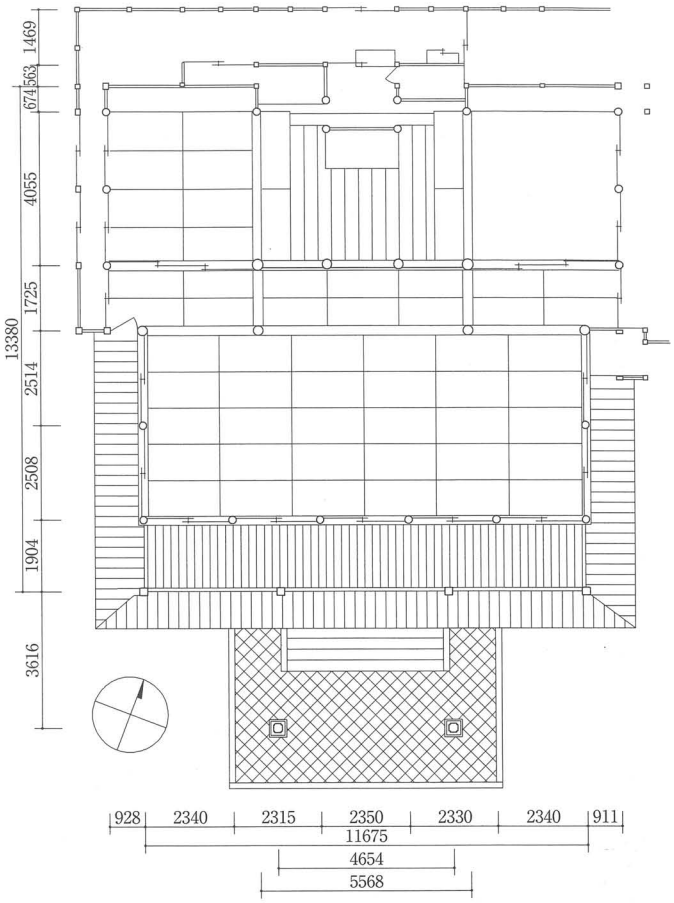


図76　本堂平面図

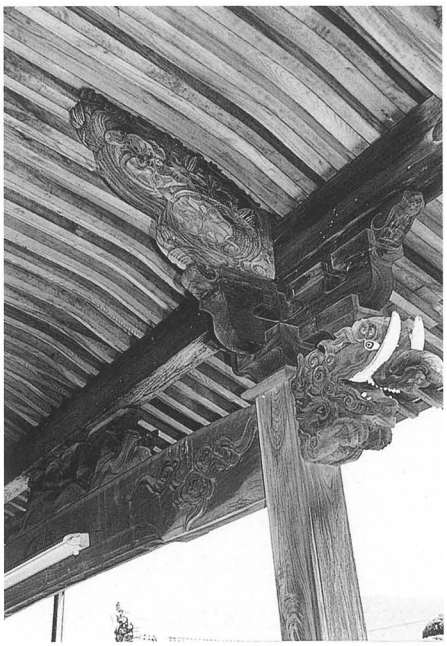


写真334　本堂向拝見返し

写真335　本堂広縁

写真336　本堂内陣

第三章　太子町の寺社建築の特質

1、太子町における神社本殿の特質

はじめに

太子町は「鵤庄引付」や法隆寺領播磨国鵤荘絵図をはじめとする史料によって、中世の状況が比較的よく分かる地域であるが、建造物に関しては永禄八年（1565）頃に再建された斑鳩寺三重塔のほかは全て江戸時代以降のものである。特に神社本殿に関しては、約80箇所の一次調査対象（悉皆調査対象）に対し、明治に入る可能性があるものも含めて江戸時代のものは19棟に過ぎない。うち３棟は斑鳩寺内の鎮守社であるから、村落の神社は16棟で、それも江戸後期から幕末の建物がほとんどである。その他は近現代の建築物で、現存の建物のみからは中世はおろか江戸時代の村落の神社の姿も知ることが困難である。

（1）では18世紀の史料を使って、江戸時代の太子町の神社本殿の一般的状況を描き出すことを試みる。（2）では、中世の史料に登場する神社の性格等について記述し、現状を述べる。（3）では太子町で見られる二つの主要な神社本殿形式、流造と入母屋造について、その形式の相違はどのような地域的あるいは歴史的事情によるのかを考察する。（4）では、斑鳩寺の聖霊権現社の特殊なあり方、すなわち寺院鎮守でありながら周辺地域とも深い関係を持つあり方を指摘する。

（1）江戸時代以前の村落の神社本殿

神社の数　表11は寛延元年（1748）の「村々寺社并境内間寸付扣帳」[1] から寺院を除いた宗教施設の構築物に関する事項をまとめたもので、70箇所ある。ここに掲載された範囲は現在の太子町域のうち龍野藩領に属するもので、林田藩領は含まれていない。堂または本尊名だけのものが９箇所で、残り61箇所が神社・祠である。ここで龍野藩領における寛延の頃と現在の宗教施設の数を比べてみたい。林田藩領は、矢田部（相給）、東南、東保、東保出屋敷、中太田、平方（相給）、柳で、正確には数えられないが、現在のこれらの地域の社・祠を仮に10箇所程度とすると、今回の一次調査対象が62箇所であるから、龍野藩領は差し引き50箇所程度となり、全体として神社、祠の数は寛延元年当時から約２割減っているといえる。

神社の規模・屋根葺材　規模の欄をみるとほとんどが小規模本殿であり、屋根葺材はわら葺が１棟、柿葺が１棟で、残りは瓦葺である。現在の本殿は小規模で近代以降のものが多いが、小規模で瓦葺という傾向は少なくとも江戸後期以来のものであることが分かる。

建築物の記載に関しては次の３種類がある。

（イ）　桁行・梁行寸法と屋根葺材の記述があるもの

（ロ）　桁行・梁行寸法のみのもの

（ハ）　無社と書かれ、寸法も葺材も記述がないもの

（ハ）の無社というのは７社あるが、文字通り敷地のみあって（表では省略したが全てに敷地の広さの記載がある）、施設がないものとみられる。現在の荒神社をはじめとする小さい社で、境内に大きい樹木が生えている事例があり、このような大きな木やあるいは石などが標識となっていたのであろう。（ロ）については表11において、70地神石祠とあるから、他のものも石祠と考えることができる。これが６社である。そうすると（イ）は木造の建築物で、48社となる。石祠は今回の調査対象としていないが、現在の木造本殿は江戸中期の石祠を含めた数をやや上回ることから、大勢として木造本殿が石祠になるのではなく、石祠が木造になったといえる。また信仰が続いている状態では、祠をなくすということはないから、変化の仕方は一様ではないとしても無社、石祠、木造本殿という方向で変化したといえる。

次に屋根葺材について考える。ただ１棟の柿葺は60宮本村崇道太明神で、現在の石海神社である。この神社は江戸時代においても周辺８箇村の鎮守社であるから、格の高い神社である。一方、16稗田神社も周辺12箇村[2] の鎮守社であるが、こちらは瓦葺である。詳しくは次項で記述するが、広い信仰圏を持つ神社は４社で、それ以外は一集落以下の狭い信仰圏の神社である。

---

[1]「村々寺社并境内間寸付扣帳」（『太子町史』第三巻太子町、平成元年）

	村名	神社名	堂名	建物	規模1	規模2	屋根葺材
1	阿曽村	荒神社			2.5	3.1	瓦
2	阿曽出屋敷	荒神社			2.5	3	わらふき
3	老原村	権現社			4	4	瓦
4		荒神社			4	4	瓦
5			地蔵				
6	蓮常寺村	崇道大明神社			5	5	瓦
7		一之宮社			3	3	瓦
8		荒神社			3	3	瓦
9		天神社			3	3	瓦
10	糸井村	荒神社			3.5	4.5	瓦
11		弁財天			3	4	瓦
12	立岡村	一之宮社			3	3	瓦
13		天神社			6	6	瓦
14		荒神社			2	2.4	瓦
15			薬師		無堂		
16	鵤村	稗田大明神			2間	2間	瓦
				舞殿	2間	2間	瓦
				拝殿	2間半	4間	瓦
17		三宝荒神社			2.5	2.1	瓦
18		稲荷祠・荒神社			2.5	2.1	瓦
19		同社			2	2	瓦
20		大将軍					
21		八幡宮			2.7	2.2	瓦
22		天神社			1.5	1.5	瓦
23			地蔵		杉森		
24			古地蔵				
25	馬場村	春日大明神			2.5	2	瓦
26		胞衣荒神社			3.5	2	瓦
27	助久村	荒神			無社		
28		同社			3	3	
29			地蔵堂		2	2	瓦
30		荒神祠			1	1	
31	下大田村	吉美大明神社			1間	1間	瓦
				拝殿	2間	2間	瓦
32			薬師堂		1間	1間	瓦
33		加谷戸明神			無社		
34	原村	大年大明神			7	7	瓦
				舞殿	6	6	瓦
				拝殿	2間	3間	瓦
35			地蔵		無堂		
36		落本大明神			無社		
37		黒田太明神			無社		
38		天神			無社		
39	山田村	弁財天社			4	4.5	瓦
				拝殿	3間	2間	瓦
40		荒神社			3.5	3	瓦
41	上太田村	若王子社			6	6	瓦
				拝殿	2間	3間	瓦
42		王子権現社			3.5	3	瓦
43	太郎左衛門	荒神社			2.5	2.5	瓦
44	平方村	大年大明神社			4	4	瓦
45		荒神社			1.5	1.5	瓦
46	松尾村	八幡宮			1間	4	瓦
				拝殿	2間	1.5間	瓦
47		天神社			1間	5	瓦
48		荒神社			3.5	2.5	瓦
49		稲荷			無社		
50	鵜飼村	荒神社			2	2	
51			地蔵				
52	広坂村	落大明神社			1間	1間	瓦
53		八太荒神社			3.2	2.5	瓦
54	竹広村	荒神社			2	2	瓦
55	吉福村	八幡宮			1間半	1間半	瓦
				拝殿	3間	2間	瓦
56	吉福出屋敷	三方荒神社			3	3	瓦
57		同社			4	4	瓦
58	常全村	八幡宮			2	3	瓦
59		荒神社			2	3	瓦
60	宮本村	崇道太明神			1間5尺	1間	こけら
				舞殿	1間	1間	瓦
				拝殿	3間	1間1尺	瓦
61		三方荒神社			2	1	瓦
62	福地村	崇道大明神社			1間	4.5	瓦
				舞殿	1間	1間	瓦
				拝殿	2間	3間	瓦
63		荒神祠			0.9	1.8	
64		同断			1	1	
65	船代村	三宝荒神社			2.5	2.5	瓦
66		稲荷			無社		
67	岩見構村		薬師堂		1.5間	1.5間	瓦
68		大将軍社			2.3	2.3	瓦
69		年神社			2	2	瓦
70		地神石祠			1.5	0.8	

表11　「村々寺社并境内間寸付扣帳」（寛延元年1748）の記載内容
建物名称がないのは本殿または仏堂。
規模1・規模2は梁行・桁行のいずれか。数値のみの単位は尺

しかし瓦葺本殿は表の多数を占めるから、瓦葺そのものは信仰圏の広狭とは無関係であることが分かる。わら葺も1棟あり、常識的には瓦葺よりもわら葺の方が簡素なものである。1阿曽村と2阿曽出屋敷の荒神社がほぼ同じ規模で屋根葺材を違えているが、これは本村と枝村（出屋敷）の関係であるから、葺材の相違は村の序列を示すと考えてよい。55吉福と56吉福出屋敷では、集落の序列が神社の規模に表れている。

18世紀中期には既に現状と同じく小規模木造瓦葺の本殿が多かったが、それ以前にはわら葺のもの、石祠、建物のない社も多かったと思われる。

祭神　現在の神社の祭神は、荒神が多い。この状況は18世紀中期においても同じで、表11をみると荒神はだいたい各集落にある。「斑鳩庄引付」永正十四年（1517）四月廿八日条に「東南村衆荒神講之席ニテ喧嘩アリ」[3]という記述がある。16世紀には荒神はこの地域に存在しており、「村衆」とあるから荒神講は村単位あるいは村内で結ばれていたと考えられる。次項で言及する「鵤御庄当時日記」大永三年（1523）正月元三条には東保の荒神もみえるが、現在は所在不明である。文献史料で16世紀に荒神が二社確認できるので、それよりは多くの荒神があったと考えられる。

(2) 中世史料に見える神社の現状

中世史料に見える社で現存の神社に関連付けられるのは、稗田神社、東保の大歳社、斑鳩寺聖霊権現社、平方の大歳社、東南の荒神である。

このうち東南の荒神については、前節末尾で触れた。現在は檀特山西側に張りだした岡の麓に三宝荒神社が

(2)「村々寺社并境内間寸付扣帳」（前掲註（1））で12村、現状は6集落（『太子町史』第二巻「別章　太子町の民俗」太子町、平成八年）。

(3)「鵤庄引付」（『太子町史』第三巻太子町、平成元年）

あり、本殿は一間社流造銅板葺、拝殿は桁行三間梁間二間本瓦葺で両方とも昭和戦前の建物である。

稗田神社は、法隆寺領播磨国鵤荘絵図の嘉暦四年（1329）図、至徳三年（1386）図[4]の双方に描かれる（以下嘉暦図、至徳図と略称）。両方とも妻入の表現で、嘉暦図は記号的な簡略な描き方である。至徳図では少し丁寧に描かれ、春日造または入母屋造、檜皮葺、土台建と解釈できるが、他の神社も同じ描き方であるから、これも神社の記号的表記と見るのが妥当である。稗田神社は鵤庄の荘園鎮守社であり、斑鳩寺すなわち荘園領主側の支配下にあるが、「鵤庄引付」応永廿五年（1418）九月十五日条[5]に名主百姓が稗田集会を行い、逃散したとある。このことは、領主側の出先機関であると同時に住民側の結束の拠点でもあるという荘園鎮守社の性格をよく示している。稗田神社は、前項の江戸時代の記録では本殿が方二間の規模で、舞殿、拝殿を備え、建物規模の点でもこの記録中最大の神社であり、おそらく町域最大の神社であっただろう。現在も次項で述べる信仰圏の広い神社として現存し、本殿は鉄筋コンクリートで近年建替えられたが、社地は動いていない。

東保の大歳社は、嘉暦図では絵図の折り目に当たって傷みが激しく、かろうじて鳥居が見える程度である。至徳図では「□保大歳社」の文字と本殿の絵の表記がある。絵は上記稗田神社と同じである。「鵤御庄当時日記」[6]大永三年（1523）正月元三以下朝拝事の条において、東政所の法隆寺僧快訓が正月朔日に預所・筆取・両定使・中間以下を召し連れて各所を廻る記事のなかに東保の大歳殿がある。一行は、政所客殿での行事の後、下宮（斑鳩寺聖霊権現社）、本堂、太子堂、八幡、仁王堂、稗田、毘沙門堂、平方宮、東保荒神、大歳殿、八幡を廻って政所に戻り、大将軍に参詣した。このうち荒神、大歳殿、八幡が東保にあり、それを政所の一行が朝拝に回っているから、これらは領主にとって重要な意味をもっていたらしい。同日記には東保大歳頭次第が記されており、15名の名主が名を連ねている。現在、至徳図大歳社の位置には東保字丹生の大歳神社がある。その本殿は三間社流造、本瓦葺で、太子町の神社本殿の中では大きい方である。建立年代は石製の垣に大正十一年（1922）の刻銘があり、その頃ないし明治時代と思われるが、詳細な調査はしていない。拝殿は桁行三間、梁間二間、本瓦葺で平成十二年の建立、鳥居には安永二年（1773）の銘がある。この大歳神社は中世から続いていると見てよいだろう。荒神は確認できず、八幡も現存しない。

平方宮は弘安三年（1280）の「鵤庄平方条実検目録」[7]に「大歳敷地一段廿五、同社祭田二段五」とある。「斑鳩庄引付」永正十八年（1521）正月の条には平方大歳ノ宮とある。この記事によると、大歳ノ宮神宮寺の坊主が辞退して勤行が無くなり、そのことに対する神の祟りによって在所の百姓以下が病気になったという訴訟があった。そこで別の坊主を定め、坊舎も破損しているのでその修理を約束したとある。平方の宮には給田があり、政所がこの件を裁いているから、この宮は荘園領主の出先機関であることが分かる。これは領主側の記述になるから割り引く必要があろうが、そこで勤行が行われることは在所の百姓が望んでいるとされ、荘園内の神社の性格がよく示されている。永正十年（1513）（年月日欠く）と推定される条には平方歩射の儀に関する争論のことがある。「鵤御庄当時日記」には平方大歳頭役次第があり、名主15名が書き上げられている。この社は弘安年間以後中世を通じて存在したと思われるが、その中間に当たる嘉暦図、至徳図には描かれていない。このことから、絵図に描かれなかった社が存在した可能性が高い。「村々寺社并境内間寸付扣帳」では平方村に大歳大明神社があり、平方村、助久村、柳村の支配となっている。この範囲は中世の平方条とおよそ一致すること、大明神と称されていることから、これが中世平方の大歳ノ宮に当たると考えられる。この社は三村の支配とされているが、この記載は他の神社で複数集落をあげる場合の氏村、氏子村、あるいは記載なしに村名が続くのとは事情が異なるようである。当時の本殿は4尺四方の瓦葺であ

(4) 法隆寺領播磨国鵤荘絵図　嘉暦四年（1329）図、至徳三年（1386）図（『太子町史』第一巻付図　太子町、平成八年）

(5) 前掲註（3）

(6)「鵤御庄当時日記」（『太子町史』第三巻太子町、平成元年）

(7)「鵤庄平方条実検目録」（『太子町史』第三巻太子町、平成元年）

った。現在、平方には佐用岡字宮ノ元の大歳神社しかなく、これが近世の大歳大明神であり、ひいては中世平方条の大歳ノ宮と考えられる。大歳神社は周囲を田に囲まれ、平地でこんもりした森を形成している。本殿は昭和十年（1935）改築の一間社流造、銅板葺である。桁行三間梁間二間の拝殿は平成十四年に大きな改築を受け、一間一戸薬医門の表門も同年の建立である。

これらの社の中世における存在意義はどのようなものであったのか。鵤庄の荘園管理は全体を東方、西方の二つに分け、さらに東方は平方、東保、東南の三つに分けて行われていた。このことは「鵤御庄当時日記」にも表れているほか、嘉暦図、至徳図においてはそれらの地域の境界に朱線が引かれている。上述の検討において、稗田社が中世史料に出るのは当然として、平方大歳、東保大歳、東南荒神の三つが史料に出てくるのは偶然ではなく、これらが領主側、住民側双方の地域の要となる重要な社だったからと考えられる。そのような古い社の伝統を継ぐであろう神社が現存するが、それらは他の社と比べて特に変わった点もなく、町内の神社のひとつとして存在している。

(3) 入母屋造本殿の意義

全国の国宝・重要文化財の神社本殿を形式別に分けた棟数の割合は、流造6割弱、春日造2割弱、入母屋造2割弱となっている。春日造は奈良、和歌山近辺に多いから、全国的に一般的な本殿形式は流造と考えられる。太子町の神社本殿の形式は、一次調査対象の神社における境内社も含めた本殿87棟のうち、春日造1棟、入母屋造13棟、流造67棟で、あとは小さな社などにこれ以外の形式がある。斑鳩寺境内に3棟の入母屋造本殿があるが、これらは寺院鎮守社で、村落の神社とは性格が異なるので考慮の外におくとすると、村落の神社、祠の入母屋造本殿は10棟となる。表12に村落の入母屋造本殿と春日造本殿を示す。太子町における本殿形式の割合は、先述の傾向とまったく一致していて、太子町における神社本殿の一般的な形式は流造であるといってよいのだが、ではなぜ入母屋造本殿が存在するのか、入母屋造本殿はどのようは意味を持つのだろうか。

まず所在地に関しては、図77に示されたとおり入母屋造本殿は太子町の周辺部、つまり鵤荘の外周部に散在している。1大歳神社（広坂）、2王子神社（王子）、3若王子神社（上太田）、4黒岡神社（太田）、5大歳神社（原）は、鵤荘東の山の麓に立地している。8石海神社（宮本）、9崇道大明神（塚森）、10八幡神社（吉福）は、鵤荘の南西地域にあたる。6と7は鵤荘内であるが、6は最近の建物、7は非常に小さいものである。

次に、神社の信仰圏（氏子圏）との関係をみてみる。神社をその信仰圏の広さによって分類すると、太子町には次の3つの型がある。

（イ）複数集落を信仰圏とする神社
（ロ）単一集落を信仰圏とする神社
（ハ）任意の講あるいは集落の一部を信仰圏とする神社

このように分類したとき、表12から町内にある（イ）の型の4社の本殿はすべて入母屋造であることがわかる。信仰圏の広い神社、大きい神社の本殿は、入母屋造の形式をとるのである。入母屋造は少なくともこれらの本殿の建立年代である江戸後期には、格の高い形式と考えられていたといえる。

このことが明らかになると、分布状況も説明可能となる。鵤荘内に入母屋造本殿がないのは、そこは稗田神社の信仰圏であり、稗田神社以外はすべて（ロ）（ハ）の型の神社だからである。上記江戸時代の「村々寺社并境内間寸付扣帳」において、平方大歳大明神が三村の支配という分かりにくい書き方がされていたのは、三村とも稗田神社の氏子であることによる位置付けと考えられる。従って、鵤荘内で入母屋造本殿となる可能性があるのは稗田神社ということになる。稗田神社本殿は、現在は鉄筋コンクリート造であるが、昭和十三年刊の『兵庫県神社誌』[8]には「本殿　入母屋造三坪五合」とある。神社での聞取りでは現在の本殿は昭和四十四年に建替えたもので、それ以前は入母屋造、瓦葺であった。規模は「村々寺社并境内間寸付扣帳」に「弐間四方」とある。これらのことから、稗田神社本殿は江戸時代においてこの史料の中で最大の本殿であり、形式は入母屋造であったことがほぼ確かである。石海神社は石見郷十三ヶ村の鎮守、八幡神社（吉福）は石見郷三ヶ村の鎮守、黒岡神社は太田荘七

[8]『兵庫県神社誌』中巻（兵庫県神職会、昭和十三年）

	神社名	所在地	本殿規模	建立年代	西暦	郷・荘名	信仰圏・備考	一次調査番号	二次調査解説
1	大歳神社	広坂	1・1	明治26年頃	1893	大市郷		61	
2	王子神社	王子	1・1	幕末		太田荘		62	
3	若王子神社	上太田	1・1	明治後期		太田荘	上大田・松ケ下二ケ村の氏神	64	
4	黒岡神社	太田	2・2	19世紀前期		太田荘	太田荘七ケ村の氏神	71	19
5	大歳神社	原	2・2	寛政5年	1793		町域東部	73	17
6	天満宮	東南	1・1	昭和52年	1977	鵤荘	小祠	69	
7	荒神祠	斑鳩	1・1	明治		鵤荘	個人の庭にあり	50	
8	石海神社	宮本	1・1	天保9年	1838	石見郷	岩見郷十一ケ村の氏神	32	11
9	崇道大明神社	塚森	1・1	昭和4年頃	1929	石見郷		26	
10	八幡神社	吉福	1・1	19世紀中期		石見郷	吉福・沖代・米田三ケ村の氏神	22	13
11	崇道神社	福地	1・1	寛政7年	1795	石見郷	一間社隅木入春日造	29	7

表12　入母屋造と春日造の本殿一覧

本殿規模は桁行柱間・梁行柱間

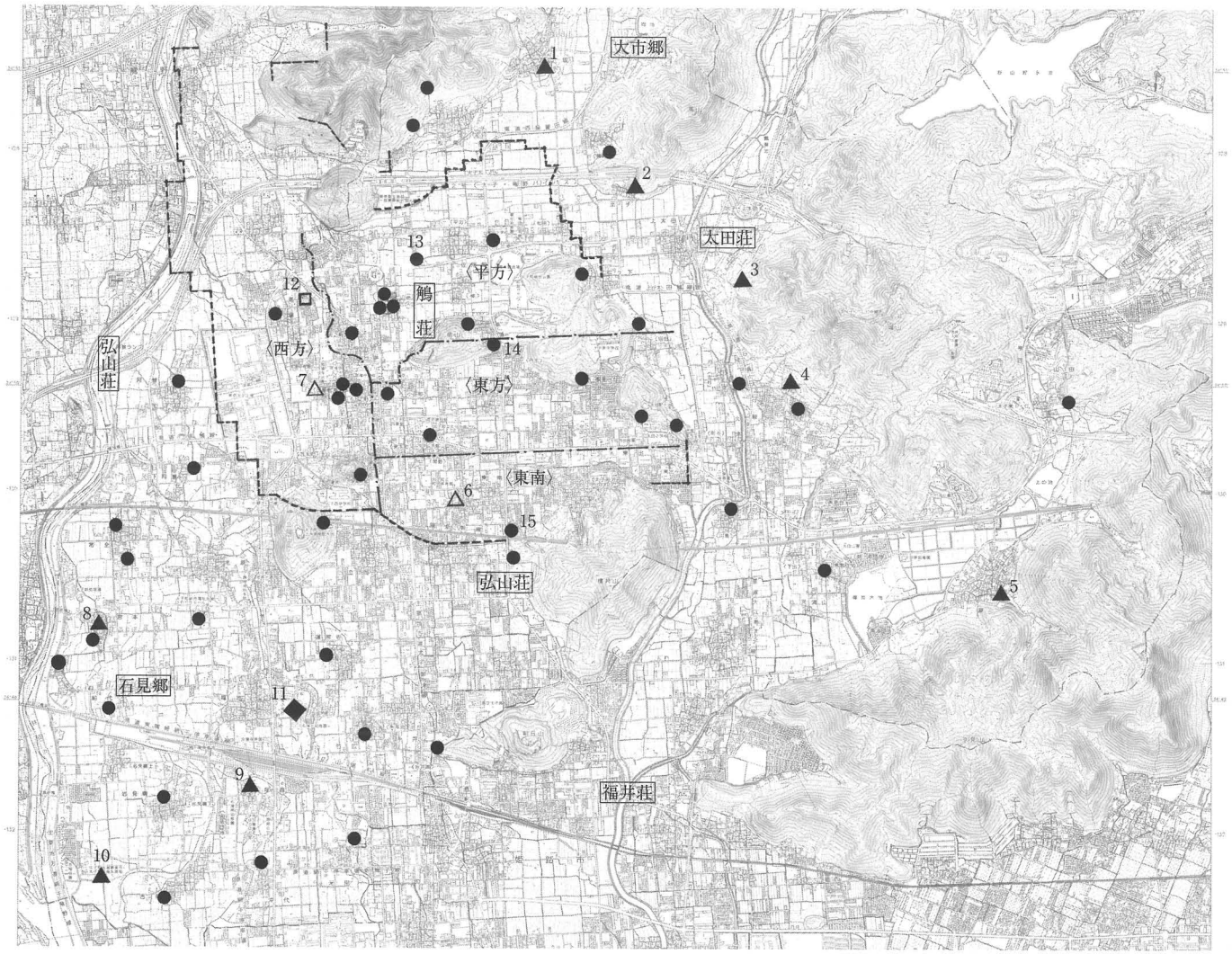


図77　荘園境界と神社本殿形式の分布および中世鵤荘内の神社

凡例・番号　1～11は表2の番号と同じ。12稗田神社　13平方大歳神社　14東保大歳神社　15東南荒神社

・鎖線は荘園境界。一点鎖線は鵤荘内の地域境界。至徳図及び『太子町史　第一巻』付図7を参照した。

・▲入母屋造造本殿　●流造本殿　◆春日造本殿　△近年の入母屋造小祠　□RC造神明造。

・本殿形式の表示はその神社の主たる本殿のみとし、境内社は含まない。斑鳩寺境内の入母屋造本殿3棟は含まない。

ヶ村、若王子神社（王子）も太田荘二ヶ村の鎮守[9]で、これらは中世以来の荘園域に関連した性格を有している。東部の残り三社は単一集落の鎮守社である。単一集落の鎮守社については、（イ）の型の神社の信仰圏に属していない場合に、入母屋造としたと考えられる。

太子町外では「鵤庄引付」に登場する弘山八幡すなわち現在の阿曽神社は弘山荘の鎮守社である。本殿は桁行三間梁間二間の入母屋造で、『兵庫県神社誌』によると天正二年（1574）の建立で、寛政五年（1793）に修理している。太子町南方の福井荘にあって現在も広大な信仰圏をもつ魚吹八幡神社本殿も桁行三間梁間三間の大規模な入母屋造本殿で『兵庫県神社誌』によると正保二年（1645）の建立である。太子町域の入母屋造本殿はいずれも江戸後期の建物であるから、上で示した入母屋造本殿の意義も厳密には江戸時代のものであるが、中世荘園の領域と密接に関係していることがわかる。

（4）斑鳩寺聖霊権現社

寺院鎮守社の多くは寺と関係のある著名な大社の祭神を勧請したり、地主神あるいは護法神を祀るものである。これに対して、斑鳩寺の聖霊権現社は、聖徳太子を祀り、また鵤庄の荘園鎮守社である稗田神社と密接な関係にあり、また荘内の百姓との関係も深いという極めて珍しい鎮守社である。

聖霊権現社の最も古い姿は、至徳図に見ることができる。(2) で述べたように同図の神社表記は記号的であるが、斑鳩寺の部分に関しては本堂、太子堂、聖霊権現社の位置関係ならびに向きが現状と一致している。また本堂、太子堂、聖霊権現社本殿の柱が朱で描かれているのに対して、聖霊権現社本殿の前に柱が墨で描かれた建物があり、これは拝殿と考えられる。この4棟の建物の位置、向きは14世紀の状態を伝えているのである。

「斑鳩寺記録」[10] 天和二年（1682）の条記載の「斑鳩寺志略」に聖霊権現は太子を崇め、稗田大明神は妃膳氏を崇める、とある。江戸時代には聖霊権現社の祭神は聖徳太子と考えられており、稗田神社と深い関係があるとされていた。(2) で見たように稗田神社は斑鳩寺による荘園支配の拠点であり、同時に鵤荘の住民の結束の中心ともなる荘園鎮守社である。聖徳太子は寺内では太子殿に祀られており、二重に太子を祀っていることになる。聖霊権現社の修理は、「鵤庄引付」永正十五年、同十七年条に寺家二十貫文と地下の名主百姓の勧進三十貫文、その他合わせて五十余貫文で行われたことがみえる。江戸時代になって「斑鳩寺記録」天和二年条にも寺僧と庄内の百姓が協力して造営を行ったことが記されている。これに対して、寛文五年（1665）に落成した太子殿造営のための奉加では、池田越前守とその家中から大量の銀子を得たのをはじめ、荘内六ヶ村から人別一升の米、その中の町人から一軒ずつ銀を集め、寺僧も奉加している。太子殿に関して述べる余裕はないが、このような資金調達方法の相違は、当該施設の信仰内容と関わるものであり、聖霊権現社は鵤荘内の百姓と深い関係にある社であることが分かる。現在、稗田神社の秋祭りでは稗田神社の神輿がここに徒御し、御旅所となる。

おわりに

太子町の神社建築の歴史的な意義を描き出すべく、江戸時代の町内の社の一般的形態、中世に存在した神社の意味とその現状、入母屋造本殿の持つ意義、斑鳩寺聖霊権現社の特異なあり方について述べた。

なお、考察し残したことに、龍野市の阿曽神社と、石海神社・八幡神社（吉福）が林田川近くに立地していることがある。本来、川近くは氾濫の恐れがあって、神社の立地としては不利と思われるが、このように神社が並ぶということは、意図的にその場所を選んでいると思われる。おそらく川の氾濫を神威によって押さえ、土地開発を進めたという意味と、開発した土地への取水口を守るという意味のどちらか、あるいは双方があると推測される。興味深い問題であるが、後考を俟つこととする。

---

[9] 寛延元年の「村々寺社并境内間寸付扣帳」（前掲註（1）参照、以下扣帳と略称）で石海神社の信仰圏は13村、現状は9集落。八幡神社（吉福）は扣帳で3村、現状も3集落。黒岡神社は現状7集落。若王子神社は扣帳で3村、現状は2集落。現状は『太子町史』第二巻「別章　太子町の民俗」（太子町、平成八年）による。

[10] 「斑鳩寺記録」（『太子町史』史料編、太子町、昭和四十五年）

2、石海神社本殿の中国神仙彫刻

はじめに

石海神社本殿の人物彫刻は中国の神仙を主題としたものである。兵庫県内ではあまり見かけないもので、少なくとも一般的なものではない。

彫刻による建築装飾は、量的には植物、動物、雲、波が主流であり、人物彫刻は少ない。しかし、特に希少というわけではなく、中国神仙の彫刻も色々なところで見られる。例えば東海地方の尾張や近畿地方の泉南の祭礼の山車に仙人の彫刻があるから、十九世紀以降においてはこの種の彫刻は全国的な広がりがあると思われる。

ここでは石海神社本殿の神仙彫刻の主題を明らかにし、先行する事例について紹介する。主題を明らかにするために、先行事例とその解説を参照し、中国における図像を確認するべく努力した。図像の確認には『中国神仙画像集』[11]『中国神話・伝説大事典』[12]、『東洋画題総覧』[13]を使用した。前者は『捜神記』[14]『神仙伝』[15]『列仙全伝』[16]『三才図絵』[17]などの図像を集成したものである。この本はそれぞれの神仙について、各書物の図像を掲載しており、これによって中国における図像の概要を知ることができる。『捜神記』『神仙伝』などは成立の非常に古いものであるのに対して、『中国神仙画像集』所載の図がどの年代のものかは判断しがたい。『列仙全伝』『三才図絵』は明代の編纂であるから、『中国神仙画像集』のものは明代の図像と考えてよいだろう。以下で中国の図像の出典をいうときは『中国神仙画像集』所載のものである。

(1) 石海神社本殿の神仙彫刻の主題

石海神社本殿は方二間の建物で、正面のみ中央の柱を立てない。柱の上には組物が置かれ、それらの組物間に神仙彫刻が配される。正面中央にも他の面同様に組物を置き、彫刻を同様に入れるから、神仙彫刻は全部で八面となる。この数は中国で組とされた八人の仙

(11) 成寅編『中国神仙画像集』(上海古籍出版社、平成八年)
(12) 袁可著・鈴木博訳『中国神話・伝説大事典』(大修館書店、平成十一年)
(13) 金井紫雲『東洋画題総覧』(歴史図書社、昭和五十年)
(14)『捜神記』。東晋代(317～419)の書。現行本は唐代(618～907)編集
(15)『神仙伝』。葛洪(284～364)編。神仙84人収録。
(16)『列仙全伝』。王世貞(1526～1590)著、汪雲鵬増補。上古から明の弘治年間(1488～1505)までの神仙581人収録。
(17) 明代(1368～1615)の類書(百科事典)

写真337　王子喬ー南面(正面)の東

写真338　西王母ー南面(正面)の西

写真339　張果老ー西面の南

写真340　武志士かー西面の北

人すなわち八仙を思わせるが、この本殿の彫刻は中国の八仙ではない。

① 南面（正面）の東—王子喬（写真337）

鶴に乗る男。この図柄は後述の北野天満宮、東照宮陽明門にもあり、王子喬と考証されている。『三才図会』『列仙全伝』『列仙図賛』における王子喬の図はいずれも鶴に乗って笙を持つが、ここに挙げた事例はいずれも笙を持たない。ほかに鶴と関連がつけられる男の仙人には控鶴仙人と桓闓がある。

② 南面（正面）の西—西王母（写真338）

大きい女と桃を捧げる小さい女の図。大きな桃の木があってたくさん実がなっており、桃と女の結びつきを考えると西王母と考えられる。中国の図像では、大きい西王母と小さい侍女の絵が多い。ただ中国の西王母は立つか椅子に腰掛けるかであるが、この西王母は立膝で座り、何か持っている。

③ 西面の南柱間—張果老（写真339）

瓢箪から小さな馬を出す男。『東洋画題総覧』の張果老の説明に「瓢の水から驢を出す図好んで描かる」とある。張果老は八仙の一人で、中国では馬に乗る男性の図像であり、後ろ向きに乗る図もある。張果老は白い驢馬に乗って一日数万里を旅し、休むときには驢馬を紙のように折り畳んで箱に入れ、乗るときには水を吹付けるともとにもどった。この図柄は水が瓢箪から吹き出て馬がもとにもどる場面である。

④ 西面の北柱間—武志士か（写真340）

布のような物に乗って、雲間に浮かぶ男。該当しそうなのは武志士という仙人で、青い布幕を橋として五七里を行き、市中にいたることもあった。ただ、この仙人の図は『列仙全伝』にしかないらしく、どこの人かも分からないとされ、あまり有名な仙人ではない。別の図像の可能性がある。

⑤北面の西柱間—李鉄拐（鉄拐仙人）（写真341）

口から小さい人物を吹き出す男。これは八仙の一人李鉄拐である。鉄拐は体から魂を離して崋山の李老君に会いに行ったが、その間に肉体が焼かれてしまった。この場面は、鉄拐の分身が口から出て行く場面で、『仙佛奇踪』『列仙図賛』『列仙全伝』『八仙図』『元曲選図』のいずれにも日本におけるような図像はない。

⑥ 北面の東柱間—鐘離権（写真342）

波に浮かぶ剣のような物にのる男。右手で裾をつかみ、左手を額にかざしている。これは八仙の一人鐘離権である。やはり『仙佛奇踪』『列仙全伝』『列仙図賛』『元曲選図』『八仙図』いずれにも日本におけるような図像はない。狩野探幽が描いた鐘離権は、剣のようなものに乗り、右手を額にかざし、左手は下ろしている。

写真341　李鉄拐（鉄拐仙人）ー北面の西

写真342　鐘離権ー北面の東

写真343　琴高仙人ー東面の北

写真344　蝦蟇仙人ー東面の南

手の左右が異なるが、同一の図柄とみてよいものである。

⑦　東面の北柱間―琴高仙人（写真343）

巨大な鯉の上に座り、冊子を開いてもつ男。これは日本でよく見られる琴高仙人である。中国の図像では『列仙全伝』においては二匹の鯉の上に片足ずつのせて立ち、『列仙図賛』においては一匹の鯉の上にしゃがんでいる。日本で立っているのは、筆者は見ていない。鯉に乗る仙人としては他に赤鯉仙があるが、その鯉は角が生えている。

⑧　東面の南柱間―蝦蟇仙人（写真344）

柳の木の下で蝦蟇を頭の上に乗せて座る風貌魁偉な太った男。左手で蝦蟇の足をつかみ、右手は自分の髪の毛をつかむ。これは日本では蝦蟇仙人と呼ばれ、鉄拐仙人と組で作られる場合が多い。ここでは位置的に離れて配置されており、組になっているとはいえない。『東洋画題総覧』の蝦蟇仙人の解説はその名を劉海蟾として『有像列仙伝』の記事を掲げているが、その中には蝦蟇を使うことはみえない。『中国神仙画像集』の劉海蟾の解説にも蝦蟇との関連は書かれていない。『中国神話・伝説大事典』では清代の十七世紀後半から十八世紀前半に成立した『古今図書集成』の引く地誌に劉海蟾と蝦蟇の関係が若干うかがえる。後述の北野天満宮の蝦蟇仙人は口から勢いよく何かを吐いている。

(2) 建築に用いられた中国神仙彫刻の事例

ここでは筆者の知る著名な建物に中国神仙彫刻が使われた事例を挙げる。

①　聖神社本殿

大阪府和泉市の聖神社本殿は慶長九年（1604）の建立で三面の人物彫刻を施した蟇股がある。二面は王子喬と琴高仙人で、もうひとり流木に乗って水面を渡っているのは主題が分からない。ここの王子喬は左手に軍配、右手に細長い物を持つ。琴高仙人は巻物を開いている。

②　北野天満宮拝殿

京都の北野天満宮拝殿は、慶長十二年（1607）の建立で正面中備の蟇股に人物彫刻がある。それらは東から次の順に並んでいる。

(a) 衛叔卿―囲碁を打つ二人の男、(b) 蝦蟇仙人（劉海蟾）、(c) 鈎翼夫人―花の鉢を眺める右手が曲がった憂い顔の若者、(d) 黄初平―鏡があって正面からは見えない、(e) 王子喬―鶴にのる男、(f) 鉄拐仙人、(g) 黄安―亀に乗り文書を読む男

ここでの仙人の名は浅井與一郎の考証による[18]。浅井は（e）の鶴にのる仙人を王子喬とするが、先述のように中国の図像では王子喬は笙をもつ。石海神社と共通するのは、(b) 蝦蟇仙人、(e) 王子喬、(f) 鉄拐仙人である。だいたい似た図柄であるが、(b) 蝦蟇仙人の蝦蟇が口から何かを勢いよく吹き出している点などが異なる。

江戸時代にも修理があったので、これらの蟇股が建立時のものと断言できるわけではないが、修理時のものとしても元禄十三年（1700）を下ることはないだろう。ここで既に中国ではそれほど有名ではない蝦蟇仙人が登場し、しかも鉄拐仙人と対称の位置にあることが注目される。この二人を組とする考えがあったことが分かる。

③　日光東照宮陽明門

陽明門は寛永十三年（1636）の建立で、背面側の腰組の間に神仙の彫刻がある。背面は北側となり、東から次の順である[19]。

(a) 鉄拐仙人、(b) 梅福仙人、(c) 王子喬、(d) 費長房、(e) 鐘離権、(f) 黄仁覧、(g) 琴高仙人

石海神社と共通するのは (a)、(c)、(e)、(g) の４つである。それらが石海神社と違う点は次のとおりである。(a) 鉄拐仙人は、鉄拐が吐き出す息の上に小さい人物像が乗るのではなく、地面に子供ほどの大きさの人物を配する。(c) 王子喬は鶴の上に乗るのは同じだが、巻物を開いている。(e) 鐘離権は波の上で剣に乗るのは同じだが、背中に大きな傘をかけ、両手に何かもっている。

---

[18] 浅井與一郎「史実は語る　社殿の彫刻四～七」（『天満宮』134号～137号、1984年）

[19] 『増刊歴史と人物　日光東照宮』（中央公論社、1981年）の矢島清文、高藤晴俊の考証を参照したが、この本では②が王子喬、③が梅福仙人となっている。②については、中国の図像では王子喬は鶴に乗り笙を吹くが、ここでは笙は吹かず、乗っているのは鶴ではなく鸞とみるのが適切であろうから、梅福仙人と考えられる。③については、梅福は鸞にのるが、この場合は鶴に乗っているから王子喬と考えられる。

④　その他

仙台の大崎八幡宮本殿は慶長十二年（1607）の建立で、亀にのる人物（黄安か）と流木にのる人物の蟇股がある。

京都御所は、安政二年（1855）に再建されたもので、御所西面の宜秋門に琴高仙人、王子喬、鐘離権のほかもう一面の蟇股人物彫刻がある。

おわりに

中国神仙の建築彫刻は一般的なものとはいえない。なお多数の類例があることが推測されるが、上記の検討からは次のようなことが分かる。

①　中国の神仙や孝子は多数の種類があるが、仙人の場合は八仙[20]、孝子の場合は二十四孝のようにまとめられることがある。これに対して、日本で仙人の建築彫刻が作られる場合、ある範囲の仙人が選ばれているようだが、決まった組み合わせにはなっていない。八仙の何人かは取上げられるが八仙全部を踏襲するわけではない。

②　中国の図像と日本における図像は一致しない場合が多い。日本における図像は一定の決まりごとを持ちながらも、独自の表現をとる場合が多い。

③　日本で取り上げられる題材は、中国でも何種類もの本に取り上げられる有名な物が多いが、蝦蟇仙人のように中国では多分あまり有名ではない仙人も好んで題材とされている。

④　建築装飾として仙人の彫刻が使われる部位は、蟇股が多く、次いで組物と組物の間である。現段階では仙人の彫刻の出現自体は蟇股の中のほうが早いが、日光東照宮で既に組物間に神仙彫刻が入っていて、はるか後年の石海神社と同じである。

日本の神仙図像は中国の基本的な図像とは異なる。この間にどのような展開があったのかは絵画史の問題と思われ、なお調査研究が必要である。

---

[20] 八仙は、先ず明代に張果老、鐘離権、曹国舅、藍採和、鉄拐李、韓湘子、徐神翁、呂洞賓とされ、清代に徐神翁が何仙姑に変わった。また清代の異説に張果老、何仙姑の代わりに風僧寿、元壷子を入れるものがある（『中国神話・伝説大事典』〔註12〕による）。

3、真宗本堂の類型

真宗本堂の平面や内部空間の構成は、極めて定型的であり、宗派独自の形式を維持している。堂の前半部を外陣として、その内部に、左右に分けて各々一本から三本程度の中柱（独立柱）を立て、それら同士や側柱を、貫もしくは虹梁で繋ぐ。外陣は中柱列で緩やかではあるが三つの空間に分割される。堂の後半部は概ね外陣中柱の筋に揃えて三分し、中央部を内陣、両脇を余間として、内陣須弥壇には阿弥陀を、脇仏壇には親鸞や蓮如を、余間には阿弥陀名号や七高僧、聖徳太子などを祀る。この形式の現存最古の遺構は照蓮寺本堂（岐阜県　永正元年＝1504頃）である。ただし照蓮寺は、柱は角柱を用い、虹梁を用いず、内陣の須弥壇も押板形式で、住宅と大差ない意匠であるのに対し、江戸時代の真宗本堂は円柱・虹梁を多用し、住宅とはかけ離れた印象を受けるものが大半である。また、正面の広縁の有無、外陣と内陣の平面規模、外陣の架構などで多用な類型が見られる。またそこには地方色もある。太子町において二次調査の対象とした10棟について、比較しておきたい。

本寺と開基　町内の真宗寺院の本寺と開基は「寺社境内寸法控帳」（『太子町史』第三巻第三章四五号文書）・「龍野藩領寺院開基社号簿」（同四六号文書）によって知られる。他領の清光寺・法心寺についてはこれらの史料から知ることはできないが、姫路本徳寺の前身である英賀東かりや道場が開かれる明応二年（1493）を遡る寺はなく、本徳寺の成立が当地域の真宗勢力定着の基をなしていたことが窺われる。とはいえ「龍野藩領寺院開基社号簿」の成立した享和二年（1802）にはすべてが本徳寺末であるわけではなく、本願寺直末や播磨六坊の龍野光善寺、東本願寺の有力寺院である山戸村西宝寺の末寺もある。

各寺の本堂の外陣・内陣の規模、外陣中柱の数、架構、内陣仏壇の当初形式等を整理したのが表13である。

広縁　本堂は正面・側面に広縁・落縁を設けるが、広縁は三方にあるもの、正面のみのもの、設けないものがある。太子町内には前の二形式のみがある。この内三方に設けるものの内、正覚寺・善導寺は本願寺末であり、蓮光寺は西宝寺末であるから、三方広縁の本堂

は寺格を反映していると推定される。

外陣規模　ところで、外陣の間口と奥行を実寸法の間の単位（柱間数の単位の間ではなく）で示すと、表の外陣規模の欄のようになり、三方に広縁を持つ本堂は外陣規模が小さい。しかし広縁の規模も加えると蓮光寺・正覚寺・善導寺いずれも間口七間となって西光寺・清光寺と並ぶ。つまり広縁を含めて全体の規模の大枠が間口七間か六間と限定され、これが一般の真宗本堂の規模の基準となっていたと推定される。

外陣と内陣の境、もしくは矢来の柱筋で間口幅を広げる事例が見られ、太子町内もこの形式が多い。この場合、三方広縁付きでは広縁通りの柱筋に内陣・余間の幅を揃え、それ以外は外陣間口六間に半間づつ加えて、内陣間口が七間になる。外陣間口が七間あるものは内陣幅を広げることはしていない。結局、内陣間口幅は七間に定まっていると見ることができる。勿論、一般的にはこれ以下の規模の真宗本堂も存在するから、一定の寺格においてはこのような規模となるのであろうか。検討課題である。

外陣の架構　外陣には中柱を立て、これに虹梁を架けて外陣空間を飾るのが真宗本堂の特徴の一つである。この中柱の数や、架構の架け方も多様である。中柱の数は０、２、４の三種で、建立年代や平面の形式と関連なく決められているようである。三方広縁を持つ善導寺が中柱を一切立てないのは興味深い。

桁行と梁行に虹梁を架ける事例は４棟あり、これらは定型的である。これに対しそれ以外の５棟は、個性的である。

正円寺は梁行のみに繋ぎ材を入れるが、矢来より内陣側は虹梁を用い、他の部分、則ち矢来筋より前は内法貫を入れ、その上は土壁としていて、江戸時代前期の古式な形式を採っている。了源寺は正円寺と同様梁行のみに繋ぎ材を入れるが、これはすべて虹梁を用いる。法心寺も了源寺と同形式であるが、中柱が２本しかないため、矢来筋がなくなる。虹梁の長さが一間半と長くなるので、中央に大瓶束を立てているのが特異である。

蓮光寺は２本の中柱同士と、中柱と内外陣境の柱、及び中柱と側面側柱のみを繋いで、正面側柱とは繋がない。しかも中柱と内外陣境の柱の繋ぎは台輪と貫である。内陣に台輪を用いているのでその意匠が矢来筋まで延びていると見ることもできよう。

照雲寺は蓮光寺を簡略化したもので、中柱筋に桁行にのみ虹梁が入る。

貫を用いるのは古式であるが、その他は時代的な変化が見られるのではなく、それぞれの施主や大工の創意工夫によるものであろう

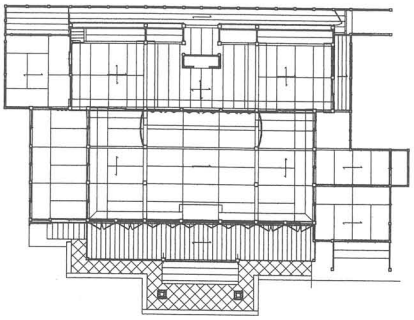
内陣仏壇　真宗本堂の内陣の仏壇は、独立した来迎柱二本を立てて須弥壇を設け、後戸の出入りが可能な形式（後門形式）と、内陣背面の壁面に仏壇を造り付ける、いわゆる三ツ並び仏壇とがある。後者が古く、前者が新しい形式とされている。太子町の真宗本堂は、現状ではすべて後門形式であるが、改造の痕跡が比較的明瞭で、当初の仏壇の形式が判明するものが多い。

西光寺・了源寺・蓮光寺・善導寺はいずれも三ツ並び仏壇であり、正覚寺は余間の仏壇が半間前に設けられていた事が判明するので、おそらくそれと関連して内陣も三ツ並び仏壇であったと推定される。その建立年代は宝暦十四年（1764）から寛政八年（1796）までであり、十八世紀には三ツ並び仏壇がなお主流であったことになる。

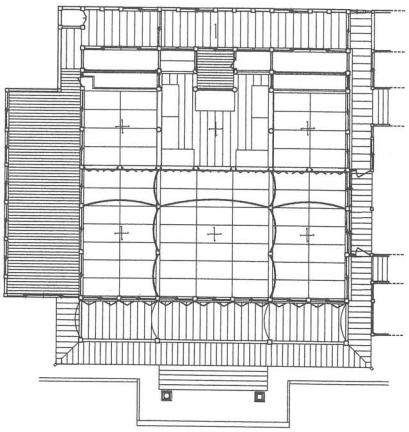
以上のように、多様な形式の真宗本堂を太子町内で見ることができる。真宗の盛んな播磨の一郭の歴史的背景を反映したものと言うことができよう。

	寺名	建立年代	本寺	開基年代	広縁	外陣規模	外陣	外陣中柱数	外陣架構	内陣当初仏壇形式
4	西光寺	天明年間（1781～1789）	姫路本徳寺	永正十三年（1517）	正面広縁	7×3.5		4	梁行と桁行に虹梁	三ツ並び
16	清光寺	文化５年（1808）	—	—	正面広縁	7×3.5		4	梁行と桁行に虹梁	
22	照雲寺	天保三年（1832）	龍野光善寺	永禄五年（1562）	正面広縁	6×3.5	矢来・内陣広げる	2	桁行のみに虹梁	
18	浄因寺	安永七年（1778）	—	—	正面広縁	6×3.5	内陣広げる	4	梁行と桁行に虹梁	
21	法心寺	文政５年（1822）	龍野光善寺	永正十六年（1519）	正面広縁	6×3	内陣広げる	2	梁行のみに虹梁	
5	正円寺	享保三年（1718）	姫路本徳寺	明応元年（1492）	正面広縁	6×3	内陣広げる	4	梁行のみに虹梁	
6	了源寺	天明六年（1786　寺伝）	姫路本徳寺	天文十一年（1542）	正面広縁	6×3	内陣広げる	4	梁行のみに虹梁	三ツ並び
8	蓮光寺	寛政八年（1796）	山戸村西宝寺	天文十年（1541）	三方広縁	5×3.5	矢来・内陣広げる	2	特殊（本文参照）	三ツ並び
15	正覚寺	宝暦十四年（1764）	本願寺	永正十六年（1519）	三方広縁	5×3	矢来・内陣広げる	2	梁行と桁行に虹梁	三ツ並びか？
14	善導寺	18世紀後期	本願寺	天文十三年（1544）	三方広縁	5×3	内陣広げる	0	なし	三ツ並び

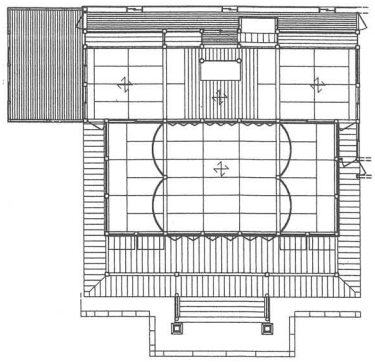
表13　二次調査対象の真宗本堂の比較　外陣規模の単位は間である



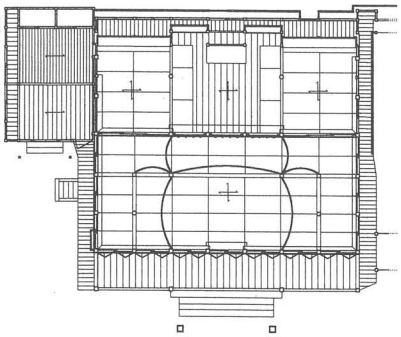
正円寺（享保三年, 1718）



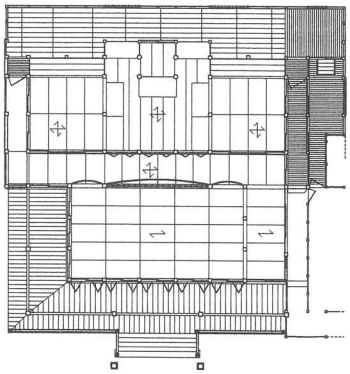
西光寺（天明年間, 1781～89）



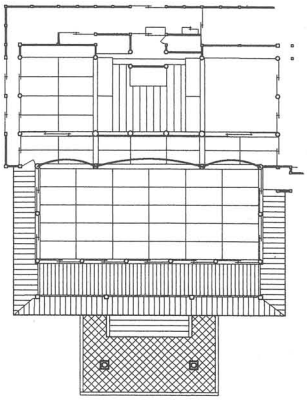
法心寺（文政五年, 1822）



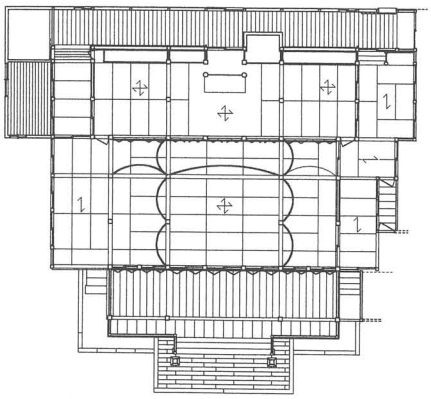
正覚寺（宝暦十四年, 1764）



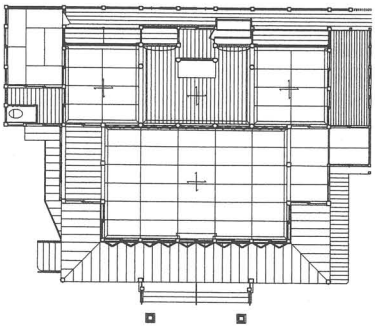
蓮光寺（寛政八年, 1796）



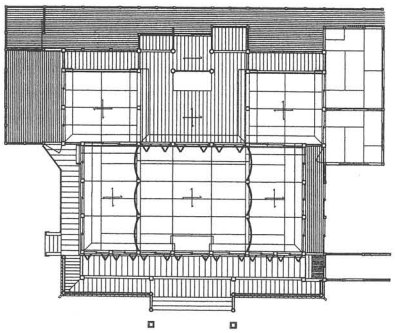
照雲寺（天保三年, 1832）



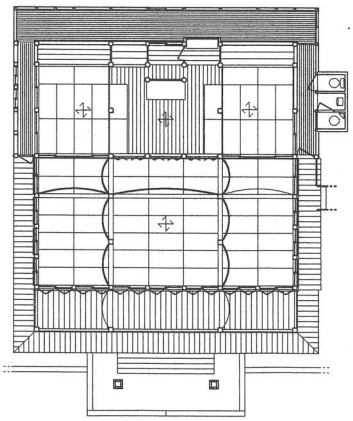
浄因寺（安永七年, 1778）



善導寺（18世紀後期）



了源寺（天明六年, 1786）



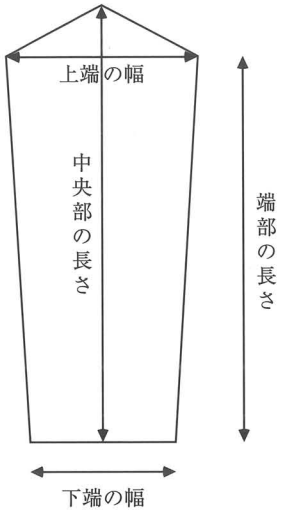
清光寺（文化五年, 1808）

図78　太子町内の真宗本堂の平面比較
〈印は虹梁の架かることを示す。

4、棟札等史料釈文

二次調査対象の寺社の所蔵する棟札・寄進札の釈文を以下に掲げる。棟札は近世に作成されたものに限った。

棟札名の下の記載は、棟札の寸法（中央部の長さ、端部の長さ、上端の幅、下端の幅、厚さ、単位はミリメートル）、加工（材質、木取り、表面仕上げ）、収納場所を記した。



□斑鳩寺

(一)

明和六年講堂建立棟札　895 895 180 180 13　桧板目台鉋　収蔵庫

(表)

播州斑鳩寺
上棟明和六年己丑春三月初六日也
委別記有之

(裏)

此棟木ハ弘治二丙辰ヨリ明和六己丑マテ
年間凡ソ二百十余年ヲ経テ両度ニ相用
ユル者也、于時季春上浣之日　当寺双樹沙門妙志識之

(二)

明和六年講堂建立棟札　880 880 180 181 10　桧板目台鉋　収蔵庫

(表)

雲水造営誠永年
性金庵妙志識之

(裏)

播州斑鳩寺本堂隅木四本懸魚二枚雲板二枚其外
松木不残太子山并当寺ノ境内稗田社ノ境内ニ出生
スル所ノ材木ナリ此度幸造営ニ因テ伐ラセ用ユル者也
時明和六年己丑三月　当寺双樹院大忍釈妙志記之

(三)

安永十年聖徳殿前殿修理札　『斑鳩寺聖徳殿前殿保存修理工事報告書』による

(表)

安永十年□□(辛丑カ)二月二十五日ヨリ葺替三月十五□(日カ)
棟包時之現住青龍院真瑞　宝勝院妙洞
双樹院妙志　仏餉院智真　禅林院観中　円珠院妙含
十行房寂仙　□□普請場江相詰指図
□□□□潤

(裏)

屋根下地前々至極念入有之此度損シ少ク右□□
今度杉皮ニテドイ葺造作少ク相済
大工手間寄進有之
瓦師当所小田村三木伊八郎　同庄兵衛　同治七郎
□□□庄内ヨリ日々出之　出屋鋪并一山家頼出之

(四) **寛永十一年縁格子施入札**　採寸せず　山王社内部

(表)

為現世安穏後生善□

縁隔子□

寛永十一□

(裏)

縁隔子　願主龍野塩沢九郎右衛門常栄

為現世安穏後生善処也

于時寛永十一年八月吉日　保寿□(院カ)玄得書

本願別当仏餉院玄寺□□

(五) **慶安二年天井・敷板寄進棟**　採寸せず　山王社内部

慶安二暦壬記四月廿三日

奉寄進天井并敷板施主浄土坊

[左欠損]

(表)

(裏)

(なし)

(六) **寛保二年唐戸施入札**　428　423　158　9　松板　目台　鉋　山王社内部

□□□□□□□

(表)

唐戸一間　施主□□□

寛保二年三月□

(裏)

時之大工八仁王門久兵衛造立之

(註)　山王社にはこの他、元禄十五年銘の板華蔓、天正八年の祈祷札、享保二年の祈祷棟などを現存するが、山王社の建立との関係は不明である。

(七)

天保六年天神社建立棟札　572　559　121　118　8　杉板目鉋台　天神社内陣

(表)

聖主天中天　迦陵頻迦声　我此土安穏　天人常充満

梵　梵

梵卍奉造立　天照大神　自在天神　大弁財天　一宇　七福即生　七難即滅　祈所

梵　梵

哀愍衆生者　我等今敬札　園林諸堂閣　種々宝荘厳

(裏)

梵梵　天保六未年六月吉日　勧人　庄屋□兵衛　年寄　与兵衛

斑鳩寺

衆徒中　敬白

□八幡神社（吉福）

(一)

安政五年　拝殿建立棟札　580　560　120　115　5　杉板目鉋台　拝殿棟札に打ちつける

(表)

安政五戊午年十一月吉祥日

(裏)

（見ることができない）

□照雲寺

(一)

天保二年本堂建立棟札　1295　1245　211　215　22　桧板目鉋台　寺蔵

(表)

奉再建上棟大元尊神　手置帆屓神　願主當山現住正方建之此僧完栗三方庄福知村　當村庄屋治兵衛

棟梁當所木村源兵衛藤原隆信　岡象女神　従明願寺移住　同所年寄太　藏

同断　周　藏

五帝龍神　古堂再建享保二十乙卯年三月朔日上棟々梁松原村岡本与右ェ門　普請世話人　當所重之助

彦狭知神　再々建上棟之式天保三壬辰年四月八日　同新重郎

（裏）

一
二　于時天保三壬辰年
天下泰平国家安全寺門永久守護
一
二　四月八日幹支吉祥

當所　垣井新十郎
北山村　奥村与吉
谷村　熊藏
鵜飼村　佐助
當所　久藏
西脇村　七右ェ門
土太田村　音吉

小工
木挽
北山村　隅田九兵衛
同所　喜助
中井村　忠兵衛
千本村　忠藏
西脇村　喜八
相野村　治兵衛

□大歳神社（原）

（一）

元禄八年再興棟札

669
655
160
158
13

ガ目釿
ト板手　本殿内陣

（表）

于時元禄八乙癸年
原村大歳大明神再興
卯月吉日

鵤神官上綱
神主改発理右衛門

願主
大工　蒲田新兵衛
同　木村伝三郎
同　木村庄兵衛
庄屋　改発平兵衛
年寄　改発長右衛門
并　氏子中

（裏）

天津社
无上霊宝神道加持
祇津社

以我行神力神道加持カ三无三行
神変神通力普供養四住三妙加持

（二）

元禄八年建立棟札

605
583
145
140
12

ガ目
ト板釿　本殿内陣

（表）

元禄八乙癸年
大明神建立

鵤神官上綱
神主改発理右衛門

（裏）

大工　蒲田新兵衛
同　木村伝三郎
同　木村庄兵衛
同　木村市兵衛
同　木村伝兵衛
同　木村仁右衛門

開発平兵衛
願主　改発長右衛門
惣氏子中

（三）

元禄三年建立棟札

504
495
130
128
30

杉目鉋
板台
本殿内陣

（表）

□社再興□　□右衛門　□衛門　治□

（裏）

播東□　□大□社造工ノ事□

元文三□九月致成就

大工播磨姫路西□屋町長谷川宗四郎　并　小工　源□衛門
三太夫

（四）

寛政五年社殿修理棟札

609
590
148
149
10

キヤ目鉋
ケヤ板台
本殿内陣

（表）

太田庄原村

太歳大明神社修復

于時寛政五癸丑年七月吉日

神主　改発伝右衛門
大工　當村　改発理右衛門
同村　改発浅右衛門
同村　平　六

（裏）

庄屋　廣岡為右衛門
年寄　改発喜平次
同　次郎右衛門

□伊都岐嶋神社

(一)　享保十五年木野山社本殿建立棟札　528×507×54×54×9　杉板目鉋台　本殿内陣

(表)

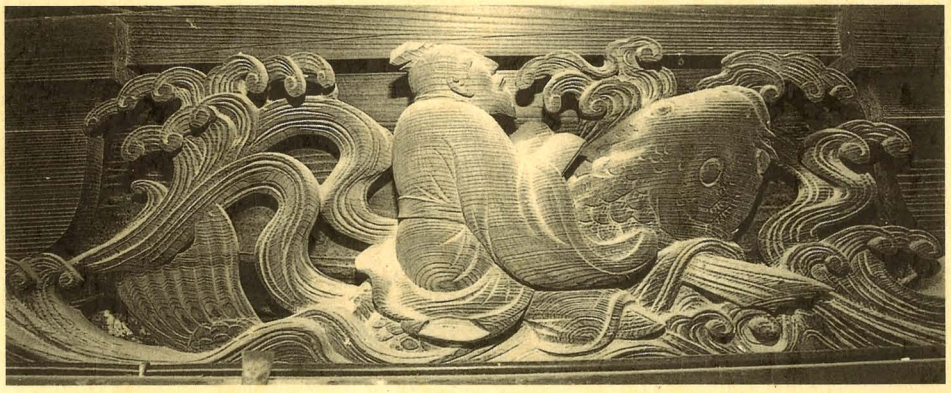
奉建立御社

享保十○五庚戌暦
九月廿四日

大工　菅生澗村　山本孫四郎

(裏)

願主　山田村庄屋亦右衛門
氏子中

太子町の寺社建築

発行日　平成17年３月31日
発　行　太子町教育委員会
　　兵庫県揖保郡太子町鵤1369番地の１
　　電話　0792-77-1010
印　刷　㈲関西プロセス
　　京都市右京区山ノ内山ノ下町13